九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— Ⅵ —

福岡県筑紫野市所在遺跡群の調査

1 9 7 5

福 岡 県 教 育 委 員 会

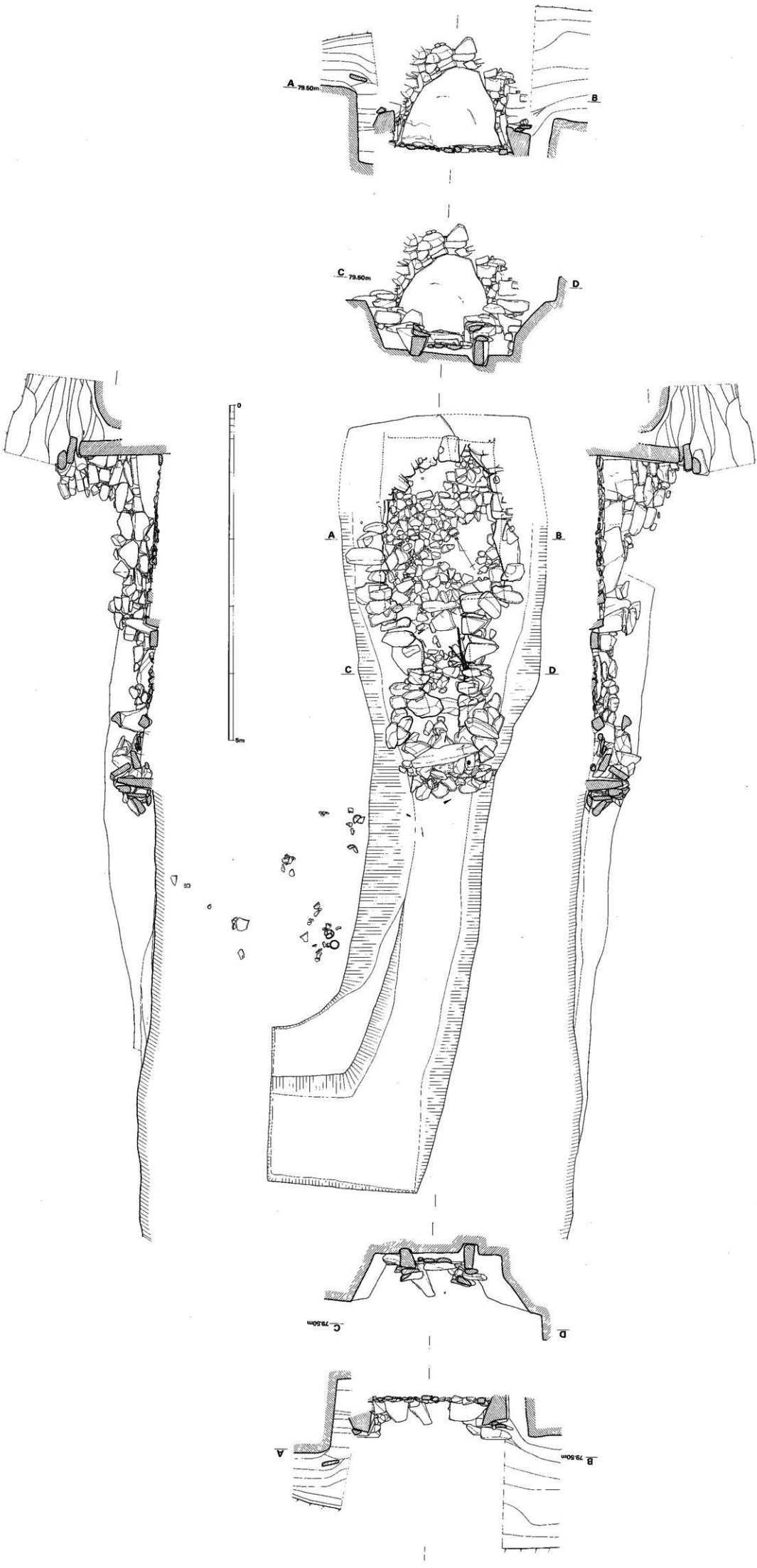
九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— Ⅵ —

付　　図

1 9 7 5

福岡県教育委員会



付図 Fig. 1 萩原古墳石室実測図（縮尺1/40）

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 VI 正誤表

ページ	行	誤	正
目次 2	9	(欠落)	4 小結……178
目次10	下から 1	実測実	実測図
本文17	22	14, 15, 16	15, 16, 17
17	23	14	15
17	24	16の底部	17の底部
21	10, 12, 19	鏃形石鏃	鏃形石鏃
46	1	その外	その他
71	4, 5	磨滅	摩滅
88	13	1から4	1～4
93	16	整す	施す
96	9	灰茶褐で	灰茶褐色で
104	3	灰黄褐で	灰黄褐色で
105	8	大型品	大形品
128	2	東側傾面	東側斜面
133	16	貝殻復縁痕	貝殻腹縁痕
134	13	口唇上	口唇状
136	29	密着していいた	密着していた
145	11	床面上の	床面上に
146	下から 2	垂直に下に掘りこんで	垂直に掘りこんで
151	5	太型蛤刃石斧	太型蛤刃石斧
151	8	現存刃	現存刃
151	13	片刃	片刃
155	13	(9, 10)	(9, 11)
159	22	ほど同時期	ほぼ同時期
173	16	小型	小形
178	1	3 小結	4 小結
Fig. 124		16……中門整第1次	中門第1次
Fig. 124		19～22 大察府	大宰府
180	4	出土量	出土量
181	註 9	(欠落)	9) 1974年発掘調査4基

※ 本文中の湾はすべて彎である。

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— Ⅵ —

福岡県筑紫野市所在遺跡群の調査

1 9 7 5

福 岡 県 教 育 委 員 会

序

九州縦貫自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の調査は，昭和44年度に始まり，6年目をむかえた今日，大牟田市から粕屋郡古賀町の古賀インターチェンジまでの間を終了しました。なお，調査はさらに，鞍手郡若宮町までいたっております。

本報告書は，筑紫野市と太宰府町所在の遺跡群のうち，昭和47年度から昭和49年度に調査を実施いたしましたもののうちの一部であります。

筑紫野市，太宰府町には，弥生時代から中世にいたる各時代の重要な遺跡が濃密な地域でありまして，縦貫道関係だけでも，萩原遺跡，扇祗古墳群，山の口遺跡，畑添1・2遺跡，八隈古墳群と住居跡群，道場山遺跡，桶田山遺跡，塔ノ原遺跡，唐人塚遺跡，剣塚遺跡，水城遺跡，向佐野・長浦窯跡群の調査を実施しました。

しかしながら，調査の期間が十分でなく，その成果は意を尽しえておりません。この状況を御理解のうえ，本書を御活用いただければ幸甚に存じます。

昭和50年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　森　田　　實

例　　言

1. この報告書は，九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち，昭和47年度から昭和49年度にかけて発掘した筑紫郡太宰府町所在遺跡群と筑紫野市所在遺跡群の調査報告書である。
2. 発掘調査は，日本道路公団の委託事業として，福岡県教育委員会が実施した。その際，福岡教育大学の協力をえた。
3. 本書の執筆はつぎのとおりである。

Ⅰ	川述昭人
Ⅱ	川述昭人
Ⅲ	酒井仁夫　川述昭人　佐藤保雄
Ⅳ	川述昭人
Ⅴ	川述昭人
Ⅵ	川述昭人
Ⅶ	川述昭人　川述公紀
Ⅷ	栗原和彦　中間研志　中牟田實治
Ⅸ	亀井明徳　酒井仁夫　高橋　章

4. 昭和47年度に行なった九州縦貫道関係の調査は，主として，植田実主事と，西谷正・石山勲・酒井仁夫・川述昭人・森田勉各技師があたり，昭和48年度は主として瀧龍二主事と，石山勲・酒井仁夫・川述昭人・中間研志各技師があたった。昭和49年度は主として山本文和主事と，栗原和彦・石山勲・酒井仁夫・川述昭人・上野精志・児玉真一・中間研志・池辺元明各技師があたった。
5. 本書の編集は，川述昭人が担当し栗原，中間がこれを助けた。

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅵ—
福岡県筑紫野市所在遺跡群の調査

目　　次

頁
Ⅰ　はしがき……1
Ⅱ　筑紫野市・太宰府町所在遺跡群の位置……9
Ⅲ　萩原遺跡の調査……13
　1. 調査の経過……13
　2. 調査の内容……16
　　a. 萩原遺跡の調査……16
　　b. 萩原遺跡表採遺物……20
　　c. 萩原古墳の調査……25
　3. 小　　結……40
Ⅳ　扇祇3号墳の調査……43
Ⅴ　山の口遺跡の調査……49
　1. 調査の経過……49
　2. 調査の内容……50
　3. 小　　結……61
Ⅵ　畑添1地点の調査……65
　1. 調査の経過……65
　2. 調査の内容……66
　3. 小　　結……76
Ⅶ　畑添2地点の調査……81
　1. 調査の経過……81
　2. 調査の内容……86
　3. 小　　結……113
Ⅷ　桶田山遺跡の調査……117
　1. 位置と環境……117
　2. 調査の経過……120

3. 調査の内容…… 121
4. 結　　語…… 153
IX 向佐野，長浦窯跡の調査 …… 165
1. 遺跡の概況…… 165
2. 調査の経過…… 165
3. 調査の内容…… 169
a．長浦窯跡の調査…… 169
b．向佐野1号窯跡の調査…… 175

図　版　目　次

萩　原　遺　跡

本文対照頁
PL. 1 (1) 萩原遺跡遠景（北東から）（川述昭人撮影）……13
(2) 萩原遺跡土層断面（晃　治撮影）……16
PL. 2 (1) 萩原遺跡縄文式土器（表）その1（川述公紀撮影）……17
(2) 萩原遺跡縄文式土器（裏）その2（川述公撮影）……17
PL. 3 (1) 萩原遺跡縄文式土器（表）その1（川述公撮影）……17
(3) 萩原遺跡縄文式土器（裏）その2（川述公撮影）……17
PL. 4 (1) 萩原遺跡石器（川述公撮影）……17
(2) 萩原遺跡表採石器　その1（川述昭撮影）……21
PL. 5 (1) 萩原遺跡表採石器　その2（川述昭撮影）……21
(2) 萩原遺跡表採石器　その3（川述昭撮影）……21
PL. 6 (1) 萩原遺跡表採石器　その4（川述昭撮影）……21
(2) 萩原遺跡石斧（川述公撮影）……19
PL. 7 (1) 萩原古墳全景（南東から）（川述昭撮影）……25
(2) 萩原古墳盗掘壙（川述昭撮影）……25
PL. 8 (1) 萩原古墳墳丘と石室（晃撮影）……25
(2) 萩原古墳石室と羨道（晃撮影）……25
PL. 9 (1) 萩原古墳石室全景（北西から）（晃撮影）……25
(2) 萩原古墳羨道部閉塞状況（晃撮影）……25
PL. 10 (1) 萩原古墳玄室内耳環出土状況（晃撮影）……28
(2) 萩原古墳羨道部大刀出土状況（晃撮影）……28

PL. 11 (1) 萩原古墳裏込め内耳環出土状況（晃撮影）……28
(2) 萩原古墳墳丘中土器出土状況（晃撮影）……28
PL. 12 (1) 萩原古墳耳環（川述公撮影）……28
(2) 萩原古墳鉄鏃　その1（川述公撮影）……29
PL. 13 (1) 萩原古墳鉄鏃　その2（川述公撮影）……29
(2) 萩原古墳鉄鏃　その3（川述公撮影）……29
PL. 14 (1) 萩原古墳鍔・刀子（川述公撮影）……31
(2) 萩原古墳大刀（川述公撮影）……31
PL. 15 萩原古墳須恵器　その1（川述公撮影）……32
PL. 16 萩原古墳須恵器　その2（川述公撮影）……32
PL. 17 萩原古墳須恵器　その3，土師器（川述公撮影）……32
PL. 18 萩原古墳須恵器　その4（川述公撮影）……32

山の口遺跡

PL. 19 (1) 山の口遺跡遠景（北東から）（川述昭撮影）……50
(2) 山の口遺跡遠景（東から）（川述昭撮影）……50
PL. 20 (1) 山の口遺跡1区南北トレンチ内遺構（川述昭撮影）……51
(2) 山の口遺跡1区東トレンチ内遺構（川述昭撮影）……51
PL. 21 (1) 山の口遺跡1区2号袋状竪穴（川述昭撮影）……51
(2) 山の口遺跡1区3号袋状竪穴（川述昭撮影）……51
PL. 22 (1) 山の口遺跡2区全景（晃撮影）……54
(2) 山の口遺跡2区土壙（晃撮影）……55
PL. 23 (1) 山の口遺跡3区遠景（東から）（川述昭撮影）……56
(2) 山の口遺跡3区遺構の検出状況と土層断面（川述昭撮影）……56
PL. 24 (1) 山の口遺跡3区全景（西から）（川述昭撮影）……56
(2) 山の口遺跡3区第1号住居跡（川述昭撮影）……56
PL. 25 (1) 山の口遺跡3区斜面土層断面（川述昭撮影）……56
(2) 山の口遺跡3区土壙墓（川述昭撮影）……59
PL. 26 (1) 山の口遺跡1区出土須恵器・石斧（川述公撮影）……53
(2) 山の口遺跡3区出土土器（川述公撮影）……59
PL. 27 山の口遺跡3区出土土器・日常雑器（川述公撮影）……61

畑添 1 地点

PL. 28 (1) 畑添1地点遠景（東から）（川述昭撮影）……66
(2) 畑添1地点北半部遺構（南から）（川述昭撮影）……66
PL. 29 畑添1地点南半部全景（南から）（川述昭撮影）……75
PL. 30 (1) 畑添1地点遺構全景（南から）（川述昭撮影）……66
(2) 畑添1地点第1号袋状竪穴（川述昭撮影）……66
PL. 31 (1) 畑添1地点第2号袋状竪穴土層断面（川述昭撮影）……66
(2) 畑添1地点第6号袋状竪穴土層断面（川述昭撮影）……67
PL. 32 (1) 畑添1地点第2号袋状竪穴（川述公撮影）……66
(2) 畑添1地点第3号袋状竪穴（川述公撮影）……67
PL. 33 (1) 畑添1地点第4号袋状竪穴（川述公撮影）……67
(2) 畑添1地点第5号袋状竪穴（川述公撮影）……67
PL. 34 (1) 畑添1地点第3号土壙（川述公撮影）……75
(2) 畑添1地点第5号土壙（川述公撮影）……75
PL. 35 畑添1地点弥生式土器（川述公撮影）……70
PL. 36 畑添1地点日常雑器（川述公撮影）……75
PL. 37 (1) 畑添1地点石剣未製品（川述公撮影）……72
(2) 畑添1地点石斧（川述公撮影）……72

畑添 2 地点

PL. 38 (1) 畑添2地点遠景（南から）（川述昭撮影）……86
(2) 畑添2地点遠景（北から）（川述昭撮影）……86
PL. 39 畑添2地点全景（東から）（川述昭撮影）……86
PL. 40 畑添2地点1区全景（東から）（川述昭撮影）……86
PL. 41 (1) 畑添2地点1区北半部（西から）（川述公撮影）……86
(2) 畑添2地点1区南半部（西から）（川述公撮影）……86
PL. 42 (1) 畑添2地点甕棺墓（川述公撮影）……86
(2) 畑添2地点第1号住居跡竈（川述公撮影）……87
PL. 43 (1) 畑添2地点第1号住居跡（南から）（川述昭撮影）……88
(2) 畑添2地点第2号住居跡（東から）（川述公撮影）……89
PL. 44 (1) 畑添2地点第3号住居跡土層断面（西から）（川述公撮影）……90
(2) 畑添2地点第3号住居跡（北から）（川述公撮影）……90
PL. 45 (1) 畑添2地点第4号住居跡（南から）（川述公撮影）……92
(2) 畑添2地点第5号住居跡（東から）（川述公撮影）……93

PL. 46 (1) 畑添2地点第6号住居跡（南から）（川述公撮影）……95
(2) 畑添2地点第7号住居跡（西から）（川述公撮影）……97
PL. 47 (1) 畑添2地点第8号住居跡（西から）（川述公撮影）……98
(2) 畑添2地点第7・8号住居跡（西から）（川述公撮影）……97
PL. 48 (1) 畑添2地点配石遺構（北から）（川述昭撮影）…… 102
(2) 畑添2地点2区全景（西から）（川述昭撮影）…… 106
PL. 49 (1) 畑添2地点根石（川述昭撮影）…… 108
(2) 畑添2地点3区全景（南から）（川述昭撮影）…… 111
PL. 50 畑添2地点全景（北から）（石山勲撮影）……86
PL. 51 畑添2地点1区出土土器（川述公撮影）…… 102
PL. 52 畑添2地点弥生式土器，紡錘車（川述公撮影）……102
PL. 53 畑添2地点砥石，磁器など（川述公撮影）…… 101

桶田山遺跡

PL. 54 桶田山遺跡全景（北西から）（朝日新聞社撮影）…… 117
PL. 55 (1) 桶田山遺跡西半部の遺構の状況（東から）（栗原和彦撮影）…… 120
(2) 桶田山遺跡東半部の遺構の状況（北西から）（栗原撮影）…… 120
PL. 56 (1) 桶田山遺跡第11号貯蔵穴と第2号土壙墓（西から）（栗原撮影）…… 121
(2) 桶田山遺跡第41号貯蔵穴（北から）（栗原撮影）…… 121
PL. 57 (1) 桶田山遺跡第32号土壙（栗原撮影）…… 122
(2) 桶田山遺跡第40号土壙（南東から）（栗原撮影）…… 122
PL. 58 (1) 桶田山遺跡第1号・第2号・第3号甕棺墓と第21号貯蔵穴（北から）（栗原撮影）…… 131
(2) 桶田山遺跡第4号甕棺墓（東から）（中牟田賢治撮影）…… 133
PL. 59 (1) 桶田山遺跡第5号甕棺墓と第25貯蔵穴（北から）（栗原撮影）…… 133
(2) 桶田山遺跡第3号土壙墓（南から）（中牟田撮影）…… 147
PL. 60 (1) 桶田山遺跡第4号箱式石棺墓（北から）（栗原撮影）…… 136
(2) 桶田山遺跡第8号石棺墓と第7号貯蔵穴（北から）（中間研志撮影）…… 139
PL. 61 (1) 桶田山遺跡第10号箱式石棺墓（東から）（中間撮影）…… 141
(2) 桶田山遺跡第10号石棺墓・蓋石除去後の状況（東から）（中間撮影）…… 141
PL. 62 (1) 桶田山遺跡第9号箱式石棺墓（南から）（中間撮影）…… 141
(2) 桶田山遺跡第9号石棺墓・蓋石除去後の状況（南から）（中間撮影）…… 141
PL. 63 （右） (1) 桶田山遺跡第3号A甕棺の蓋（中牟田撮影）…… 132
(2) 桶田山遺跡第2号甕棺の上蓋（中牟田撮影）…… 132
(3) 桶田山遺跡第2号甕棺の下蓋（中牟田撮影）…… 132

(左) (1) 桶田山遺跡第4号甕棺（中牟田撮影）…… 133
(2) 桶田山遺跡第3号B甕棺の上甕（中牟田撮影）…… 132
PL. 64 (上) (1) 桶田山遺跡第10号石棺墓出土玉類・鉄鏃（中牟田撮影）…… 141
(2) 桶田山遺跡紡錘車（中牟田撮影）…… 151
(下) 桶田山遺跡石器類（中牟田撮影）…… 150
PL. 65 (上) 桶田山遺跡木棺墓出土鉄釘・刀子（中牟田撮影）…… 145
(中) 桶田山遺跡木棺墓出土土師器（中間撮影）…… 148
(下) 桶田山遺跡土壙墓出土土師器甕（中間撮影）…… 148
PL. 66 (1) 桶田山遺跡掘状遺構出土火舎類（中牟田撮影）…… 128
(2) 桶田山遺跡土師質鍋形土器類（中牟田撮影）…… 130

向佐野，長浦窯跡

PL. 67 (1) 長浦窯跡全景1（西から）（高橋章撮影）…… 169
(2) 長浦窯跡全景2（西から）（高橋撮影）…… 169
PL. 68 (1) 長浦窯跡煙道（西から）（高橋撮影）…… 171
(2) 長浦窯跡土器出土状態（西から）（高橋撮影）…… 171
PL. 69 (1) 向佐野1号窯跡窯尻遺存部（下方から）（酒井仁夫撮影）…… 175
(2) 向佐野1号窯跡窯尻遺存部（煙出しから）（酒井撮影）…… 175
PL. 70 向佐野，長浦窯跡出土須恵器（亀井明徳，高橋撮影）……171・175

挿　図　目　次

頁
Fig. 1 昭和49年度調査遺跡分布図（縮尺約1/604,000）（酒井作成）…… 5
Fig. 2 遺跡群の位置（縮尺1/25,000）（川述昭作成）…… 8

萩　原　遺　跡

Fig. 3 萩原遺跡周辺地形図（原図道路公団作成，縮尺1/2,000）（川述公作成）……14—15
Fig. 4 萩原遺跡地形とトレンチ配置図（縮尺1/1,500）
（川述昭・進博次・浦山博子実測，川述昭製図）……16—17
Fig. 5 萩原遺跡土層断面図（縮尺1/80）（川述昭・進・浦山実測，川述公製図）…… 16—17
Fig. 6 萩原遺跡第8トレンチ出土縄文土器実測図（縮尺1/2）（川述昭実測製図）……18
Fig. 7 萩原遺跡石器実測図（縮尺1/2）（川述昭実測製図）……19

Fig. 8　萩原遺跡須恵器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……19
Fig. 9　萩原遺跡表採押型文拓影（縮尺1/2）（酒井手拓）……20
Fig. 10　萩原遺跡表採石器実測図（縮尺2/3）（川述昭実測製図）……22
Fig. 11　萩原遺跡表採石器実測図（縮尺2/3）（酒井・佐藤保雄実測，酒井製図）……23
Fig. 12　萩原古墳地形実測図（縮尺1/200）（川述昭実測，川述公製図）……26
Fig. 13　萩原古墳墳丘断面図（縮尺1/40）（森田勉・晃・鹿島英世実測，川述公製図）……26—27
Fig. 14　萩原古墳墳丘と石室実測図（縮尺1/200）（森田・瀬戸孝治・晃・鹿島実測，川述公製図）…27
Fig. 15　萩原古墳遺物出土状況実測図（縮尺1/30）（森田・晃・鹿島実測，川述公製図）……29
Fig. 16　鉄鏃，刀子，耳環実測図（縮尺1/2）（川述昭実測製図）……30
Fig. 17　大刀，鍔実測図（縮尺1/4）（川述昭実測製図）……32
Fig. 18　須恵器実測図①（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……33
Fig. 19　須恵器実測図②（縮縮1/3）（川述昭実測製図）……35
Fig. 20　須恵器，土師器実測図③（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……36
Fig. 21　須恵器実測図④（縮尺1/4）（川述昭実測製図）……36—37
Fig. 22　須恵器実測図⑤（縮尺1/6）（川述昭実測製図）……38
Fig. 23　土師器実測図⑥（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……39

扇 祇 3 号 墳

Fig. 24　扇祇3号墳石室実測図（縮尺1/40）（中間・内田始実測，川述公製図）……44
Fig. 25　扇祇3号墳須恵器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……45
Fig. 26　扇祇3号墳須恵器実測図（縮尺1/4）（川述昭実測製図）……45
Fig. 27　扇祇3号墳，山の口遺跡，畑添1・2地点周辺地形図
（縮尺1/2,000，原図道路公団作成1/1,000）（川述公作成）……48—49

山 の 口 遺 跡

Fig. 28　山の口遺跡発掘区周辺地形実測図（縮尺1/400）
（川述昭・川述公・内田・副島輝司実測，川述公製図）……50—51
Fig. 29　山の口遺跡1区南北トレンチ下段土層断面図（縮尺1/80）
（次郎丸達朗・中牟田・川述公実測，川述公製図）……51
Fig. 30　山の口遺跡1区袋状竪穴実測図（縮尺1/30）（川述昭実測，川述公製図）……52
Fig. 31　山の口遺跡1区遺構配置図（縮尺1/120）
（川述昭・次郎丸・中牟田・川述公実測，川述公製図）……52—53
Fig. 32　山の口遺跡袋状竪穴出土石斧実測図（縮尺1/2）（川述昭実測製図）……53
Fig. 33　山の口遺跡1区出土土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……53
Fig. 34　山の口遺跡2区遺構配置図（縮尺1/80）（栗原・浦山・光枝勇敏実測，川述公製図）……54—55

Fig. 35　山の口遺跡2区土壙実測図（縮尺1/60）（栗原・補山・光枝実測，川述公製図）……55
Fig. 36　山の口遺跡3区土層断面図（縮尺1/80）（次郎丸・中牟田実測，川述公製図）……56—57
Fig. 37　山の口遺跡1号住居跡実測図（縮尺1/40）（川述公実測製図）……57
Fig. 38　山の口遺跡3区出土土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……58
Fig. 39　山の口遺跡3区遺構配置図（縮尺1/60）
（次郎丸・中牟田・川述昭・川述公実測，川述公製図）……58—59
Fig. 40　山の口遺跡住居跡土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測，川述公製図）……59
Fig. 41　山の口遺跡1号土壙墓実測図（縮尺1/30）（川述昭実測，川述公製図）……59
Fig. 42　山の口遺跡土壙墓土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……60
Fig. 43　山の口遺跡竪穴，土壙実測図（縮尺1/30）（中牟田実測，川述公製図）…… 60

畑添1地点

Fig. 44　畑添1地点地形測量図（縮尺1/300）
（川述昭・川述公・次郎丸・中牟田実測，川述公製図）……66—67
Fig. 45　畑添1地点土層断面図（縮尺1/60）（川述公実測製図）……67
Fig. 46　畑添1地点袋状竪穴実測図①（縮尺1/40）（川述昭・川述公実測，川述公製図）……68
Fig. 47　畑添1地点遺構配置図（縮尺1/120）（川述昭・川述公・次郎丸実測，川述公製図）……68—69
Fig. 48　畑添1地点袋状竪穴実測図②（縮尺1/40）（川述昭・川述公実測，川述公製図）……69
Fig. 49　畑添1地点袋状竪穴実測図③（縮尺1/40）（川述昭・川述公実測，川述公製図）……70
Fig. 50　畑添1地点弥生式土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……71
Fig. 51　畑添1地点石斧実測図（縮尺1/2）（川述昭実測製図）……72
Fig. 52　畑添1地点石剣未製品実測図（縮尺1/2）（川述昭実測製図）……73
Fig. 53　畑添1地点土壙実測図（縮尺1/40）（川述昭・川述公実測，川述公製図）……74
Fig. 54　畑添1地点須恵器，土師器他実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……76

畑添2地点

Fig. 55　畑添2地点土層断面図（縮尺1/80）（川述昭・川述公実測，川述公製図）……84—85
Fig. 56　畑添2地点地形測量図（縮尺1/300）（川述昭・川述公実測，川述公製図）……85
Fig. 57　畑添2地点甕棺墓実測図（縮尺1/20）（川述昭実測，川述公製図）……86
Fig. 58　畑添2地点1区遺構配置図（縮尺1/120）（川述昭・川述公実測，川述公製図）……86—87
Fig. 59　畑添2地点1号住居跡実測図（縮尺1/60）（川述昭実測，川述公製図）……87
Fig. 60　畑添2地点1号住居跡土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……88
Fig. 61　畑添2地点2号住居跡実測図（縮尺1/60）（川述公実測製図）……89
Fig. 62　畑添2地点3号住居跡実測図（縮尺1/60）（川述昭実測，川述公製図）……90
Fig. 63　畑添2地点3号住居跡土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……91

Fig. 64 畑添2地点4号住居跡実測図（縮尺1/60）（川述昭実測，川述公製図）……92
Fig. 65 畑添2地点4号住居跡土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測，川述公製図）……93
Fig. 66 畑添2地点5号住居跡実測図（縮尺1/60）（川述昭実測，川述公製図）……94
Fig. 67 畑添2地点5号住居跡土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……95
Fig. 68 畑添2地点6号住居跡実測図（縮尺1/60）（川述公実測製図）……96
Fig. 69 畑添2地点6号住居跡土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……96
Fig. 70 畑添2地点7号住居跡実測図（縮尺1/60（川述公実測製図）……97
Fig. 71 畑添2地点7号住居跡土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）……97
Fig. 72 畑添2地点8号住居跡実測図（縮尺1/60）（川述昭実測，川述公製図）……99
Fig. 73 畑添2地点8号住居跡土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）…… 100
Fig. 74 畑添2地点砥石実測図（縮尺1/2）（川述昭実測製図）…… 101
Fig. 75 畑添2地点配石遺構実測図（縮尺1/40）（常木晃実測，川述公製図）…… 102
Fig. 76 畑添2地点1区出土土器実測図①（縮尺1/3）（川述昭実測製図）…… 103
Fig. 77 畑添2地点1区出土土器実測図②（縮尺1/3）（川述昭実測製図）…… 105
Fig. 78 畑添2地点2区遺構配置図（縮尺1/120）（川述公実測製図）…… 107
Fig. 79 畑添2地点根石実測図（縮尺1/40）（川述昭実測製図）…… 108
Fig. 80 畑添2地点2区出土土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）…… 109
Fig. 81 畑添2地点2区出土土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）…… 111
Fig. 82 畑添2地点紡錘車（縮尺1/2）（川述昭実測製図）…… 111
Fig. 83 畑添2地点3区遺構実測図（縮尺1/300）（川述昭実測，川述公製図）…… 112
Fig. 84 畑添2地点3区出土土器実測図（縮尺1/3）（川述昭実測製図）…… 112

桶田山遺跡

Fig. 85 桶田山遺跡周辺地形図（縮尺1/1,000）（原図道路公団作成1/1,000，重松絢子製図）…… 119
Fig. 86 桶田山遺跡遺構配置図（縮尺1/100）（中牟田作成製図）……120—121
Fig. 87 桶田山遺跡丘陵南北断面層位実測図（縮尺1/40）（栗原実測，重松製図）……124—125
Fig. 88 桶田山遺跡第2号土壙墓，第10号・11号土壙実測図
（縮尺1/30）（栗原実測，伊東登美子製図）…… 123
Fig. 89 桶田山遺跡第41号土壙実測図（縮尺1/30）（中牟田実測，伊東製図）…… 124
Fig. 90 桶田山遺跡第40号土壙実測図（縮尺1/30）（中間・中牟田実測，伊東製図）…… 125
Fig. 91 桶田山遺跡第31号土壙，第32号土壙土層断面図（縮尺1/30）（中牟田実測，伊東製図）…124—125
Fig. 92 桶田山遺跡第40号土壙出土陶器実測図（縮尺1/3）（中間実測，重松製図）…… 126
Fig. 93 桶田山遺跡堀状遺構土層断面図（縮尺1/40）（中牟田実測，伊東製図）…… 128
Fig. 94 桶田山遺跡火舎類他拓影（縮尺1/2）（中間・中牟田手拓，中間実測製図）…… 129
Fig. 95 桶田山遺跡土師質埴形土器実測図（縮尺1/3）（中間・中牟田実測，重松製図）…… 129

Fig. 96 桶田山遺跡第1号・4号甕棺墓実測図（縮尺1/20）（中牟田実測製図）…… 131
Fig. 97 桶田山遺跡甕棺実測図（縮尺1/6）（中間・中牟田実測，中間製図）……132—133
Fig. 98 桶田山遺跡第4号甕棺実測図（縮尺1/6）（中間・中牟田実測，中間製図）…… 133
Fig. 99 桶田山遺跡弥生式土器，甕棺片実測図（縮尺1/3）（中間実測，重松製図）…… 134
Fig. 100 桶田山遺跡第4号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）（栗原・佐藤実測，重松製図）…… 137
Fig. 101 桶田山遺跡第4号石棺出土鉄鏃実測図（縮尺1/2）（中間実測製図）…… 138
Fig. 102 桶田山遺跡第8号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）（三津井和幸・中間実測，重松製図）… 139
Fig. 103 桶田山遺跡第9号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）（遠・中間実測，重松製図）…… 140
Fig. 104 桶田山遺跡第10号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）（中間・中牟田実測，重松製図）…142—143
Fig. 105 桶田山遺跡第10号箱式石棺墓出土玉類実測図（実大）（中間実測製図）…… 142
Fig. 106 桶田山遺跡第12号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）（中牟田実測，中間製図）……142—143
Fig. 107 桶田山遺跡第1号木棺出土鉄釘実測図（縮尺1/2）（中間実測，重松製図）…… 144
Fig. 108 桶田山遺跡第2号木棺墓実測図（縮尺1/20）（中牟田実測，重松製図）…… 145
Fig. 109 桶田山遺跡木棺出土刀子実測図（縮尺1/2）（中間実測，重松製図）…… 145
Fig. 110 桶田山遺跡第3号土壙墓実測図（縮尺1/20）（中牟田実測，中間製図）…… 147
Fig. 111 桶田山遺跡第3号土壙墓使用土器，副葬土師杯（縮尺1/3）（中間・栗原実測，重松製図）…148
Fig. 112 桶田山遺跡木棺墓，他出土土師器実測図（縮尺1/3）（中間実測，重松製図）…… 149
Fig. 113 桶田山遺跡石器実測図（縮尺2/3）（中間実測製図）…… 150
Fig. 114 桶田山遺跡表土出土鉄器実測図（縮尺1/2）（中間実測，重松製図）…… 151
Fig. 115 桶田山遺跡紡錘車実測図（縮尺1/2）（中間実測，中牟田製図）…… 151
Fig. 116 桶田山遺跡須恵器実測図（縮尺1/3）（中間実測製図）…… 152
Fig. 117 桶田山遺跡箱式石棺墓主軸方位一覧（中間作成製図）…… 155

向佐野，長浦窯跡

Fig. 118 遺跡群の位置（縮尺1/3,000）（酒井作成）…… 166
Fig. 119 向佐野，長浦窯跡周辺地形図（縮尺1/1500）（高橋作成，伊藤製図）…… 167
Fig. 120 長浦窯跡実測図（縮尺1/30）（高橋実測製図）……170
Fig. 121 長浦窯跡出土須恵器実測図（縮尺 1/3）（高橋実測製図）……172
Fig. 122 向佐野1号窯跡実測図（縮尺1/30）（亀井実測製図）……176
Fig. 123 向佐野窯跡出土須恵器実測図（縮尺 1/3）（亀井実測製図）……177
Fig. 124 大宰府を中心とする歴史時代須恵器の変遷（縮尺⅓）（亀井実測製図）…… 178—179
Fig. 125 大宰府学校院跡井戸埋土層出土須恵器実測実（縮尺⅓）（亀井実測製図）……180

表　目　次

頁

Tab. 1　昭和49年度調査内容（川述昭作成）……1

萩　原　古　墳

Tab. 2　萩原古墳耳環計測表（川述昭作成）……31

桶　田　山　遺　跡

Tab. 3　桶田山遺跡土壙一覧表（中牟田作成）……126
Tab. 4　桶田山遺跡甕棺墓一覧表（中間作成）……135
Tab. 5　桶田山遺跡第10号箱式石棺墓出土玉類計測表（中間作成）……142
Tab. 6　桶田山遺跡箱式石棺墓一覧表（中間作成）……143
Tab. 7　桶田山遺跡木棺墓一覧表（中間作成）……146
Tab. 8　桶田山遺跡土壙墓一覧表（中間作成）……150

向佐野，長浦窯跡

Tab. 9　向佐野1～3号窯出土須恵器（亀井作成）……177

付　図　目　次

Fig. 1　萩原古墳石室実測図（縮尺1/40）（森田・晃・鹿島実測，川述公製図）

I はしがき

九州縦貫高速自動車道建設に伴う発掘調査はすでに6年を経過し，県内では大牟田市から粕屋郡古賀町の古賀インターチェンジまでの調査を終了し，昭和50年度は，古賀町の残留分と鞍手郡若宮町の残留分，そして新に，鞍手町の調査を実施の予定である。

昭和49年度の調査経過の概略を述べてみよう。

当年度の発掘調査は，筑紫野市の残留分と，古賀町，鞍手郡若宮町の3箇所に分れて，工事と並行して，調査を実施した。

筑紫野市では，48年度から引き続いて，県道5号線切り変えにかかる道場山遺跡の調査を急ぎ，工期との関係より，県教育委員会の技師の多数の応援をうけて，甕棺112基と石棺2基の調査を4月26日に終了した。甕棺は，弥生時代中期後半から後期初頭にかけてのものであり，甕棺内からは，鉄戈1，貝輪20個，棺外から鉄鉾1を検出した。引き続き，本線内の道場山遺跡の調査を行い，ここからは，弥生前期の木棺墓，土壙墓があり，前期末から中期初頭の甕棺10基が検出され，弥生時代前期から後期に到る墳墓群の連続遺跡となった。他に中期初頭の住居跡1軒と，袋状竪穴が10数基検出された。これと並行して4月から，桶田山遺跡の調査を実施した。ここでは後述する如く，箱式石棺，甕棺，袋状竪穴，中世土壙墓などを検出した。さらに，八隈遺跡では，4月から側道分の調査を行い，弥生時代から古墳時代の住居跡を，30数軒と，江戸時代の建築物の遺構を検出した。かくして筑紫野市関係は，8月をもって調査を終了した。

古賀町では5月に調査を開始し，土取り場を含む13基の古墳を調査した。

鞍手郡宮田町・若宮町では12地点の調査を実施し，弥生時代から中世に到る各種遺構を検出した。

Tab. 1　昭和49年度調査内容

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	内容
40	桶田山遺跡	筑紫野市大字塔ノ原	3/15～ 6/27	1,500	甕棺、石棺、中世遺構
追56	道場山　A地点	筑紫野市大字武蔵	4/ 1～ 9/ 3	1,500	木棺、土壙、甕棺墓
追75	道場山　B地点	同	5/ 1～ 8/20	900	甕棺、石棺墓
追76	道場山　C地点	同	3/ 9～ 4/26	1,000	弥生～古墳時代住居跡
古5	深町古墳群	粕屋郡古賀町	8/ 8～10/31	484	古　墳
古6	同	同	8/ 8～10/31	100	古　墳
古8	水上遺跡	同	6/ 4～ 9/11	9,000	土師，須恵散布地
古10	深町古墳群	同	8/ 8～10/31	176	円　墳
古16	川原庵山5号墳	同	5/16～ 6/18	300	円　墳
古18	原口遺跡	同	9/ 7～10/12	400	方　墳

直1	本木遺跡	宗像郡福間町大字本木	4/25～5/29	1,331	遺構なし
直2	遺園遺跡	鞍手郡若宮町大字山口	4/1～5/31	6,909	中世屋敷跡
直3	小原遺跡	同	4/1～5/15	615	弥生～古墳時代住居跡
直7	咲花遺跡	同	5/27～6/12	2,035	奈良時代住居跡
直8	都地原第1地点	同	6/14～6/29	4,106.5	弥生後期住居跡
直9	北田遺跡	同	6/3～6/14	436	弥生後期住居跡
直10	柳ケ谷遺跡	鞍手郡若宮町大字水原	4/19～8/4	6,037.5	弥生～古墳時代住居跡
直11	筒井田遺跡	鞍手郡若宮町大字芹田	4/22	185	遺構なし
直12	平原遺跡	同	6/24～8/5	1,776	奈良時代倉庫跡
追1	都地原第3地点	鞍手郡若宮町大字沼口	8/5～8/23	1,470	散布地
追2	都地原第2地点	同	7/3～7/28	4,939	散布地
追3	沙井掛遺跡	同	7/28～10/31	18,395	円墳、石棺群
追4	小原古墳群	同	8/29～10/5	3,337	円墳
追5	茶臼山城跡	同	8/5～10/26	8,151.5	中世城跡

注　追…追加地点の意
　　古…古賀地区の意
　　直…直方地区の意

遺跡の調査関係者はつぎのとおりである。

総　　括

教育長	森田　実	教育次長	西村太郎
文化課長（前任）	森　英俊	文化課長	藤井　功
文化課課長補佐（前任）	今井岩雄	文化課課長技術補佐（前任）	藤井　功
文化課課長補佐	平井元治	調査係長	松岡　史
技術主査（前任）	鬮久嗣郎		

庶務会計

文化課庶務係長（前任）	姫野　博	文化課庶務係長	前田栄一
文化課庶務主査（前任）	小川浩一郎	文化課庶務主査	師岡　満
文化課庶務主事	山本文和	嘱託	因　将太

発掘調査員

福岡教育大学教授	波多野晥三	九州歴史資料館	亀井明徳
九州歴史資料館	高橋　章		
文化課技師	栗原和彦	文化課技師	石山　勲
同	酒井仁夫	同	川述昭人
同	上野精志	同	児玉真一

文化課技師	中間研志	文化課技師	池辺元明

発掘調査補助員

次郎丸 達朗	中牟田 賢治
川述 公紀	岩崎(佐土原)逸男
瀬戸 孝司	晃 治
内田 始	菊池 法信
進 博次	副島 源司
松村 一良	高田 一弘
山本 信夫	中司 照世
山下 和美	

福岡教育大学学生	東京教育大学学生
國学院大学学生	明治大学学生
佐賀大学学生	

日本道路公団福岡建設局

局長(前任)	吉田喜市	局長	早生隆彦
次長(前任)	塩坂富司	次長	長谷川康敏
総務部長	中川了一	技術二課長	森原 稠
総務課長(前任)	遠藤明美	総務課長	原口大喜三
総務課長代理(前任)	石川雄三	総務課長代理	松本 了
総務課員(前任)	桜木幸雄	総務課員	栗須 徳

同福岡工事事務所

所長(前任)	福田 隆	所長	山本隆義
古賀工事長	瀬之口賢彦	筑紫野工事長	吉井宏幸
庶務課長	西田建治	工務課長	八尋勇次
所員	小村 浩		

日本道路公団直方工事事務所

所長	稲垣 勇	工事長	太田泰寿
庶務課長	石橋喜衛門		

建設工業受託業者

鞍手郡宮田町・若宮町	大成建設KK・梅林建設KK	共同企業体
同	住友建設KK・岡崎工業KK	共同企業体
粕屋郡古賀町・粕屋町	佐藤工業KK・戸田建設KK	

筑紫野市・太宰府町	五洋建設ＫＫ・飛島建設ＫＫ　共同企業体
筑　紫　野　市	オリエンタルコンクリートＫＫ
同	飯田建設ＫＫ・不動建設ＫＫ共同企業体
同	前田建設工業ＫＫ・小松建設工業ＫＫ　共同企業体

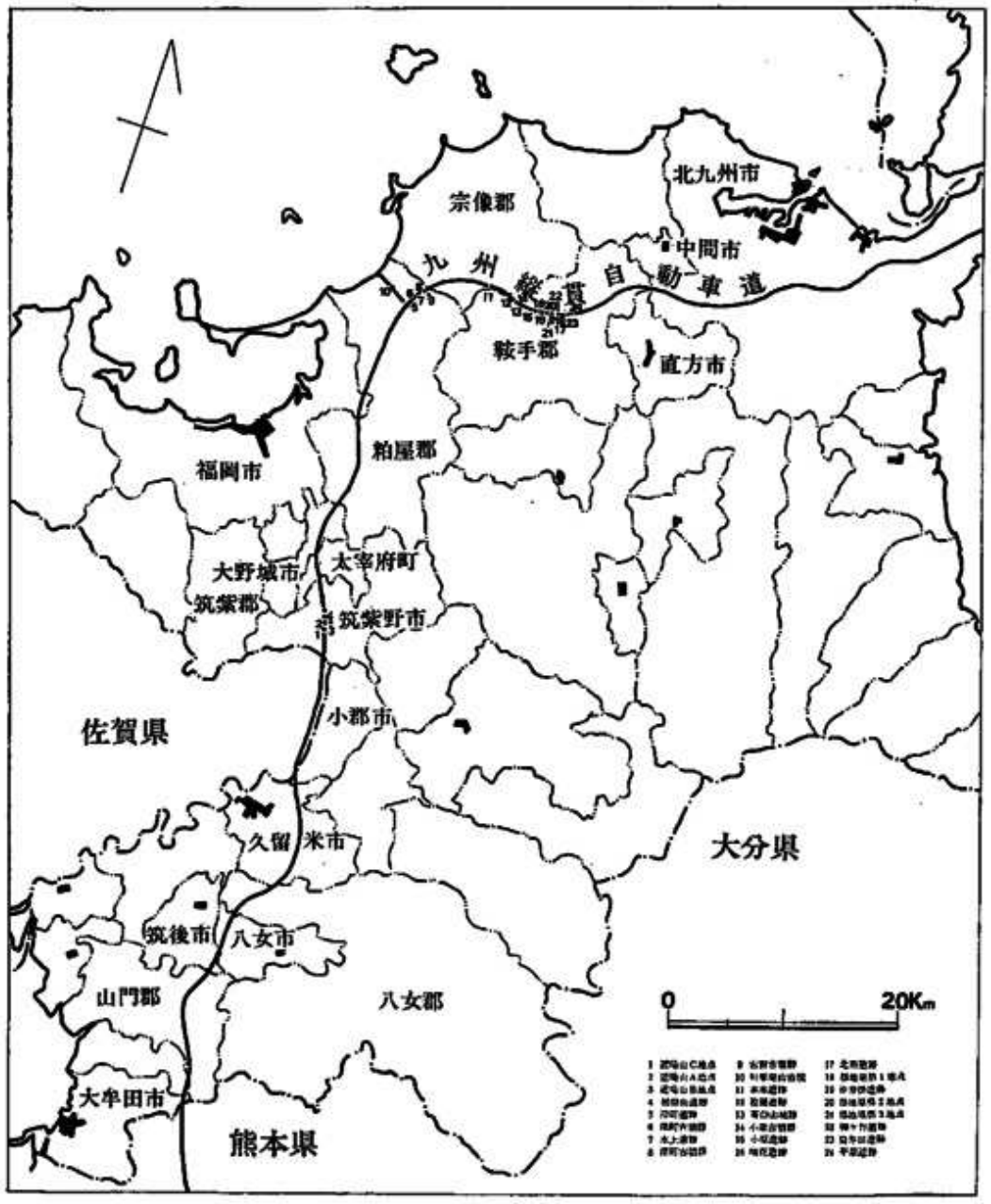
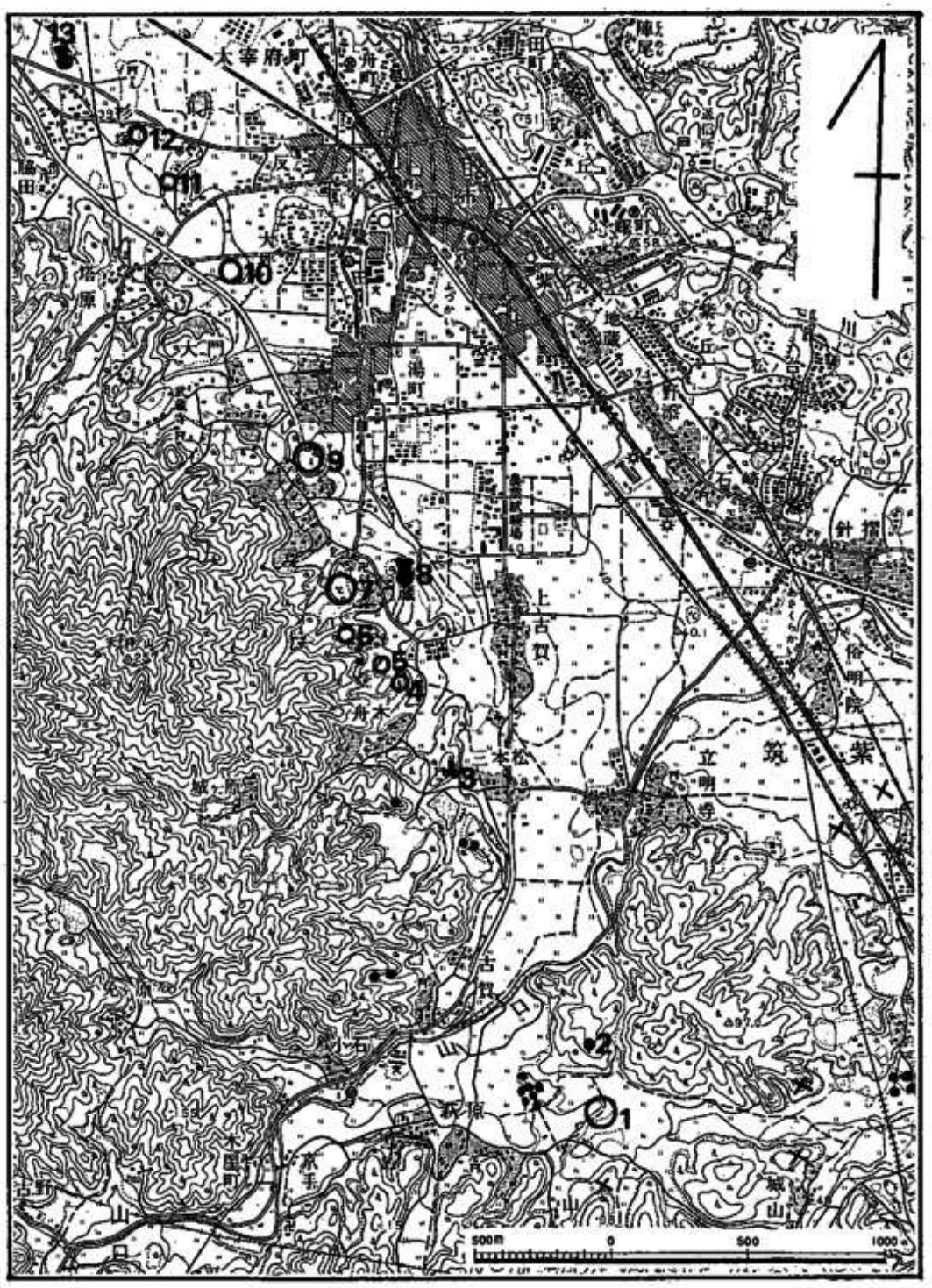


Fig. 1　昭和49年度調査遺跡分布図(縮尺約1/604,000)

Ⅱ　筑紫野市所在遺跡群の位置



1. 萩原遺跡　2. 萩原古墳　3. 刷帷古墳群　4. 山の口遺跡　× 散布地
5. 畑添1地点　6. 畑添2地点　7. 八幡遺跡　8. 原口古墳　● 円墳
9. 道場山遺跡　10. 桜田山遺跡　11. 塔ノ原遺跡　12. 唐人塚遺跡　⚱ 前方後円墳
13. 剣塚遺跡

Fig. 2　遺跡群の位置（縮尺1/25,000）

Ⅱ　筑紫野市所在遺跡群の位置

福岡県筑紫野市所在の遺跡は，今回報告するものだけで，7ヵ所ある。

遺跡群は，背振山系の東北端に所在し，南には標高404 mの基山の山麓が広がっており，西は標高257 mの天拝山麓が横たわり，この東裾部に遺跡が点在するのである。狭長な筑紫野の平野をはさんで，東方には宝満山の山なみが連なる。太宰府の南方である。九州縦貫道建設に伴って遺跡の発掘調査を実施したのであるが，このあたりは，弥生時代から中世に到るまでの重要な遺跡が多い所である。さらに詳述すれば，弥生時代前期から後期にかけての，木棺墓と土壙墓，そして，122基を数える甕棺墓を検出した道場山遺跡があり，この道場山遺跡からは，鉄戈，貝輪などの貴重品の出土を見ている。ついで，弥生時代終末から古墳時代にかけての土壙墓と箱式石棺墓，さらに古墳を検出した唐人塚遺跡があり，古式の古墳で著名な原口前方後円墳は間近である。この原口古墳の墳丘下には甕棺墓も検出されている。北方には，方墳と前方後円墳の剣塚遺跡があり，弥生時代から古墳時代にかけての住居跡群と古墳群の八隈遺跡，扇祗古墳群などの，弥生時代から古墳時代の遺跡があり，さらに，杉塚廃寺，塔ノ原廃寺，武蔵寺が点在する。南方には，延喜式にみえる筑紫神社があり，また，装飾古墳の五郎山古墳があり，その西方の山麓には上原田古墳群が所在する。

以下，南から各遺跡ごとにその位置を紹介することにする。

萩原遺跡は，基山山麓の山口川が形成する山合いの狭長な扇状地の右岸に位置し，水田部と舌状台地に縄文時代から弥生時代にかけての土器と石器を散布する。そこは福岡県筑紫野市大字萩原であり，字名をとって「萩原遺跡」とよぶことにした。

萩原古墳は，萩原遺跡の北方100 mの所にあり立明寺丘陵の西麓の標高80 mに位置する。この立明寺丘陵には古墳群があったが，宅地造成のため，調査後，壊された。今回の調査は，萩原遺跡の調査中に追加されたものであり，「萩原古墳」とよぶことにした。同古墳の西方には数基の古墳が所在する。

扇祗3号墳は，1970（昭和45）年に調査を実施した2基の古墳と共に3基よりなる扇祗古墳群の1基である。そこは，福岡県筑紫野市大字古賀字舟木であり，扇祗神社の境内にあたるため，扇祗古墳とした1，2号墳と共に「扇祗3号墳」とよぶことにした。

山の口遺跡は扇祗古墳群の北方150 mにあり，天拝山麓から続いた東方に延びる68 m程の舌状台地に位置する。調査は3期に分けて実施したため，北部を1区，中央部を2区，南部を3区と呼びわける。そこは，福岡県筑紫野市大字古賀字山の口であり，小字名をとって，「山の口遺跡」とよぶことにした。

畑添遺跡は，山の口遺跡の北東100 m弱の所にあり，山の口遺跡と同様に天拝山麓の東方から続いて北方に延びる舌状台地に位置し，南のものを畑添1地点，北東方100 mにあるものを畑添2地点とした。そこは，福岡県筑紫野市大字武蔵字畑添であり，小字名をとって「畑添1地点」，「畑添2地点」とよぶことにした。

桶田山遺跡は，畑添2地点の北方500 mにあり，もとは，天拝山麓に続いた丘陵であったと思われるが，現在は分断されて，独立丘陵のような様相を呈する。周囲を削減されているのでその上面は，非常に狭い。そこは，福岡県筑紫野市大字塔ノ原であり，通称をとって，「桶田山遺跡」とよぶことにした。

向佐野，長浦窯跡は太宰府町の西端にあり，県道5号線をはさんで対面する位置にあり，北西の1基を「長浦窯跡」，南東の2基を「向佐野窯跡群」と呼ぶ。ここは筑紫郡太宰府町大字向佐野である。多数の窯跡を有する牛頸窯跡群は間近である。　　(川述昭人)

Ⅲ　萩原遺跡の調査

筑紫野市所在後期古墳の調査

Ⅲ 萩原遺跡の調査

1 調査の経過

萩原遺跡の調査は，1972（昭和47）年5月1日から6月13日まで実施した。このうち5月27日までが当初予定した台地と水田の調査であり，5月26日からが萩原古墳の調査である。調査団は下記のとおりである。

調査担当者	福岡教育大学教授	波多野 晥 三
	福岡県教育庁文化課技師	川 述 昭 人
	同	森 田 勉
福岡教育大学学生	晃 治	鹿 島 英 世
	進 博 次	浦 山 博 子
	上 野 正 治	河 口 桂 子
	高 崎 紀 子	与 田 伸 子
	西 嶋 恵 子	古 賀 茂 雄
	中川原 哲 治	平 野 千鶴子
	森 本 好 文	
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	横 田 実
		中 尾 徹
		沢 田 康 雄
		篠 田 エ ミ
		亀 田 光 恵
		有 津 潤
		木 村 あけみ

以下に，調査日誌によって経過をたどってみよう。

5月1日（月）　曇時々雨。発掘資材を搬入して調査の準備をする。

5月2日（火）　晴。台地を1区とし，南側の水田を2区とする。土層確認のため1区に幅1m，長さ40mの第1トレンチとこれに平行して幅1m，長さ40mの第2トレンチを設定し，第1，第2トレンチと直交する幅1m，長さ22mの第3トレンチと幅1m，長さ14mの第4トレンチを設定する。第1と第2トレンチより掘り始める。

5月3日（水）　晴。第1，第2トレンチ掘りを続行する。第3トレンチを掘り始め，落ち込みがみられたため北側の表土剝ぎを行い，この落ち込みを追求する。

5月4日（木）　曇のち雨。第1トレンチは黄褐色の地山らしい層に到達する。第3トレンチ北側を拡張して掘った結果，この落ち込みは，耕作の溝であることが判明した。第2区の表採を行い須恵器を採集する。

5月5月（金）　雨。雨天のため作業中止。

5月6日（土）　晴。第1トレンチは黄褐色土層を掘り下げるが地山であることを確認した。この結果1区の北半は表土からあまり深くなくて地山に到り，南半は傾斜しており，畑作のため，多量に客土していることがわかった。このため1区は北半部のみ全面表土剝ぎを行って遺構の検出に努める。新たに2区に幅5m，長さ25mの第5トレンチ，幅5m，長さ13mの第6トレンチ，幅5m，長さ24mの第7トレンチを設定する。

5月7日（日）　晴。日曜日のため休止。

5月8日（月）　雨。雨天のため作業中止。

5月9日（火）　雨。雨天のため作業中止。

5月10日（水）　晴。第5，第6，第7トレンチを掘り始める。第6トレンチは耕作土中より石匙1点検出する。

5月11日（木）　晴。第5，第6，第7トレンチ掘りを続行する。

5月12日（金）　晴。第5，第6，第7トレンチ掘りを続行する。

5月13日（土）　晴。第5，第6，第7トレンチ掘りを続行する。

5月14日（日）　日曜日のため作業を休止する。

5月15日（月）　晴。第5，第6トレンチを掘りあげる。第7トレンチは続行する。第4トレンチを掘る。

5月16日（火）　曇一時雨。第5，第6トレンチは土層断面図作成のため片側面のみ掘り下げる。第6トレンチは続行するが湧水してくる。

5月17日（水）　晴。第4トレンチは掘りあげたため第4トレンチの南北にグリットを設けて遺構の有無を確かめる。第6トレンチは土層断面図の作製にとりかかる。第7トレンチは地表より2m程掘り下げたが，湧水がひどいため中止する。

5月18日（木）　曇。第5，第6，第7トレンチは河川の流出の堆積土層が厚く遺構は存在しないことが判明したため，2区最南部に幅1m，長さ38mの第8トレンチを設定して遺構の有無を確かめる。高位の1区と低位の2区の中位に6m×4mのグリットを設け第9トレンチとする。

5月19日（金）　雨。雨のため作業を中止する。

5月20日（土）　晴。第8，第9トレンチを掘り下げる。

5月21日（日）　日曜日のため作業を中止。

5月22日（月）　晴。第8トレンチは南端部で縄文式土器，須恵器，土師器が混入している土層があるため，周辺を拡張する。第9トレンチは中段に位置するが，これも地山は南に傾斜しており，やはり盛り土によるものであることが判明した。

5月23日（水）　晴。第5，第7トレンチの壁面を清掃し土層分けをする。第8トレンチはトレンチ掘りを続行する。第9トレンチは掘りあげる。

5月24日（水）　曇。各トレンチの壁面清掃後，写真撮影を行い，土層断面図作製の準備をする。

5月25日（木）　曇。土層断面図をとる。地形図にトレンチ配置を1/500で記入する。道路予定地内に古墳がかかるため新たに調査を開始する。

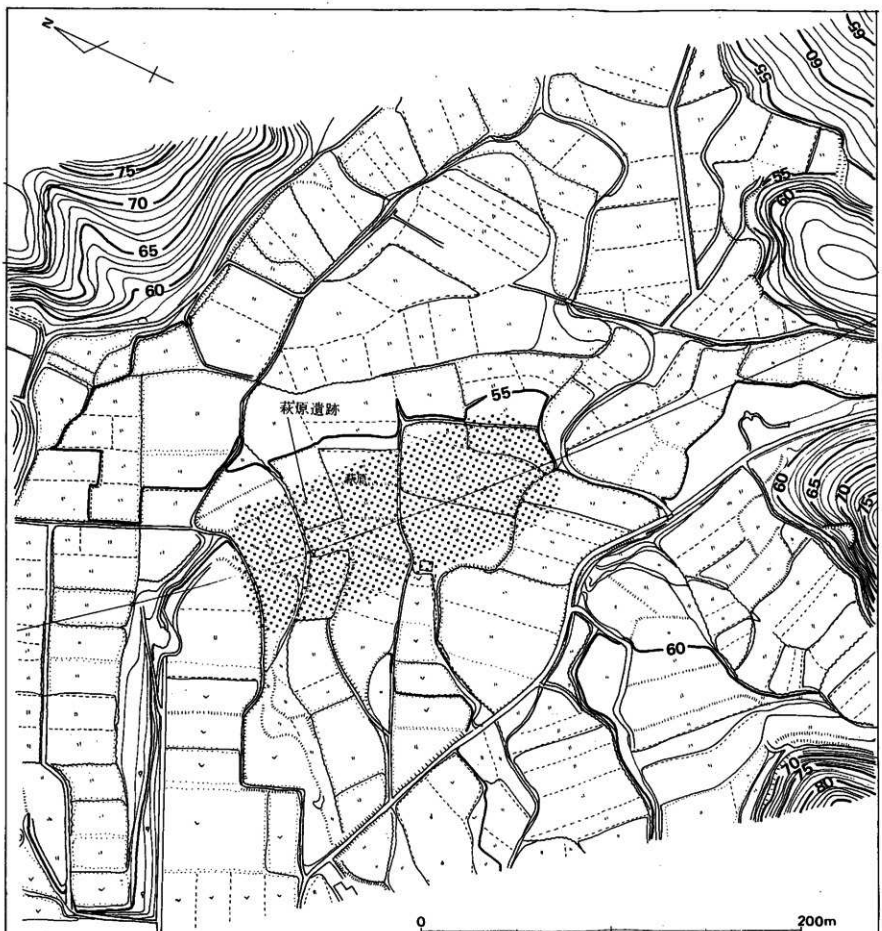


Fig. 3 萩原遺跡周辺地形図（縮尺1/5000）

5月26日（金） 雨。雨のため実測は中止して，萩原古墳の伐採と墳丘上の雑木などを清掃して写真撮影を行う。その後墳丘を中心とした地形測量を1/100の縮尺で作製する。

5月27日（土） 曇時々雨。萩原遺跡は土層断面図作製を続行する。萩原古墳は本日より発掘開始。墳丘に東西のトレンチを入れ，第1トレンチとする。東方に高まりがあるためトレンチを入れる。

5月28日（日） 晴。トレンチ掘りを続行する。これと並行して西半部の表土剝ぎを行う。東方の高まり部分と西南部の小丘は古墳でないことが判明した。第1トレンチからは杯の身と蓋・壺などの須恵器が出土した。萩原遺跡は土層断面図をとり終え調査を終る。

5月29日（月） 曇。石室内を清掃して行く。西半部の表土剝ぎ作業を続行する。

5月30日（火） 雨。雨のため作業を中止する。

5月31日（水） 晴。石室内の清掃を続行する。石室内の攪乱土中より銀環を1個検出する。敷石上より鉄鏃と耳環を2個検出。石室のプランは長方形を呈する。第1トレンチは拡張して石室を追求する。墳丘の東北部の表土剝ぎを行い終る。

6月1日（木） 晴。羨道部はまだ確認できないが羨道の落ち込みが検出される。墳丘の東南部の表土剝ぎを行い終る。

6月2日（金） 曇。石室内の清掃を続行し羨道部床面で大刀を検出する。南北トレンチを入れ，南，北の墓壙を検出する。羨道部は閉塞石が存在する。なお羨道前面には墓道が続く。

6月3日（土） 晴。石室内の清掃を続行する。石室西半部の墓壙の検出に努める。墓道を追求する。

6月4日（日） 晴。石室内の清掃と墓道を追求する。石室西半部の墓壙の検出を続行する。

6月5日（月） 晴。羨道部からは大刀4振検出する。石室北西部の墓壙の検出を終り，墓壙埋め土中より銀環を1個検出する。墓道埋土の土層断面の写真撮影と実測を行う。

6月6日（火） 晴のち曇。午前中石室内の清掃をし，新たに銀環を1個検出し，総数は5個になる。墓道のセクションベルトを除去する。午後写真撮影を行う。

6月7日（水） 雨。仕事にとりかかるが雨のため作業を中止する。

6月8日（木） 曇のち晴。石室西半部の盛り土の除去作業と並行して，石室実測を開始する。

6月9日（金） 晴。石室東半部も盛り土除去作業を行い，周溝らしい溝を検出する。実測は平面図を終了する。遺物のとりあげを行う。

6月10日（土） 晴。石室側壁と奥壁，羨道閉塞石の断面見透し図を作製する。

6月11日（日） 晴。石室側壁と羨道閉塞石，墓道の実測を行う。

6月12日（月） 晴。石室側壁と玄室断面見透し図，羨道部断面見透し図を作製する。

6月13日（火） 晴。実測終了。平板測量図に石室の墓壙と割り付け基準線を入れ，調査を終了する。

2 調 査 の 内 容

a. 萩 原 遺 跡 の 調 査

萩原遺跡からは，先縄文時代のものと思われるナイフなどの石器と縄文時代のものと思われる石鏃（150本），スクレーパーなどの石器が多数点表採されており，その分布範囲も小丘陵から水田までと広範囲に及んでおり，ここが，九州縦貫道の路線にあたるために調査を実施した。

まず発掘調査の方法としては，水田面に舌状にのびる標高61mの小丘陵を2,000m^2程，ブルドーザーで表土剝ぎをし，トレンチを4本設定した。丘陵を横断する1m×40mのトレンチを2本，縦断する1m×14mと1m×22mのトレンチをそれぞれ1本ずつ設定して遺構の検出をはかった。遺物は表土剝ぎの段階で，耕作土中からのみ数点の出土を見たが，それ以外からは皆無である。

第1トレンチの土層断面図をみると，丘陵北半部は地山を削除しており，南半部では地山が下降しており，その上層に耕作用の客土を50～80cm程積んで平坦面にしている。しかるに，この小丘陵は，畑作地にするために丘陵を切り開いて，南半部の斜面に多量に盛り土して平坦面を作って水田としているのであった。ちなみに付近の長老の言によると，ここは「開き田」と呼ばれて，明治時代に開墾したとの事であった。その言を裏づけるごとく，道路わきには石製の記念碑が立っており，それによると明治40年に開墾された丘陵であることがうかがわれた。しかるに同小丘陵から表採した遺物は，客土中に包含されていたものと思われ調査の結果遺構は存在しなかった。当初は地形的に見ても有望な丘陵であっただけに，残念であった。

続いて水田面にトレンチ4本（5m×25mを2本，5m×13mを1本，1m×38mを1本）設定して遺構の検出をはかった。第5，第7トレンチは30cmが耕作土であり，以下は砂利，もしくは砂層が堆積しており，確認されただけでも2.5m程の厚さであり，以下は湧水のため作業不可能となり，砂利層を最後まで追う事はできなかった。第8トレンチは，この砂利層の平面的な範囲を追求するために細長いトレンチを設定した。ここでも5，7トレンチと同様，全域にわたって，砂利，砂層があることがわかり，遺構の存在は望めない。ただ，同トレンチの南端部では，茶黒色の層があり，須恵器片と，縄文土器を出土したので，トレンチを拡張して，調査したが，何ら遺構は検出されなかった。

この萩原の水田面は，全域が扇状地上に客土して水田としており，表採の遺物は，この客土

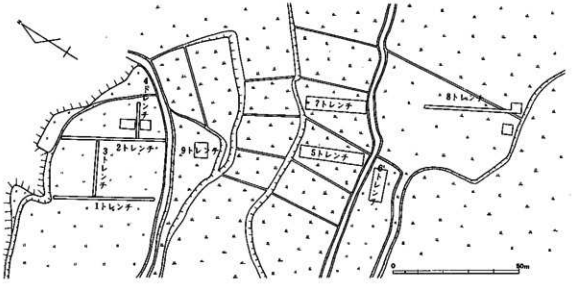
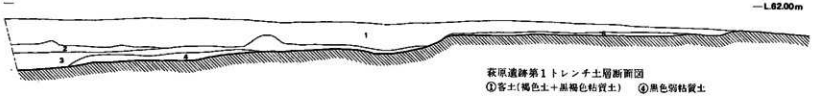
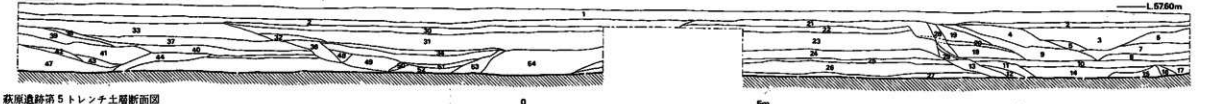


Fig. 4 萩原遺跡地形とトレンチ配置図（縮尺1/6500）



萩原遺跡第1トレンチ土層断面図

①客土(褐色土＋黒褐色粘質土)
②淡灰黒褐色砂質土
③淡灰黒褐色弱粘質土
④黒色弱粘質土
⑤暗褐色粘質土



萩原遺跡第5トレンチ土層断面図

①耕作土
②砂層A
③砂層A
④砂層A
⑤砂層A
⑥砂層A
⑦砂層B
⑧砂層B
⑨砂層B
⑩砂層B
⑪砂層C
⑫砂層C
⑬砂層C
⑭砂層C
⑮砂層C
⑯砂層C
⑰砂層C
⑱砂層C
⑲砂層C
⑳砂層A
㉑砂層A
㉒砂層A
㉓砂層A
㉔砂層A
㉕砂層A
㉖砂層A
㉗砂層A
㉘砂層A
㉙砂層A
㉚砂層A
㉛砂層A
㉜砂層A
㉝砂層A
㉞砂層A
㉟砂層A
㊱砂層A
㊲砂層A
㊳砂層A
㊴砂層A
㊵砂層A
㊶砂層A
㊷砂層A
㊸砂層A
㊹砂層A
㊺砂層A
㊻砂層A
㊼砂層A
㊽砂層A
㊾砂層A
㊿砂層A
(1)砂層A
(2)砂層A
(3)砂層A
(4)砂層A
(5)砂層A
(6)砂層A
(7)砂層A
(8)砂層A
(9)砂層A
(10)砂層A
(11)砂層A
(12)砂層A
(13)砂層A
(14)砂層A
(15)砂層A
(16)砂層A
(17)砂層A
(18)砂層A
(19)砂層A
(20)砂層A
(21)砂層A
(22)砂層A
(23)砂層A
(24)砂層A
(25)砂層A
(26)砂層A
(27)砂層A
(28)砂層A
(29)砂層A
(30)砂層A
(31)砂層A
(32)砂層A
(33)砂層A
(34)砂層A
(35)砂層A
(36)砂層A
(37)砂層A
(38)砂層A
(39)砂層A
(40)砂層A

中に包含されていたものであり，この客土を採掘した場所，もしくは，この扇状地の上方には遺構の存在も可能であるが，そこまでは調査は及ばなかった。要するに多数の石器を表採した，この萩原の地区からは，何ら遺構は検出されなかった。

縄文時代の遺物（Fig. 6・7）

縄文時代の遺構は検出できなかったが，石器としては表土から石鏃，石匙が，第8トレンチ内からは石鏃，搔器，磨製石斧が出土しており，土器としては，縄文時代晩期の鉢，深鉢などの精製土器と，深鉢形粗製土器がある。さらに底部が出土している。

縄文式土器（Fig. 6, PL. 2・3）　1～6は鉢形精製土器であり，内外面とも篦研磨している。色調は茶褐色ないし，茶黒色を呈する。口唇部は体部より「く」字状に外反し，境部は明瞭な稜線が入る。口唇部は，上方に突起し，その形状は丸味を有するものと角張るものとがある。5は復元口径50cm前後となる。6は体部は直立気味であり，深鉢になるものと思われる。いずれも胎土に細砂粒を含んでおり，焼成は良好である。7は鉢型と思われ，口唇部には二条の平行沈線が入る。内外面は篦磨き調整であるが，器表は粗である。暗茶褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。8は，口唇部は丸味を有し，口唇直下の内外に沈線が入る。9は波状口縁の深鉢形土器であり，波状部分には，新に粘土を接合しているのが，観察でき，接合を良くするために，内外より押圧しており，凹線が入る。波状部の頂部は凹湾する。色調は茶黒色を呈しており，焼成は良好である。10，11，13は深鉢形粗製土器であり，口縁部は直立するものと，外反するものがある。内外面は篦磨き調整を施す。色調は10は，灰茶褐色を呈し13は，外面は淡茶黒色を，内面は灰茶褐色を呈しており，いずれも焼成は良好である。胎土には，精製土器と違って，小砂粒を多量に含んでいる。14は，鉢形粗製土器であり，口縁部を欠損している。口縁下には浅い凹線が入る。外面は灰茶褐色を呈し，内面は明茶黒色を呈する。胎土には小砂粒を含んでおり，焼成は良好である。14，15，16は底部であり，14は底径11.5cmである。底部外面には小凹凸が著しい。暗茶褐色で，焼成は良好である。胎土には多量の小砂粒を含む。16は，15と同様，底部外面には小凹凸が著しい。16の底部は，円板貼り付けである。外面は灰褐色を呈し，内面は灰茶黒色である。胎土には多量の砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

石器（Fig. 7, PL. 4・5・6）

石鏃（1～6）　1，4，6は表土より出土しており，2，3，5は第8トレンチ内より出土した。抉りの深い形態を呈する。石質は1，2，4，5は黒曜石，3，6はサヌカイト製である。すべてに，抉りが入る。

石匙（7，8）　7は1区の耕作土中から，8は8トレンチより出土した横形石匙であり，7はつまみを有する。材質はともにサヌカイトである。7は表裏の先端に加工を施し刃部とする。8は片面にのみ加工を施して刃部とする。

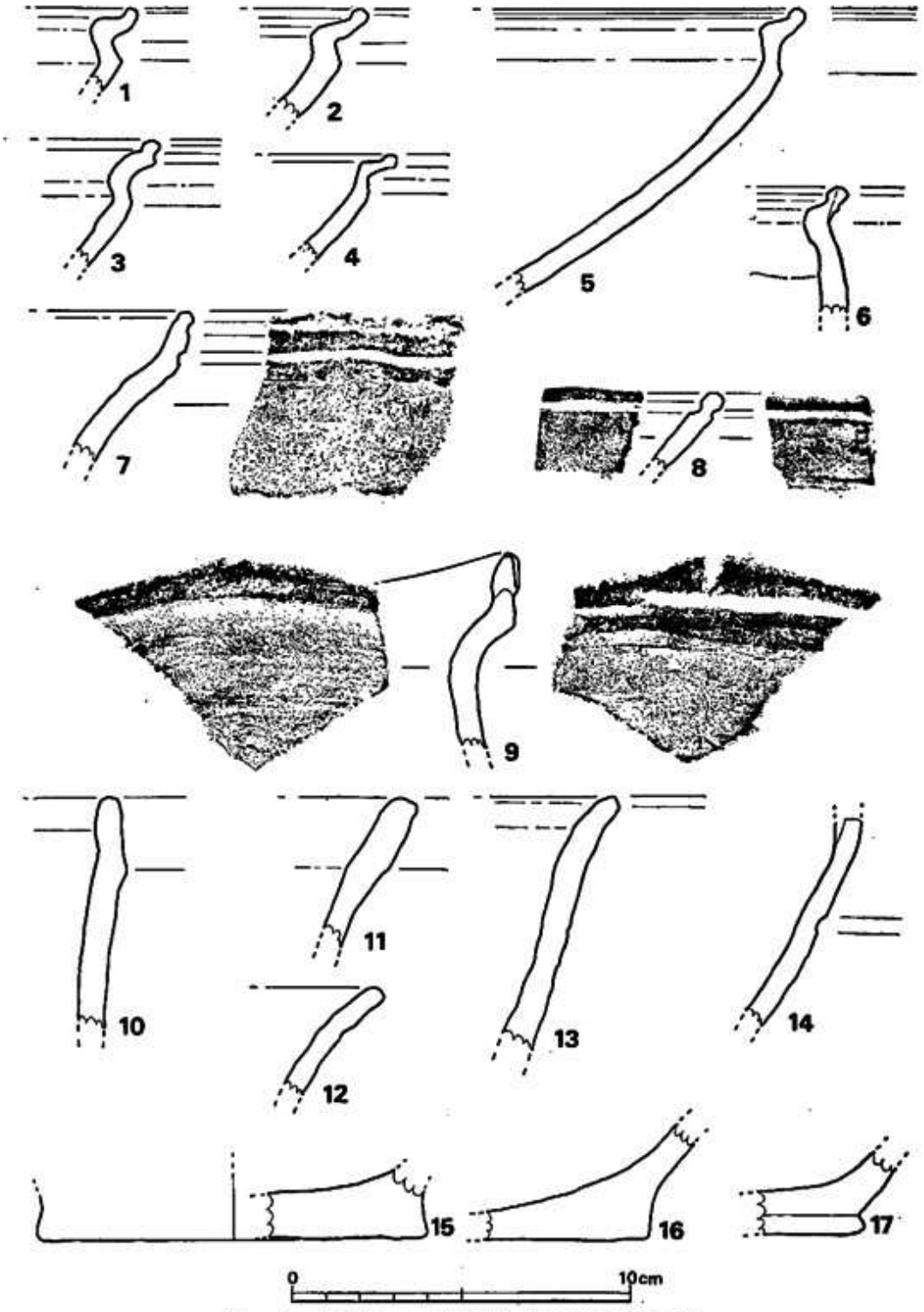


Fig. 6　第8トレンチ出土縄文土器実測図（縮尺1/2）

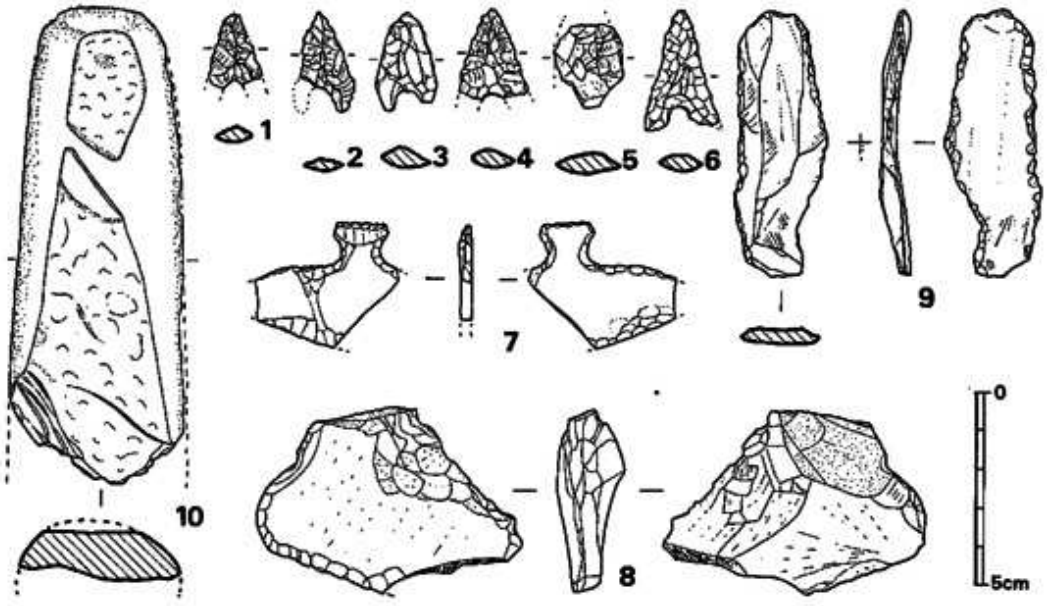


Fig. 7　石　器　実　測　図（縮尺1/2）

掻器（9）　黒曜石製であり，サイド・スクレイパーである。第8トレンチより出土した。

磨製石斧（10）　1/4を残存するのみであり，狭長な石斧である。刃部を欠損する。第8トレンチより出土した。

須恵器（Fig. 8）　第7トレンチから，4，7，8が出土しており，以外は第8トレンチから出土している。杯蓋は2類に，杯は1類に分類できる。

杯蓋（1～4）

I類（1，2）　1は体部と天井部の境に沈線が入って段がつく。口縁部内面には甘い沈線が入り，古式のなごりをとどめる。灰色で，焼成は良好である。胎土には細粒を含む。2は体部と口縁部の境に沈線が入る。天井部は箆削りを施し，以外は横ナデ調整である。灰色で，焼成は良好である。胎土に細砂粒を含む。

II類（3，4）　蓋に身受けのかえりがつくものであり，かえりは，わずかにつく退化形態である。調整法はともに，残存部は横ナデである。3は灰白色で，焼成は不良。胎土には細粒を含む。4は灰色で，焼成は良好である。胎土に小砂粒を含む。

杯（5，6）　高台を有するものであり，短く，断面は方形を呈する。5は，高台の外方が地につき，6は底面は平坦である。5は灰色で焼成は良好であ

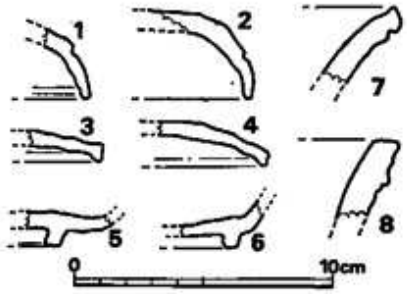


Fig. 8　須恵器実測図（縮尺1/3）

る。胎土は精選されていて良い。6は明灰色で焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

甕（7，8）　口頸部を残存するのみである。7は口唇部下に一条の沈線が入り，8は小突起が付く。残存部，内外面ともに横ナデ調整である。7は暗灰色，8は灰色である。焼成はともに良好である。

杯蓋のⅠ類はⅢb式に属し，6世紀後半代に比定され，Ⅱ類はⅦ式に属し，8世紀後半代に比定される。杯はⅦ式に属するものと思われる。　（川述昭人）

b.　萩原遺跡表採遺物

九州縦貫自動車道建設にかかる遺跡発掘調査に先立ち，萩原遺跡からは佐藤の積年の努力によって，先縄文から縄文早期にかけての多数の遺物が採集されている。そのうちの数例をここに紹介する。なお，調査に際しては，この時期の遺物はまったく出土しておらず，縄文晩期に限定されている。

土器（Fig. 9）

撚形文土器片4点が採集されている。1，2は口縁片，3，4は胴部片である。すべて殻粒文の撚形文であるが，施文具は各々異なっており，1，3に見られる長5㎜大の殻粒から，4に見られる殻粒までさまざまである。すべて焼成に際しての火の通りが悪く，胎土中央は黒色を呈し，外壁は褐色を呈している。

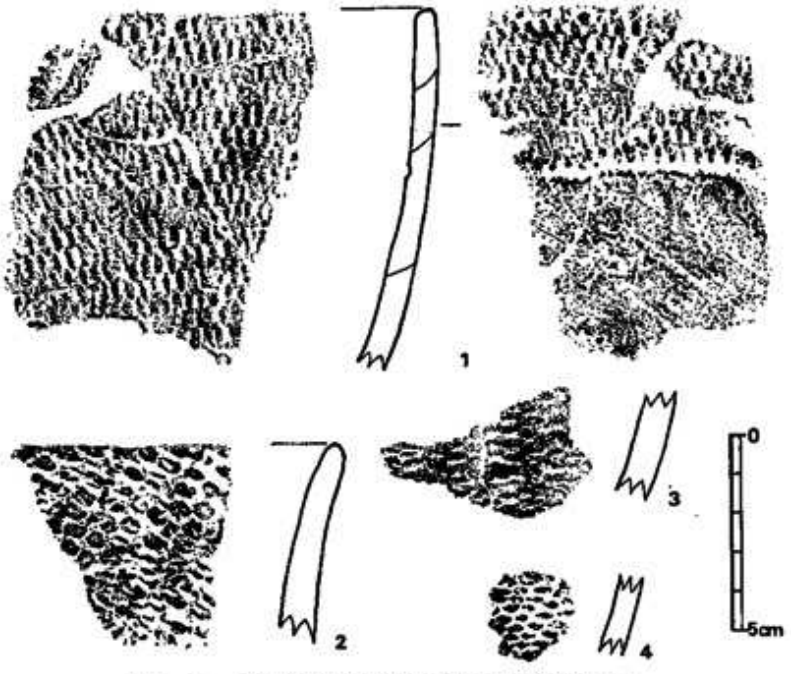


Fig.　9　　萩原遺跡表採押型文土器撮影（縮尺1/2）

口縁部片の1と2は器型が異なる。1は平端に近い口縁部を持ち，単純に円湾しながら胴部に至る。いわゆる砲弾型の土器である。2は外湾する口縁部下で若干の膨みを持つ。いずれも早水台遺跡出土土器中「円形捺形文土器」に共通する器形である。(註1)

石器 (Fig. 10～11)

多数の石鏃及びスクレーパー，先縄文時代の台形石器，ナイフ，ポイント，コアーが採集されている。以下，縄文時代と先縄文時代石器に分けて記述する。

縄文時代石器

石鏃 (Fig. 10)　各種形式の石鏃が採集されている。早水台遺跡の調査報告に際しては，11種(A～K)に区分されて，各々の特徴が述べられているが，大むね，その範疇に含まれよう。5は剝片石鏃であり，8～28は基部が円形あるいは梯形に湾入した，いわゆる鏃形石鏃，31は平面二等辺三角形の縦長石鏃である。いずれも捺形文土器中でも，特に楕円捺形文土器に特徴的に共伴するものである。今時採集品中，鏃形石鏃が多数を占めるが，これらの中でも数類に区分しうる。すなわち8～9に見られるごとく，小形ではあるが，刃部に明瞭な段を有するもの，縦形で小形のもの (10～16)，縦長で大形のもの (21～28, 30)，横長のもの (17～20) がある。本例採集品中，横長の例はこれまで早水台遺跡を初め，大分県稲荷山遺跡(註2)，黒山遺跡(註3)，成仏岩陰遺跡(註4)，長崎県福井洞窟(註5)等で発見されているが，本遺跡採集石器ほど横に張るものは少なく，当遺跡の一つの特徴とみなしてよかろう。32～35は細長な類である。刺突具であろうが，大きさからみて石鏃の範疇に含めた。39～42は基部が直線に近く，断面扁平である。石材は黒耀石と安山岩が相半ばするが，特に鏃形石鏃の小形品については黒耀石製品が多い。

尖頭器 (Fig. 10—36～38)　加工は一般に荒く，原剝片の剝離面を一面，又は両面にとどめている早水台遺跡の石鏃第K類に当るものと考える。36, 37は安山岩，38は黒耀石製である。

スクレーパー (Fig. 11)　多くは長2.5㎝大と小形である。エンド・スクレーパー，あるいはラウンド・スクレーパーとみなしうる石器である。縦長剝片のバルブに近い部分を利用し，1～3，5，9は原剝片の剝離面を残している。大部分は刃部加工が入念であり，時に6に見られるごとく石鏃の範疇に含めてもよい例もある。ここで石鏃の類に入れず，スクレーパーとしたのは，その先端部より両縁に細密なる加工を施したという理由による。10は断面台形の石器で，両縁に細かい加工を施している。横長剝片のバルブを利用している。先端部が欠けており，あるいは錐かもしれない。4は石英，6が安山岩を利用している他は，全て黒耀石製である。

先縄文時代石器 (Fig. 11—11～21)

台形石器 (11～16)

縦長剝片 (石刃) を横切りし，両側縁をブランティングした，いわゆる百花台タイプの石器(註6)である。14, 16のみは基部にまでブランティングされている。全て黒耀石製であるが，11, 16はやや黄味を帯びた乳白色の黒耀石製で，他の全ての黒耀石製品と異なる。

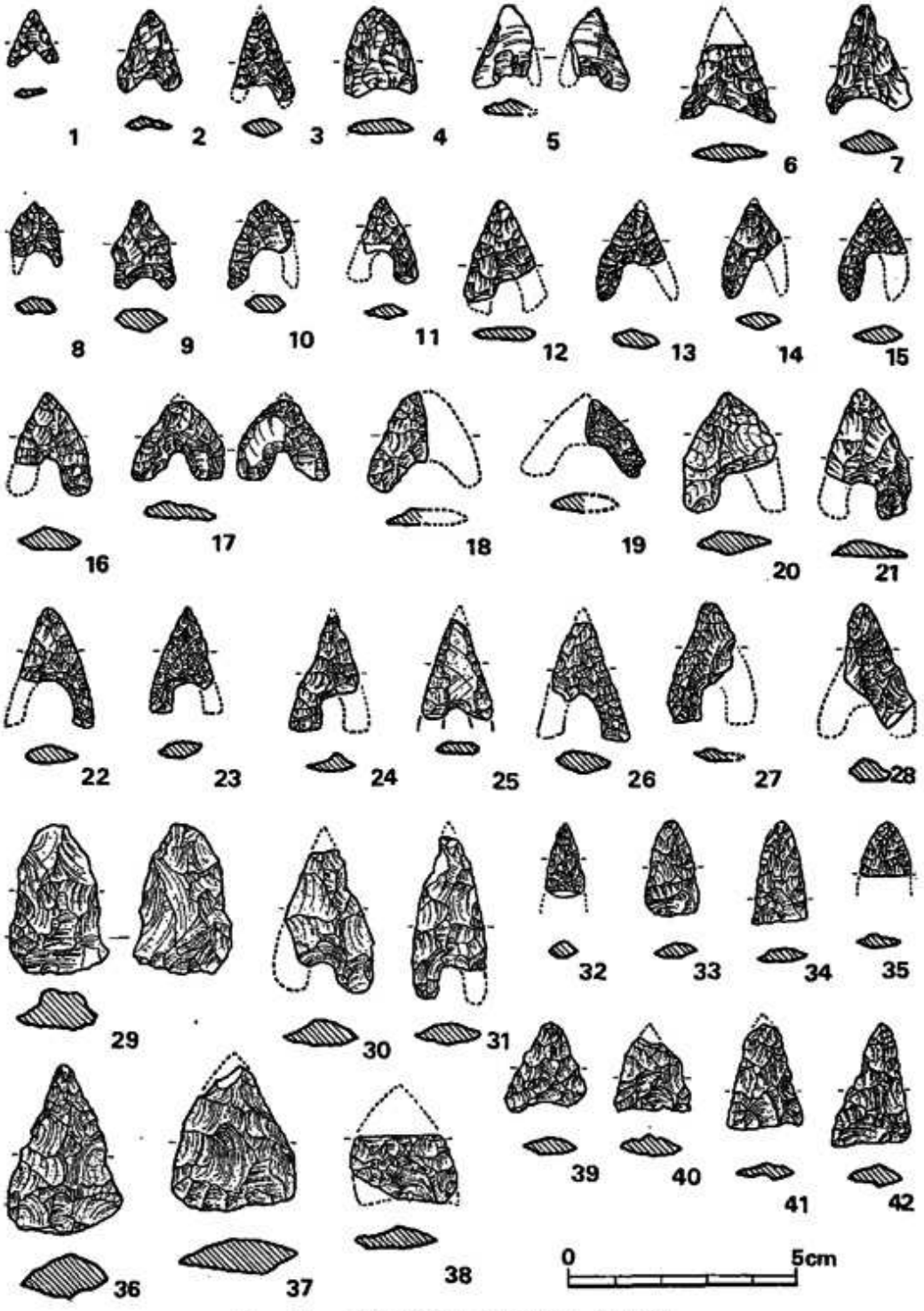


Fig. 10　萩原遺跡表採石器実測図①（縮尺2/3）

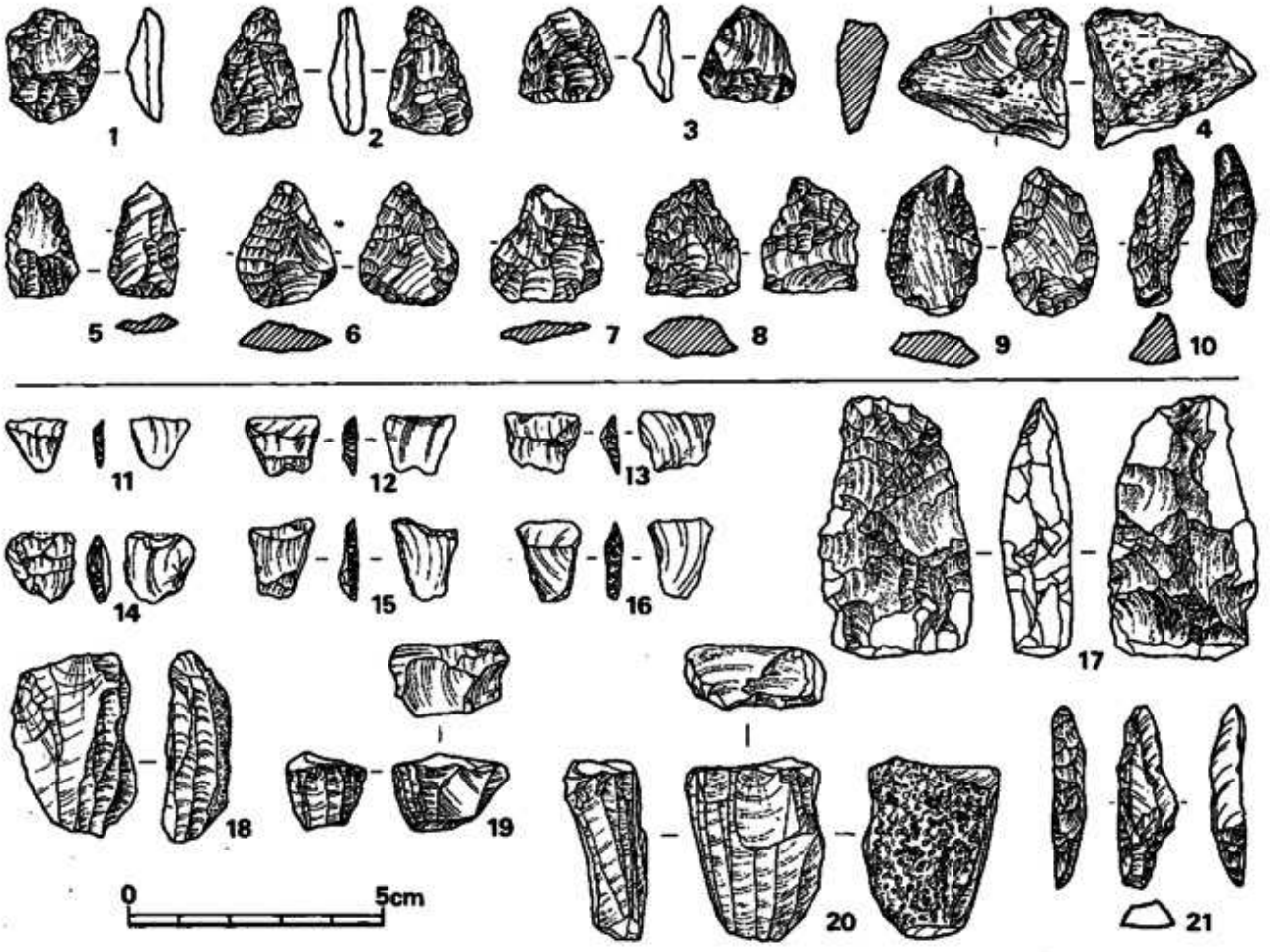


Fig. 11 萩原遺跡表採石器実測図③ (縮尺2/3)

尖頭器（17）

刃部周辺に新しい破損個所が多いが完形品である。断面レンズ状で，基部は平坦である。先端部は片方に寄っている。安山岩製である。福井洞窟第4層(註7)及び直谷岩陰遺跡(註8)出土中に類品がみられる。

ナイフ形石器（21）

3点採集されているが，完形品は図示したもののみである。縦長剥片を利用した断面台形の石器である。バルブは切り取られているが剥離方向は基部側である。二宮忠司氏のいうaⅢ型の範疇に含まれようか。(註9) 黒曜石製である。

細石核（18～20）

18は背に礫面を残している。上下に調整打面を持つ。黒曜石製である。19は上面にのみ調整打面を持った残核で，石刃剥離は図上左側からのみ行っている。なお下面にいわゆる core refreshing facit を行っているが，facit された以後石刃を取った形跡はない。黒曜石製である。20は上面にのみ調整打面を持っており，背に礫自然面を残している。安山岩製である。

以上萩原遺跡採集品について概略を述べてきた。石器は早水台タンプの微粒楕円捺形文に伴うものと先縄文時代のものとに大別したわけであるが，尖頭器及びスクレーパーについては先縄文時代に含めるべきものであろう。

捺形文土器に共伴する石器は九州では主に大分県，長崎県で多く出土しているが，福岡周辺ではこれまで発見例が少なく，本遺跡のものは採集品とはいえ，そのもつ意義は貴重と考えられる。

先縄文時代の各種石器は，層位的に把握されたわけではないので，共伴関係は明瞭でない。

註　1）八幡一郎，賀川光夫「早水台」昭和36年.
2）大分県教育委員会「稲荷山遺跡緊急発掘調査」大分県文化財調査報告，第20・21合輯，昭和45年.
3）大分県教育委員会「黒山遺跡緊急発掘調査」大分県文化財調査報告，第17輯，昭和41年.
4）坂田邦洋「国東町文化財調査報告書―縄文時代に関する研究，成仏岩陰の調査」国東町教育委員会，昭和47年.
5）麻生　優「岩下洞穴の発掘記録」中央公論美術出版，昭和43年.
6）和島成一・麻生　優「島原半島百花台遺跡の調査」日本考古学協会昭和38年度大会協会研究発表要旨，昭和38年.
7）福井洞窟　日本考古学協会「日本の洞窟遺跡」昭和42年.
8）長崎県教育委員会「福井洞窟―図録編」
9）二宮忠司「九州地方におけるナイフ形石器について」考古学論叢1，別府大学考古学研究会，昭和48年.

（酒井仁夫・佐藤保雄）

c. 萩原古墳の調査

墳　丘

萩原古墳は，標高97mの立明寺丘陵の西側斜面80mの高さに位置する円墳である。伐採後に行なった墳丘測量によると同墳の規模は東西径 12.7m，南北径 12.5mを有するものと思われた。Fig. 12 からもわかる様に，同墳の北東部にも円墳の存在を考えさせる様な小丘があったので，トレンチを入れて確かめた結果，これは自然地形であった。

萩原古墳は調査時には墳頂部はすでに盗掘壙をポッカリあけており，石室の様子が覗ける状態であった。また盗掘壙周辺には，中から取り出した石室の石材を小積みしており，副葬品を盗むための仕業と思われ，石室内の遺物の残存状況は，悪そうに思えた。

この古墳は，丘陵の西傾斜地に墓壙（掘り方）を掘って，構築した横穴式石室を包蔵するものであり，その墓壙内に，奥壁，玄門の袖石を据えて，あらかじめの位置を決めたのち，基底部から，石材を積み，同時に掘り方の空間部に，赤褐色粘質土と茶褐色砂質土を交互に平行状にたたきしめながら石材を安定させる作業をくりかえすのである。このような版築作業は，掘り方をやや上廻る高さで行なわれる。墳丘の築成には，10層前後の層位が認められる。前述した様に，同墳の東北部には小丘があり，古墳築造に際してはこの東北部の墳丘裾部には溝を掘る事によって，その墳丘の範囲を明瞭にしている。盛土の高さは，東側で，約1.2m，南側では約0.8m，そして北側では掘り方上端面が低位置にあるため1.7mと高くなる。なお床面から残存盛土上面までは 2.4 mある。

石　室

内部主体は，主軸をN—30°—Eにとり，南西方向に開口する全長約 4.25 mの単室横穴式石室で，玄室の平面形は長方形を呈する。

墓壙（掘り方）は，まず，地山を 0.7m～1.1mの深さに掘り，平面形は，幅 3.1m，長さは 3.9mまではほぼ長方形であるが，それから 1 m程は，内側へ掘り込まれて幅をせばめる。奥壁部の墓壙端部より，4.9mの位置で幅は 2 mとなる。これはさらに前方へ延びて墓道を形成している。墓壙はあらかじめ石室の形態にあわせて，羨道部側はその幅をせばめている。

玄室の幅は奥壁部で1.65m，袖石部で1.78mと若干広くなる。長さは中軸線上で，奥壁から仕切石まで2.42mを測るが，袖石までの長さは左側袖石は2.31m，右側袖石は2.65mと右側の方が長い。奥壁は一枚石で下部幅約1.5m，上部幅約0.5m，高さ1.3m（床面から），厚さ25cmの巨石を鏡石として立てている。上部には，小石を挟んで20cm大の石を二段積んでいる。奥壁現存高は1.65mであり，当初も，これよりそう高くはなかったものと思われる。両側壁最下段は腰石として，長方形状の石材を横長に使っており，右側壁は，長さ 1 m大のものを 2 個と20

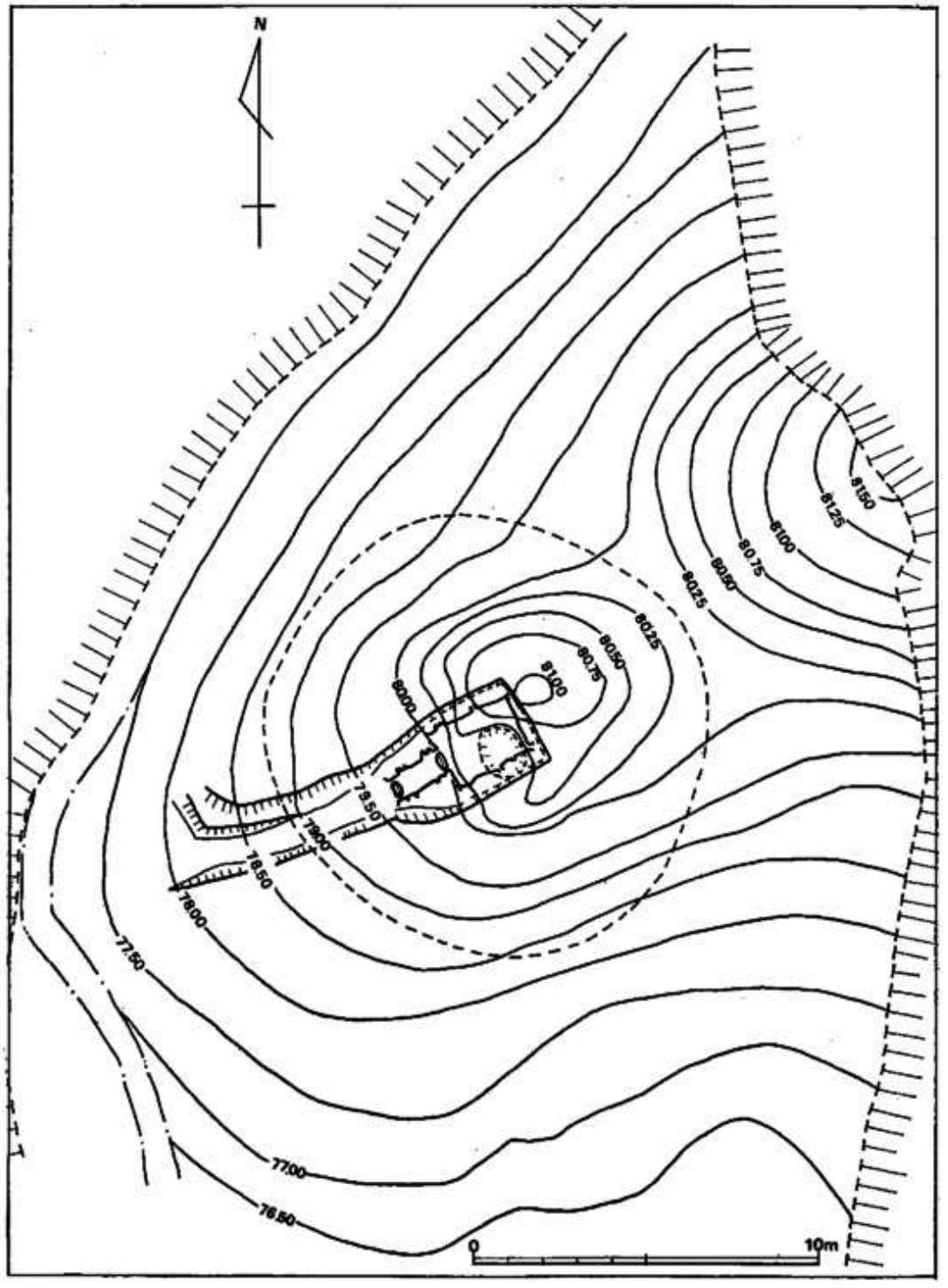


Fig. 12 萩原古墳地形実測図（縮尺1/200）

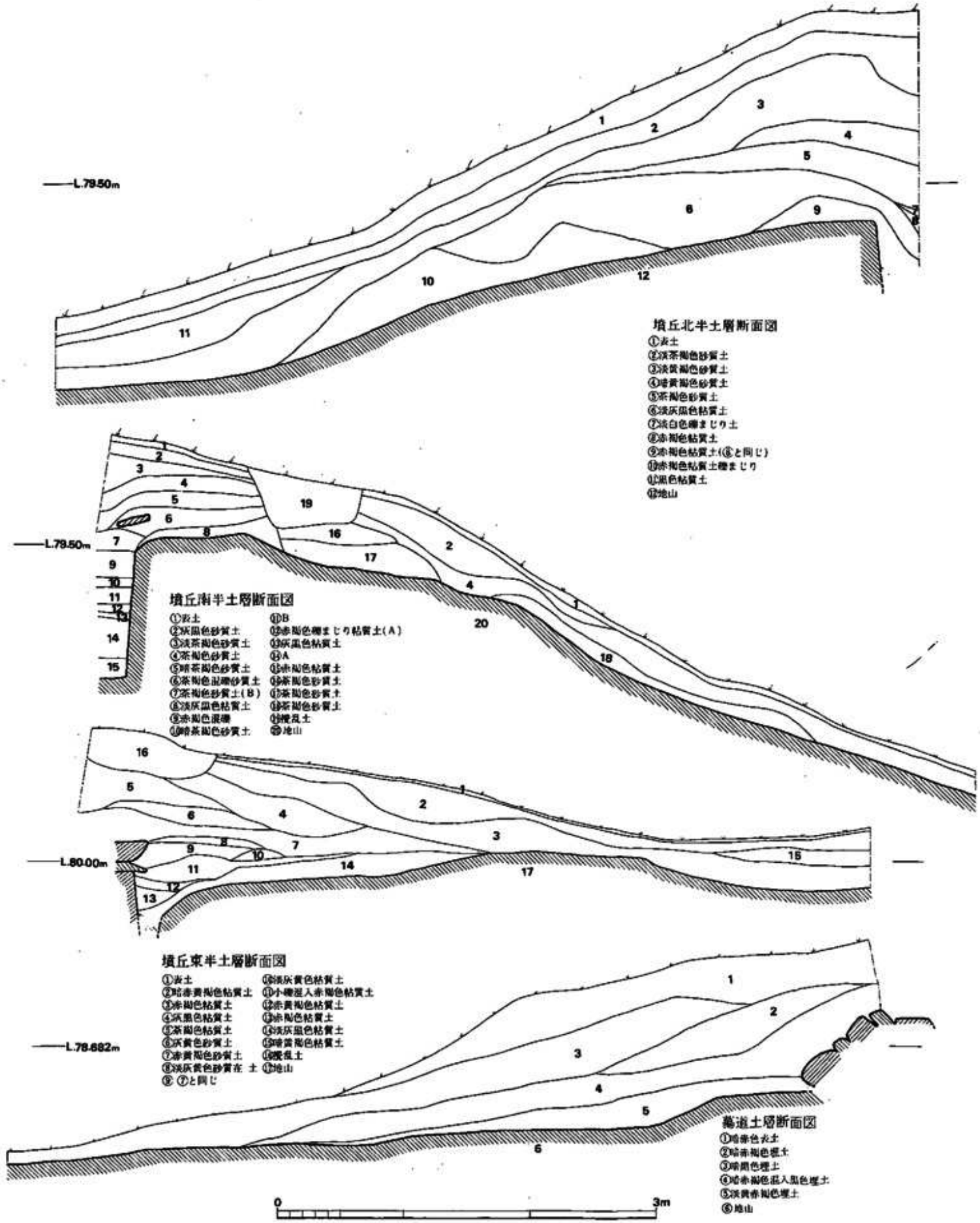


Fig. 13 萩原古墳墳丘土層断面図（縮尺1/60）

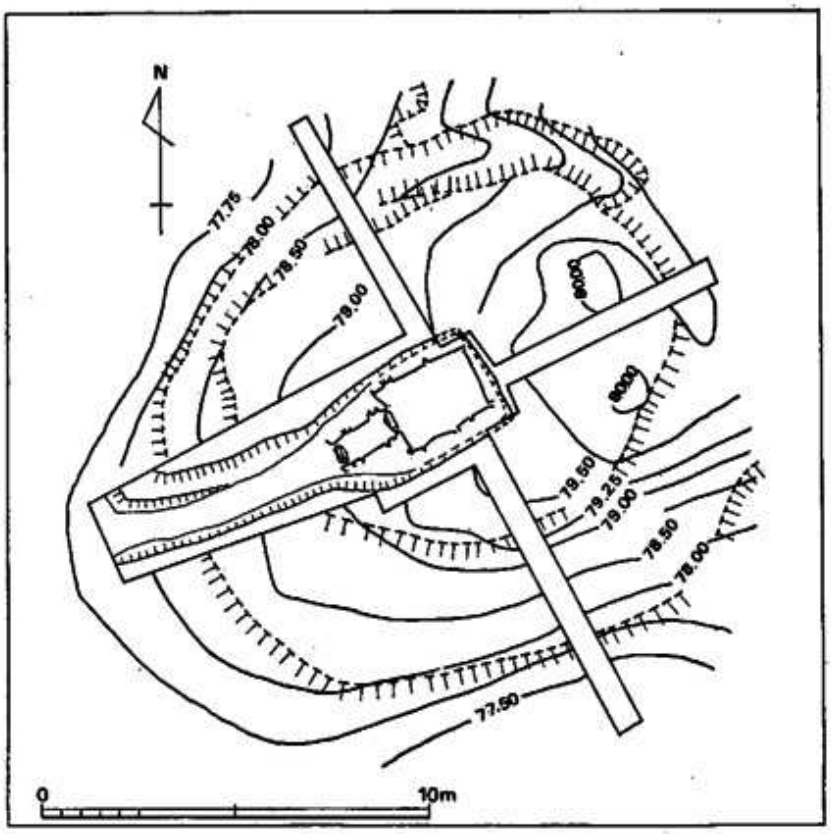


Fig. 14　荻原古墳墳丘と石室実測図（縮尺1/200）

㎝～30㎝大の小石２個，左側壁は，70㎝～90㎝大の石を２個と，30㎝～40㎝大の石を２個交互に使っている。両側壁とも最下段には，横長の石材を使用しているが，二段目からは，小さめの石材を横積みしている。側壁は，残存状態が良くないが，かなり持ち送りされて，天井部では，壁面間の間隔をせばめているのがわかる。

玄門は右壁から50㎝，左壁から65㎝ほど各１個の石を突出させて袖石としている。左のそれは，高さ50㎝，幅20㎝～30㎝，右のそれは，高さ55㎝，幅20㎝であり，袖石間の床面には長さ55㎝，幅15㎝～18㎝，厚さ約20㎝の仕切石を置く。袖石間は上部，下部とも約60㎝であり，袖石上に何段か積んだのち，天井石が，のったものと思われる。

床面は盗掘の際に一部攪乱されているが，本来は玄室と羨道部の全面にわたって15㎝～25㎝大のやや角張った厚めの自然石を敷石としている。

羨道は，玄室仕切石より，中軸線上で1.85ｍ続き，これは奥壁から4.05ｍの長さになる。最下段の石は，30㎝～60㎝の長さの石を基調にしており，地山を５㎝～10㎝程掘りくぼめて据えている。羨道先端部は，左右両壁にそれぞれ添った位置に各１個の袖石がある。この袖石間に

長さ55cm，幅25cm，厚さ20cmの仕切石が置かれてある。右袖石は盗掘の際，動かされたと見えて，著しく内傾していた。高さは，右袖石は70cmであるのに対し，左のそれは40cmであり30cm程低い。前述した如く羨道部にも床面には敷石が全面にあった事が認められており，この敷石は，玄室のそれと同様，地山上に直接敷く事はせずに10cm程盛り土しているのは，敷石とした石材が一様に扁平でなく，やや厚手のものがあるため，盛り土して，上面をあわせたためと考えられる。

羨道前面には，地山を幅1.1m～1.6m程断面をU字型に掘りくぼめた墓道が7mほど続き，右側は直角に近く開く。墓道の床面は，傾斜地形にそって下降する。墓道の断面をみると第1次の墓道は淡黄赤褐色の埋土があり，上部には3層ほど確認されており，数次にわたっての追葬が考えられる。

閉塞は，羨道前面に行なわれている。まず，仕切石から70cm前方の位置に高さ65cm程の大きさの石を据え，さらに20cm～30cm大の石と土とを，この石の側方と墓道側に積み，次いで仕切石側に幅1m大の板状の大きめの石を，さきほどの石にもたせかけ，周辺を覆って閉塞としている。

遺　物 (Fig. 15～Fig. 23)

上述してきたように萩原古墳の石室は破壊はされているものの，下部を残存していたので，副葬品などの出土遺物の中に原位置を保つと思われるものもあった。玄室内では床面から耳環3個と鉄鏃が出土している。羨道部の左壁よりの位置には鉄刀4振が刀先を玄室に向け，刀部を左壁に向けて重なった状態で出土したが，床石のなくなっている所もあり，二次的移動を受けた可能性もある。耳環は玄室内清掃中に堆積土中より1個出土しており，玄室内からは4個になる。さらに興味深い事には，石室の墓壙(掘り方)内の裏込め土中より耳環が一個検出された。土器は石室内の攪乱土中よりわずかに出土しているが，石室内にあったものかどうかは明らかでない。出土した土器の大半は墓道内と石室前面の墳丘中より出土しており，後者のしめる比率が高く，追葬時に二次的移動を受けたものが多いものと思われる。なお，墳丘中より出土した壺，甕は，墳丘に供された可能性がある。

なお，出土した遺物を列記すると，つぎの通りである。

(1)	装身具	耳環　5個
(2)	武　器	鉄鏃　16本以上
		大刀　4振
		鍔　1個
(3)	工　具	刀子　2本
(4)	土　器	須恵器　56個体以上
		杯（蓋・身）　37個体以上

高杯　6個体
甕　2個体
坩　1個体
提瓶　2個体
壺　4個体
甕　1個体
横瓶　1個体
不明（平瓶か）1
土師器　11個体
高杯　10個体
鉢　1個体

鉄鏃（Fig. 16—1～16）　1は変形両丸造定角式に属する。最大幅30㎜，身長65㎜である。2は広鋒両丸造三角形式に属する。最大幅25㎜，身長50㎜，全長147㎜である。3は広鋒片丸造三角形式に属する。最大幅27㎜，身長44㎜，全長124㎜である。4は円頭広根斧箭式に属する。最大幅16㎜，身長80㎜，全長156㎜である。5，6，7，8，9，14は片丸造盤箭式に属する。6，7は棘箆被である。完存する6よりその大きさをみると，最大幅10㎜，身長25㎜，全身165㎜である。11，12は関無片丸造盤箭式に属する。11は棘箆被である。15は関無平造盤箭式に属する。残存長120㎜である。以上の如く，述べてきた鉄鏃の出土地点を付け加えてみると，玄室内出土は2であり，墓道出土は4，8，16であり，閉塞石下出土は6，7であり，残りはすべて羨道部から出土している。

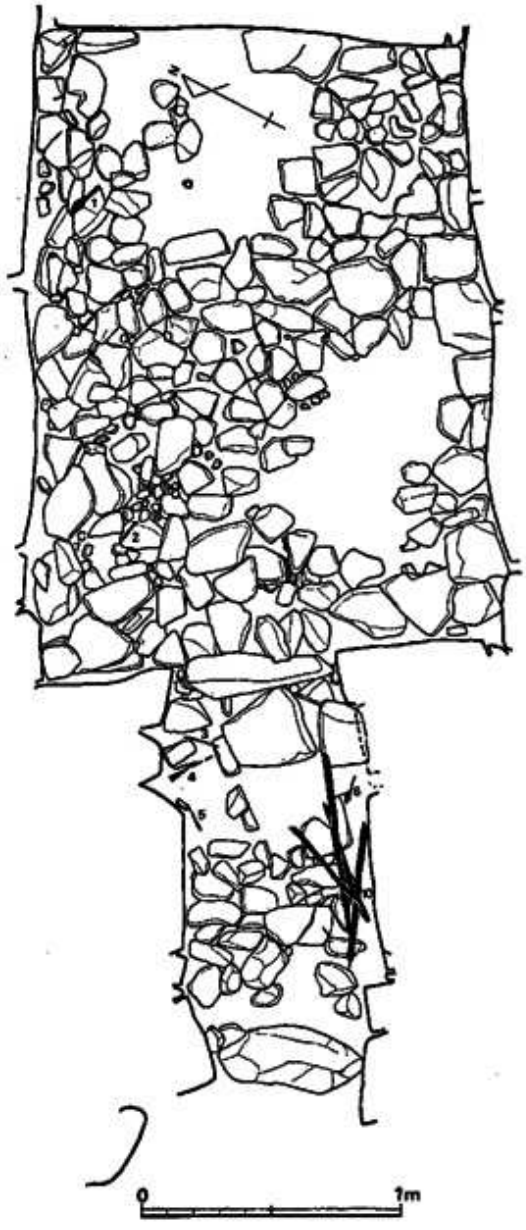


Fig. 15　遺物出土状況実測図（縮尺1/30）

刀子（Fig. 16—17・18）　17は片関であり，身長89㎜，最大幅15㎜，身厚5㎜，茎は長さ52㎜，最大幅11㎜，厚さ3㎜であり，全身は141㎜である。18は身の前半部を欠損する。両関である。身厚3㎜。茎は長さ59㎜，幅9㎜で先細りとなる。厚さ5㎜である。

耳環（Fig. 17—1～4）　5個出土しており，いずれも銀環である。各部の計測値，出土位置

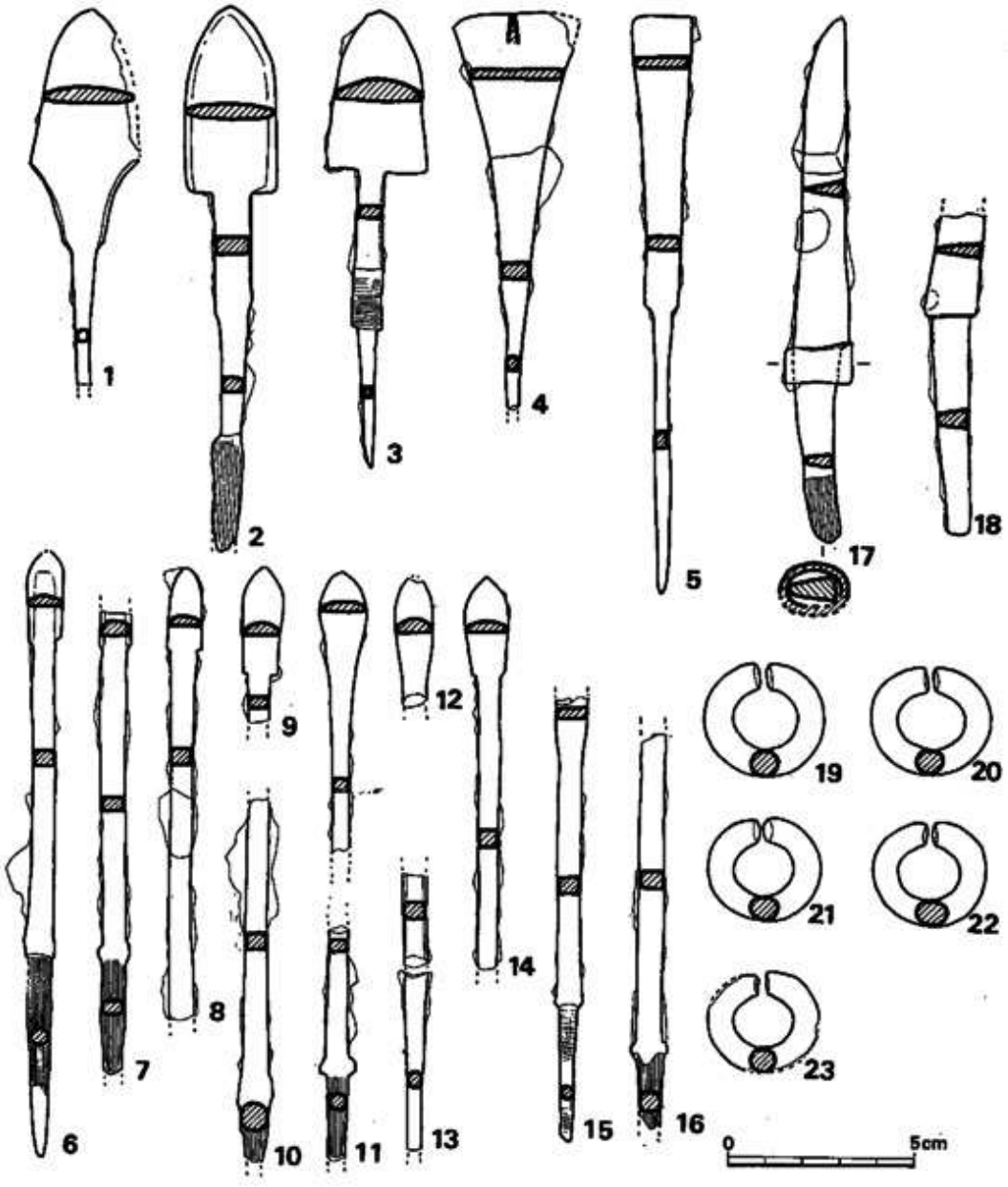


Fig. 16　鉄鏃，刀子，耳環実測図（縮尺1/2）

は以下の如くである。

21と22は出土状態，計測値よりセットと思われる。19と20は計測値は近似するが，出土状態は19は掘り方裏込め土中より出土しているので，セットとは思われない。またなぜ，この様な出土の仕方をしたのか疑問である。本墳出土の耳環は3セットと思われ，少くとも3体の埋葬

Tab. 2 萩原古墳耳環計測表（単位はミリメートル）

	外径	断面の形態	断面径	出土位置
19	33 ×30.5	円	8 ×7.5	墓壙内出土
20	32 ×29.5	円	7 ×7	玄室内攪乱土中
21	31 ×28	楕円	7.5×6.5	玄室内
22	31 ×28	楕円	8 ×7	玄室内
23	30.5×27	円	7 ×7	玄室内

遺体が考えられる。

大刀（Fig. 17—1～4） 羨道部左壁寄りから4振まとまって出土した。1は茎の先端部をわずかに欠損する。平棟，平造りで，刃わたり37.5㎝，幅25㎜，厚さ9㎜である。関部には幅20㎜～23㎜，断面で長径約30㎜，短径は推定で23㎜の楕円形の縁金具がある。2は茎の先端部をわずかに欠損する。茎の部分には鉄鏃が錆て付着している。茎には目釘穴がみられる。平棟・平造で，刃わたり41㎝，幅23㎜で関の部分では27㎜と少し広くなる。厚さ10㎜である。関部には幅22㎜～24㎜，断面で長径30㎜，短径29㎜の不整円の縁金具がある。3は刃部をわずかに欠損するのみである。平棟・平造で，刃わたり42㎝，幅27㎜，厚さ8㎜である。関部には幅16㎜，断面で長径31㎜，短径は推定で28㎜の縁金具がある。茎は長さ7.1㎝，幅は中央部で16㎜を測り先細りとなる。なお，目釘穴は不明である。全長49.1㎝である。4は最も長く，全長72.8㎝である。平棟・平造で，刃わたり60.2㎝，幅29㎜，厚さ9㎜である。関部には幅16㎜，断面で長径32㎜，短径26㎜の楕円形の縁金具がある。茎は長さ12.6㎝，幅は中央部で19㎜，厚さ4㎜～6㎜であり，目釘穴が認められる。

鍔（Fig. 17—5） 1枚だけ閉塞石の下から検出されている。無窓であり長径68㎜，短径59㎜，刀身を通す部分は長径27㎜，短径17㎜で，厚さは，外縁部は5㎜，内縁部は3㎜である。

須恵器（Fig. 18—1～Fig. 20—50. Fig. 21—52～Fig. 22—57）

蓋（Fig. 18—1～4, 6～17） 口径と器高により3類に大別される。

Ⅰ類 口径13.6㎝～14㎝。器高4.1㎝～4.8㎝。

Ⅱ類 口径12.7㎝～13.2㎝。器高3.9㎝～4㎝。

Ⅲ類 口径12.8㎝～13㎝。器高3.2㎝～3.5㎝。

蓋の総個体数のうちⅠ類は4個体，Ⅱ類は8個体，Ⅲ類は4個体を数える。

Ⅰ類（Fig. 18—1～3, 15） は，口唇部の形態は15のように，内面にわずかに反を有して，古式のなごりをとどめるのと，やや肥厚して丸味を有するものとがある。1は内面のやや高位に細い沈線が三条入る。2は口唇内面に一条の沈線が入り，外面，天井部との境にも一条の沈線が入る。1は特に器高が高くて4.8㎝を測る。調整法は天井部は篦削りを施しており，1は反時計廻りの篦削りの走向が観察される。内面の頂部周辺はナデを施し，残りはすべて横ナデ

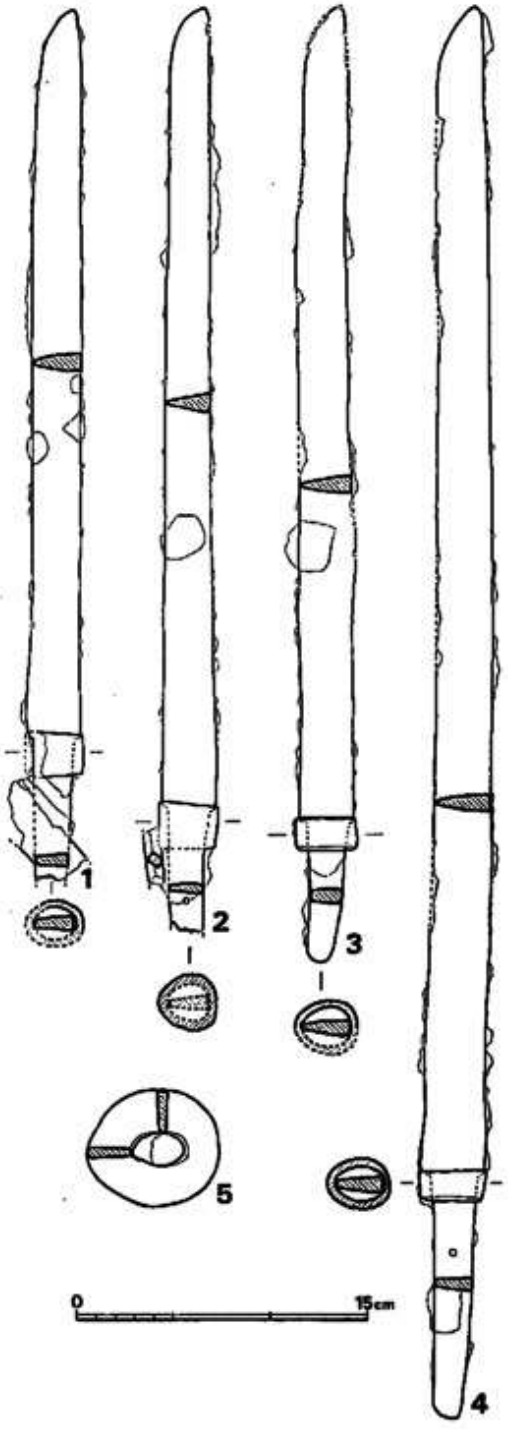


Fig. 17　大刀，鋳型測図（縮尺1/4）

が施されている。色調は灰色ないし暗灰色を呈している。胎土には，砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

Ⅱ類（Fig. 18—4・6～10. 16・17）は，口唇部がやや高いものと，外側へ出たものがあり，端部は丸くつくられている。天井部は篦削りが施され，内面頂部付近はナデを，残りは横ナデを施す。4，8，9は天井部に篦記号を有する。なお，4は5とセットをなす。色調は4は暗小豆色を，他は灰色ないし暗灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には細砂粒ないし砂粒を含む。

Ⅲ類（Fig. 18—10～14）では口径に比して器高が低くなり，扁平な形態となる。口唇部は丸くつくられている。調整法は12は天井部に篦削りを施すが，13はロクロを静止した状態での篦削りを行い，14は天井部の頂部を残した周辺部のみ篦削りを施している。このようにⅢ類になると篦削りを施したもの，一部に篦削りを施すもの，ロクロ静止時の篦削りと様々である。内面の頂部はナデを施し，残りは横ナデを施す。色調は暗灰色を呈しており，27は灰色を呈する。胎土は12は精選されていて良好であるが，他はすべて砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

杯身　口径と蓋受け部の立上りにより3類に分類され，さらに小片ではあるが底部に高台の付く器形を含めて4類に分類される。

Ⅰ類　口径14cm～14.5cm。立上り1.2cm～1.4cm。

Ⅱ類　口径13.2cm～14cm。立上り1cm～

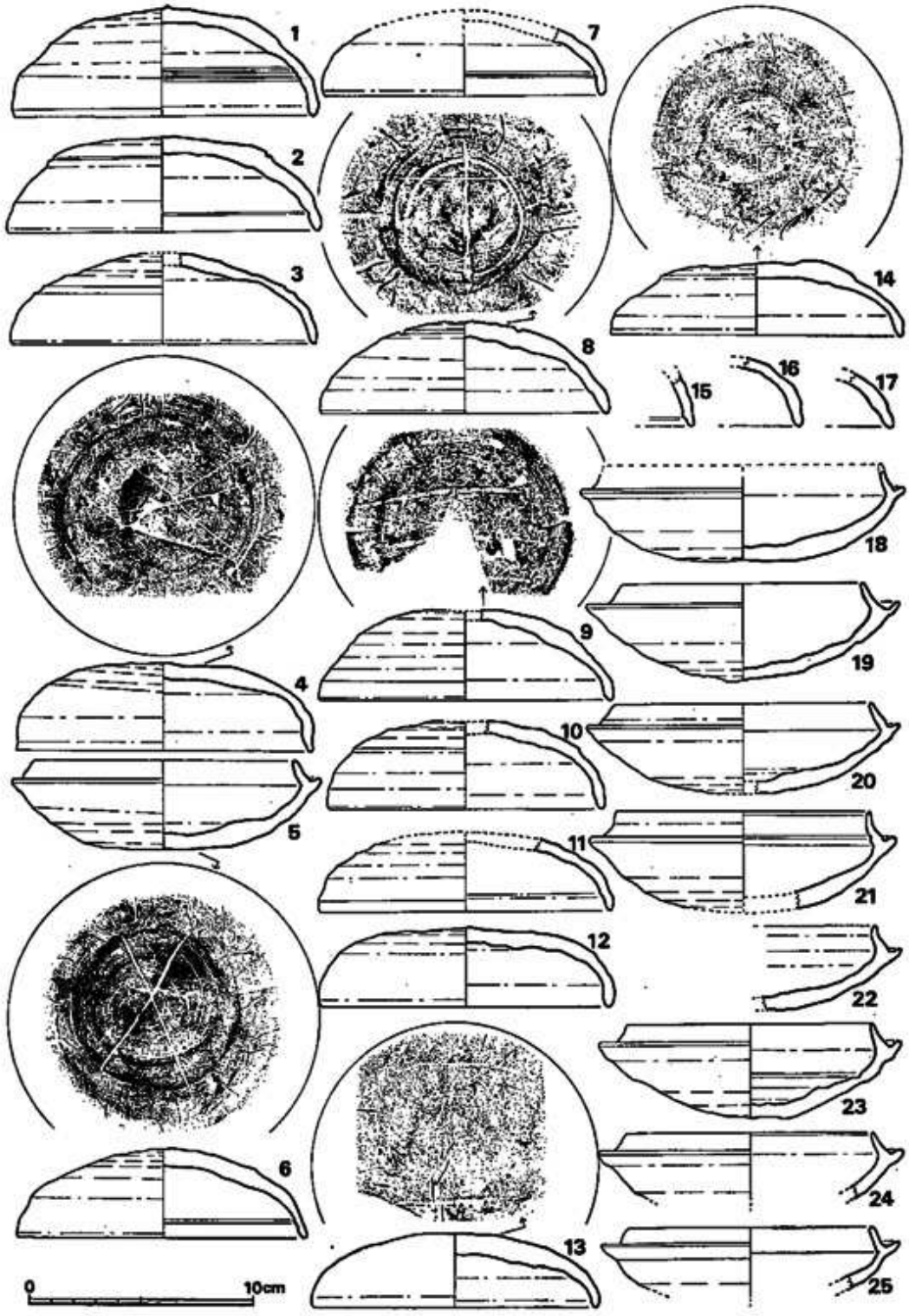


Fig. 18　須恵器実測図 ①（縮尺1/3）

1.4cm。

III類　口径12.3cm～13.2cm。立上り0.8cm～0.9cm。

IV類　高台を有するもの。

杯身の総個体数のうちI類は3個体，II類は9個体，III類は7個体，IV類は1個体を数える。

I類（Fig. 18—18～20）は口径，立上りともに長い。立上りは直線的に内傾する。調整法は底部の半ばまで丁寧な篦削りを施されている。底部内面の中心部はナデを施し，他は横ナデを施す。器壁は全体にうすで造りである。18は焼成が不良であり，灰黄色を呈するが，他は暗灰色を呈しており焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。

II類（Fig. 18—21～Fig. 19—26～28）は，口径はI類に比してやや小さくなり，立上りはI類と同じ位のものもあるが，I類と違うのは内傾はするが端部は立ってくることである。それと立上りが短くなったり，立上りが太くなるものなど様々である。調整法はI類同様，底部は篦削りを施しており，底部内面の中心部のナデ調整と他部分の篦削りを施すのは同様である。色調は28は暗小豆色を呈するが，ほとんどは灰色ないしは暗灰色を呈する。胎土には小砂粒ないしは砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

III類（Fig. 19—29～36）は小形となる。立上りは短くなり，立ち気味となる。調整法は回転篦削りと，ロクロを静止した状態での篦削りの両方があり，回転篦削りの29，30も削りは雑である。色調は33は暗小豆色を呈しているが，他は灰色を呈する。胎土には砂粒を含んでおり，焼成は良好である。35は蓋受部に蓋を重ねて焼いたと思われる痕跡が見られる。

IV類（Fig. 19—37）は高台が付く。高台は低く，高台底はわずかにくぼむ。色調は灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。羨道部より出土している。

高杯（Fig. 19—38～43）有蓋のものと無蓋のものにより2類に分けられる。

I類（Fig. 19—38～40）は有蓋高杯である。セットとなる蓋は出土していない。口径は15.2cm～15.3cm。立上りは1.2cm～1.4cm。立上りに関する限りでは杯蓋のII類に近いが，口径はI類よりも大である。脚裾径は9cm，器高は7.2cmと8.1cmを測る。脚裾はややはね上り，丸くつくられる。調整法は杯部の底部は篦削りを施し，底部内面の中央部周辺はナデを，残りの全面には横ナデを施す。色調は灰色を呈する。胎土には少量の砂粒を含んでおり，焼成は良好である。40は蓋受け部に沈線が入る。

II類（Fig. 19—41～43）は無蓋高杯である。42，43は脚部のみであるが無蓋高杯と思われる。41では杯部の体部と底部の境はわずかに外方へ張り稜をなす。底部には櫛状器具による刺突文が入り装飾を添える。脚柱部には，内外面ともにしぼり痕がみられる。42では脚裾は内側へ折れまがる。内外面にしぼり痕が観察される。41と42は色調が異なり別個体である。43は小型の高杯であろう。色調は42は暗小豆色を他は灰色を呈する。胎土は42は良好であり，41，43は砂粒を含んでおり，焼成は共に良好である。

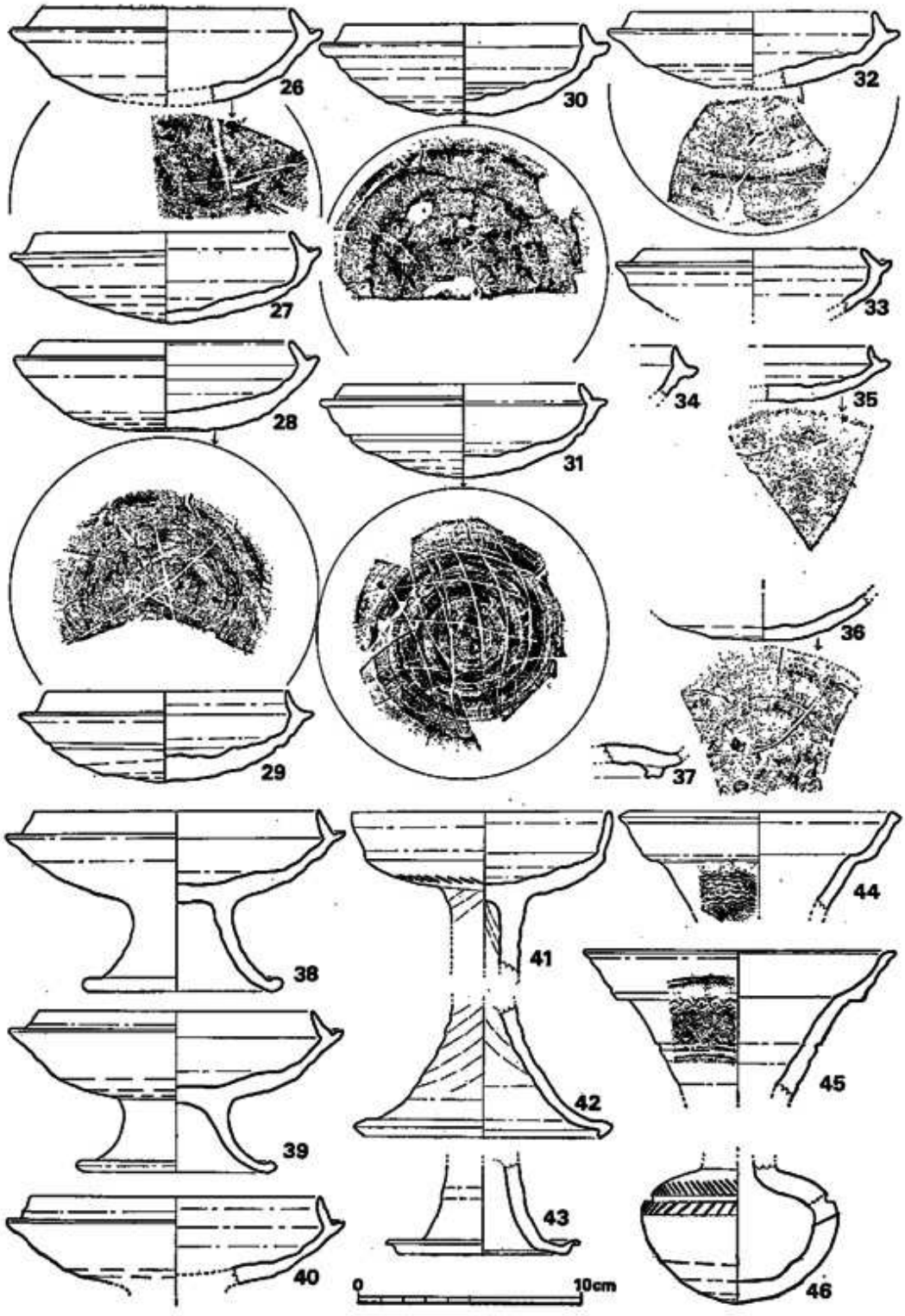


Fig. 19 須恵器実測図 ③ (縮尺1/3)

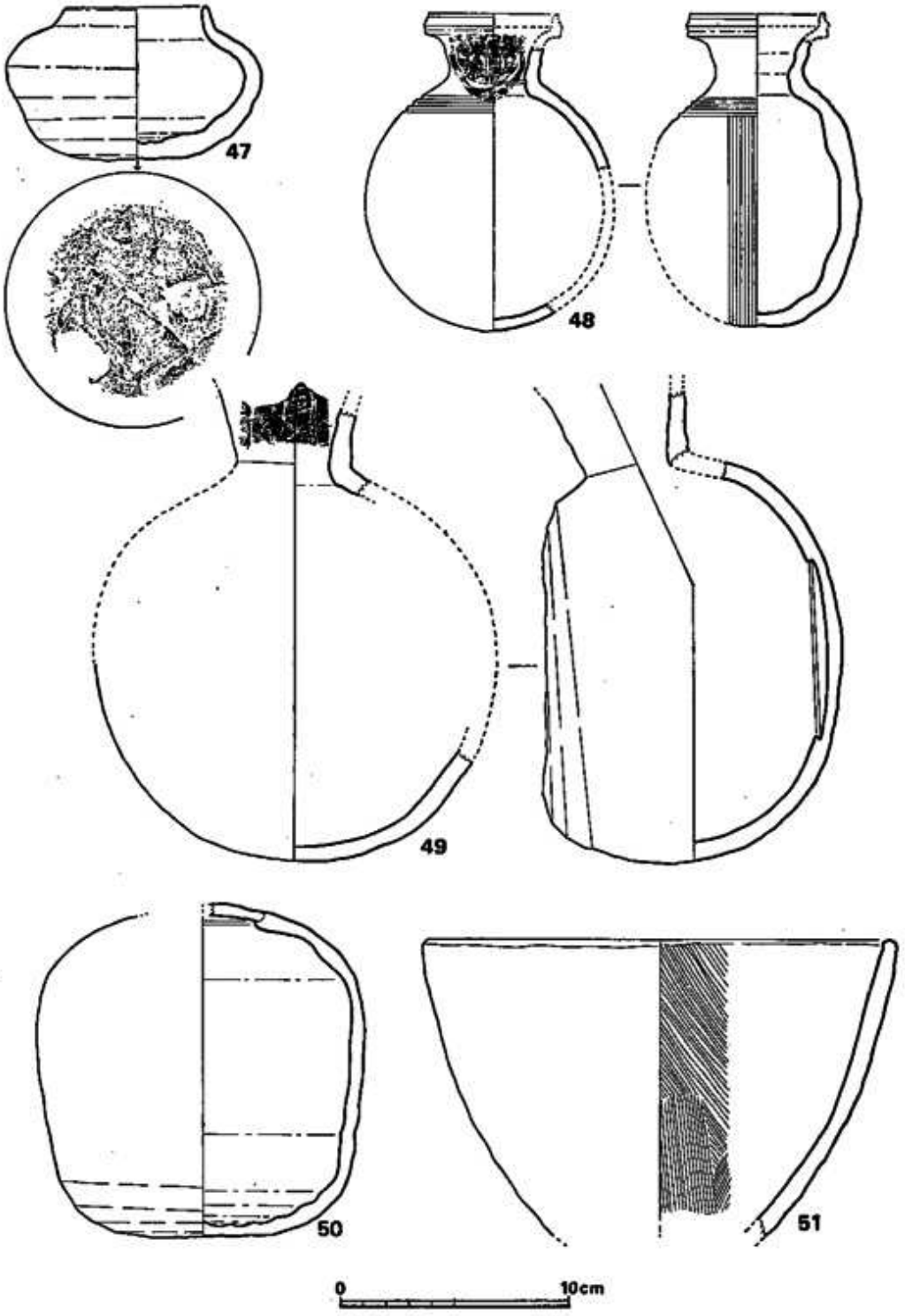


Fig. 20　須恵器，土師器実測図③（縮尺1/3）

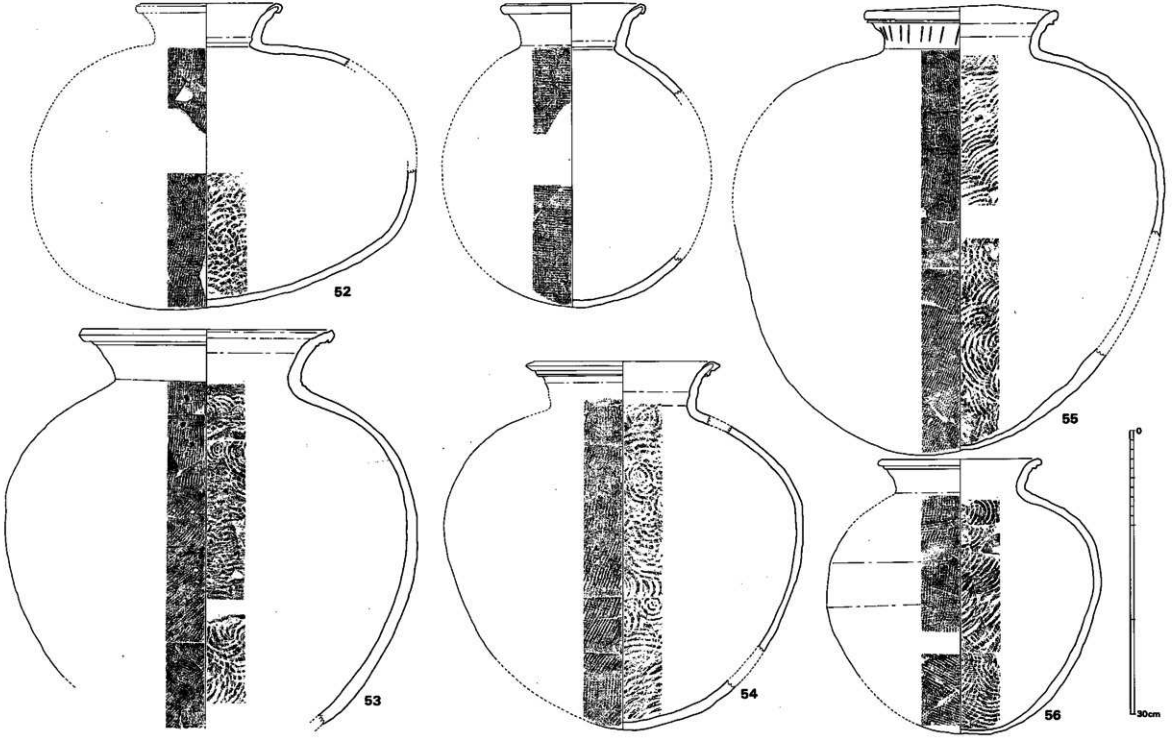


Fig. 21 萩原古墳須恵器実測図（縮尺1/4）

壺（Fig. 19—44～46）　2個体出土している。44は口頸部のみである。口唇部は平坦面をなす。口縁部と頸部の境は段がつき，外面は鋭い稜がつく。頸部には櫛描波状文が入るが，目が粗い。全体に横ナデを施す。色調は灰色を呈する。胎土には少砂粒を含み焼成は良好である。45と46は同一個体をなすものと思われる。口径は13.9㎝。球状部最大径は8.8㎝。口唇部はやや丸味を有する。口縁部と頸部の境は内面では稜がつくが，44ほど明瞭には段がつかない。外面では鋭く段がつく。頸部の中ほどには一条の沈線が入り，この上方は細い櫛描波状文が入る。球状部には直径1.1㎝の孔があく。孔の高さの位置に一条の沈線が入り，上下に櫛状器具による刺突文が入る。球状部の底部は篦削りされており，ややとがり気味の丸底となる。色調は暗灰色を呈する。

坩（Fig. 19—47）　口径6.2㎝。最大部径11㎝。器高6.7㎝。篦削りの範囲は広くて胴部中央以下に施されている。他はすべて横ナデを施す。色調は暗灰色を呈する。胎土には小砂粒を含み，焼成は良好である。

提瓶（Fig. 20—48・49）　2個体出土している。48は小型である。口径5.7㎝。最大径10.9㎝。器高13.6㎝。口唇部は短く直立する。頸部下は櫛描文が入る。円を先に描き，その後肩部には平行状の描目が入る。色調は暗灰色を呈する。胎土は精選されていて良好であり，焼成も良好である。49は口縁部と胴部の一部を欠損する。背面は篦削りを施す。色調は灰色を呈する。胎土には砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

不明（Fig. 20—50）口頸部を欠損する。頸部がつくと思われる中央部は一度ふさいでおり，おそらくは，平瓶と同様に中央からはずれた位置に頸部が付くと思われるが，残存状況からみて口頸部は小さいものである。底部は篦削りを施しており，その上を刷毛目調整しており，これは全面にわたっている。色調は灰色を呈するが，半分ほど自然釉が付く。胎土には多量の小砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

横瓶（Fig. 21—52）　口径15.5㎝。器高32.4㎝。頸部下の外面には格子状叩き目が，内面には同心円叩き目が入る。口唇部は粘土をかぶせて整形している。色調は暗灰色を呈する。胎土には多量の砂粒を含んでおり，焼成は良好である。第2次墓道より出土した。

壺（Fig. 21—53～56）　4個体出土しており54を除くすべては墳丘より出土した。55と56は口縁部の形態は同じで丸くつくられている。54は口唇部は平坦面を有する。53は最も大型であり口唇部は平坦で鋭い稜がつく。56では外面は平行状叩き目が入り，中位以上にはさらにカキ目を施す。内面は中位以上と底部には目の粗い同心円叩き目が入り，以外は細い同心円叩き目が入る。口径17.2㎝。胴部最大径28.7㎝。器高29㎝。色調は灰色を呈する。胎土には砂粒を含んでおり，焼成は良好である。54は外面には平行状叩き目が入り，さらにその上からカキ目を施す。内面は同心円叩き目が入る。口径20.5㎝。最大部径37.9㎝。器高39㎝。色調は暗灰色を呈する。胎土には小砂粒を含み，焼成は良好である。53は底部を欠損する。外面は平行状叩き

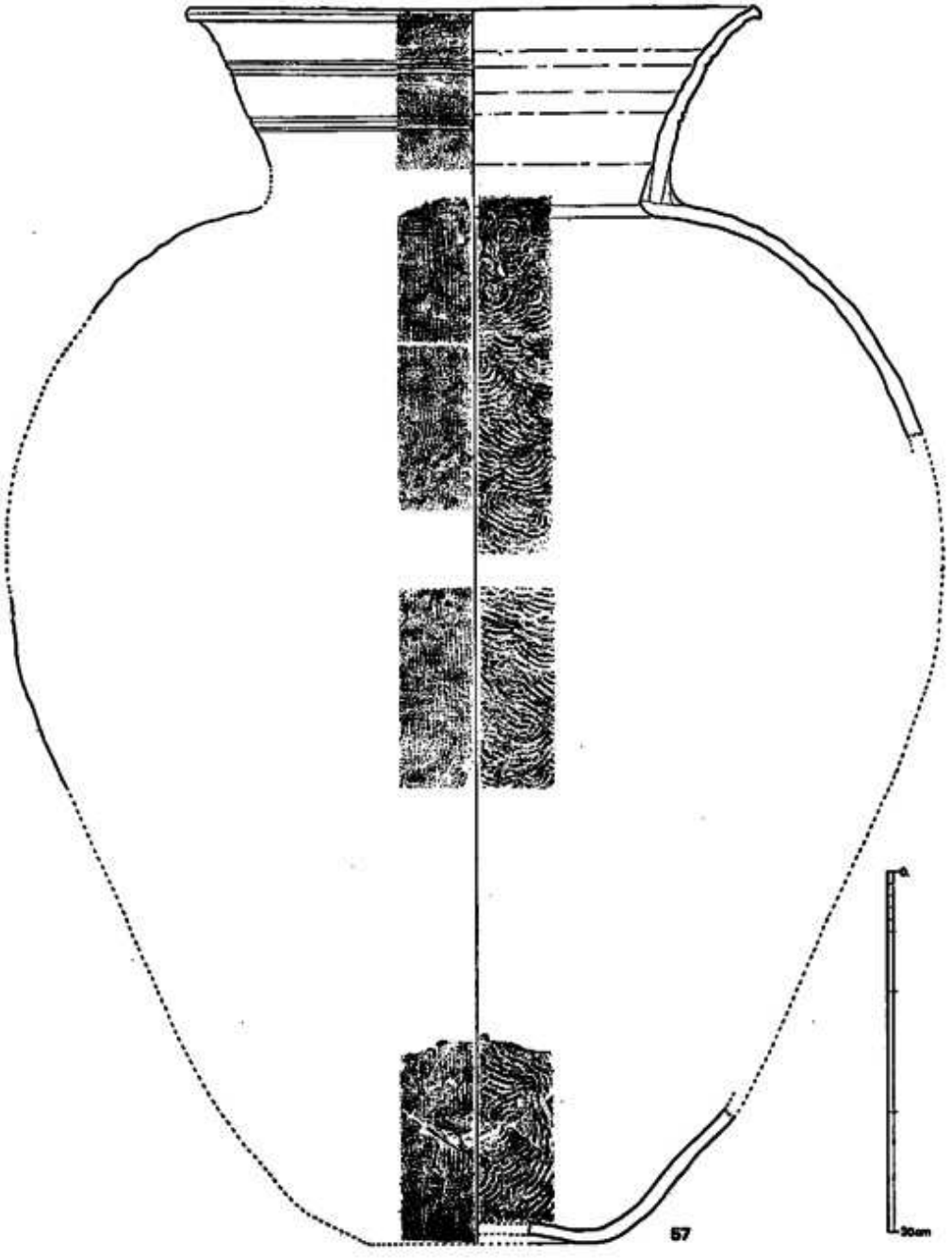


Fig. 22　須恵器実測図⑤（縮尺1/6）

目が入り，その上を幅1.5㎝程を1単位として平行にカキ目が入る。内面は同心円叩き目である。色調は灰色を呈する。胎土に小砂粒を含み，焼成は良好である。55は最も大形である。外

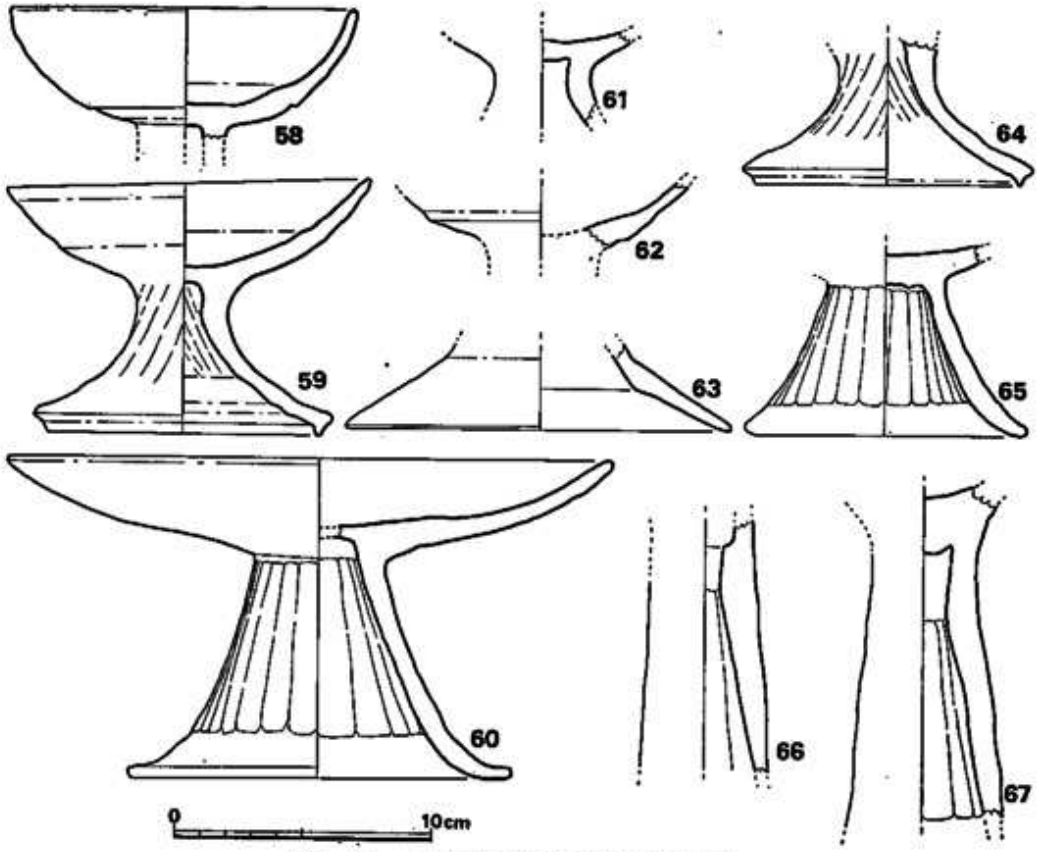


Fig. 23　土師器実測図⑥（縮尺1/3）

面は平行状叩き目の上からカキ目を施す。内面は同心円叩き目が入る。頸部にはヘラによる刻目が入る。口径20.4cm。最大部径45.4cm。器高47.8cm。色調は底部付近は暗灰色を呈しており，全体的には灰色を呈する。胎土には小砂粒を含み，焼成は良好である。

甕（Fig. 22—57）口径48cm，器高103cm，胴部最大径77.5cmを測る大形品である。頸部には各々2条の沈線が2段に入り，口頸部を3区に分ける。1区，2区には櫛描波状文が入り，2区は細目である。胴部外面には平行状叩き目が入り，内面は同心円叩き目が入る。底部は乾燥時にひずんでおり，凹湾している。色調は灰色を呈している。胎土には小砂粒を含み，焼成は良好である。

土師器（Fig. 20—51，23—58～67）

高杯（Fig. 23—58～67）9個体分出土しており，5種類に分けられる。58は杯部のみ残存している。杯部は深味がある。杯部の底部は一部篦削りしており，以外は横ナデを施す。口径13.4cm。色調は褐色を呈する。胎土には多量の小砂粒を含んでおり，焼成は良好である。59は口径14.1cm。脚裾径11.7cm。器高9.9cm。杯部は58のように丸まらずに開く。脚柱部は整形時

のしぼり痕が，内外面にみられる。脚裾は下方へ突き出す。全面に横ナデを施す。色調は褐色を呈する。胎土は精選されていて良好であり，焼成も良い。60は杯部は口径は23.5cmと広く，浅い。脚柱は内外面とも篦削りを施す。杯部は内外面とも篦研磨をし，脚内面を除く全面に丹塗りを施す。脚裾径15cm。器高12.3cm。胎土には小砂粒を含み，焼成は良好である。63は脚部のみである。器形は直線的で鋭い稜を有する。脚裾径15cm。色調は暗茶褐色を呈する。胎土には多量の砂粒を含んでおり，焼成は不良である。66，67は墳丘より出土している。長い脚部を有する。脚部内面は篦削りを施す。色調は茶褐色を呈する。胎土には砂粒を含み，焼成は不良である。

鉢（Fig. 20—51）　口径20.8cm。底部を欠損する。外面には整形時の凹凸が著しい。内面には刷毛目が入る。色調は黄褐色を呈する。胎土には多量の砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

3　小　　結

萩原古墳の築造された年代は，後述する須恵器の年代より，六世紀後半に比定する事ができよう。出土須恵器の中で杯蓋，杯をそれぞれ3類，4類に分けたが，杯蓋のうち，Ⅰ，Ⅱ類はⅢb型式に属し，Ⅲ類は前二者より後出すると思われⅣ型式に属するものと思われる。杯では，Ⅰ，Ⅱ類は，Ⅲb型式に属し，Ⅲ類は前二者より後出するものと思われⅣ型式に属するものと思う。そして1片だけ出土しているⅣ類はⅦ型式に属するものであろうか。高台部をわずかに残存するだけであり，判断に苦しむ。つぎに玄室内より出土した耳環であるが，これは4個を数えており，被葬者に着装されていたという前提に立つと2体という数字が出てくる。さらに耳環の計測値，形などを見ると，21と22は対になりそうであり，20と23は対になりそうにない。従ってこの方法からだけ見ると3体という事も考えられる。それとあと1個であるが，これは石室北側の掘り方内の裏込め土中より検出された。これを副葬品とするには，問題があり，偶然にしては不自然であるようだ。なお，福岡市高崎4号墳からは，同様に掘り方裏込め土中より耳環が1個検出されていることを考えると何らかの意味があったものかも知れない。

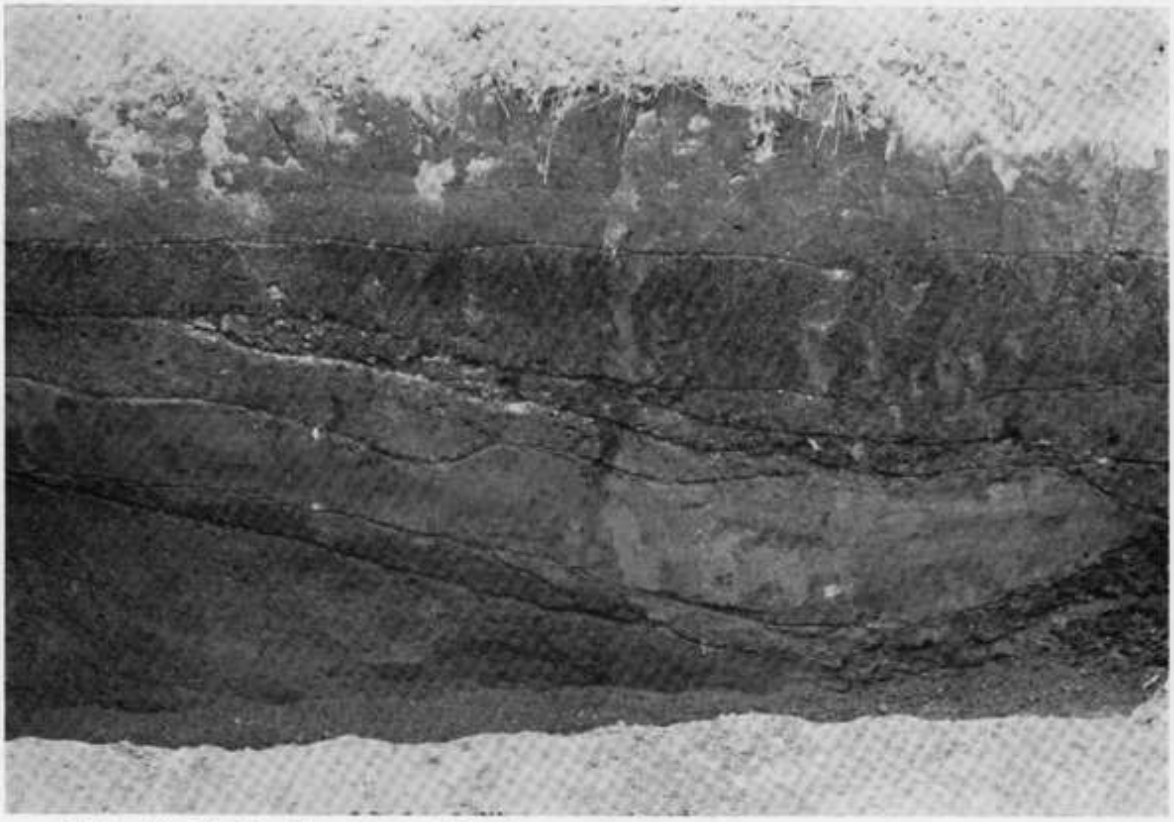
耳環の出土数より，埋葬遺体は，少くとも二体以上が考えられ，須恵器の時期差，墓道の土層断面と，閉塞の関係などより，数回にわたる追葬が考えられる。なお，石室前面の墳丘より1片だけ出土した高台の付く杯は，追葬の下限と見るよりも，後の供献的なものを考えた方が良さそうである。被葬者の生前の生活の場所としては，墓道先端部が西側に開いている事や，西方の低地が最も見はらし良く眺められる事などを考え合わせると，西方を意識したものと推定される。

（川述昭人）

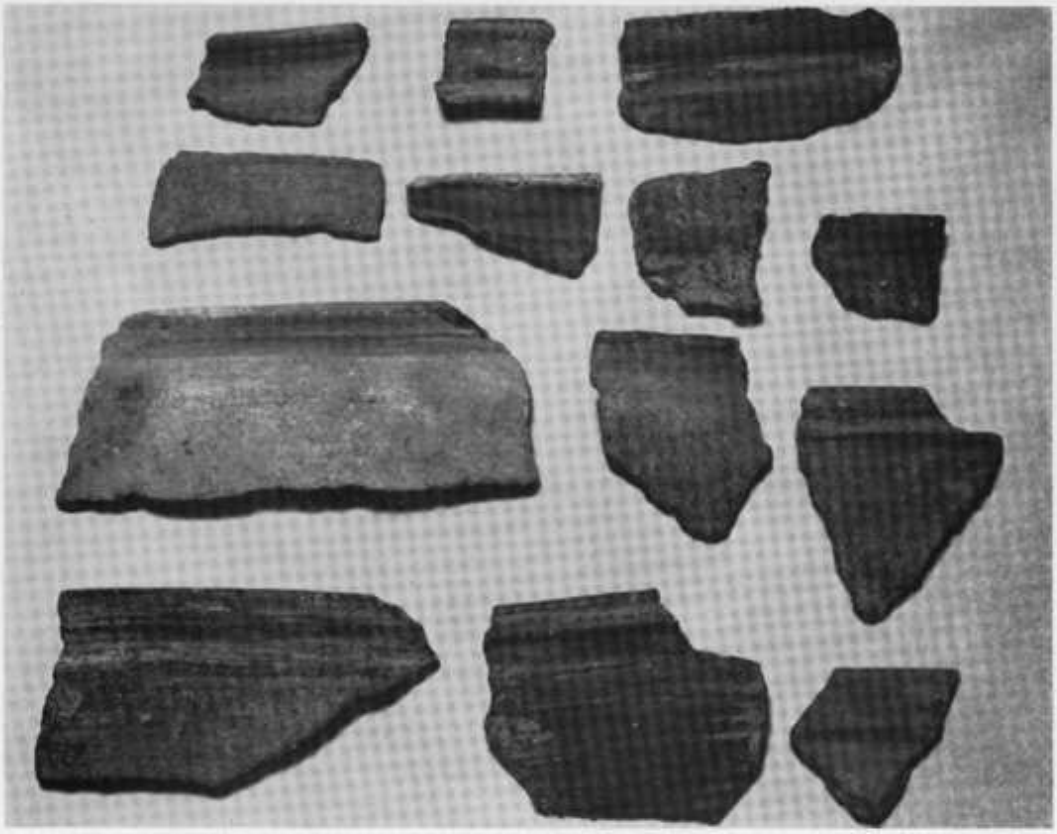
萩 原 遺 跡

PLATES

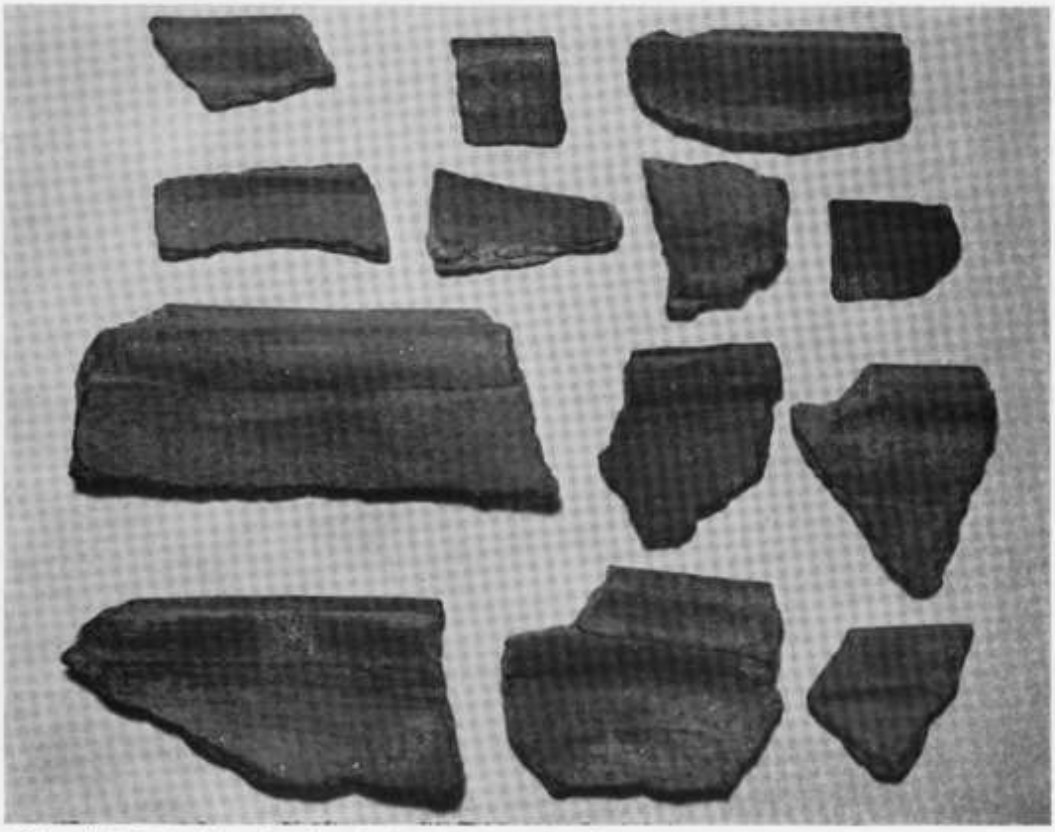
(1) 萩原遺跡遠景　　(北東から)



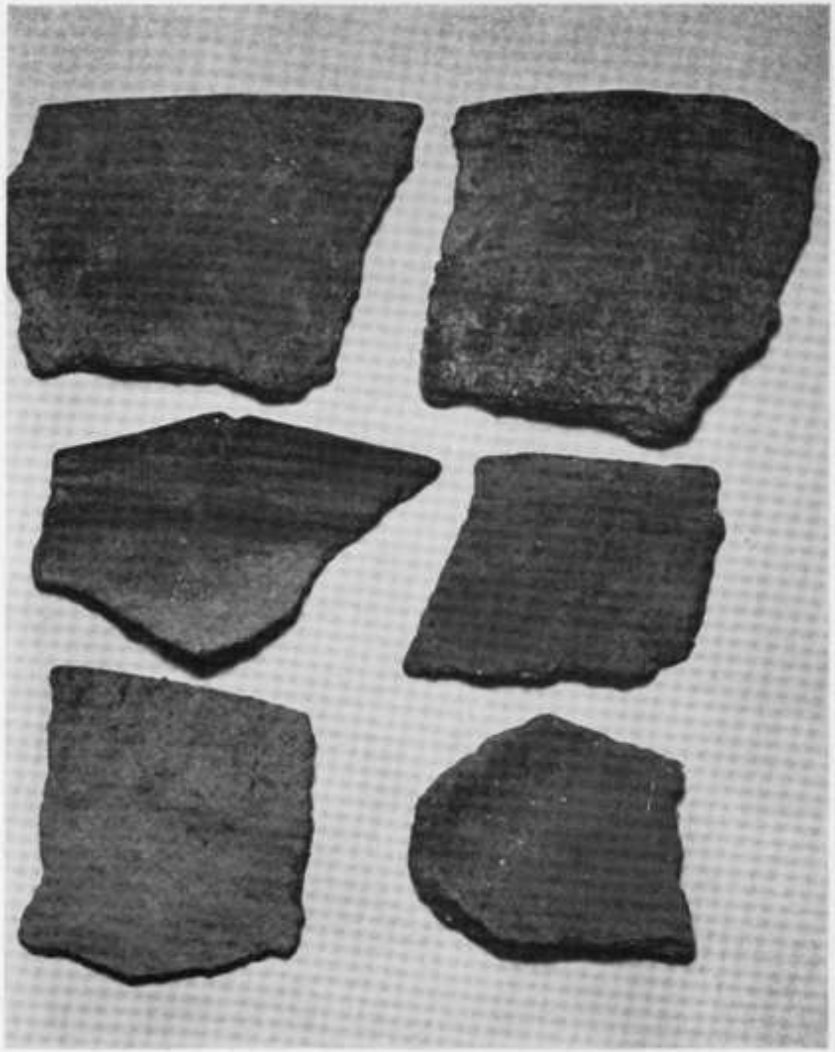
(2) 萩原遺跡土層断面



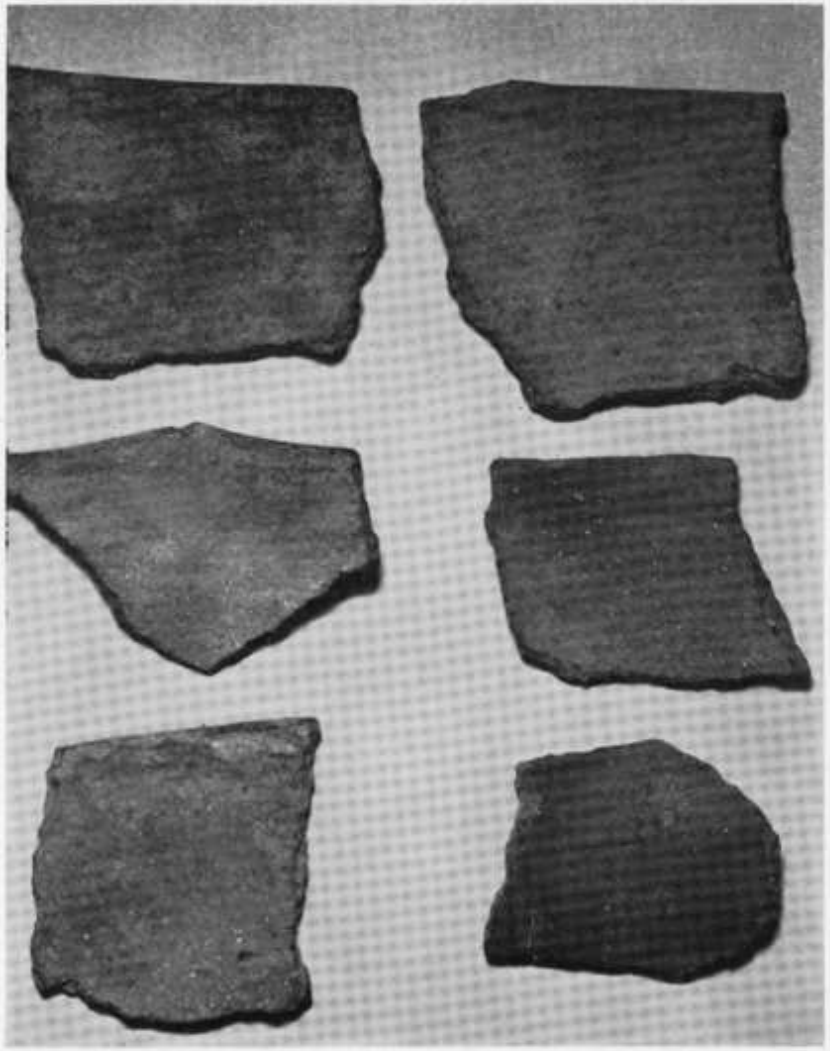
(1) 萩原遺跡　縄文式土器(表) その1



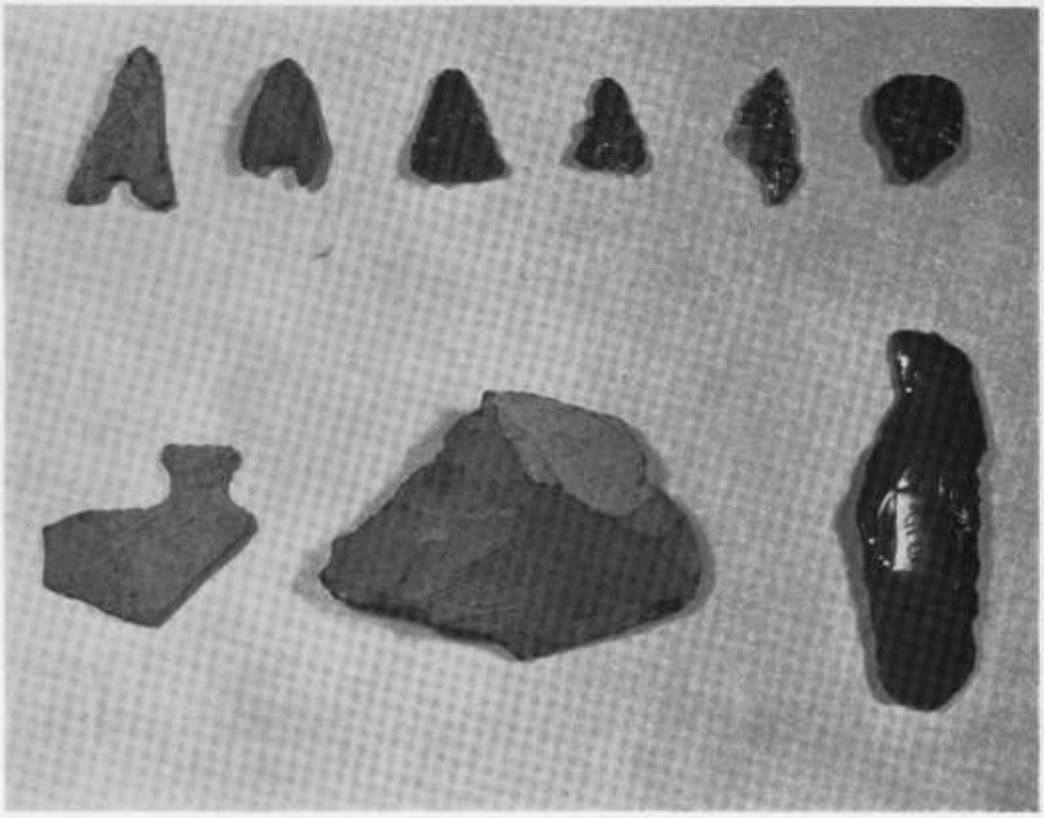
(2) 萩原遺跡　縄文式土器(裏)　その2



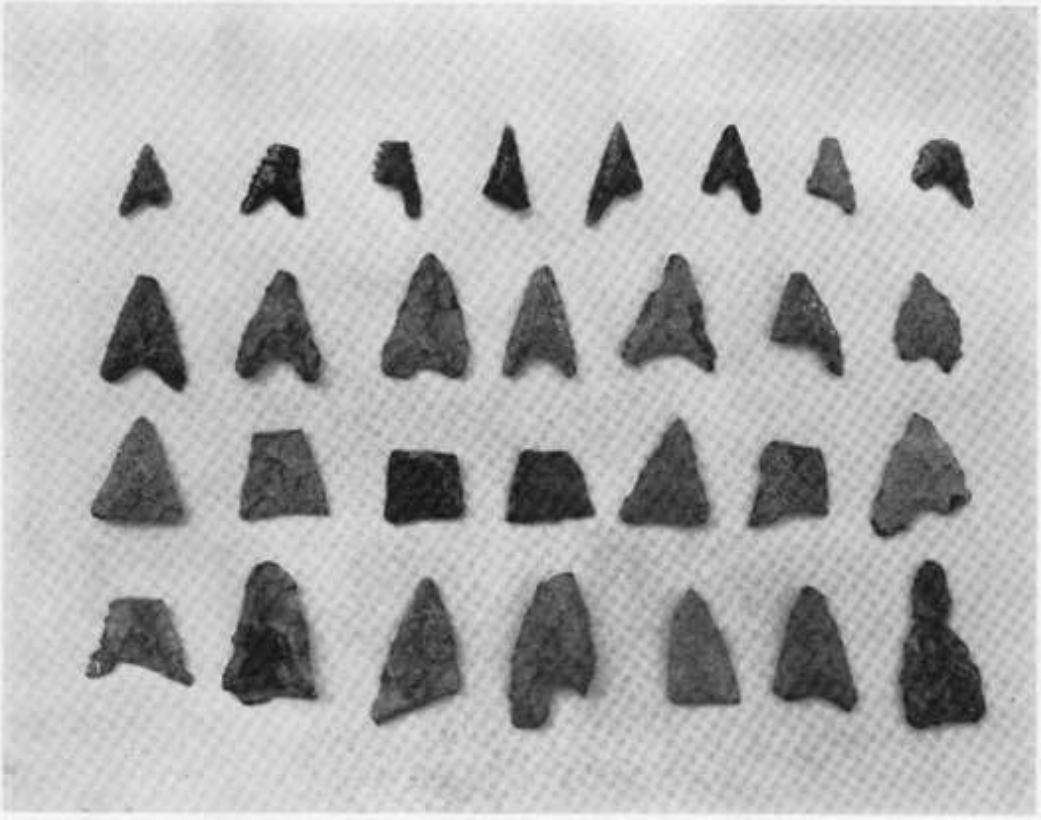
(1) 萩原遺跡　縄文式土器（表）その1



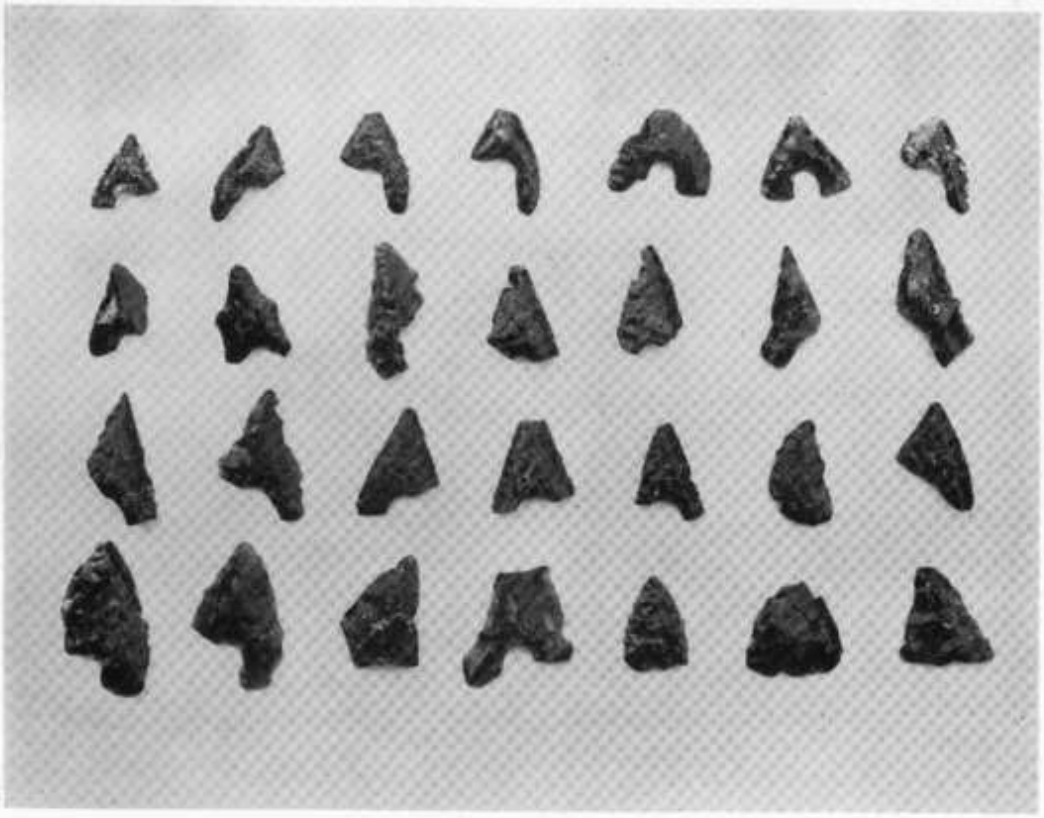
(2) 萩原遺跡　縄文式土器（裏）その2



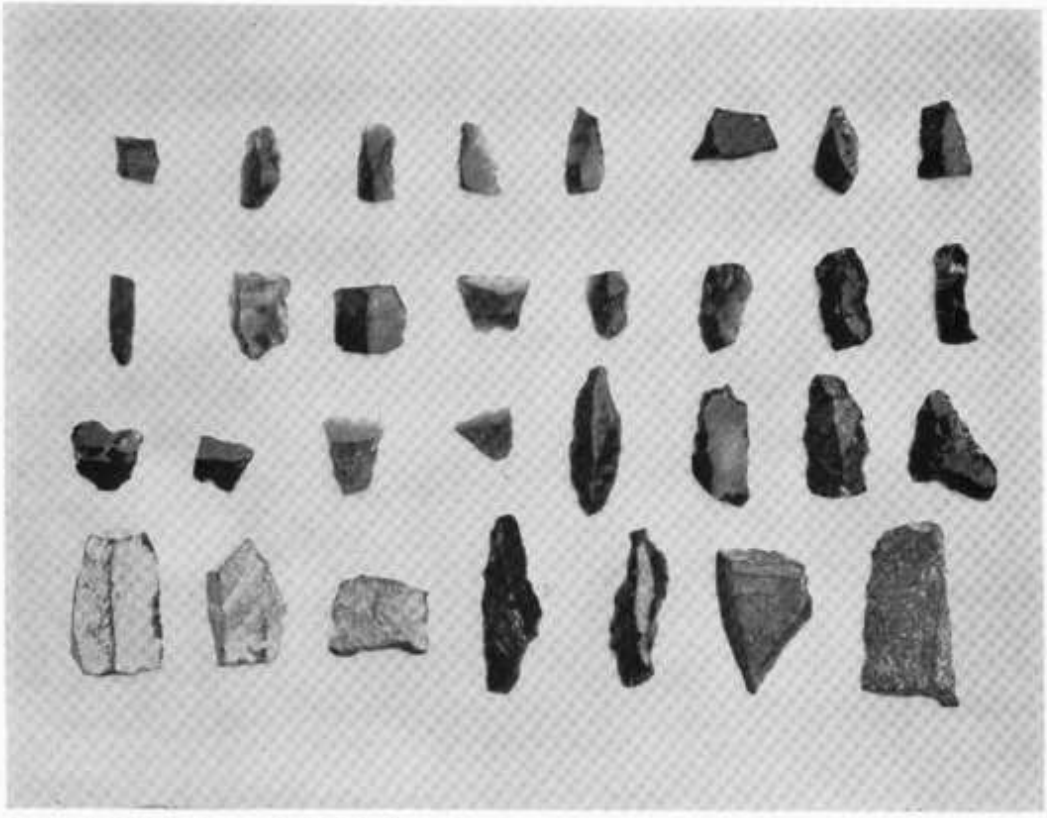
(1) 萩原遺跡　石器



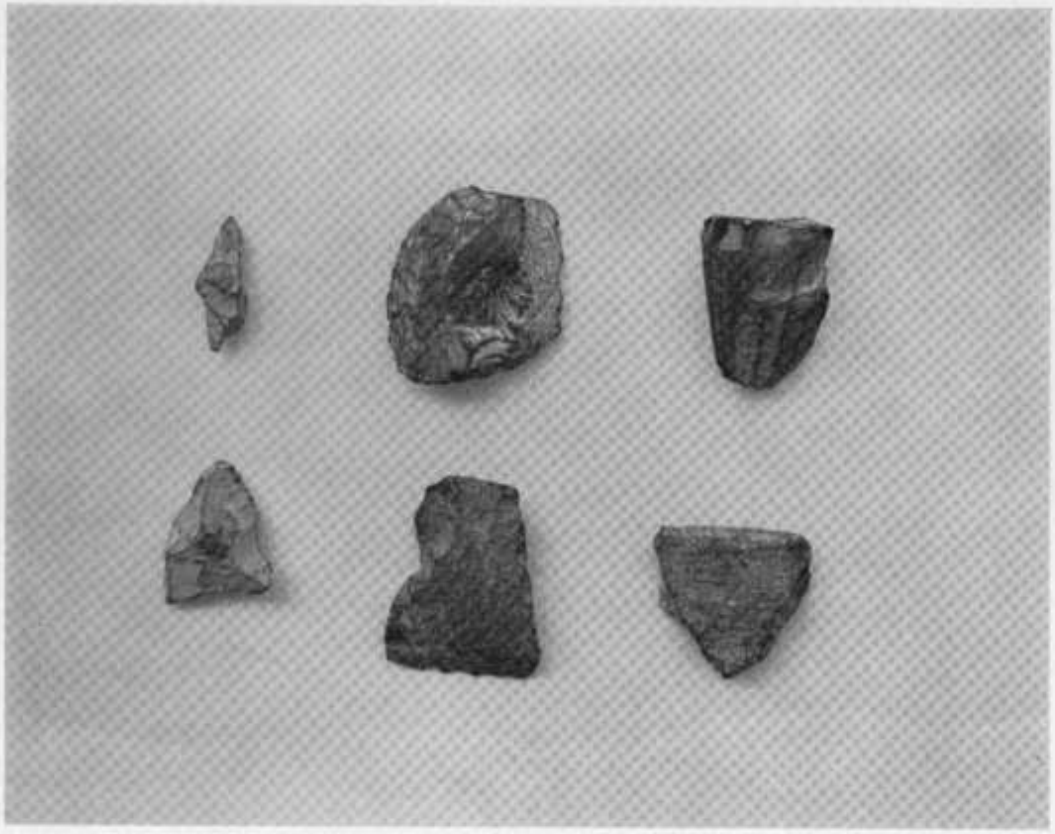
(2) 萩原遺跡　表採石器　その1



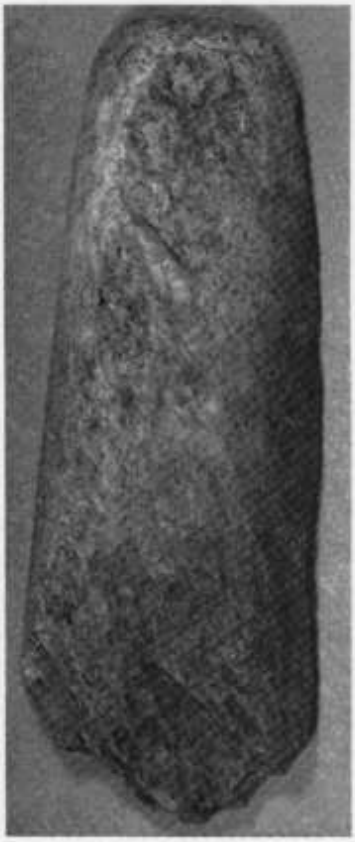
(1) 萩原遺跡　表採石器　その2



(2) 萩原遺跡　表採石器　その3



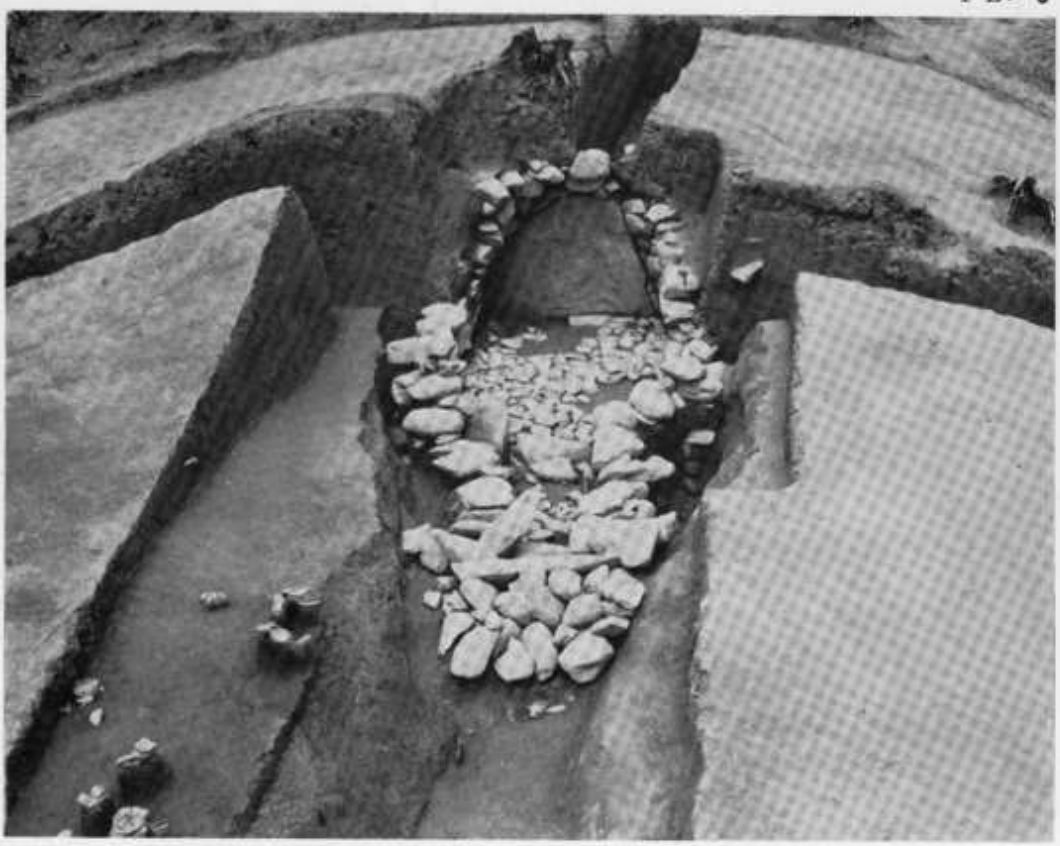
(1) 萩原遺跡　表採石器　その4



(2) 萩原遺跡　石斧

（1）萩原古墳　全景　（南東から）

（2）萩原古墳　盗掘壙



(1) 萩原古墳　墳丘と石室

(2) 萩原古墳　石室と墓道

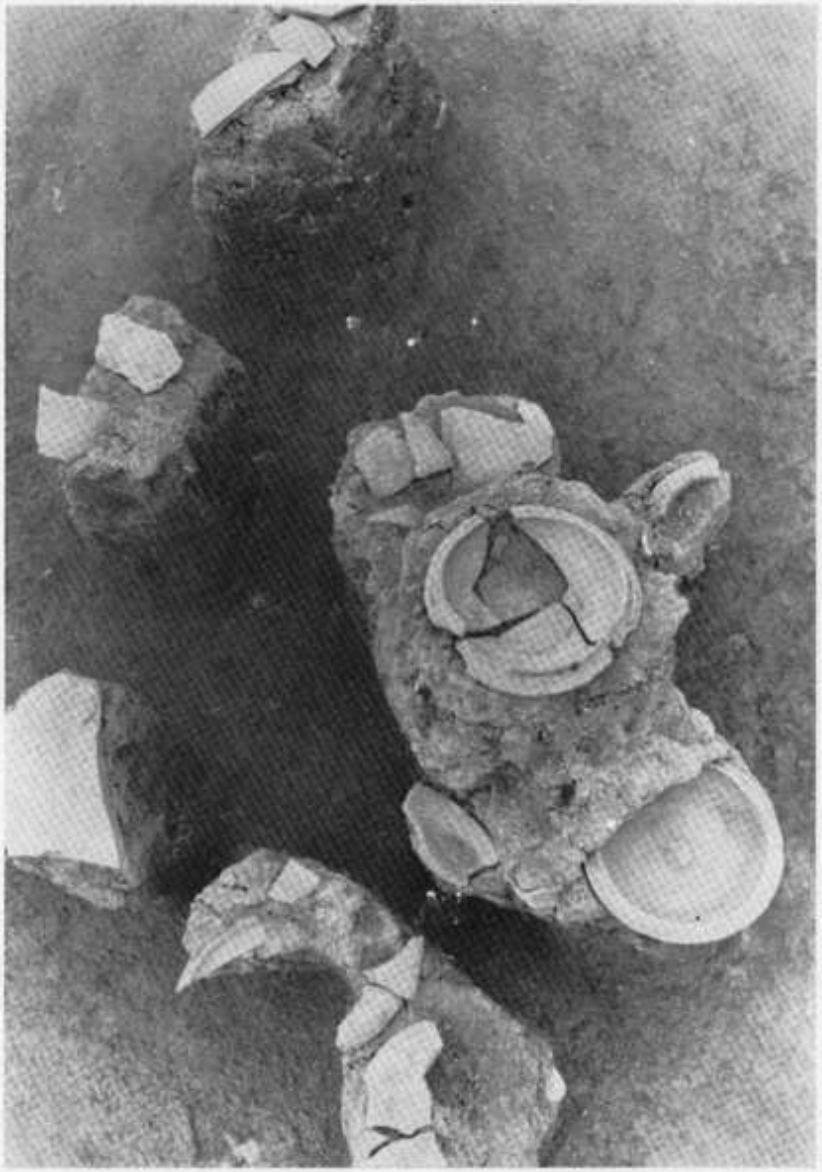
（1） 萩 原 古 墳　石 室 全 景　（北西から）

（2） 萩 原 古 墳　羨道部閉塞状況

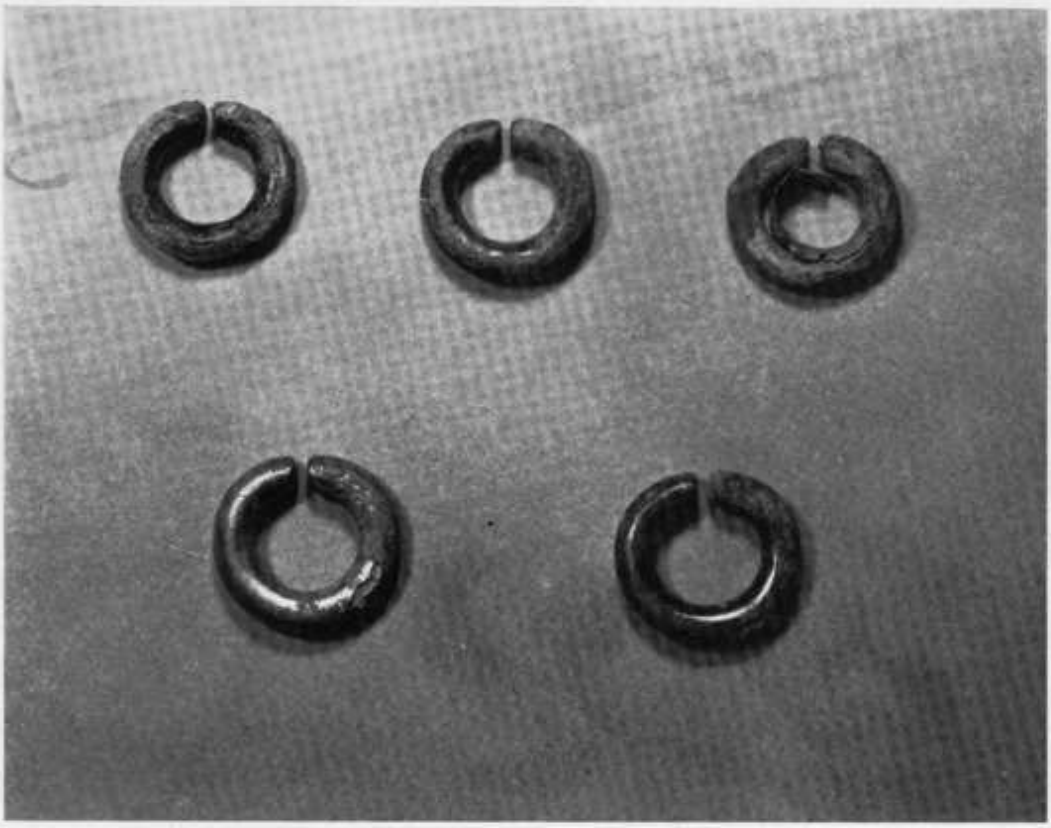
（1） 萩 原 古 墳　玄室内耳環出土状況

（2） 萩 原 古 墳　羨道部大刀出土状況

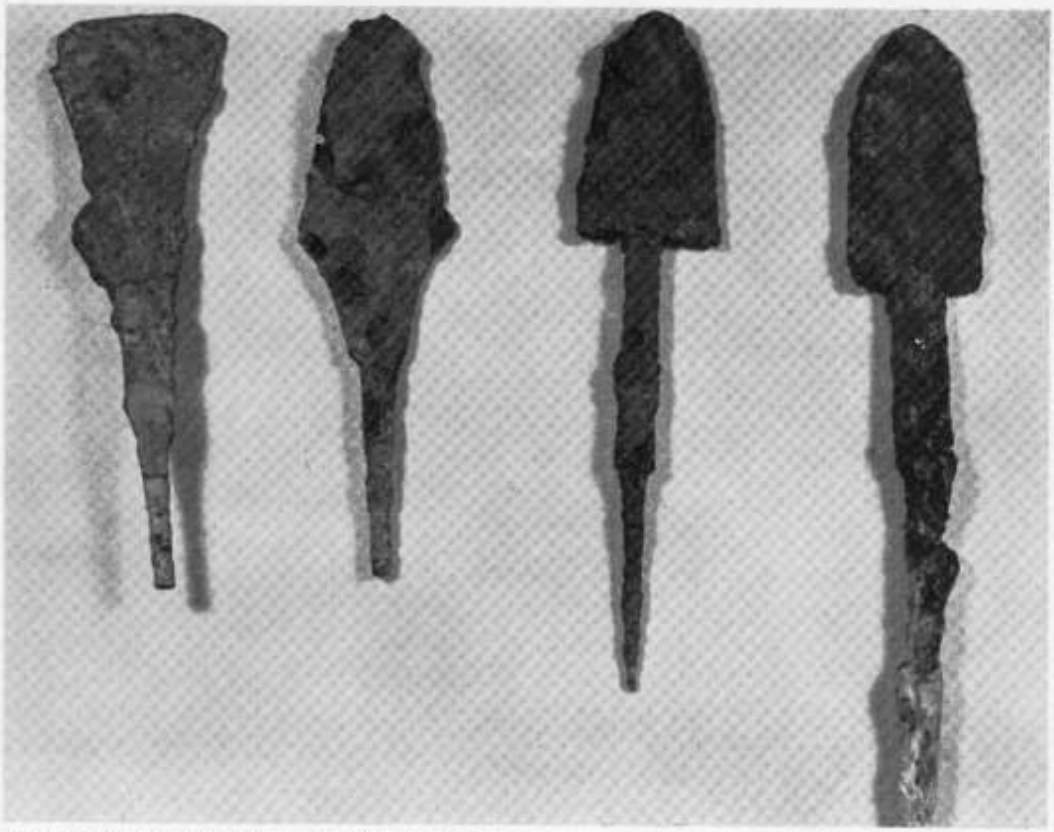
(1) 萩原古墳　裏込め内耳輪出土状況



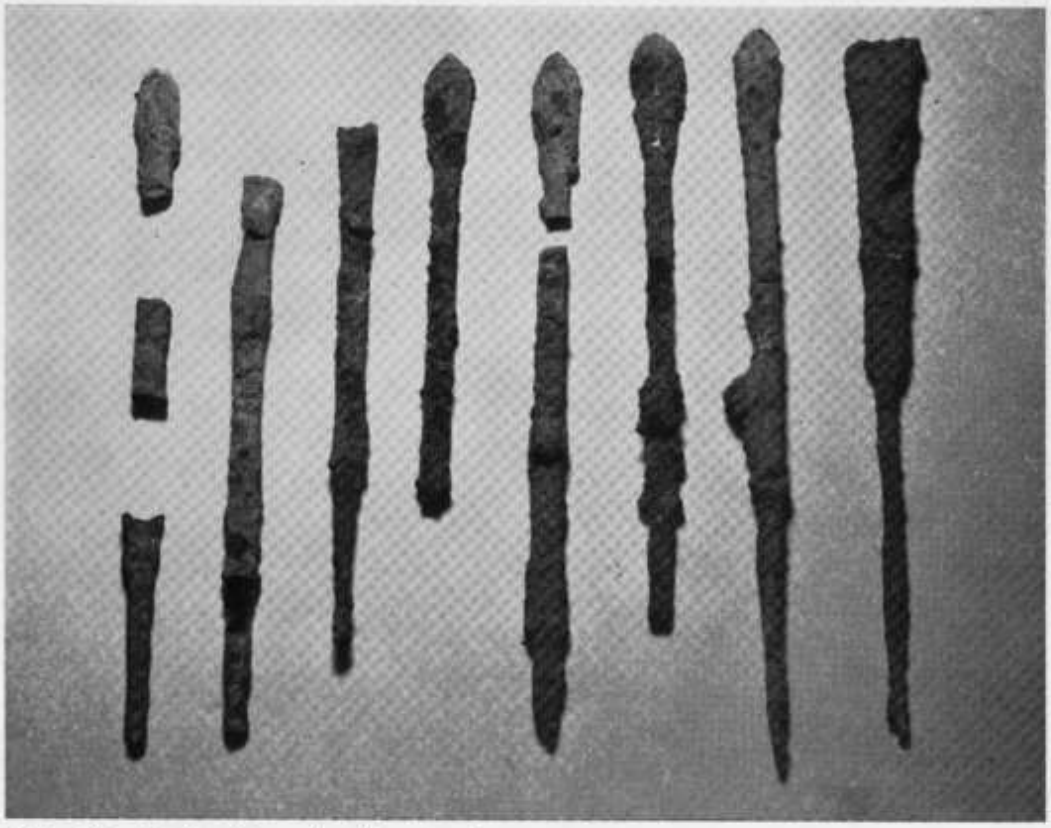
(2) 萩原古墳　墳丘中土器出土状況



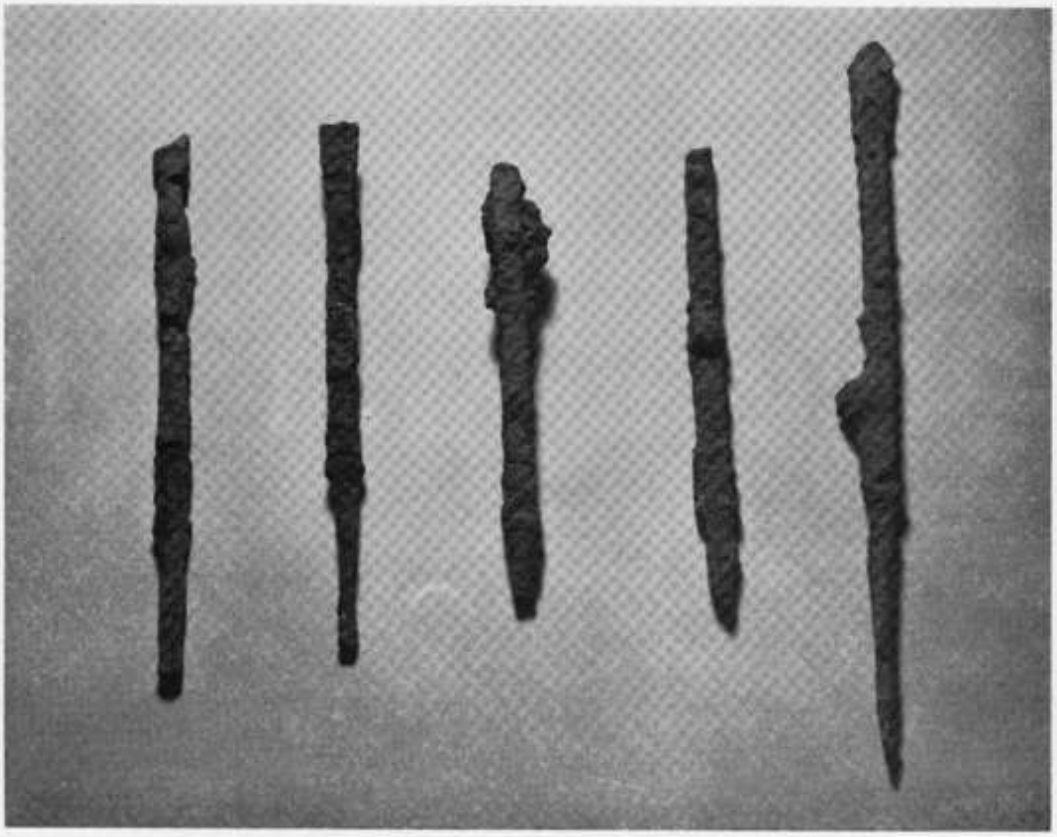
(1) 萩原古墳　耳環



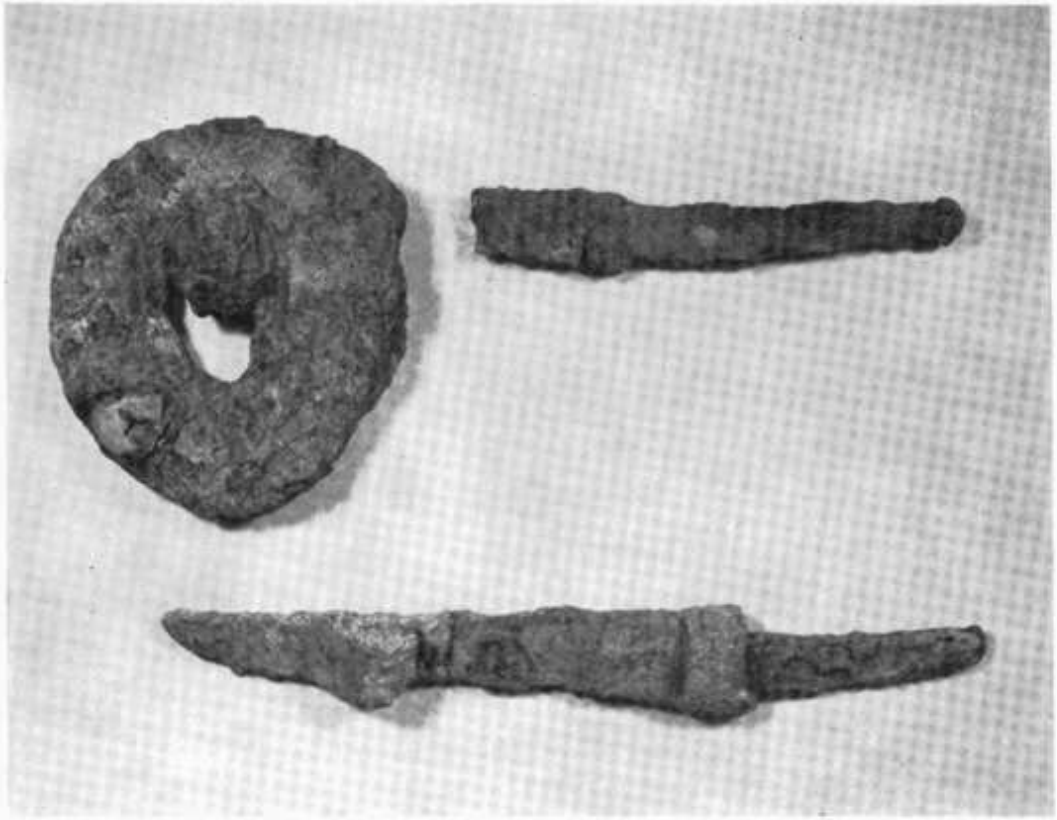
(2) 萩原古墳　鉄鏃　その1



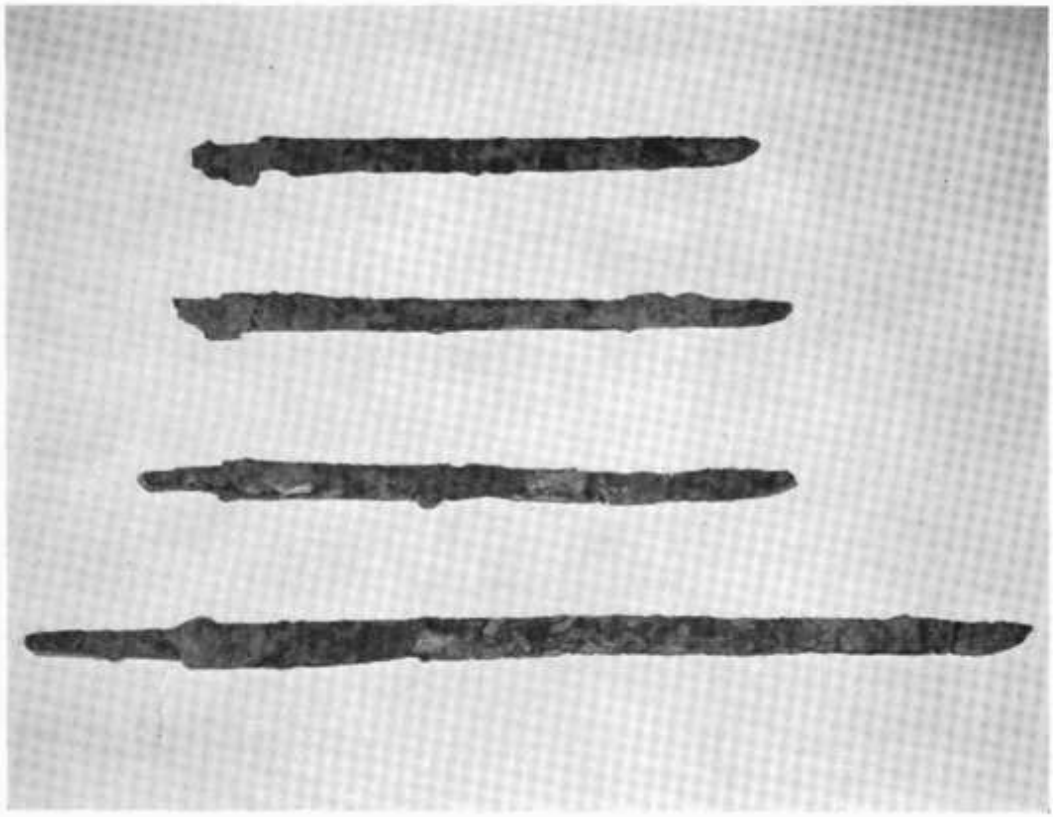
(1) 萩原古墳　鉄鏃　その2



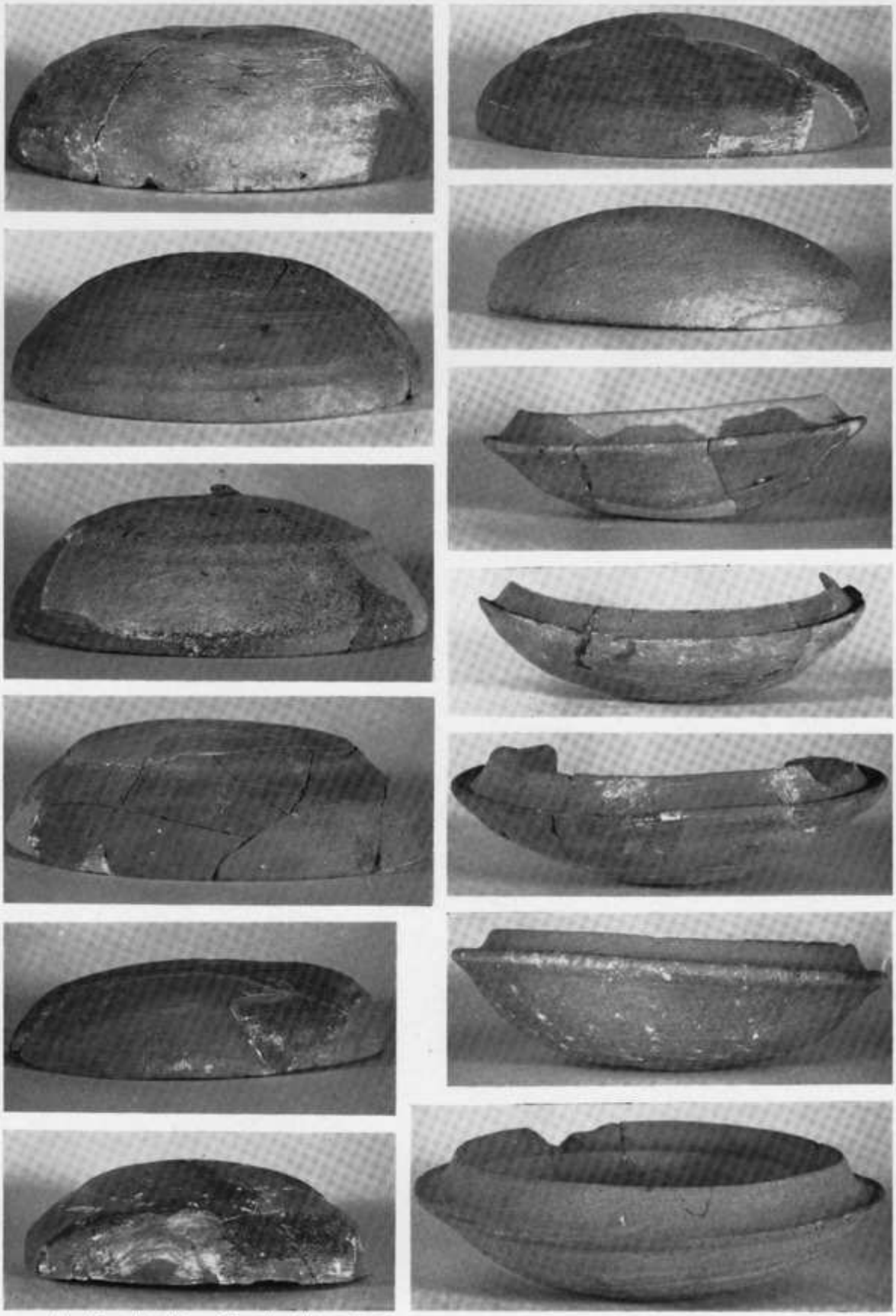
(2) 萩原古墳　鉄鏃　その3



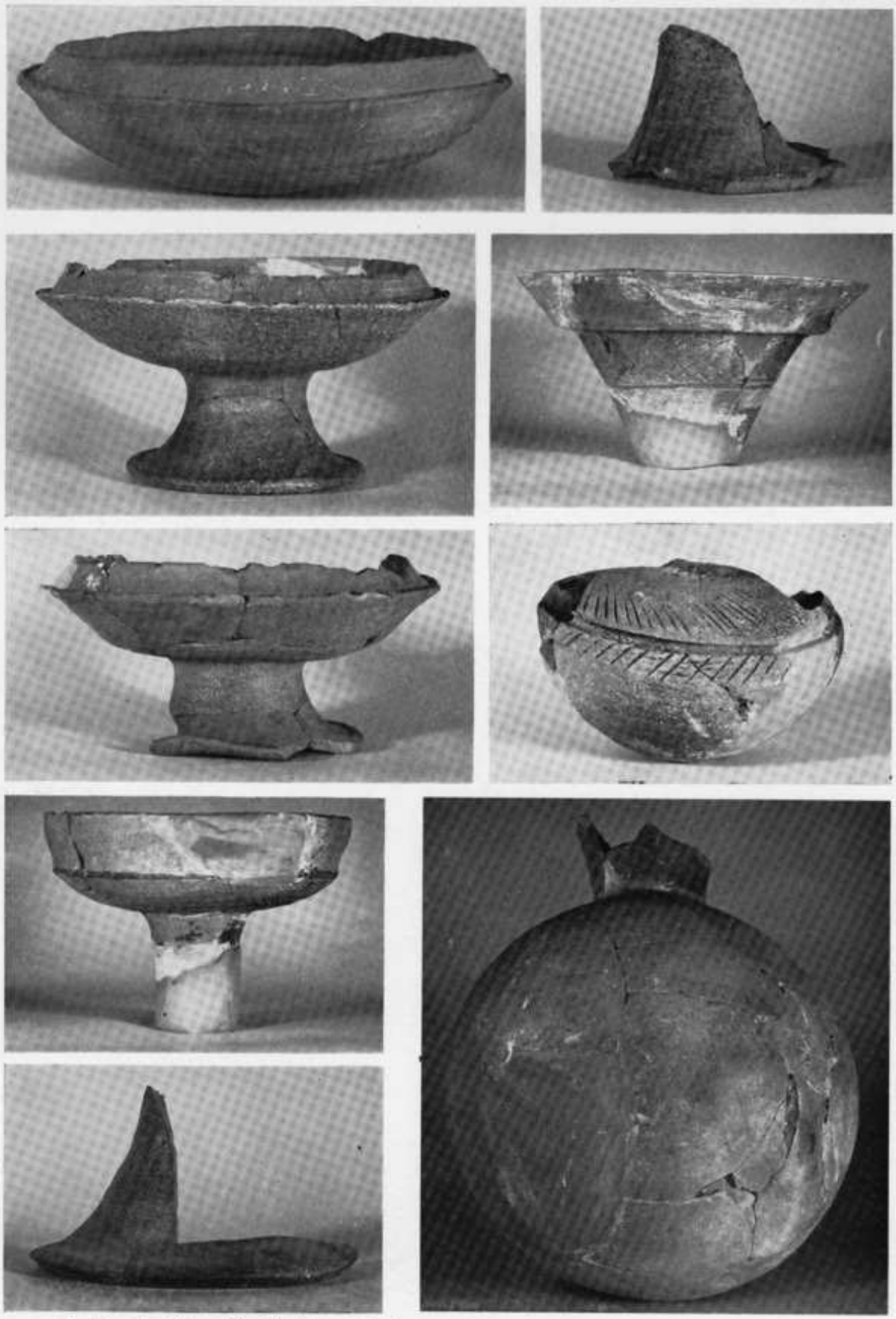
(1) 萩 原 古 墳　鋼・刀 子



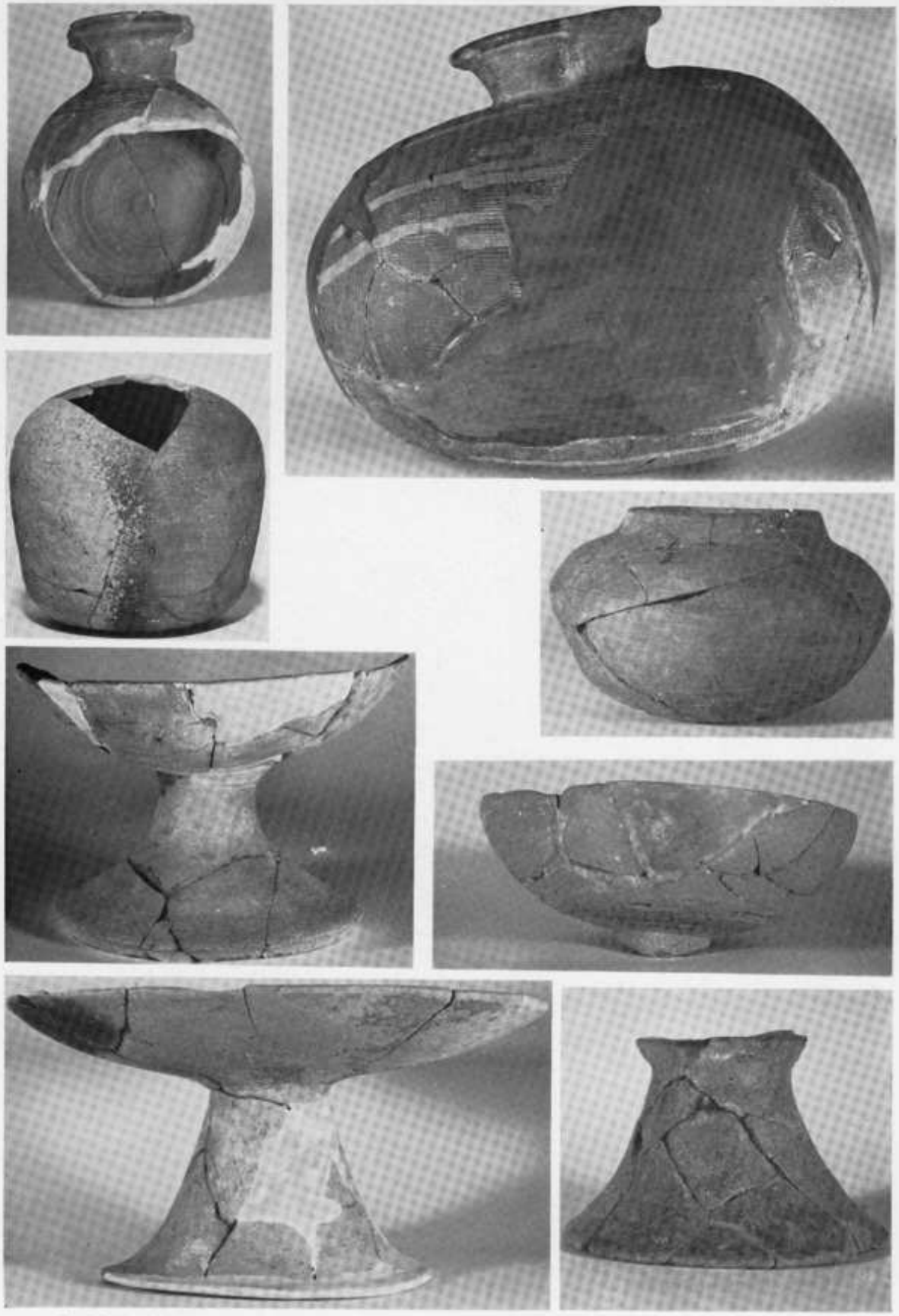
(2) 萩 原 古 墳　大 刀



萩原古墳　須恵器　その1



萩原古墳　須恵器　その2



萩原古墳　須恵器　その3・土師器

萩原古墳　須恵器　その4

Ⅳ 扇祇3号墳

筑紫野市所在　後期古墳の調査

Ⅳ 扇祇3号墳の調査

昭和45年に扇祇神社境内にある扇祇1，2号墳を調査し，その時点で，すでに扇祇3号墳は確認されていた。しかし家屋に隣接した崖面にあり，調査は家屋の移転後でないと実施は不可能であったため，扇祇1，2号墳の調査時には，3号墳は除いた。昭和48年5月に，家屋の移転が完了したため，筑紫野市塔ノ原遺跡の調査中にこれと並行して昭和48年5月31日に調査を実施し，1日を費した。

扇祇3号墳は，標高78mの丘陵の東側の裾部にあたる標高55m～57mに位置する横穴式石室を内部主体とする古墳である。丘陵の頂部には扇祇1号墳と扇祇2号墳が所在していて，1970（昭和45）年に調査を実施している。この時の調査では，扇祇1号墳は，直径約17mの円墳であり，主体部の構造は，石材をすべて抜かれていたために抜き跡より判断して，両袖の横穴式石室であり，石室の復原値は，主軸で玄門までは2.4m，幅は1.6m前後のものであった。扇祇2号墳は扇祇1号墳の北東30mに位置する直径約18mの円墳であった。主体部の構造は，1号墳と同様，石材は徹底的に抜かれていたので，その抜き跡より復原すると，両袖形式で単室の横穴式石室である。玄室の規模は，長さ3m，幅約1.8mの長方形プランを呈するものであった。

さて，今回調査を実施した，扇祇3号墳は，民家の裏庭の崖面にわずかに，残存しており，大半部分は，丘陵斜面を切って，裏庭となっていたため，墳丘の規模ならびに形状は全く不明である。主体部の構造については，石材の残存状態だけに限ると，1，2号墳よりも良好であったが，それでも玄室の奥壁の一部と側壁片面の一部を残存するだけであった。主体部は主軸をN—12°—Wにとり南に開口する。石室は，残存部で長さ2m，幅2mを測る。奥壁では2m×1mの大きな石材を腰石とし，上部に3段積まで確認されており，床面からは2.2mである。側壁は1m×0.8m大の石材を縦長と，横長に使って腰石としており，上部に3段積まで確認されている。側壁では，上部は，かなり内側へせまっており，いわゆる持送り式である。床面には小礫がみられたが，敷石であったかどうかは不明である。なお，石室構築に用いられた石材はすべて花崗岩であった。石室構築に際しての，まず第一段階としての墓壙（掘り方）は，花崗岩のバイラン土を掘り抜いており，奥壁では，掘り方のぎりぎりの位置に石材を据えている。

わずか1日の調査であったため，十分な調査ができなかったことを深く詫びたい。

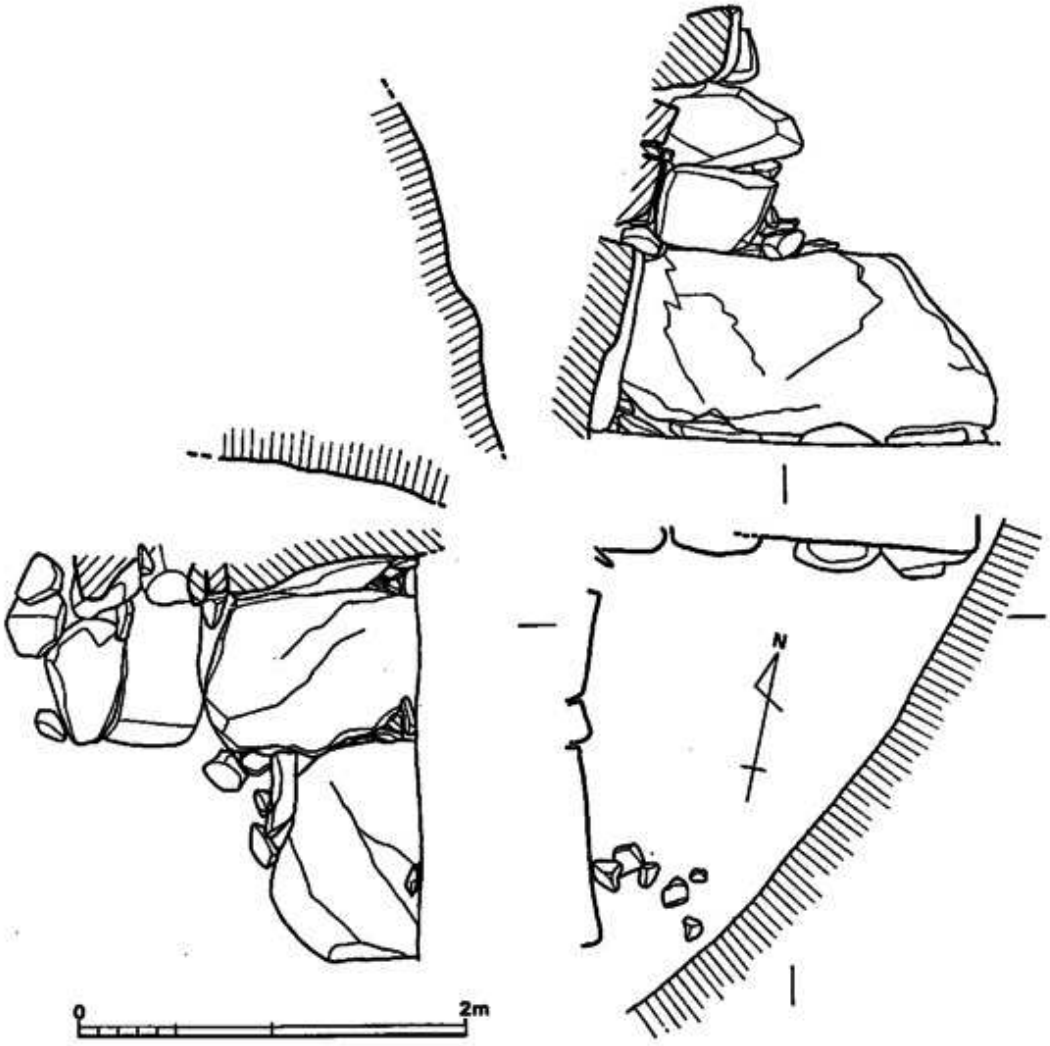


Fig. 24　扇祇3号墳石室実測図（縮尺1/40）

遺　物

上述してきたように扇祇3号墳の石室は著しく破壊されており，遺物もわずかしか残存しておらず，出土した遺物は残存石室周囲の残土中より検出されたものである。

なお，出土した遺物を列記すると，つぎの通りである。

土器	須恵器	3個体
	杯蓋	1個体
	杯身	1個体
	甕	1個体

杯蓋（Fig. 25—1）　小片であるため，全形は不明である。体部と口縁部の境は明瞭であり，口縁部は直立気味である。調整法は，天井を篦削りし，以下は横ナデである。暗灰色である。胎土に細砂粒を含み，焼成は良好である。Ⅲb期に属する。

杯（Fig. 25—2）底部を欠損する。口径11.5cm，蓋受け部径14.1cm，立上り1.1cmである。立上りは，内

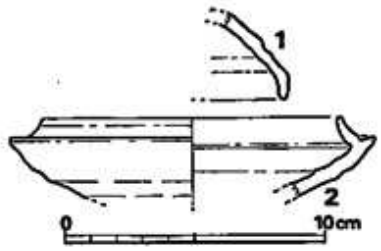
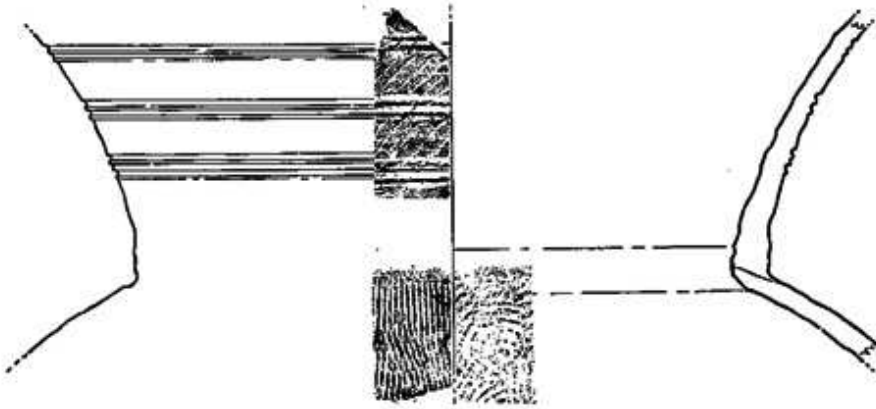


Fig. 25　扇祇3号墳須恵器実測図（縮尺1/3）



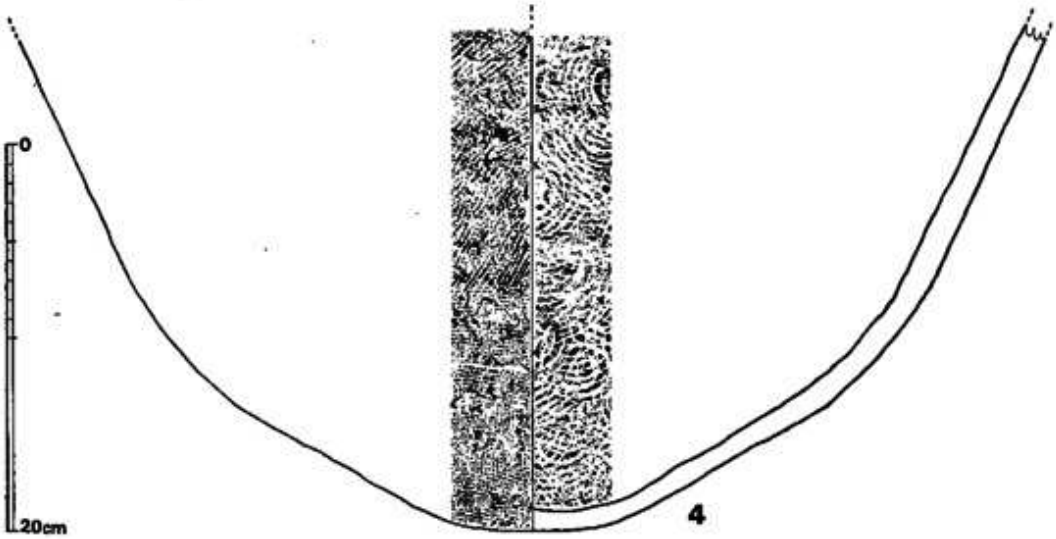


Fig. 26　扇祇3号墳須恵器実測図（縮尺1/4）

傾し，端部は丸味をもって立つ。底部は篦削りし，その外はすべて横ナデ調整である。色調は灰色を呈し，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

甕（Fig. 26—3・4）　口頸部と底部を残存する。3は口縁端部を欠損している。頸部には2条の沈線が3段に入り，沈線間には櫛描波状文が入る。頸部内面は横ナデの凹凸が著しい。4は3の底部であるが，胴部を欠損するため，全形は不明であるが，かなりの大形品である。外面には平行状叩き目が，内面には同心円叩き目が入る。内面の叩き目は，肩部のそれの方が大き目のものである。色調は灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

以上，土器の詳細を述べてきたが，出土遺物はⅢb期に属するものであり，年代は6世紀後半に比定できる。扇祇3号墳は，石室はわずかしか残存していなかったが，前回調査した扇祇1，2号墳は石材が全く残存せず，石室の構築法が不明であったため，貴重な資料となった。扇祇古墳群の3基の古墳は，いずれも6世紀後半代に構築された横穴式石室を内部主体とする円墳である。石室は，1，2号墳は，ほぼ南西に開口し，3号墳は，ほぼ南に開口する。扇祇1号墳は最も高所にあり，墳丘も自然地形を利用して構築されており，みかけの高さは高く堂々としており，盟主的な感じを受ける。　（川述昭人）

V　山　の　口　遺　跡

筑紫野市所在　中世遺跡の調査

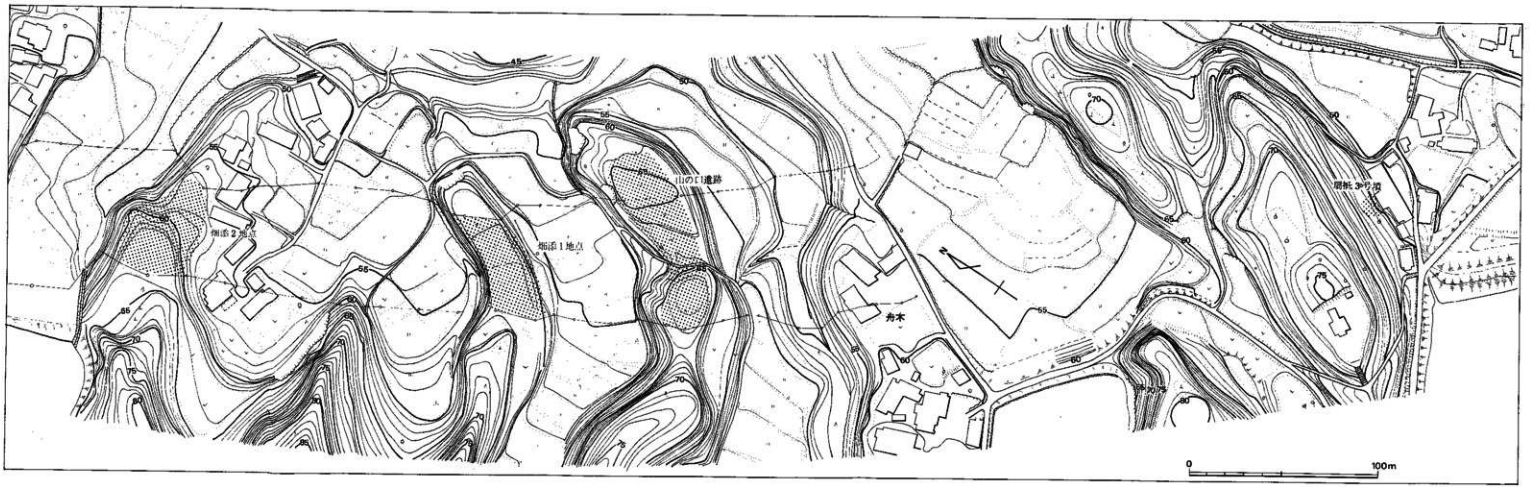


Fig. 27 屏風3号墳，山の口遺跡，畑添1,2地点周辺地形図（縮尺1/600）

V 山の口遺跡の調査

1 調査の経過

山の口遺跡の調査は，まず1970（昭和45）年12月1日から12月26日まで，扇祇1，2号墳の調査と並行して，主として，福岡県教育庁文化課技師栗原和彦により，2区の調査を実施した。この際，福岡教育大学考古学研究室の学生諸君の協力を得た。ついで，1973（昭和48）年11月12日から11月21日まで，路線外削平分にあたる1区を調査し，引き続き11月22日から12月6日まで，3区の調査を実施した。調査団は下記のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	川述昭人
調査補助員		次郎丸達朗
		中牟田賢治
		川述公紀
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	瀧　龍二
	嘱託	因　将太

以下に，調査日誌によって経過をたどってみよう。

11月12日（月）　晴。丘陵北端部の土取り場より発掘開始。伐採後，幅3m，長さ33mのトレンチと，これに直交する幅3m，長さ21mのトレンチを設定する。

11月13日（火）　晴。南北のトレンチを第1トレンチとし東側を第2トレンチ，西側を第3トレンチとし，第1，第2トレンチより掘り始める。

11月14日（水）　晴。第1トレンチは表土剝ぎを終了する。第2トレンチは地山面まで下げると遺構が出始める。

11月15日（木）　晴。第1トレンチ西側で柵列と思われるプランを検出する。北側は土層断面を見るため幅30cmで深掘りし，土層確認後，遺構の検出に努める。第2トレンチは遺構のプランを確認する。

11月16日（金）　晴。第1トレンチは遺構面でプランを検出後，遺構掘りを始める。第2トレンチは遺構掘りを行う。第3トレンチは表土剝ぎ作業を開始する。

11月17日（土）　晴。第3トレンチは遺構面まで掘り下げる。第1，第2トレンチは遺構掘りを行う。

11月19日（月）　曇一時小雨。各トレンチは遺構掘りを行う。

11月20日（火）　晴。第3トレンチは遺構掘りを行う。第2，第1トレンチの写真撮影を行い，第3トレンチは遺構掘り終了を待って写真撮影を行う。実測を開始する。プランは1/20，平板による地形測量を1/100で実施する。土層断面図は1/20でとる。

11月21日（水）　曇一時小雨。実測を続行し，終る。山の口1区の調査は本日をもって終了する。

11月22日（木）　晴。山の口遺跡南側の最も高所にある3区を調査する。写真撮影は遠景を撮る。その後平板測量で地形図を作製する。公団BMを発掘地点へ移動する。トレンチを設定する。

11月23日（金）　祭日で作業を休止する。

11月24日（土）　晴。地形測量を続行する。遺構の有無を確認するためにトレンチ掘りを開始する。

11月26日（月）　晴。地形測量を終る。南側斜面へとトレンチを延ばして，中世城跡の遺構の有無を確かめる。

11月27日（火）　晴。昨日に続いてトレンチ掘りを行い，新たに，東・西トレンチを設定する。

11月28日（水）　晴。東・西トレンチは遺構面まで下げるが西トレンチは遺構は見あたらない。

11月29日（木）　晴。東トレンチは遺構掘りを始めるが，遺構ではないことが判明した。北側斜面よりの地点は赤色土を削って遺構の有無を確認する作業を行う。

11月30日（金）　曇。北側斜面寄りで土壙墓と思われる遺構が検出された。東側トレンチは拡張して全面を掘ると，ピットが多数検出されてきた。

12月1日（土）　晴。トレンチの土層断面図をとる。東側部分は昨日に続いて表土剝ぎとプラン検出に努める。西側部分では崖ぎわのピットの遺構掘りをする。

12月3日（月）　曇一時小雨。斜面下では貯蔵穴を掘りあげ，写真撮影と実測を行う。東側部分では住居跡が検出され，遺構掘りを開始する。プランは長方形を呈している。

12月4日（火）　小雨のち曇。住居跡内の遺構掘りを行う。北東部は遺構掘りを開始する。トレンチ土層断面と土壙墓の写真撮影をする。

12月5日（水）　曇のち晴。写真撮影のため清掃を行い撮影する。午後から割りつけをし，実測を開始する。作業員は畑添1地点へ移動し，伐採を行う。

12月6日（木）　小雨のち曇。山の口遺跡は遺構実測を終了し，本日をもって調査を終る。

2　調　査　の　内　容

天拝山麓の東裾部より，南北に延びる舌状丘陵である。調査は3次に分けて実施しており，北部を1区，中央部を2区，南部を3区と細分した。1区は標高64m，2区は64.5m，3区は68mであり，丘陵の先端部に向ってその高さを減じている。水田面は約54mの高さであり，10m～14mの高低差である。

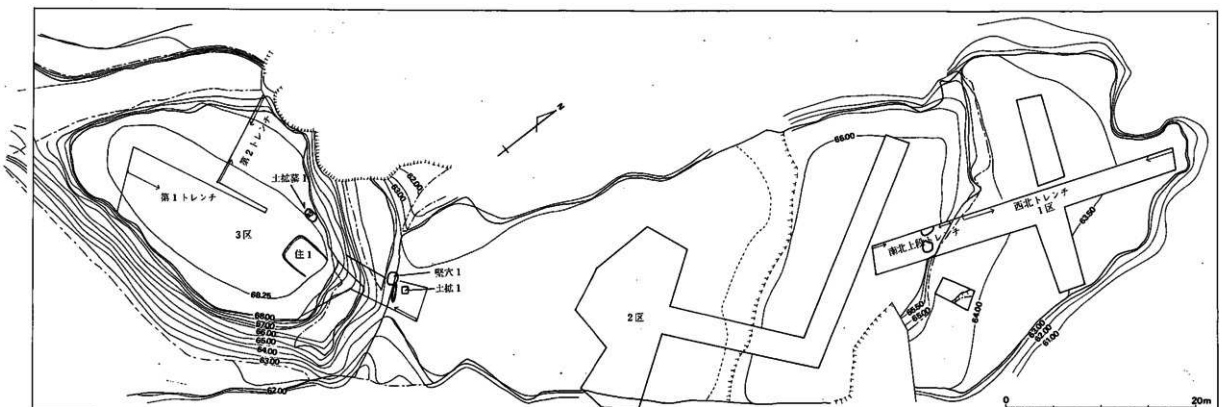


Fig. 28 山の口遺跡発掘区周辺地形実測図（縮尺1/400）

（a）山の口１区の調査

トレンチによる発掘調査を実施した。縦貫道建設に伴う土取り場となり，短期間であったので，南北にのびる丘陵の中央部に幅３ｍ，長さ35ｍの中央トレンチ，これに直交する様に東部，西部に幅３ｍ，長さ８ｍと10ｍの東西トレンチを設定した。南北トレンチでは地山は北側の丘陵端部へ向って自然傾斜しており，表土も，わずかずつ傾斜する。土地所有者の言によると，腰のあたりまで掘って，天地返しをしたということであった。地山までの深さがあまりない所は地山面まで及んでおり，斜面下方では，60cm～70cmの深さの第11層あたりにまで及んでいる。従って，第11層より上層は耕作を受けた層であり以下が堆積層となる。東西トレンチの東側では，地山は東方丘陵端部へと自然傾斜する。ブロック状に黒色土が混入していて，地山より上層での遺構の検出は明瞭でなかったが，地山上面の堆積層である灰褐色砂質土層より切り込でいるのもある。西側では土層はかなり乱れており，遺構は西トレンチ隅の溝状遺構だけ

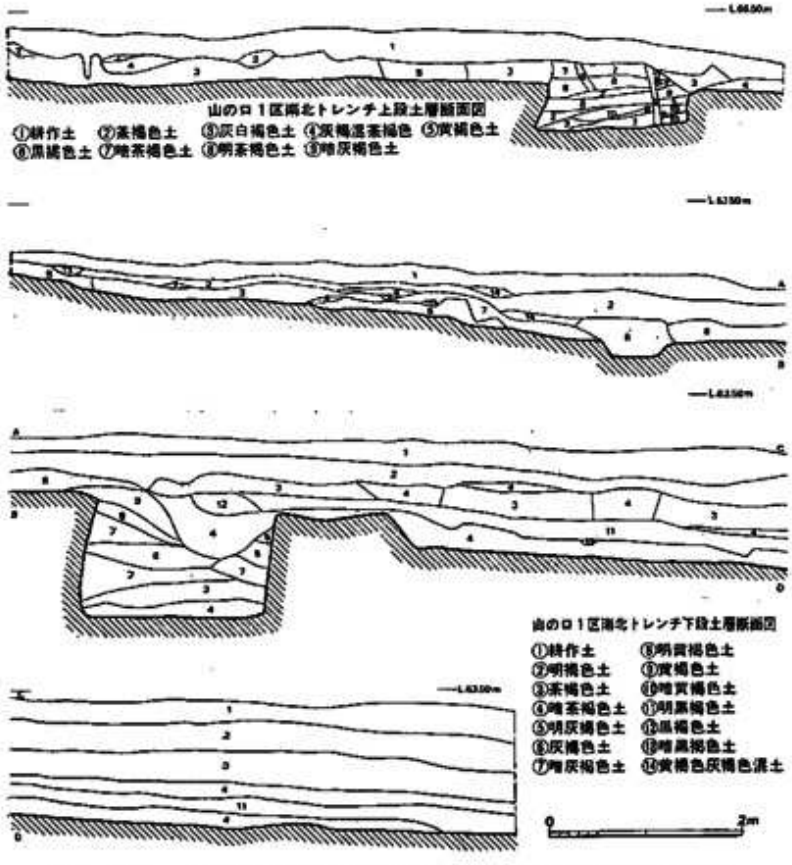


Fig. 29　山の口遺跡１区南北トレンチ下段土層断面図（縮尺1/80）

が第2層の明茶褐色土層より切り込まれており，後出するものと思われ，他の遺構は，地山面で検出した。遺物は，弥生式土器数点，石斧，須恵器，中世遺物が出土した。

弥生時代の遺構と遺物

袋状竪穴（Fig. 30, PL. 21）貯蔵穴と考えられる袋状竪穴は，中央トレンチと西トレンチにまたがって1個，中央トレンチ南の一段高い位置のトレンチより2個の合計3個検出された。1号袋状竪穴内からは，太型蛤刃石斧が検出されたが，その他の遺物は皆無である。

1号袋状竪穴（Fig. 30-1）完掘はしていないが，不整円形を呈するものと思われる。上辺径1.8*m*～1.9*m*，底辺径2.1*m*，深さ1.3*m*である。地山面より掘り込まれており，壁面は袋状を呈する。

2号袋状竪穴（Fig. 30-2, PL. 21）円形を呈する。上辺径1.2*m*，底辺径1.45*m*，深さ0.8*m*である。壁面は袋状を呈している。遺物出土はない。

3号袋状竪穴（Fig. 30-3, PL. 21）トレンチにかかった半分だけの調査である。不整円形を呈する。上辺径1.6*m*，底辺径1.6*m*，深さ0.45*m*である。壁面は袋状を呈するものと思われる。遺物は出土していない。

遺物

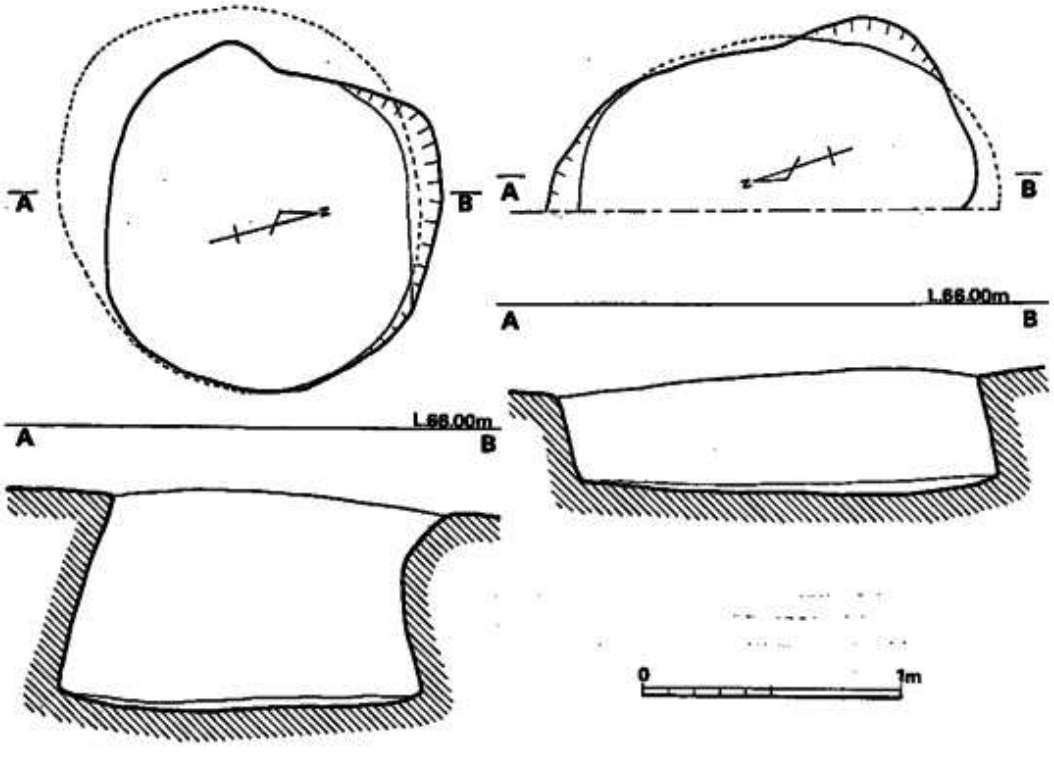


Fig. 30　山の口遺跡一区袋状竪穴実測図（縮尺1/30）

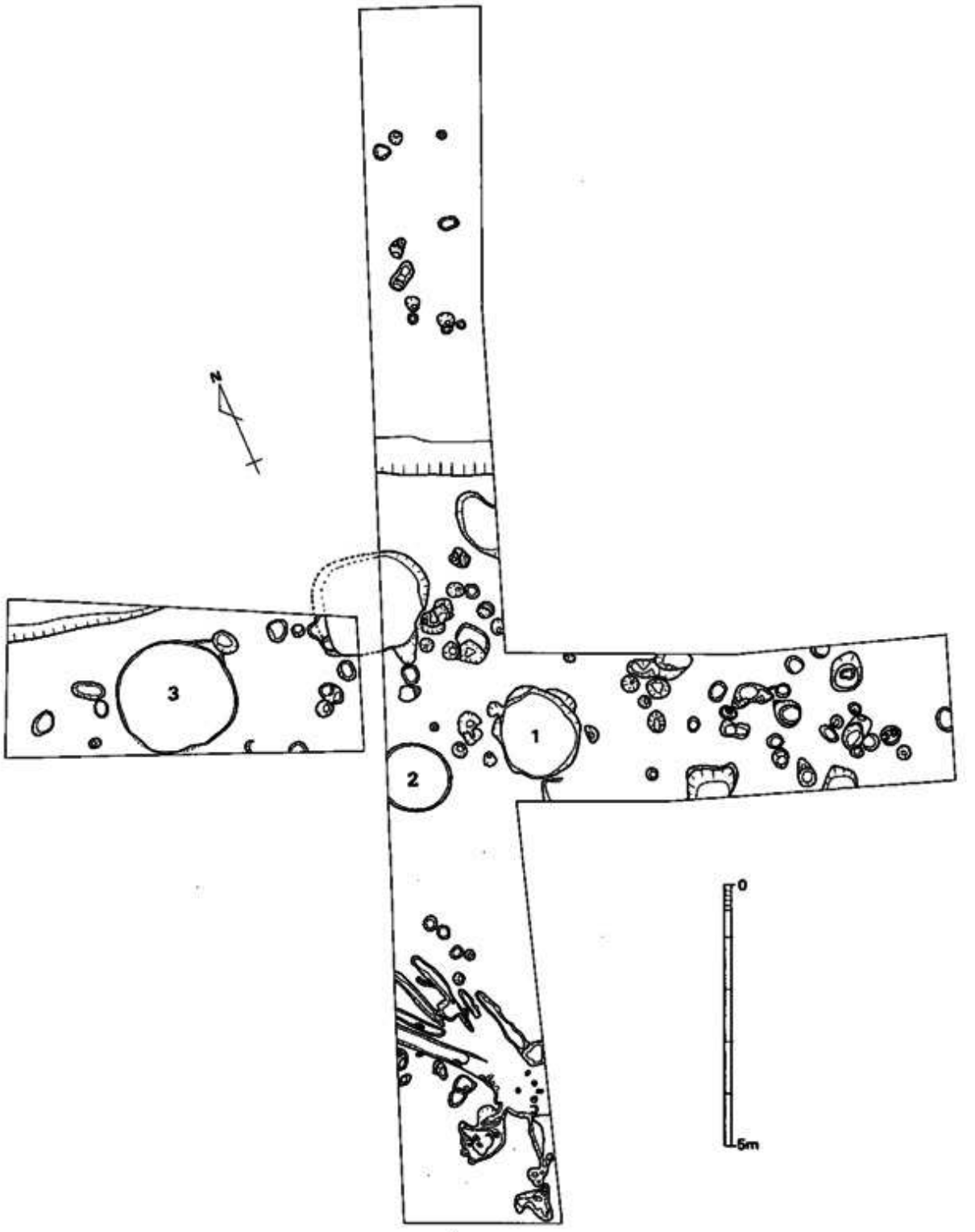


Fig. 31 山の口1区遺構配置図（縮尺1/120）

弥生式土器 (Fig. 33-1, 2) 1は壺の口縁部であり，残存口縁には1個円孔がある。南トレンチのピット内より出土した。明褐色を呈しており，焼成は良好である。2は細頸壺の頸部であり，袋状口縁をなし内外面に丹塗りを施す。胎土には小砂粒を含んでおり，焼成は良好である。中期後半に属する。

石斧 (Fig. 32, PL. 26) 1号袋状竪穴内より出土した。硬質砂岩製太型蛤刃石斧である。長さ15.5cm，幅6cm～7.5cm，厚さ4.8cmであり断面は楕円形を呈する。

須恵器 (Fig. 33-3～7) 北トレンチの1号袋状竪穴上層の埋土中より，6個体出土した。図示しなかった1個体は杯蓋であるが，磨滅した小片であるため省略した。3，5は杯蓋である。須恵器ではあるが，焼成は非常に悪く，黄灰色を呈する。天井部は篦削りはなく，ナデ調整である。身受けのかえりはわずかとなる。口径9.5cm～9.9cm，最大径11.9～12.3cm，器高2.3cm～2.6cmである。3は4とセットか。4，6，7は杯身である。焼成は悪く，黄灰色を呈する。底部は篦削りをせず，ナデ調整である。4，6は口径11.2cm～11.5cm，器高4cm～4.3cmであり，7の器高は3.4

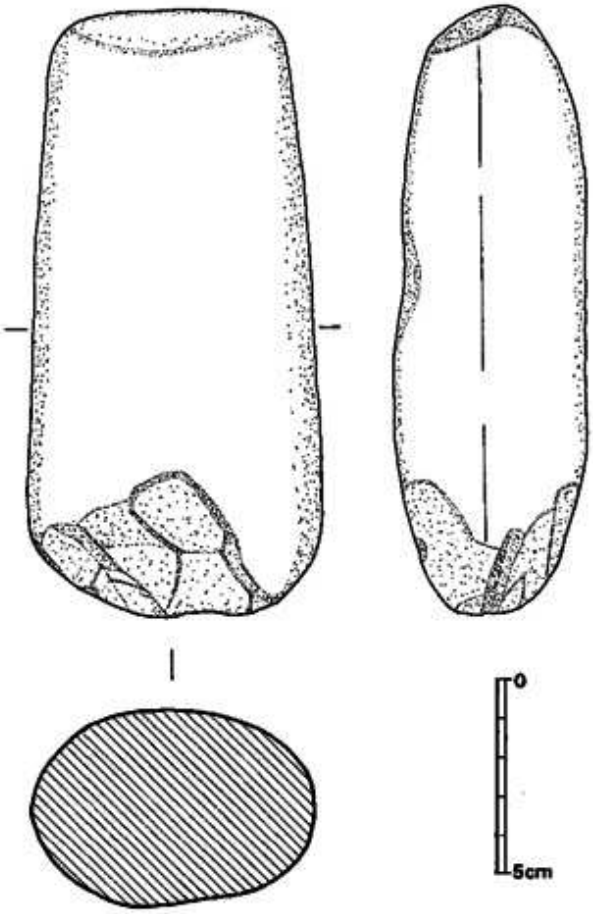


Fig. 32 山の口遺跡袋状竪穴出土石斧実測図（縮尺1/2）

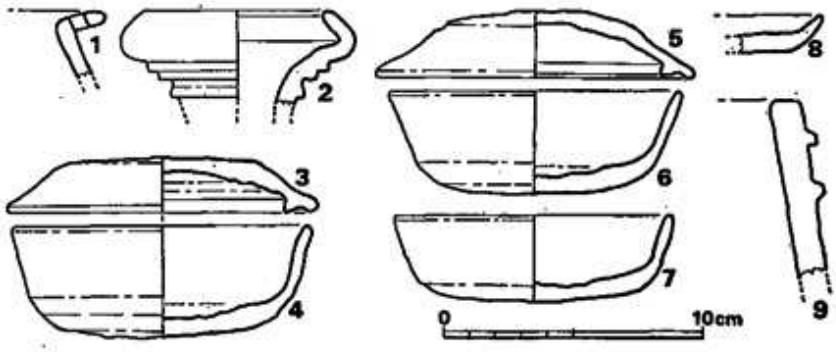


Fig. 33 山の口遺跡一区出土土器実測図（縮尺1/3）

cmとやや低くなる。遺物は6世紀末から7世紀前半に属するものと思われる。

中世の遺構と遺物

トレンチ内からは，円形，不整円形，楕円形，方形などの多様な形状を呈する多数のピット群と，溝状遺構が検出された。ピットは，その大きさは10cmから70cm，深さは5cmから50cmまでと幅広い。ピットの性格としては，柱穴，杭，柵列などが考えられる。土壙としたものは，ほぼ，円形を呈しており，上径は1.3m～2.2m，深さは20cmから40cmである。土壙内からの遺物の出土は皆無である。遺構とは関係なしに，土師器と火舎が出土しているが，出土点数は数点である。

第1号土壙（Fig. 31-1）上辺径1.6m～1.7m，底辺径1.4m～1.5m，深さ20cm～40cmである。

第2号土壙（Fig. 31-2）上辺径1.3m，底辺径1.2m，深さ17cm～25cmと浅く円形である。壁面は，ほぼ直立する。

第3号土壙（Fig. 31-3）円形である。上辺径2.2m，底辺径2.1m，深さは30cm～40cmで直立する器壁を有する。底面の西隅には，5cm程の浅いピットがある。

溝状遺構　中央トレンチ南側の1.5m程段がつく下方部にあたり，幅30cm，深さ5cm～10cmの浅い溝状遺構と，幅10cm～15cm，深さ5cm程の浅い溝状遺構が検出された。溝の南側には不規則にピットが存在するが，柵列とは考えられない。性格は不明である。

遺物

土師器（Fig. 33-8）耕作土中より出土した小皿である。底部は磨滅して明瞭でないが，糸切り痕がみられる。黄褐色を呈する。

火舎（Fig. 33-9）トレンチ内の耕作土中より出土した。口縁は平坦であり，以下には2条の突帯を付する。灰黒色を呈する。胎土には小砂粒を含んでおり，焼成は良好である。室町時代頃のものか。

（b）山の口2区の調査

山の口遺跡の中央部にあたり，標高64.5mである。この2区の調査は1970（昭和45年）年の12月に実施されており，溝状遺構，土壙，ピット群が検出された。層位は地表より20cm～30cmは耕作土であり，すぐ下は花崗岩バイラン土地山であり，遺構はこの地山を切っている。なお，遺物も若干出土したが，現在はその所在が不明であるため，今報告に載せ得なかったことを，ここに深くおわび致しておきます。

溝状遺構　ほぼ南北に縦走しており，幅は30cm～70cm，深さは10cm～30cmである。この溝状遺構は新しいものであると思われ，溝の両端でその高低差は顕著でなく，中央部が最も低くな

Fig. 34 山の口2区遺構配置図、土層断面図（縮尺1/50）

るなどしており，排水を目的としたと考えるより，耕作用のうねと判断した方が良いと思われる。

土壙 平面形が長方形，楕円形状を呈するものがあり，大きさも一様でない。

1号土壙 (Fig. 35-1, PL. 22) 0.95m×1mの隅丸方形を呈し深さ1m程の竪穴を掘っ

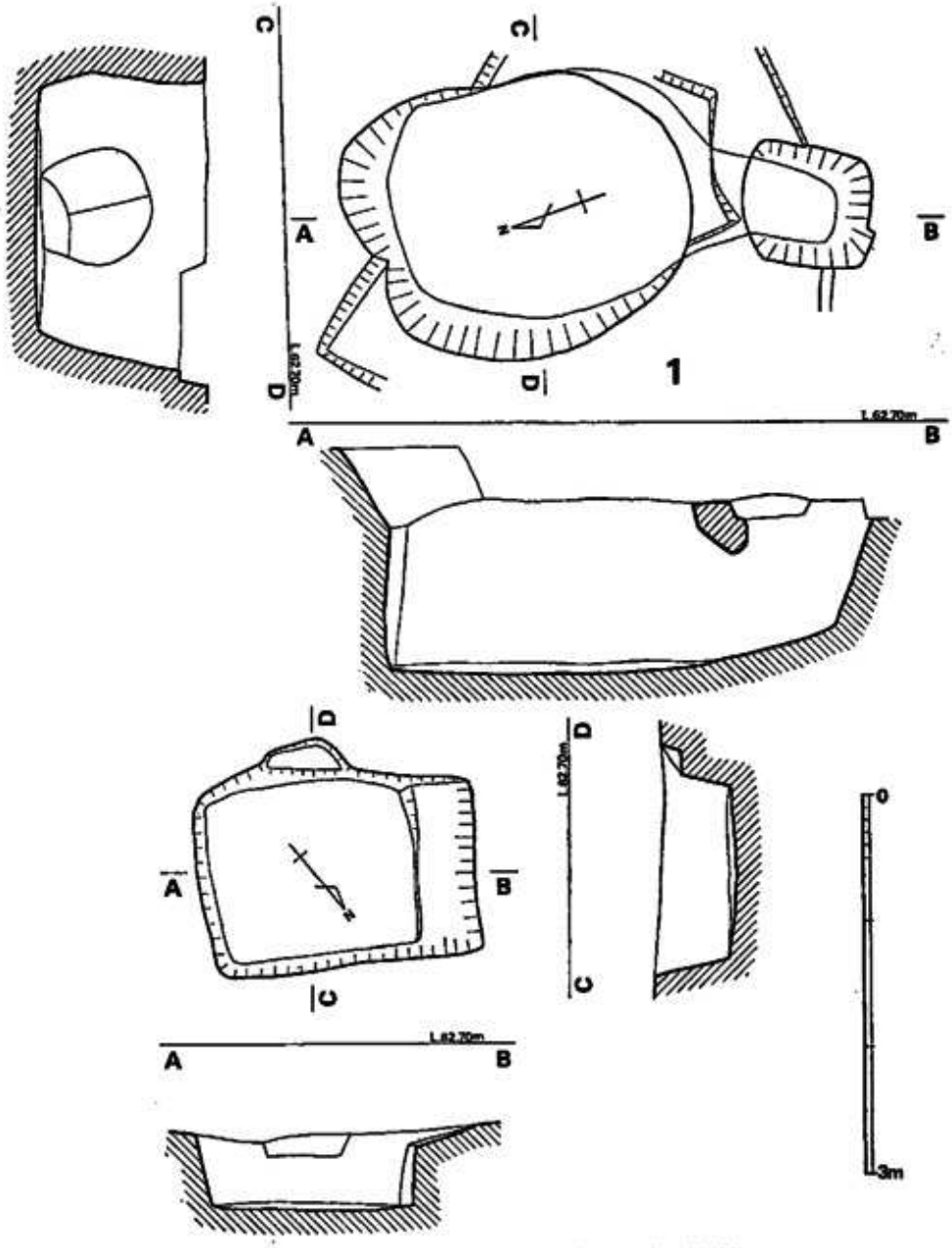


Fig. 35 山の口遺跡2区土壙実測図（縮尺1/60）

て，そこから，北方に横穴を掘る。横穴部は隅丸長方形を呈し，長辺は2.5m，短辺は1.9mである。天井部は，調査中に陥没したので高さは不明であるが地山の掘り込み面までは1.3mを測る。遺構内から遺物は出土していないので年代はわからないが，新しいのではなかろうか。遺構の性格は，貯蔵用横穴であろう。

2号土壙　(Fig. 35-2) 上辺長2.2m×1.5m，底辺長1.6m×1.35m，深さ0.6mで長方形を呈する。遺物の出土はなく，性格も不明である。

3号土壙　不整形である。地山を60cmほど掘り込んでおり，壁面は外方へ広がる。発掘区の端部にあたるため，完掘はできなかったが，濃黄褐色土層と黒褐色土層より土師器が出土した。ピット群は円形，楕円形，不整方形を呈しており大きさは，10cm～60cm，深さは5cm～70cmと様々である。中には柱穴と思われそうなものや，ピット内に根石を敷いているものなどがあり，建物が所在した事が考えられるが，明らかでない。また，ピットには杭穴，柵列なども考えられる。

(c) 山の口3区の調査

山の口遺跡の南側に位置し，標高は68mで，崖状の段を有して，最も高所に所在する。地理的にみて，この高所からは，平野部が一望に収めることができるし，周辺部は険しい斜面となっているので，調査前には，中世城跡の存在も考えられた。しかし，調査の結果，城跡と結びつく遺構は検出できなかった。上段部の平坦面は最近まで耕作していたため，地山に到る間の土層では遺構がみあたらず地山面で検出した。遺構は，弥生時代の住居跡が1軒，袋状竪穴1，土壙墓が1基，方形，長方形の土壙が3個とピット群が検出された。

弥生時代の遺構と遺物

1号住居跡 (Fig. 37, PL. 24) 長軸をほぼ東西に向ける長方形を呈する弥生時代の住居跡である。東側の壁面は消失している。残存部の規模は縦4.7m，横3.3mで深さは20cmである。住居跡は地山面より掘り込まれており，淡茶褐色土と暗茶褐色のやや粘質土が流入している。柱穴は床面から10穴と土壙が1つ検出された。住居跡の上層からも掘り込みが検出されたが，当住居跡に伴わないものである。柱穴は，15cm～40cm，深さは7cm～25cmあり大きさ深さも様々でありまとまらなかった。南側の壁面近くには，隅丸長方形を呈する土壙があり，上辺長90cm×65cm，深さは一段目までは20cmであった。西北隅の地山より壺形土器の蓋が検出された。

1号住居跡出土土器 (Fig. 38, PL. 26) 住居跡の床面より出土した。壺形土器の蓋である。口径は16.5cm，器高は3cm強である。円孔は，片方に2個あり，反対側は欠損しているが，対称形に2個所在したと思う。褐色を呈しており胎土に多量の砂粒を含む。弥生時代中期後半に属すると思われる。

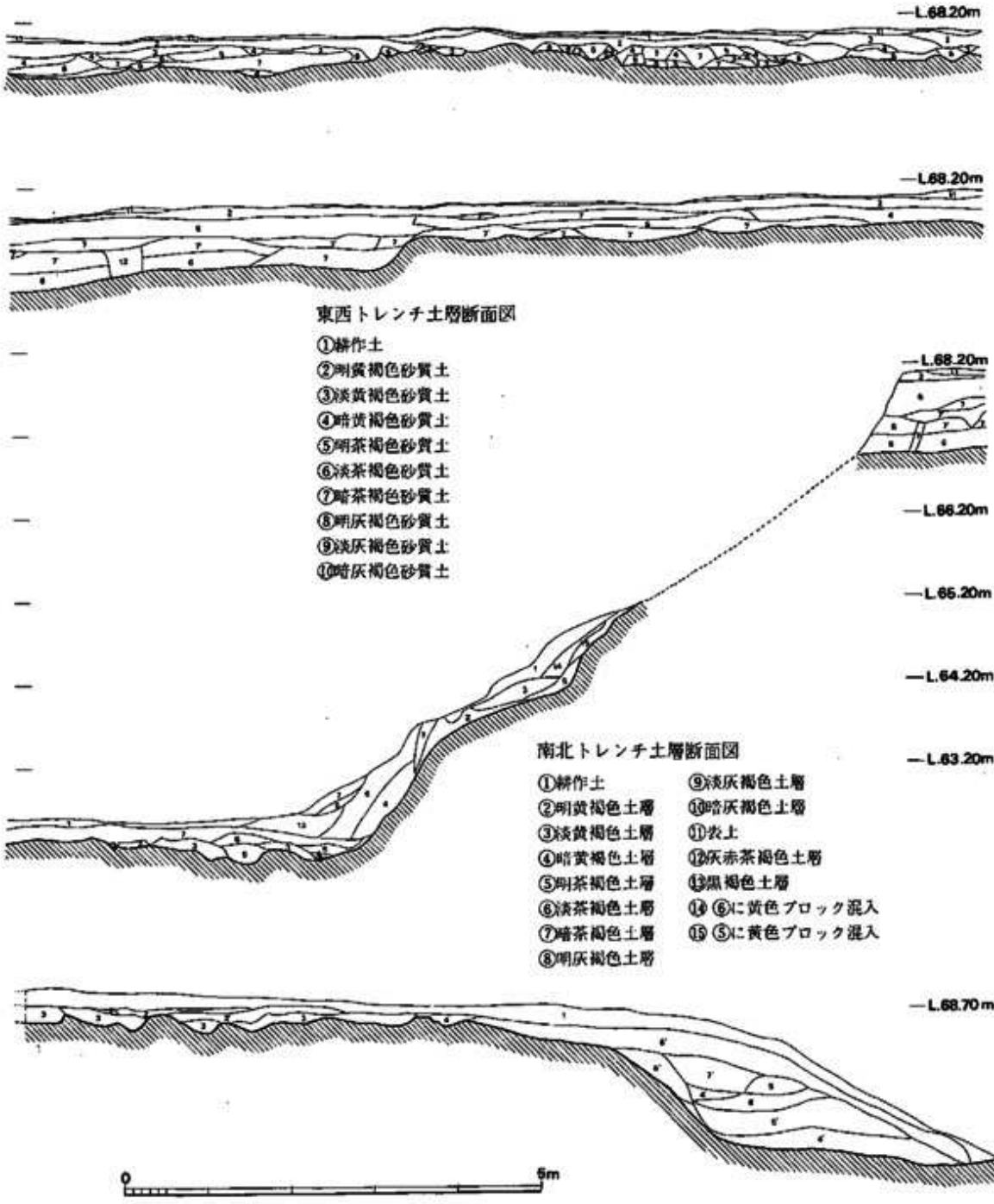


Fig. 36 山の口3区土層断面図（縮尺1/50）

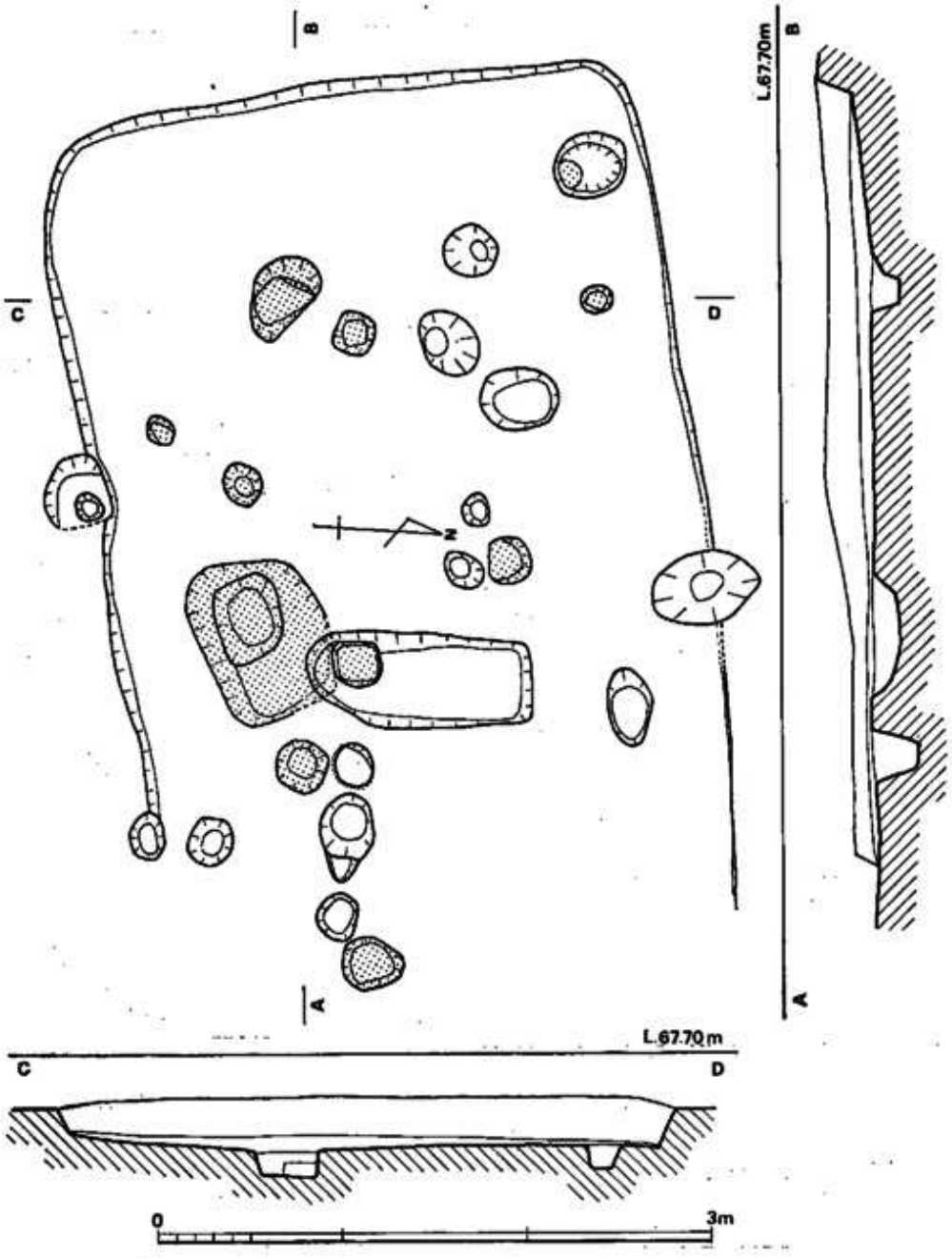


Fig. 37　山の口遺跡1号住居跡実測図（縮尺1/40）

袋状竪穴（Fig. 43-1）　丘陵の北側斜面下段より，検出された。上辺は不整形であり，底辺は隅丸長方形状を呈する。床面は凹凸が著しく未完成である。壁面は袋状を呈する。遺物の出土もなく，年代は不明である。

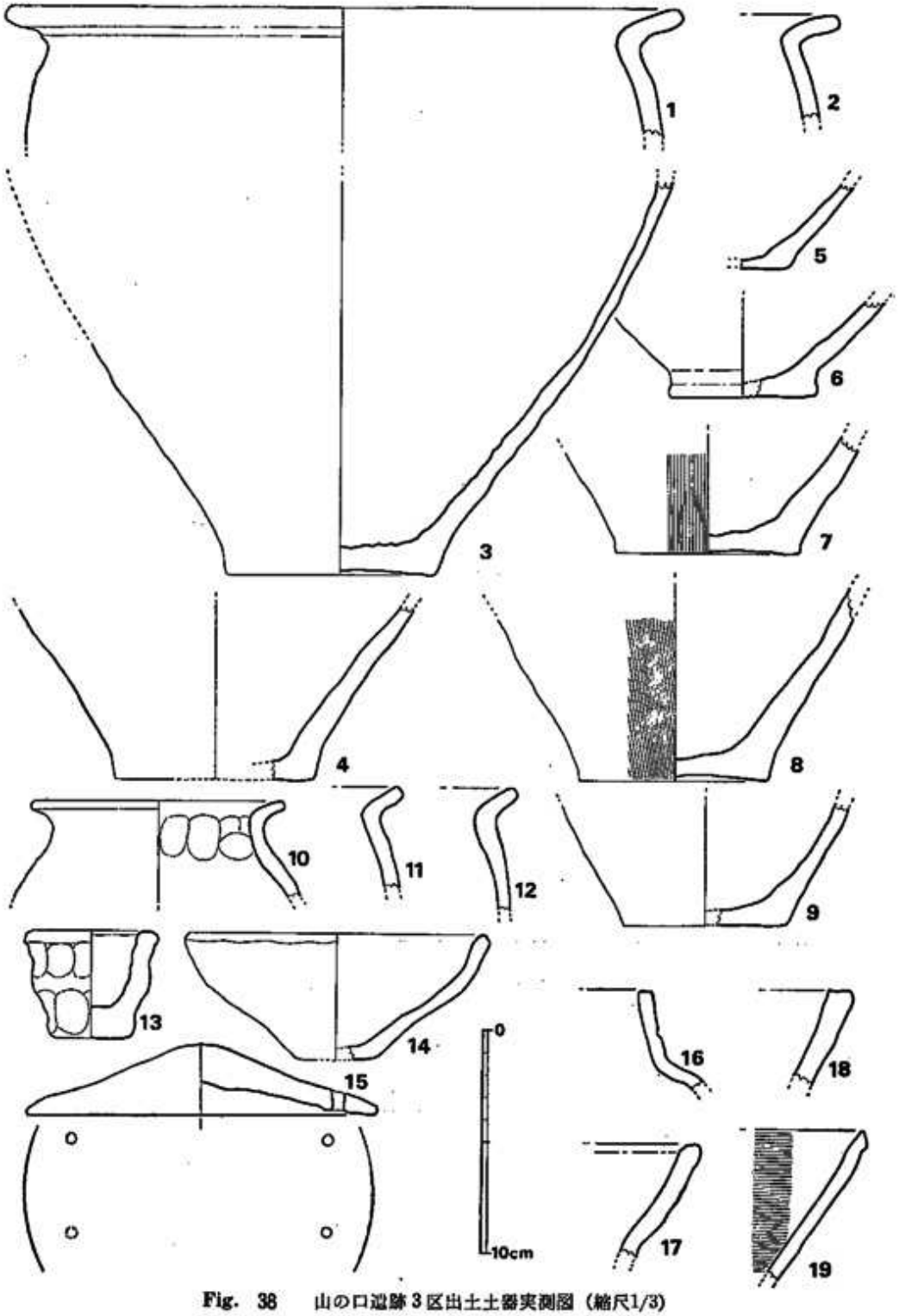


Fig. 38　山の口遺跡3区出土土器実測図（縮尺1/3）

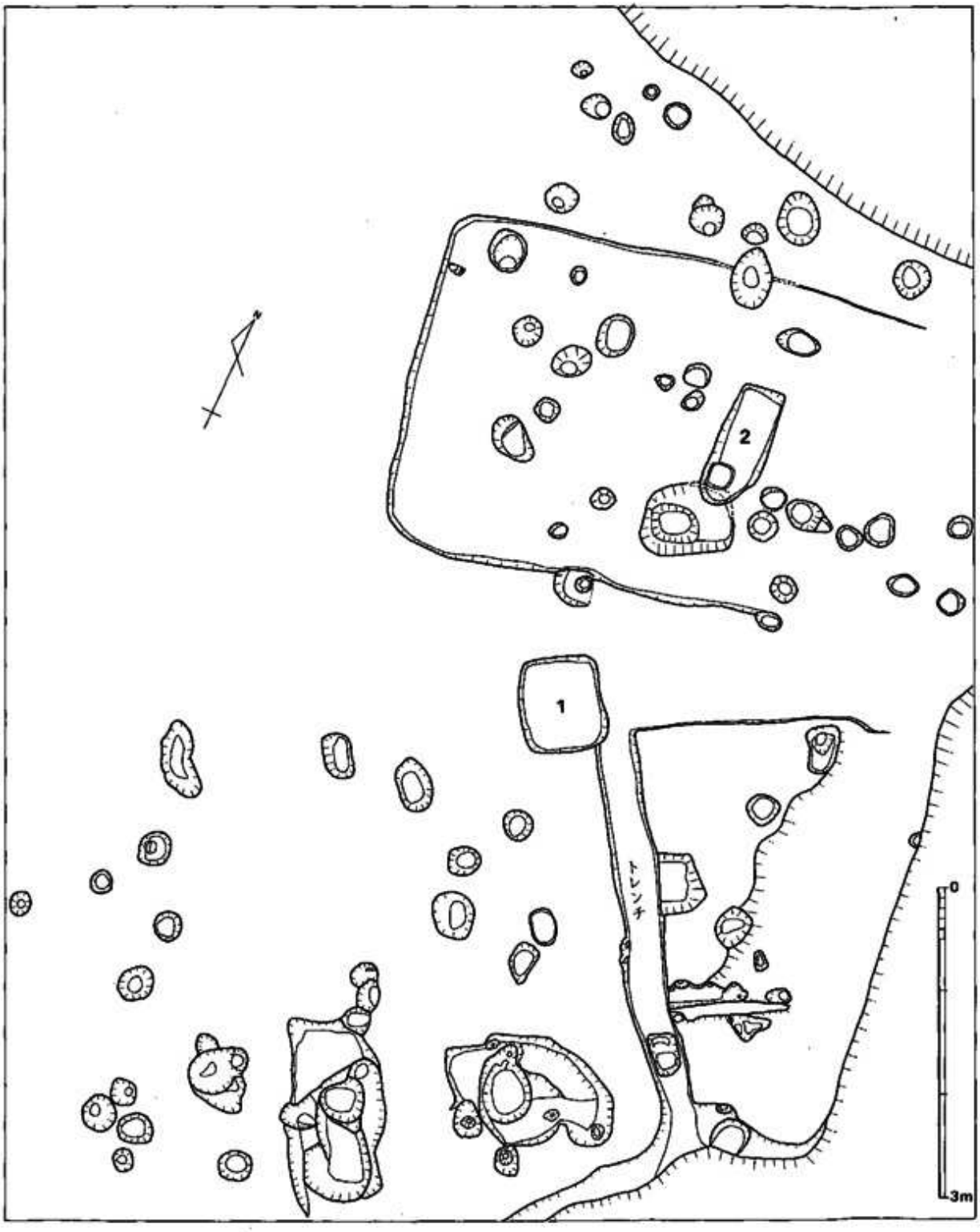


Fig. 39 山の口3区遺構配置図（縮尺1/60）

弥生式土器（Fig. 38-1～15） 南側の崖よりの堆積土中より出土したが，遺構内からは出土していない。

甕形土器　1，2 は甕の口縁部である。1は口径30.4cmであり，口縁下部には沈線が入る。褐色を呈する。胎土には多量の砂粒を含んでおり，焼成は良い。中期後半に属する。

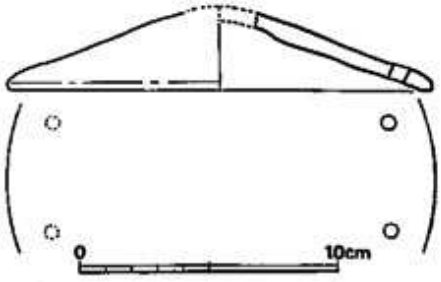


Fig. 40 住居跡土器実測図（縮尺1/3）

壺形土器　10は口径11.3cmで短く外反する口縁を有する。口縁部の接合部付近の内面には指頭ナデ痕がみられる。東南グリットの茶褐色土層より出土した。褐色を呈しており，焼きは良い。11，12も，壺の口縁部と思われる。東南グリットの茶褐色土層より出土した。

底部　4～9は底部である。2は東南グリットの茶褐色土層より出土している。底部はわずかに上げ底気味である。内面は調整が粗雑であり凹凸が著しい。7，8は外面に刷毛目が入る。6は壺の底部であろう。

蓋形土器　15は壺形土器の蓋であり，全体に厚手造りである。円孔は，現存するのは3個であるが，左右各々2個ずつ，合計4個が対称形に所存するものと思われる。東南グリットの南端の黒色土層より出土した。赤褐色を呈する。胎土に砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

鉢形土器　14であり，底部を一部欠損する。口径14cm，器高5.6cmである。口縁部はやや立ち気味となり，端部は肥厚して丸い。東南グリットの黒色土層より出土した。

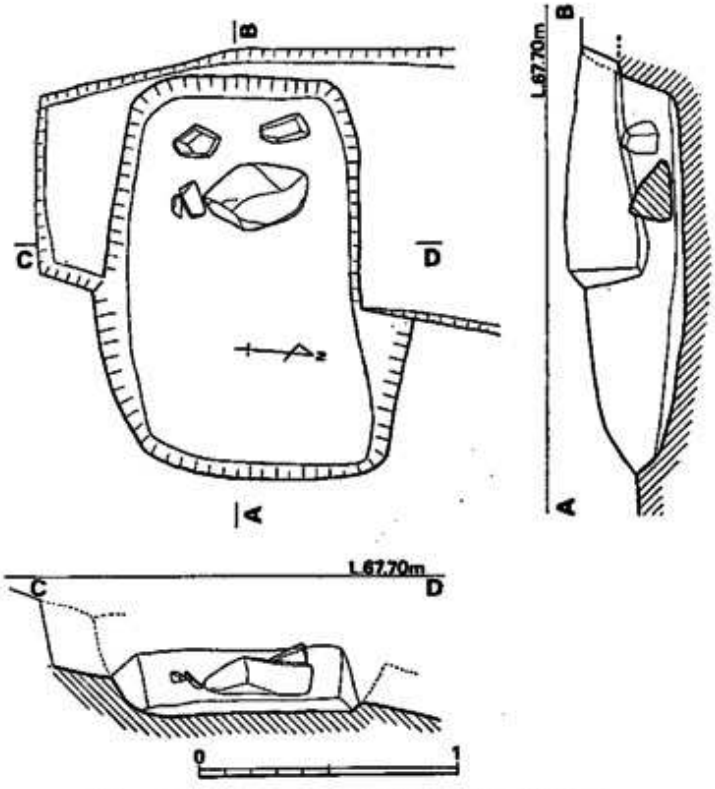


Fig. 41 山の口遺跡1号土壙墓実測図（縮尺1/30）

手捏ね土器　13がそれで，甕形土器である。外面に指頭圧痕が明瞭である。東南グリットの茶褐色土層より出土した。口径5.9cm，器高4.8cmである。

中世の遺構と遺物

1号土壙墓 (Fig. 41, PL. 25)　丘陵北側の先端部に位置し，平面形は長方形を呈する。上辺長1.55m×1m，底辺長1.4m×0.85m，深さは復原値で0.35m～0.4mである。主軸はほぼ東西である。西側には，30cm大の石1つと，20cm大の石3つが長方形にある。この石は床面より5cm～10cmの高さにあり棺外の落込みと考えられる。埋土中より木質の炭化した破片が検出されており，木棺を使用した可能性が強い。土壙墓内からは，土師器の杯が出土している。

1号土壙墓出土土器 (Fig. 42)　土師器の杯である。口径11.1cm，器高2.5cm，底径6.1cmを測る。糸切り痕が不明瞭だ

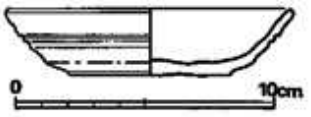


Fig. 42　山の口遺跡土壙墓土器実測図（縮尺1/3）

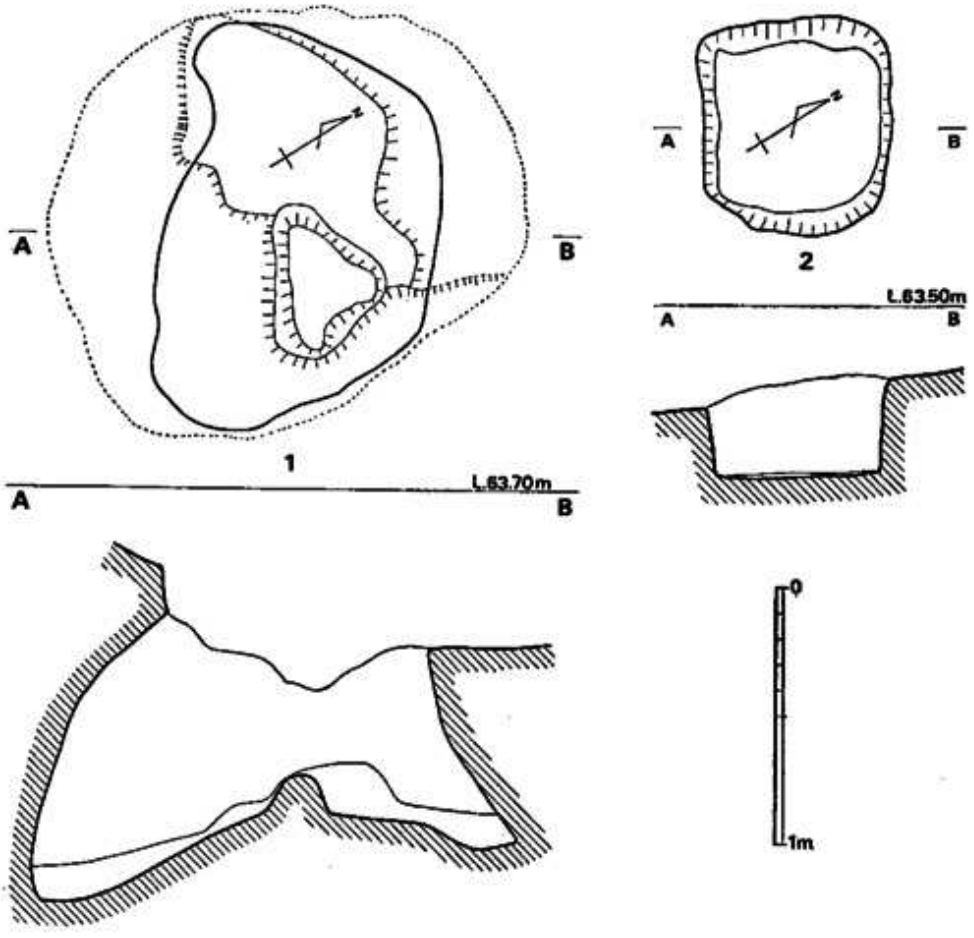


Fig. 43　山の口遺跡竪穴，土壙実測図（縮尺1/30）

がみられる。体部の中ほどに2条の沈線が入る。色調は暗茶褐色を呈する。胎土には小砂粒を含み，焼成は不良である。

土壙 (Fig. 39-1, 2, Fig. 43-2)

1号土壙 (Fig. 39-1)　方形を呈する。上辺長80cm～90cm，深さ50cmであり，壁面は直立する。出土遺物はない。

2号土壙 (Fig. 39-2)　長方形を呈する。長さ1.2m，幅0.5m，深さ0.2mである。土壙内は灰赤茶色土がつまっており，火熱を受けたと思われる。

3号土壙 (Fig. 43-2)　下段部より検出された。隅丸方形を呈しており，上辺長70cm～80cm，深さ35cmである。

ピット群　平坦部の北東部から，多数のピットが検出された。大きさは15cm～50cmと幅があるが，30cm大が多い。深さは10cm～60cmである。ピットの性格は柱穴，柵列などが考えられる。

中世遺物 (Fig. 38-16～19)　16，18は中央トレンチのピット内から出土した。16は明褐色，17は外面に刷毛目が入り，煤が付着する。暗茶色である。18は内面に細い刷毛目が入る。明褐色である。19は内面に櫛目が入り，外面には多量に煤が付着している。暗茶褐色である。

3 小　　結

山の口遺跡は調査を3度にわけて実施したため，1区から3区に分けたが，有段で高低差はあるが，同一丘陵上に位置する遺跡である。1区では弥生時代に属する袋状竪穴3と竪穴内から石斧を検出した。古墳時代では，袋状竪穴の上層部から杯身と杯蓋の3個体ずつ総数6個を一括資料で検出した。遺物はあるが遺構は定かでない。多数のピット群に伴うものとして，中世の日常雑器を検出しているが，遺構の性格は不明である。2区では多数のピットが検出されており，地形的にみても，住居跡が所在して良さそうであるが，ピット群の性格は不明である。3区では，弥生時代の住居跡1軒と，中世土壙墓，ピット群が検出された。山の口遺跡の西側丘陵下の幅2mほどの谷川には，弥生式土器を多数包含している堆積層があり，周辺部に，弥生時代の集落の存在が可能であるが，調査では，住居跡は一軒しか検出されなかった。古墳時代では遺物も少く，また遺構も検出されなかった。中世の室町時代に属すると思われる火舎を検出しており，また，土師器も検出しており，多数のピットは，中世に属するものと思われ，建て物の存在が可能であるが，まとまらなかった。

(川述昭人)

山の口遺跡

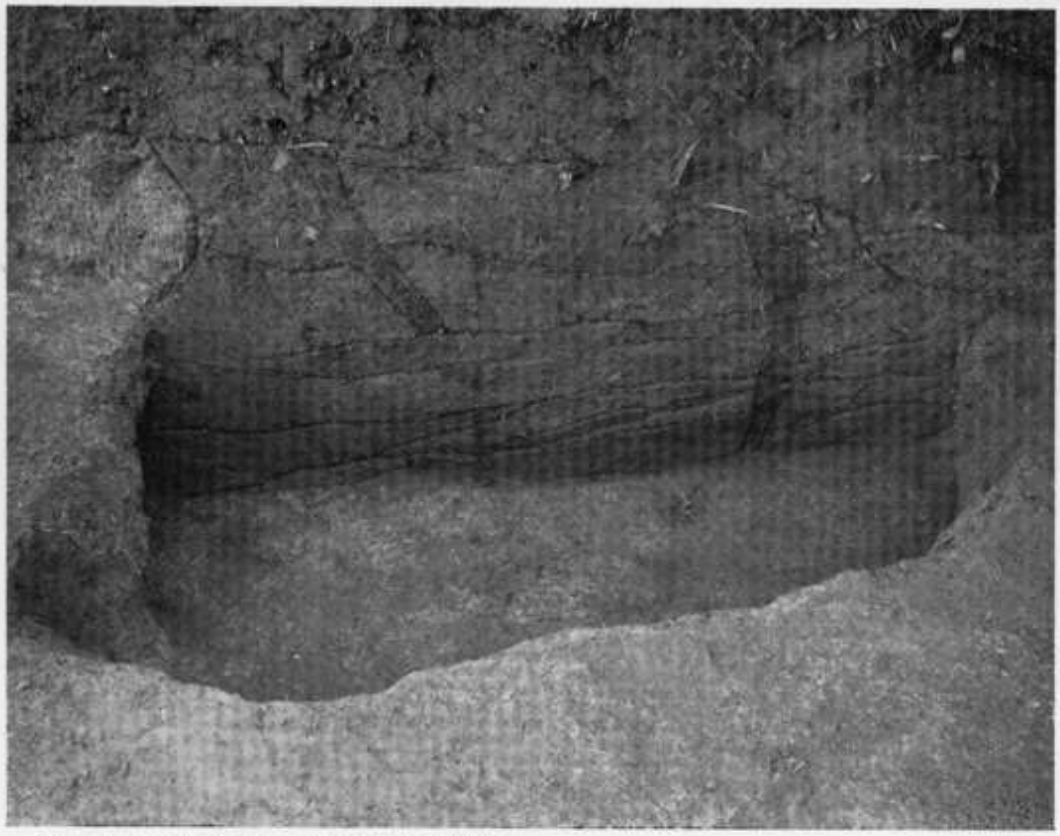
PLATES

(1) 山の口遺跡　遠景　(北東から)

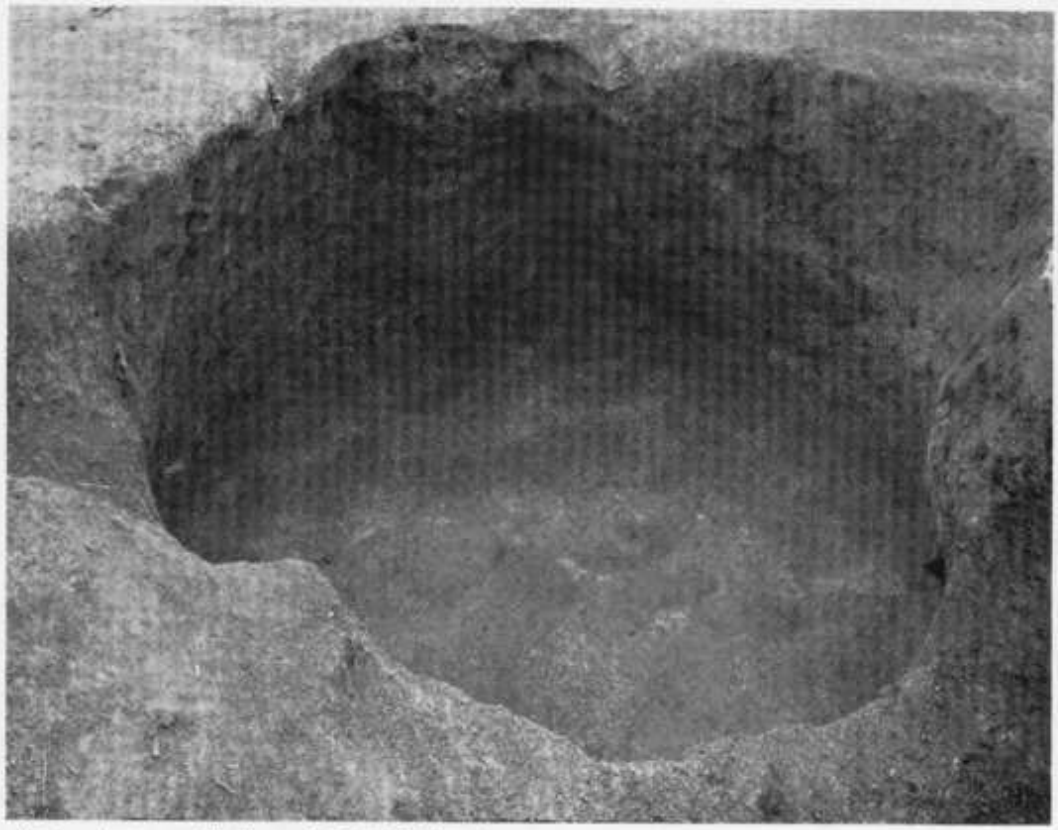
(2) 山の口遺跡　遠景　(東から)

(1) 山の口遺跡　1区南北トレンチ内遺構

(2) 山の口遺跡　1区東トレンチ内遺構

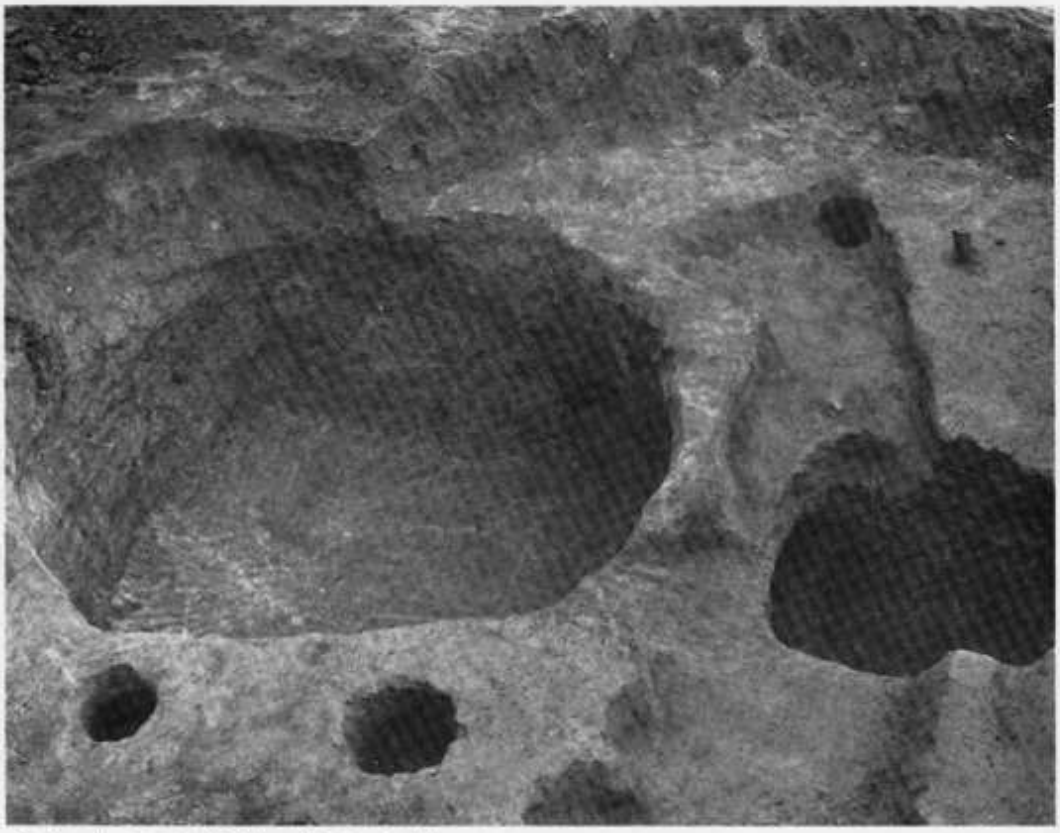


(1) 山の口遺跡　1区2号袋状竪穴



(2) 山の口遺跡　1区3号袋状竪穴

(1) 山の口遺跡　2区全景

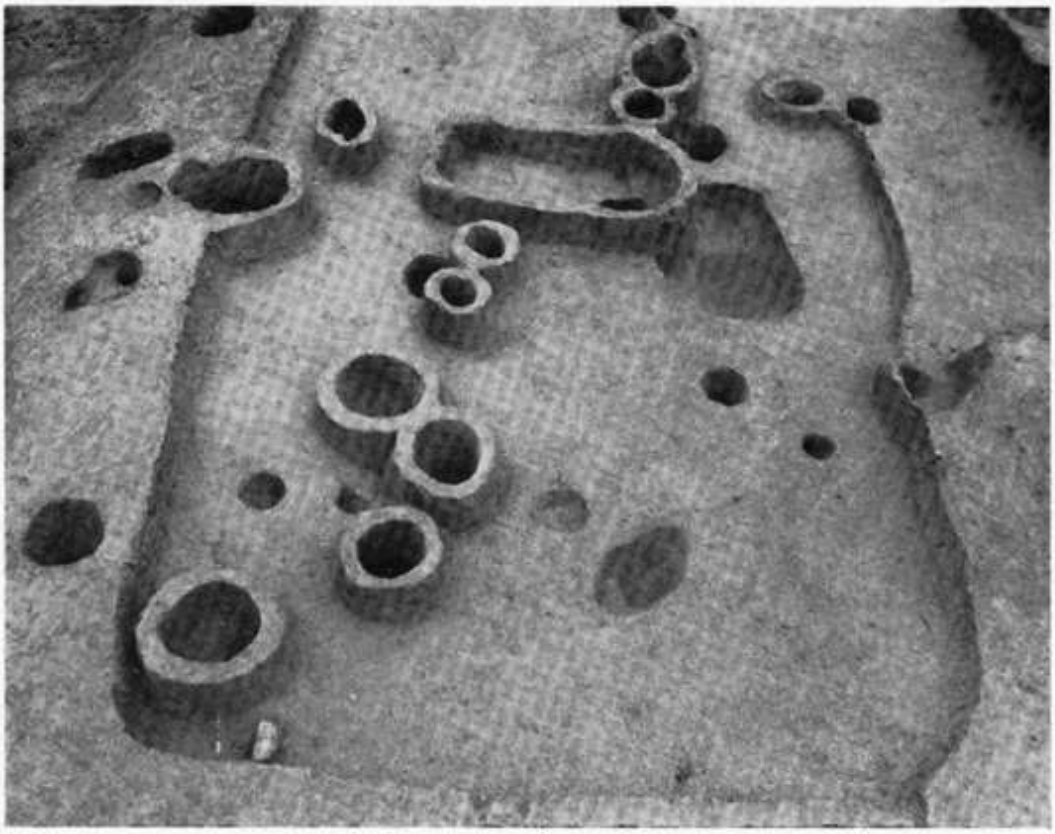


(2) 山の口遺跡　2区土壙

（1） 山の口遺跡　3区遠景　（東から）

（2） 山の口遺跡　3区遺構の検出状況と土層断面

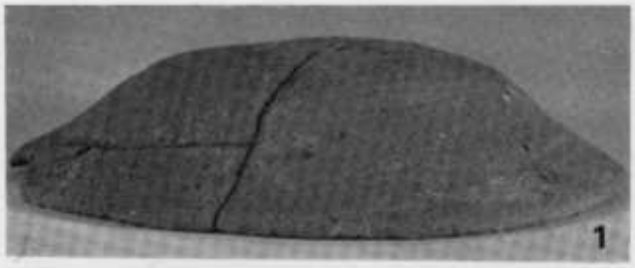
（1） 山の口遺跡　3区全景　（西から）

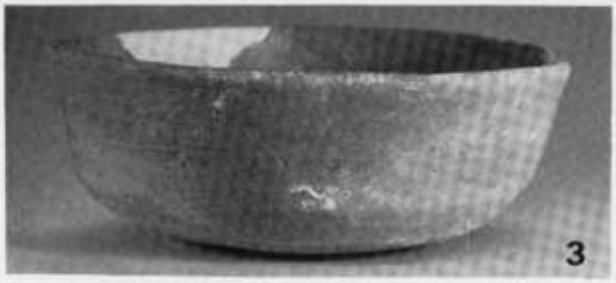


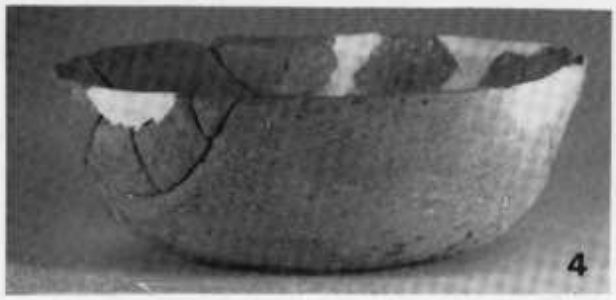
（2） 山の口遺跡　3区1号住居跡

(1) 山の口遺跡　3区斜面土層断面

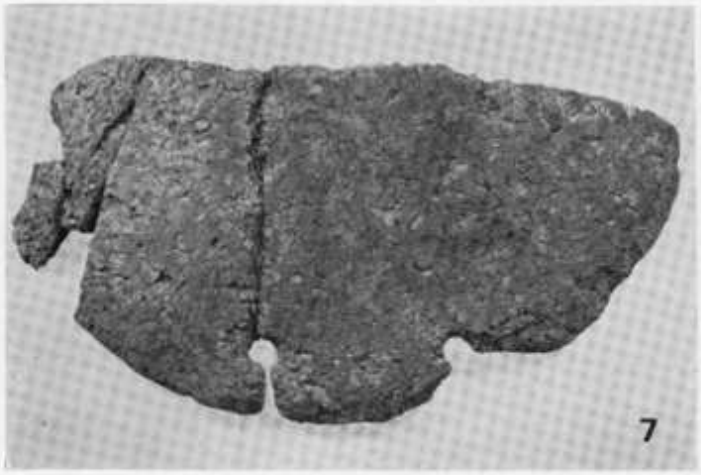
(2) 山の口遺跡　3区土壙墓



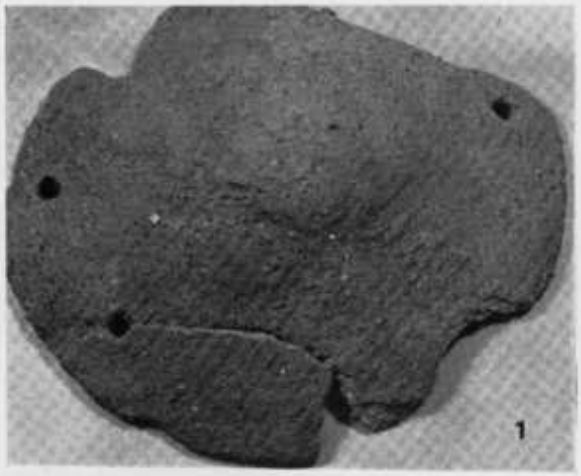


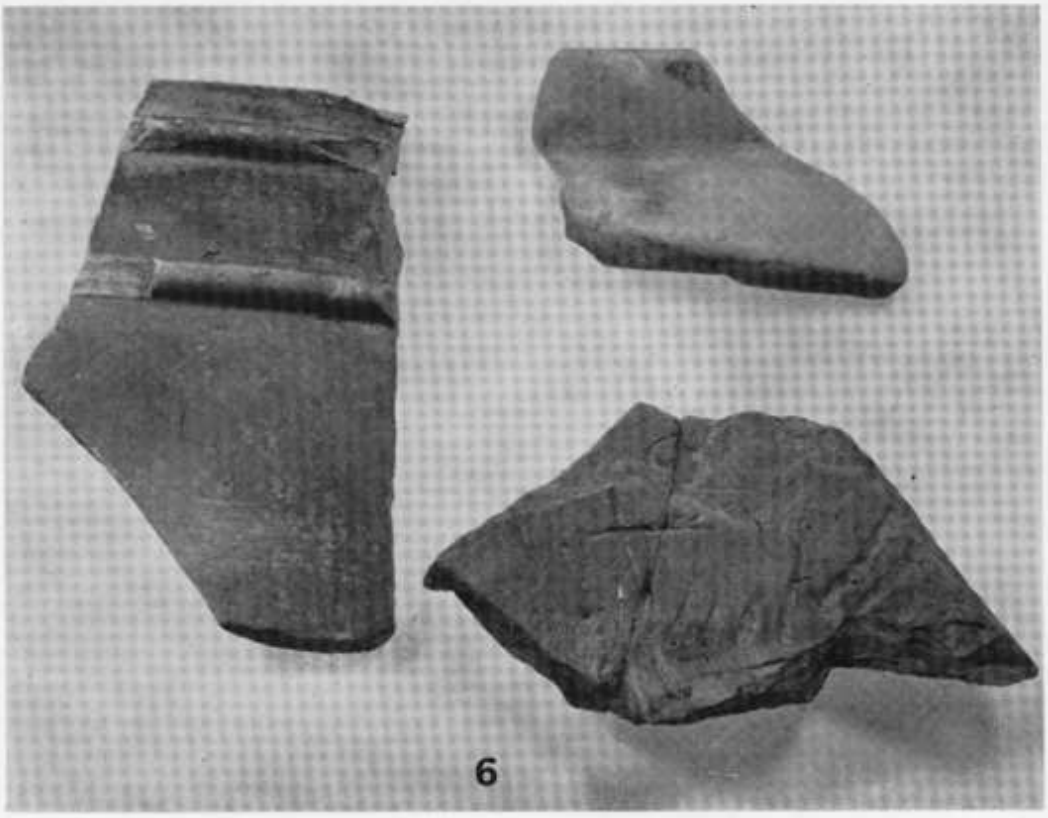


（1） 山の口遺跡　1区出土須恵器・石斧



（2） 山の口遺跡　3区出土土器（7は1号住居跡出土）





山の口遺跡　3区出土土器・日常雑器（3は土壙墓出土）

Ⅵ 畑 添 1 地 点

筑紫野市所在の弥生及び中世遺構の調査

Ⅵ 畑添1地点の調査

1 調査の経過

畑添1地点の調査は，1973（昭和48）年12月6日から12月27日まで実施した。この丘陵の西方にも調査対象地点があるため当遺跡を畑添1地点と名づけた。調査団は下記のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課	技師	川述昭人
調査補助員			川述公紀
			次郎丸達朗
			中牟田賢治
庶務担当者	福岡県教育庁文化課	主事	瀧　龍二
		嘱託	因　将太

以下に，調査日誌によって経過をたどってみよう。

12月6日（木）　小雨のち曇。伐採を行う。公団BMを移動してくる。

12月7日（金）　曇。平板による地形測量を縮尺1/100で開始する。東南部より表土剝ぎ作業を開始する。

12月8日（土）　曇時々晴。地形測量を続行する。北東部の表土剝ぎ作業を始める。

12月10日（月）　晴。地形測量を続行する。東北部の表土剝ぎ作業を続行するが，表土は浅くて，30cm程でバイラン土地山に達する。

12月11日（火）　晴。地形測量を終る。北東部は表土剝ぎ作業を終り，遺構の検出にとりかかる。ピットが多数と，隅丸方形，円形の貯蔵穴のようなものが検出される。

12月12日（水）　晴。ベルトコンベヤーを3台搬入する。北半分の遺構掘りを始める。

12月13日（木）　晴。昨日に引き続いて遺構掘りを行う。午後より，南半分の表土剝ぎを開始する。

12月14日（金）　晴。北部は貯蔵穴を掘る。南部は東側斜面寄りを調査する。中央部に比して，土量が多くなる。

12月15日（土）　曇。南部の東側斜面より掘る。北部は貯蔵穴を掘る。

12月17日（月）　晴。南部東側斜面は掘りあがり，更に南方へと表土剝ぎを進める。貯蔵穴の土層断面図をとる。

12月18日（火）　晴。貯蔵穴土層断面図をとり終り，セクションベルトを除去する。南部は表土剝ぎ作業を行う。

12月19日（水）　曇。北部は写真撮影を行う。南部は表土剝ぎと，遺構の検出をする。

12月20日（木）　晴。南部は遺構掘りを始める。

12月21日（金）　曇時々雨。遺構掘りを続行する。

12月22日（土）　曇時々雪。遺構掘りを終り，清掃して写真撮影を行う。

12月23日（日）　雨のち曇。写真撮影と割りつけを行い，実測を開始する。

12月24日（月）　雪。現場作業を中止して，事務所で報告書を作製する。

12月25日（火）　晴。実測を行う。捨て土が農道をおおったため除去作業を行う。

12月26日（水）　晴。実測を行う。発掘器材を撤収する。

12月27日（木）　雪。実測を終了する。本日をもって調査を終了する。

2 調 査 の 内 容

畑添1地点は天拝山の東南裾部にある舌状丘陵の先端部，標高63*m*の地点であり，水田面よりの高さは，10*m*ある。丘陵頂部は，最近まで，耕作しているため平坦である。南北に横長く，東西幅は35*m*～40*m*で崖面に到る。丘陵長軸に直交する東西トレンチを設定して，層位を確認した。花崗岩バイラン土地山までは，地表より30cm～40cmで達し，その間は3層から4層に分類できるが，耕作可能な深さであり，耕作土として良い。遺構は，バイラン土地山より掘りこまれている。なお，地山上層面よりの掘り込みは検出できなかった。東，西の端部は，流出土の堆積層であった。丘陵北西部では貯蔵穴とピット群，遺物は中期弥生式土器が出土し，北東部では，遺物は後期弥生式土器と石剣未製品，遺構としてはピット群，貯蔵穴1，が検出されている。南半部では，表土下20cm～30cmの地山面を掘り込んだ多数のピット群と土壙群が検出されている。若干のピットと，土壙内からは遺物が出土しており，年代の決め手となる。

弥生時代の遺構と遺物

袋状竪穴（Fig. 46～49, PL. 30～33）　貯蔵穴と考えられる袋状竪穴は，北部より6個検出された。しかし，遺構内からの遺物の出土は皆無であって，袋状竪穴の年代を決定する資料はないが，周辺部からは，弥生式土器が検出されており，また，遺構の形態から判断して，弥生時代とした。遺構はいずれも，花崗岩バイラン土地山を掘り込んでいる。

1号袋状竪穴（Fig. 46-1, PL. 30）　隅丸方形である。上辺径は2.8*m*，底辺形は長径2.7*m*，短径2.5*m*，深さ1.8*m*である。壁面は，垂直に近い。

2号袋状竪穴（Fig. 46-2, PL. 31・32）　平面は方形の形がくずれた台形を呈する。上辺で

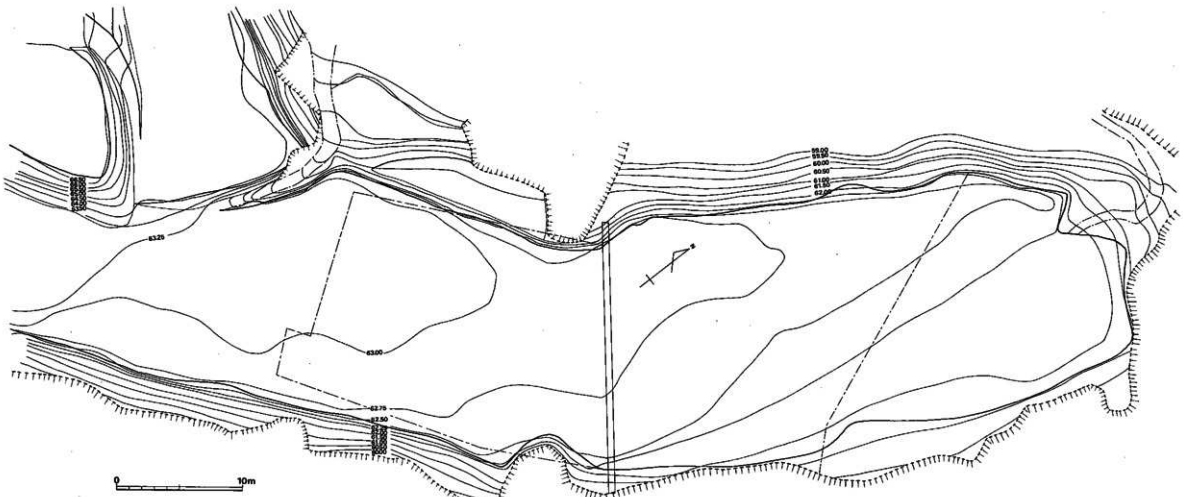


Fig. 44 畑添1地点地形測量図（縮尺1/200）

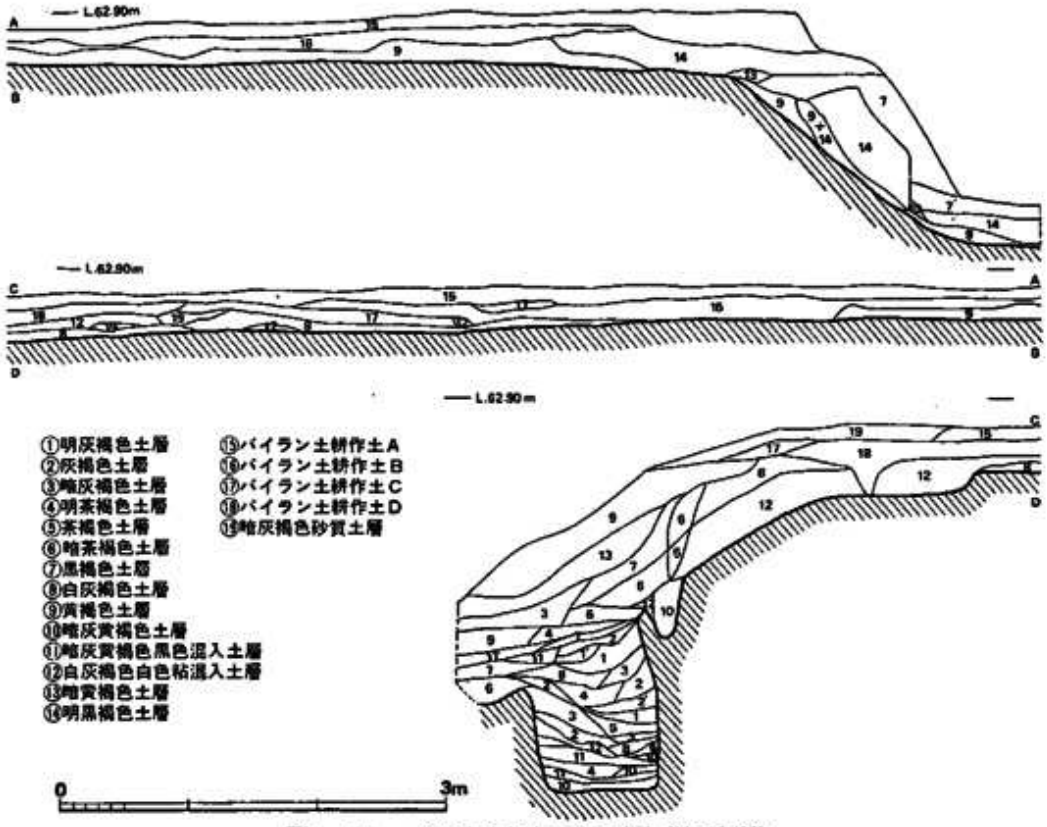


Fig. 45　畑部1地点地土層断面図（縮尺1/60）

は一辺は1.5m，台形状の長辺1.8m，短辺1.1m，底辺では一辺は1.4m，台形状の長辺1.35m，短辺1mであり，深さは1.3mである。壁面は直線的に5°から10°の外びらきの立上りとなる。

3号袋状竪穴（Fig. 48-3, PL. 32）不整円形であり，底面は楕円形である。上辺径2.3m～2.5m，底辺径は2.7m×2.2mで，深さは2.15mである。壁面は土層断面図では袋状が著しくないが，これより約60°振った断面では，顕著に袋状を呈する。

4号袋状竪穴（Fig. 48-4, PL. 33）不整円形を呈する。上辺径は2.5m～2.8m，底径2m～2.5mで，深さは0.7mである。貯蔵穴とは異るものであろう。

5号袋状竪穴（Fig. 49-5, PL. 33）隅丸方形を呈する。上辺長は2.1m～2.2m，底辺長は1.6m～1.9mである。上辺には，竪穴を切って，ピットがあり，床面には，径15cm～20cm大で，深さ35cmのピットが2個検出された。壁面は垂直ぎみである。深さは1.3mである。

6号袋状竪穴（Fig. 49-6, PL. 31）完掘していないので，全形は不明であるが，方形もしくは長方形を呈する。上辺長0.9m，底辺長0.9m，深さは，1.3mである。壁面は，わずかに袋状を呈する。

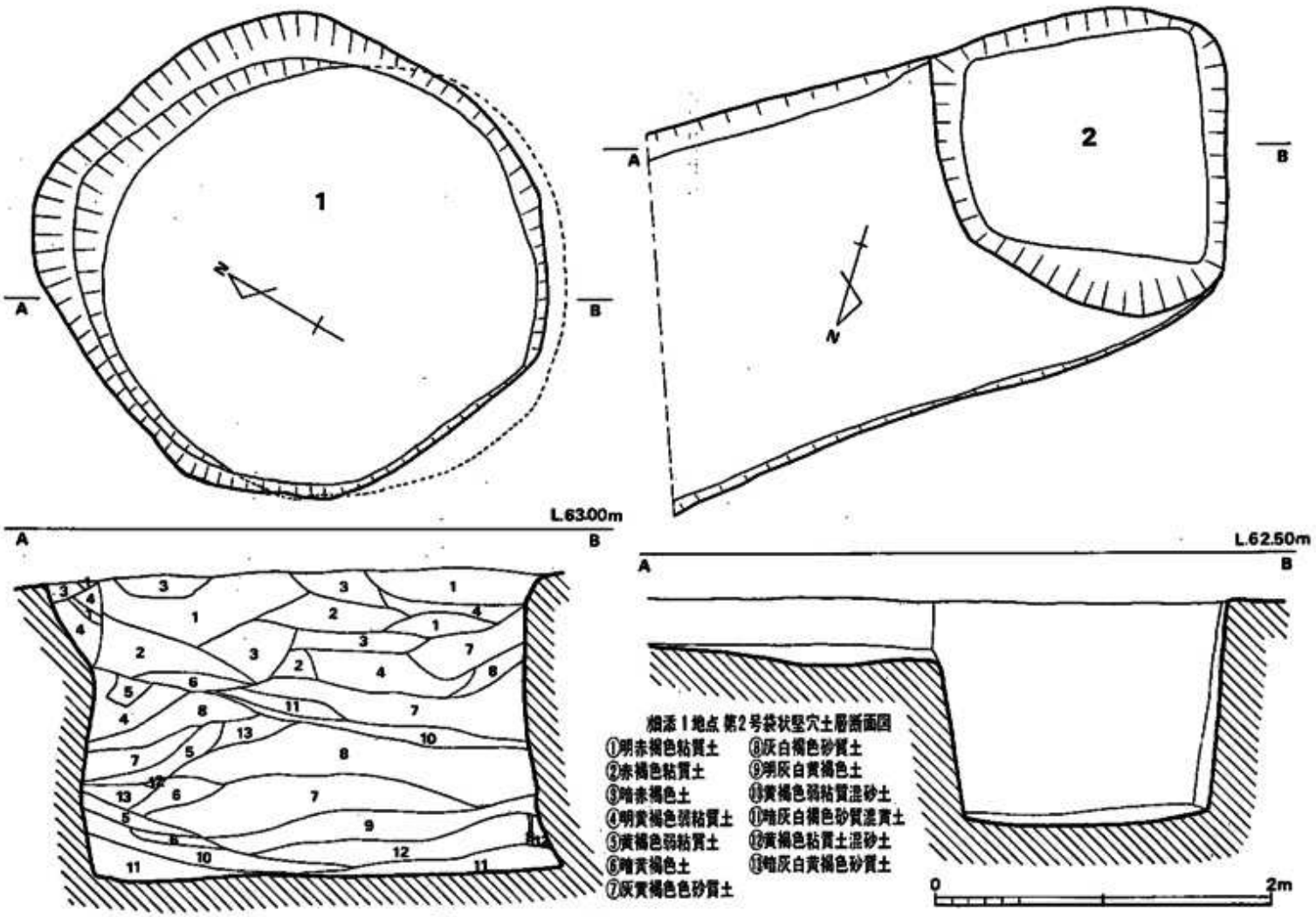


Fig. 46 畑添1地点袋状竪穴実測図① (縮尺1/40)

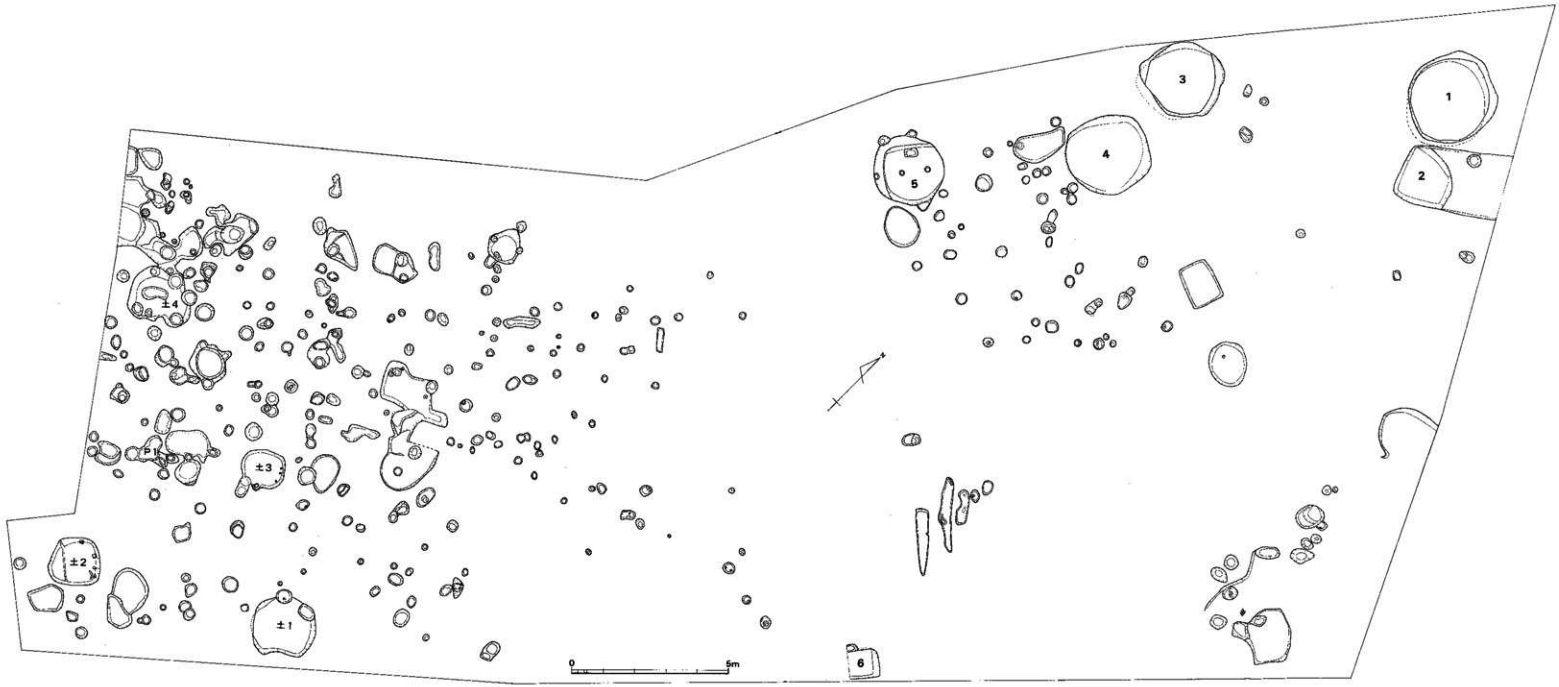
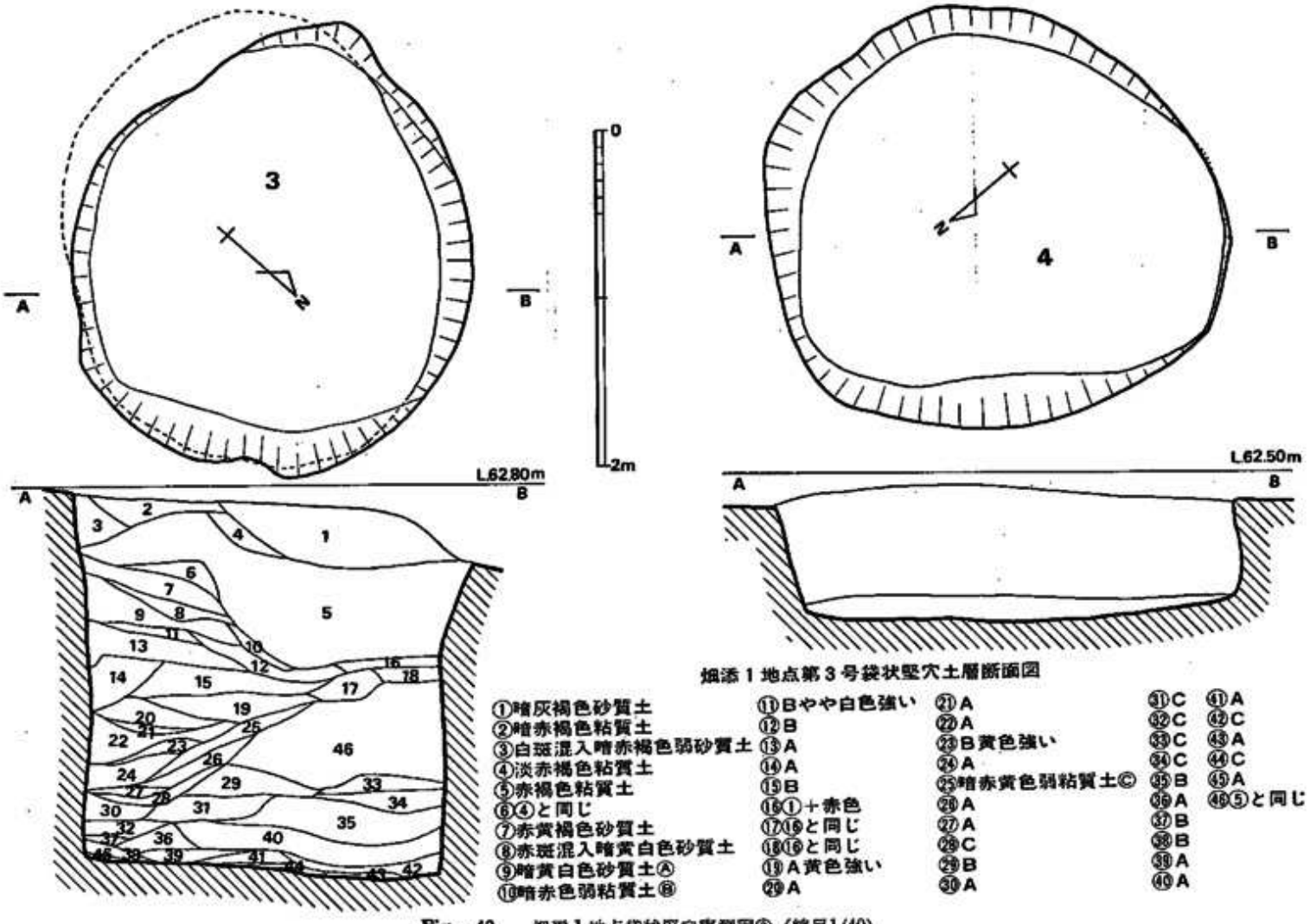


Fig. 47 畑添1地点遺構配置図（縮尺1/100）



畑添1地点第3号袋状竪穴土層断面図

①暗灰褐色砂質土
②暗赤褐色粘質土
③白斑混入暗赤褐色弱砂質土
④淡赤褐色粘質土
⑤赤褐色粘質土
⑥④と同じ
⑦赤黄褐色砂質土
⑧赤斑混入暗黄白色砂質土
⑨暗黄白色砂質土Ⓐ
⑩暗赤色弱粘質土Ⓑ
⑪Bやや白色強い
⑫B
⑬A
⑭A
⑮B
⑯①＋赤色
⑰⑮と同じ
⑱⑯と同じ
⑲A黄色強い
㉙A
㉑A
㉒A
㉓B黄色強い
㉔A
㉕暗赤黄色弱粘質土Ⓒ
㉖A
㉗A
㉘C
㉙B
㉚A
㉛C
㉜C
㉝C
㉞C
㉟B
㊱A
㊲B
㊳B
㊴A
㊵A
㊶A
㊷C
㊸A
㊹C
㊺A
㊻⑤と同じ

Fig. 48　畑添1地点袋状竪穴実測図③（縮尺1/40）

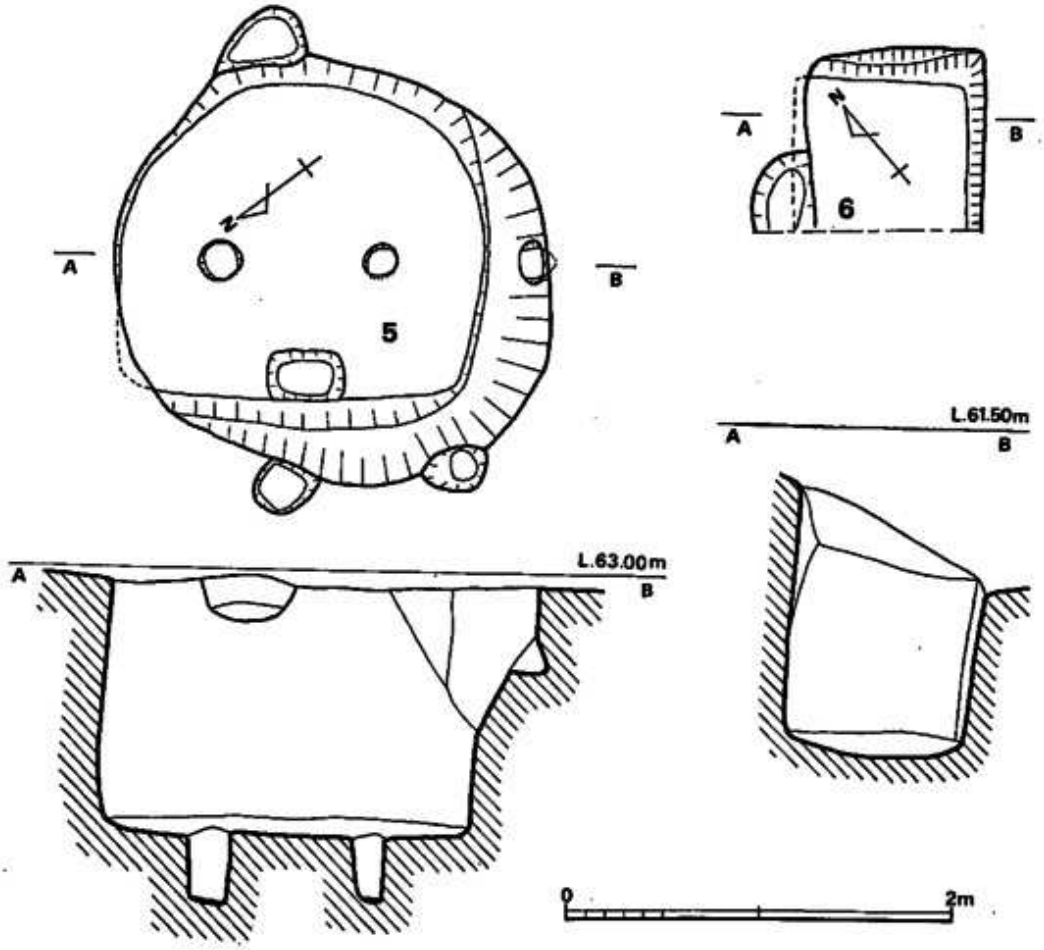


Fig. 49　畑添1地点袋状竪穴実測図③（縮尺1/40）

発掘区の東端部の崖ぎわ斜面からは，後期の手捏ね土器と，石剣未整品が黒色堆積土中より，出土しており，遺構としては，直径50cm大，深さ20cm～60cmのピット群が検出され，1m×1.7mで，深さ10cm～20cmの不整長方形を呈する浅い土壙があり，遺構内からは，弥生時代に属する土器片が出土している。以上の如く，畑添1地点の北部では，弥生時代の中期から後期にかけての遺物を出土しており，遺構としても，これに並行する頃のものであろうかとも思われる。北部のピット群は，まとまらなかった。

弥生式土器（Fig. 50-1～3, 5～19）

壺形土器（3）　3は壺形土器の口縁部と思われる。「く」の字口縁であり，口縁部外面には煤が付着する。焼成は良好である。

甕形土器（1，2）　1，2は甕形土器の口縁部と思われる。ともに「く」の字口縁である。2は口縁部外面に煤が付着する。黄褐色を呈しており，焼成は良い。胎土には多量の石英粒を

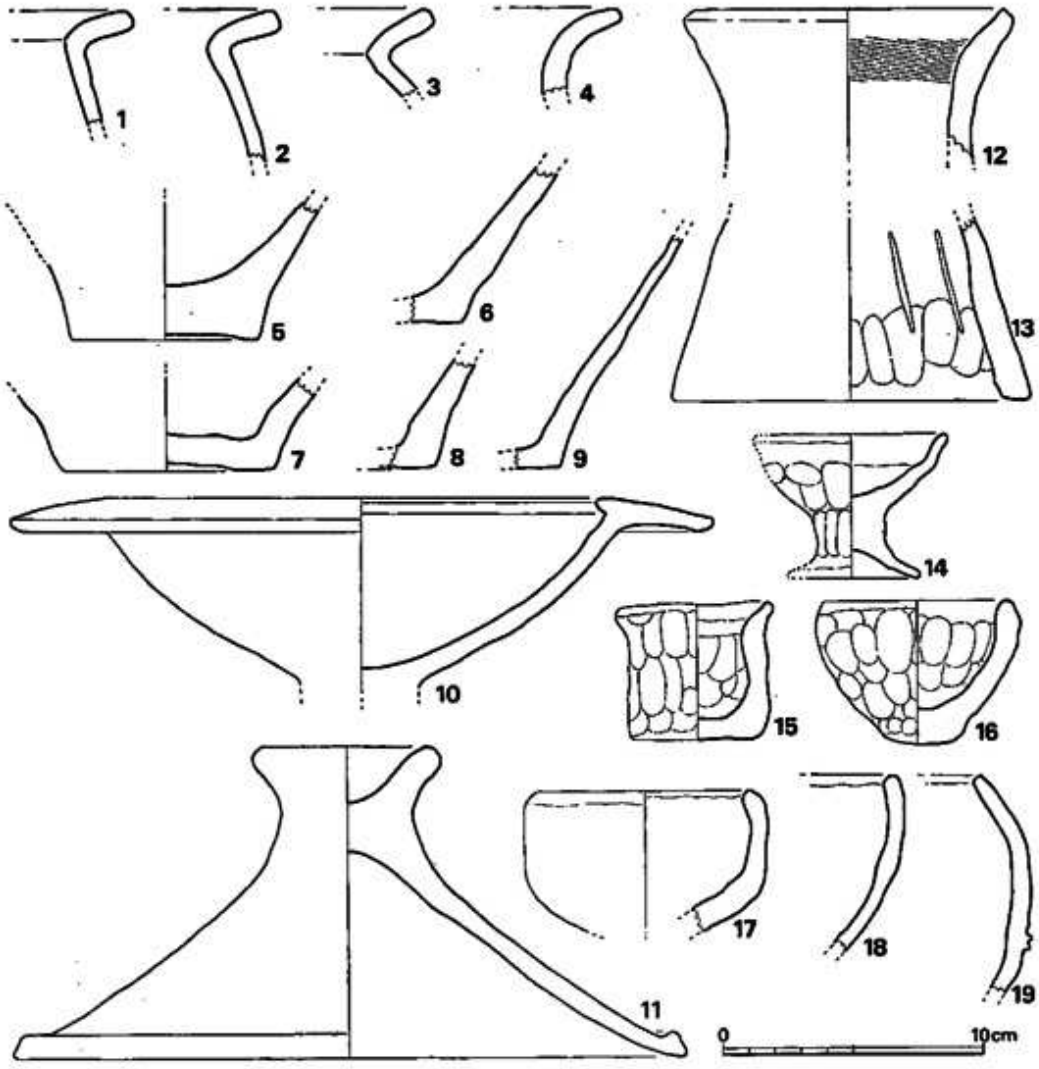


Fig. 50　畑添1地点弥生式土器実測図（縮尺1/3）

含む。底部は，甕形土器の底部と思われる。6は外面に丹塗りを施す。

高杯（10）　杯部を残存するのみである。内外面とも丹塗りである。口唇部は水平面より下る。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。中期に属するものと思われる。

蓋形土器（11）　甕形土器の蓋である。蓋のつまみは外反しており，端部の外面は多少の磨滅もあるが丸味を有する。頂部は内くぼみである。口縁端部は肥厚する。器表は磨滅しており調整法は不明である。ピット内より出土している。暗茶褐色を呈する。中期に属するものと思われる。

器台形土器　12，13はそれぞれ上部と下部であり，同一個体ではない。口縁部は短く外反し

ており，くびれ部は上方にある。口縁内面は刷毛目調整を施す。褐色を呈する。13は明褐色を呈しており，内面下部には指ナデ調整の痕跡がみられ，中位には叩きがみられる。後期に属するものと思われる。

手捏ね土器　14は高杯，15は甕，16は鉢である。14は外面に指頭ナデ痕がみられる。口径7.4cm，器高5.6cm，脚径5cmである。暗黄褐色を呈する。胎土には砂粒を含んでおり，焼きは良い。15は口唇部を除く内外面に指頭ナデ痕がみられる。底部は平底であり，口唇部は細くなり，わずかに外反し端部は丸い。暗茶褐色を呈する。胎土に多量の砂粒を含んでおり，焼成は良好である。口径6cm，器高5.2cm～5.3cm，底部径4.5cm。16は口唇部を除く内外両面に指頭ナデ痕がみられる。底部は丸くなる。口縁部は肥厚して丸い。黄褐色を呈する。胎土に砂粒を含んでおり，焼成は良好である。口径7.2cm，器高5.5cm，底部径3cm。ともに後期に属すると思われる。

鉢形土器　17は底部を欠損する。口縁部は内傾する。全面はナデ調整である。黄褐色を呈する。胎土には砂粒を多量に含み，焼成は良好である。口径は8.3cmである。18はやや細手づくりである。口縁部は，胴部より丸く内湾し，端部は丸くつくられる。外面の中位以下には細い刷毛目調整をする。以上は後期に属するものと思われる。19は，胴部に一条の凹状突帯を有する。口縁部は著しく内湾し，端部は平坦面を有する。外面には丹塗りをする。胎土には細砂粒を含んでおり，焼成は良好である。中期に属するものと思われる。

石器（Fig. 51, 52. PL. 37）

石斧（Fig. 51）蛇紋岩製の磨製石斧である。上下両面に平坦面を有しており，両面使用の石斧であろう。南半部の第1ピット内より出土した。

石剣未製品（Fig. 52）北東端部の黒色土層より出土している。いずれも未製品であり，石質は粘板岩である。他に，石屑も出土しており，石器を製作していた可能性もあるが，遺構は，定かでない。

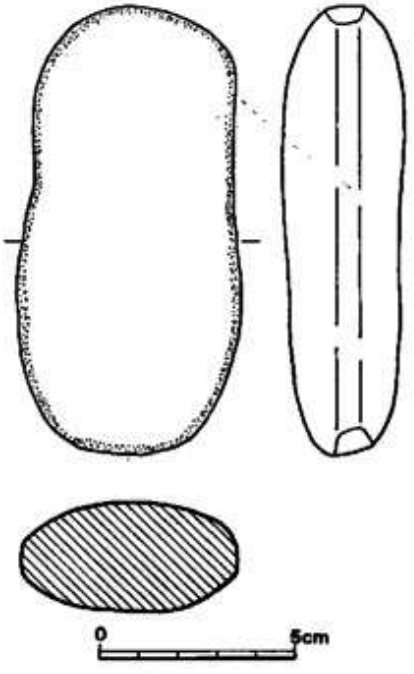


Fig. 51　畑都1地点石斧実測図（縮尺1/2）

古墳時代の遺物

須恵器（Fig. 54-20, 21）　20は壺の口縁部である。耕作土中より出土した。暗小豆色を呈する。胎土に小砂粒を含み，焼成は良好である。21は坩の底部と思われる。南斜面寄りの堆積土中より出土した。暗灰色を呈する。胎土に小砂粒を含み，焼成は良好である。

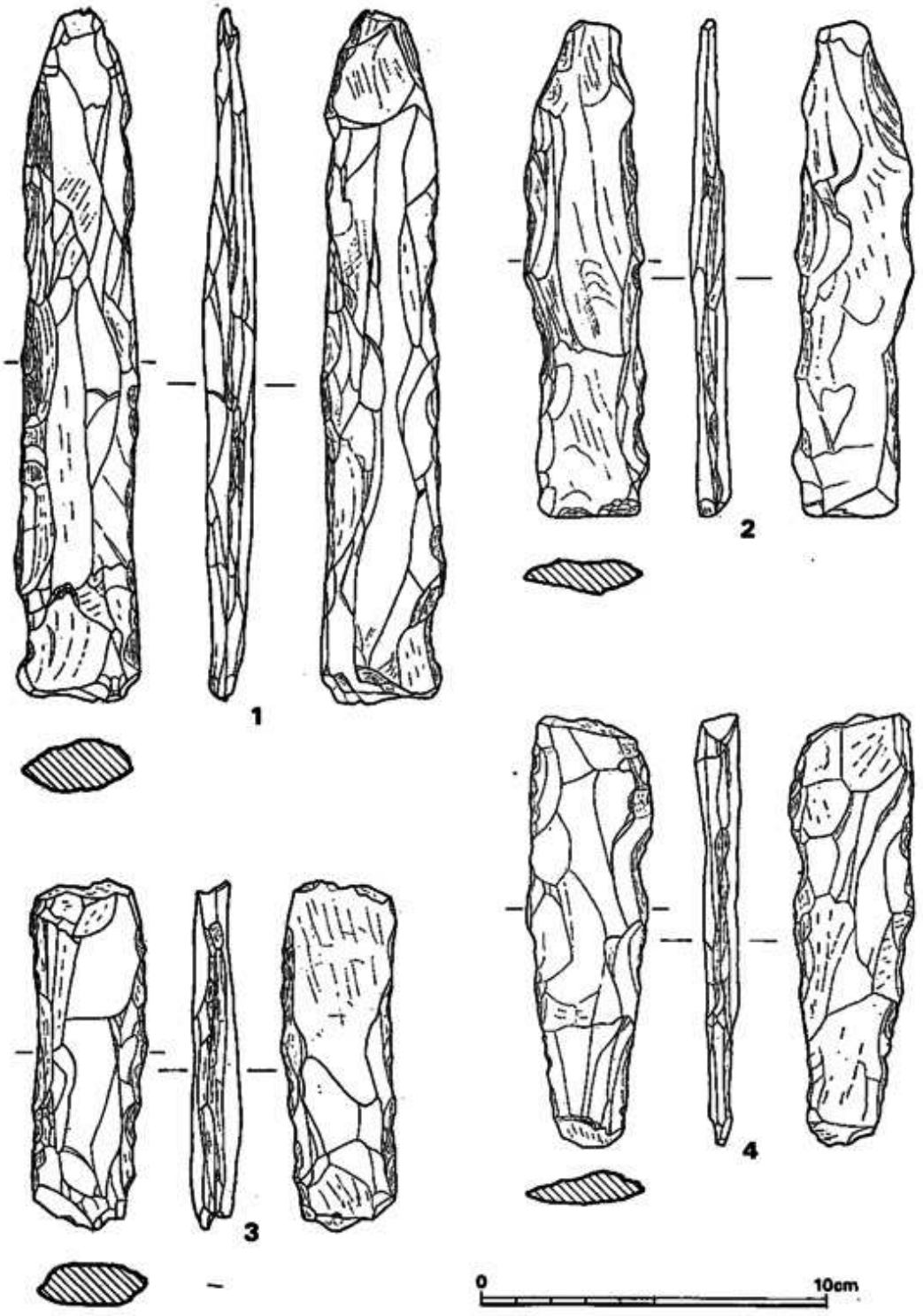


Fig. 52 畑添1地点石剣未製品実測図（縮尺1/2）

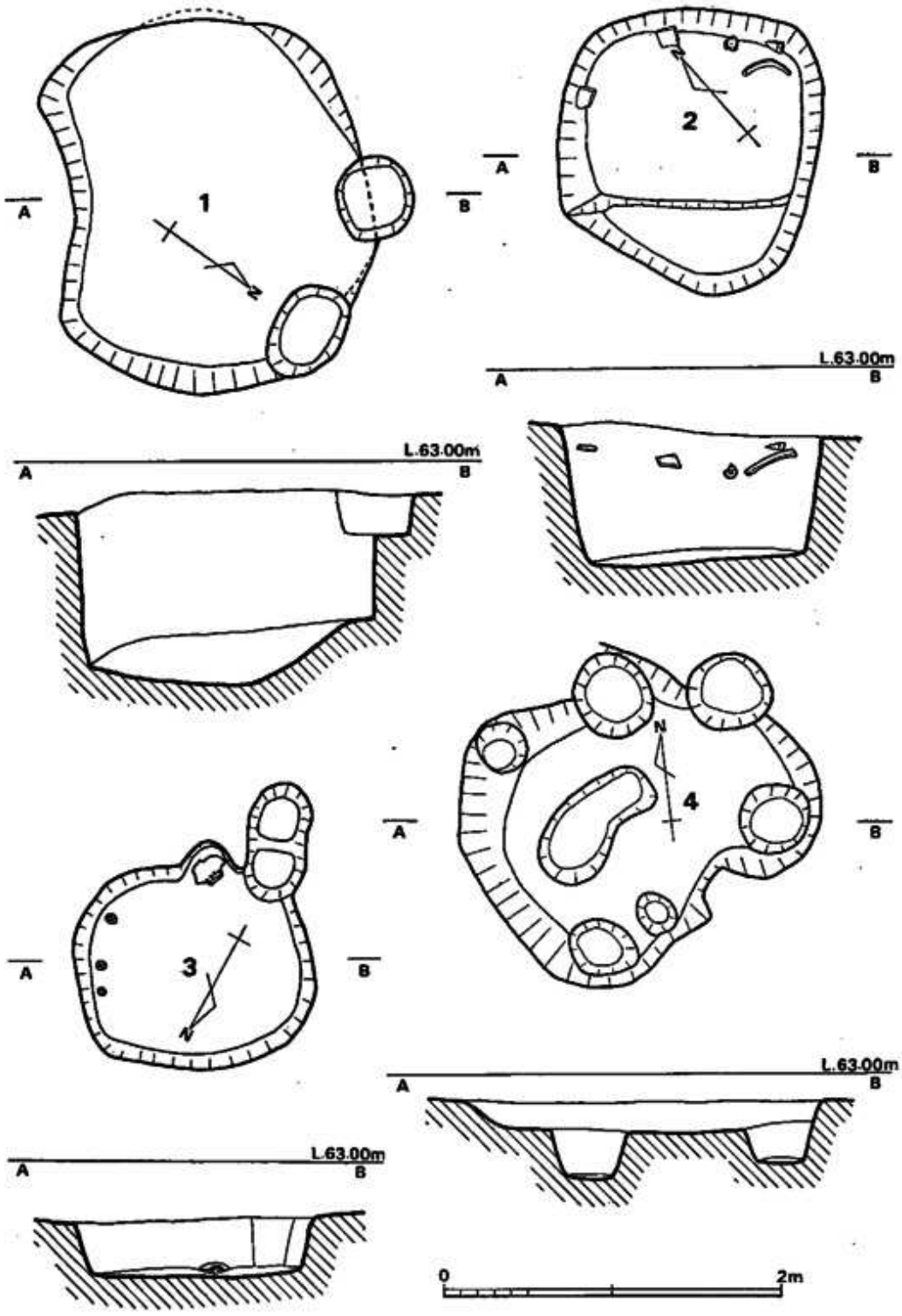


Fig. 53　畑添1地点土壙実測図（縮尺1/40）

中世の遺構と遺物

調査地点の南半部からは多数のピット群と，隅丸方形，不整円形，楕円形など様々の形状を呈する土壙がある。ピットは平面形は円形を呈するものが多いが，楕円形や，不整円形のものもあり，その大きさは10cmから1mを越すものと多様で，深さも15cmから60cmと様々である。ピットの性格としては，柱穴，杭，柵列などが考えられるが，個々の区別ははっきりしていない。ピット1からは石斧が1点，ピット2からは土師器と擂鉢の底部が出土している。土壙としたものは前述した如く，形状は様々であり，大きさも1.8m×2m，深さ70cmのものや，1.1m×1.4m，深さ30cmと多様である。

第1号土壙（Fig. 53-1）　上辺径1.8m×2m，底辺径1.7m×1.9m，深さ70cmで不整円形を呈する。2つのピットがこの土壙を切る。壁面は袋状を呈しており，床面は水平でない。なお，土壙内からの遺物の出土は皆無である。

第2号土壙（Fig. 53-2）　隅丸方形を呈する。上辺長1.5m×16m，底辺は中段がついて二段になり，下部の底辺は，隅丸長方形となり，長さは1m×1.3mである。土壙内のやや上方より，鉄鏃と室町時代頃のものと思われる擂鉢が出土した。壁面は直線的に外方へひろがる。

第3号土壙（Fig. 53-3, PL. 35）　隅丸方形に近い形である。上辺長1.1m×1.4m，底辺長1m×1.2m，深さ30cmである。壁の一部は小円形状に突出し，床面に接して三つ巴のスタンプの入る壺が出土している。床面には小ピットが3個あり，いずれも5cm程の深さである。畑添1地点の南半部からは，室町時代に属すると思われる遺物が，遺構内，表土中より出土しており，同時期に比定される遺構の存在が考えられる。

土師器（Fig. 54-22～25）　25は小皿である。底部には糸切り痕がついているが，磨滅しているので明瞭でない。口径6.7cm，器高1.3cmである。褐色を呈し，胎土に細砂粒を含む。22～24は杯である。23，24は糸切り痕がつくが，24は磨滅が著しく明瞭でない。23は第2号土壙内より，24は第2ピットより出土した。22は堆積土中より出土した。胎土に小砂粒を含み，焼成は良好である。灰茶褐色を呈する。口径11.3cm，器高3cmである。

磁器（Fig. 54-26, 27）　26は皿と思われる。白磁であり，底径は4.2cmである。27は椀の底部である。高台はいわゆる削り出し高台である。胎土は乳白色を呈し，釉はない。底径4.1cmである。

日用雑器類（Fig. 54-28～32）　28，29は壺であり，28は頸部下外面には，三つ巴のスタンプを付している。内面には横方向に刷毛目が入り，灰黄褐色を呈している。胎土に細粒を含んでおり，焼成は良好である。第3号土壙内床面より出土している。30，31，32は，擂鉢である。ともに土師質であるが焼きが硬い。30ではまず櫛で横方向に溝をつくり，その後，縦方向

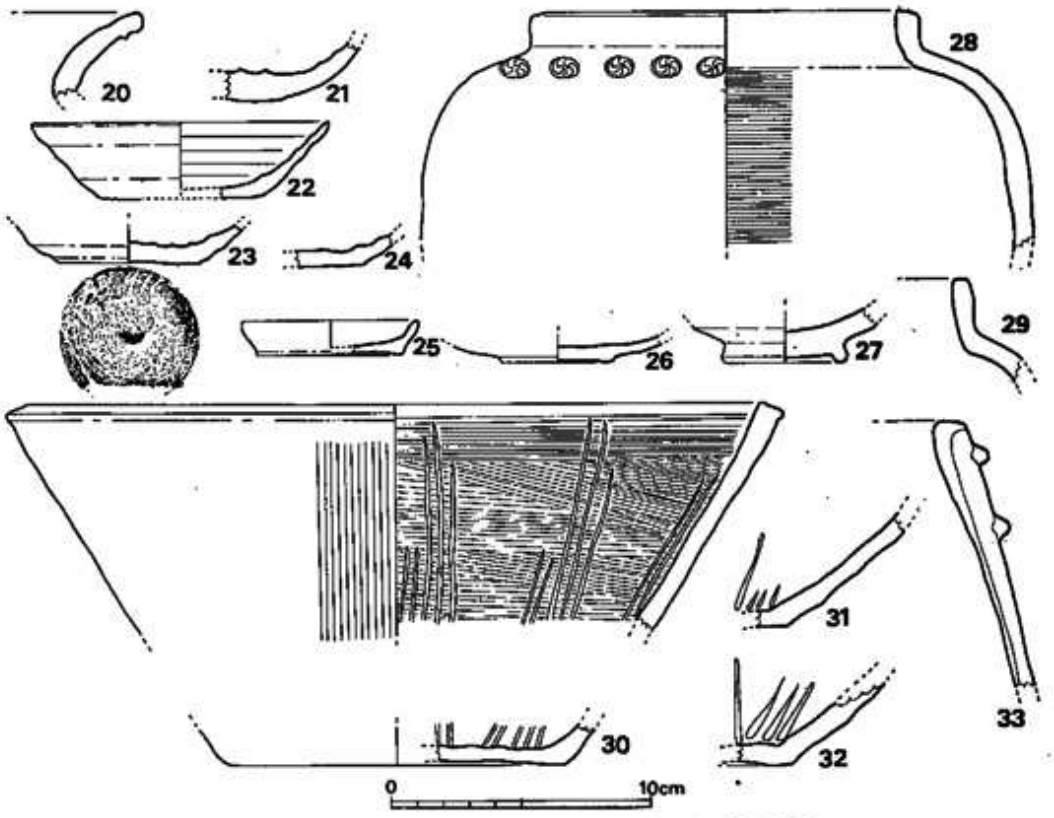


Fig. 54　畑添1地点須恵器，土師器他実測図（縮尺1/3）

には篦で溝をつけている。外面には縦方向に刷毛目が入る。胎土に細粒を含んでおり，暗茶褐色を呈する。口径は30cm，器高は14cm前後と思われる。底径は13cmである。第2号土壙内より出土している。31は第2ピット内より出土した。33は火舎である。色調は暗灰色を呈するが，焼きは甘い。突帯のつく位置は，あらかじめ，小さくえぐって接合を良くしている。下部の突帯下は篦磨きしている。耕作土中よりの出土である。以上の雑器類は，室町時代頃のものであろう。

3　小　　結

畑添1地点は，山の口遺跡の北西方100m弱にあって，標高といい，地形といい，非常に，にかよった立地をなす。丘陵鞍部の上面は平坦にしており，両側の丘陵端部は，堆積土層であり，弥生時代の遺物を多く包含する。土層は中央部付近は，30cmほどの耕作土層を取り除くと，すぐに地山となる。地山は，北方では花崗岩バイラン土であり，南方は，やや粘質を帯び

る。遺構は地山面で検出されており，弥生時代と中世の遺構を確認した。弥生時代の遺構は，丘陵北半部に集中しており，袋状竪穴を6基検出した。形状は，円形と方形のものであり，口径は，いずれも2m前後であり，深さは1.3m～2.15mである。東端部には，ピット群があり，中には，深さ70cmほどの深いものがある。ピット間の平坦面の黒色土層から石屑と共に石剣の未製品が一括出土しており，さらに周辺部のピット内からは弥生式土器を出土しているので，弥生の遺構が存在したと考えられる。しかし住居跡と想定されそうな壁面はないが，あるいは削平されて，柱穴だけが残ったものであろうか。しかし，これだけでは柱穴としては成り立たないようだ。いずれにしても，石剣未製品と石屑が一括出土している事実は，石剣製造の場とも考えられるが，石屑は一箇所にまとまって存在しただけで，周辺に散在していないので，これだけではどちらとも言えない。また石材の問題があり，石剣未製品の石材は粘板岩であるが，この周辺には，花崗岩は露頭しているが，粘板岩の原石は産しないのであり，製造跡と考えると原石の供給地も問題となる。ここでは，石剣未製品と石屑が一括出土していると記述しておくだけにとどめる。南半部は，多数のピットと土壙が出土しており，土壙内からは，室町時代の頃と思われる遺物を検出しており，遺構は，建て物として，まとめるのは困難であるが，同時代のものが存在していたものと思われる。

（川述昭人）

畑添1地点

PLATES

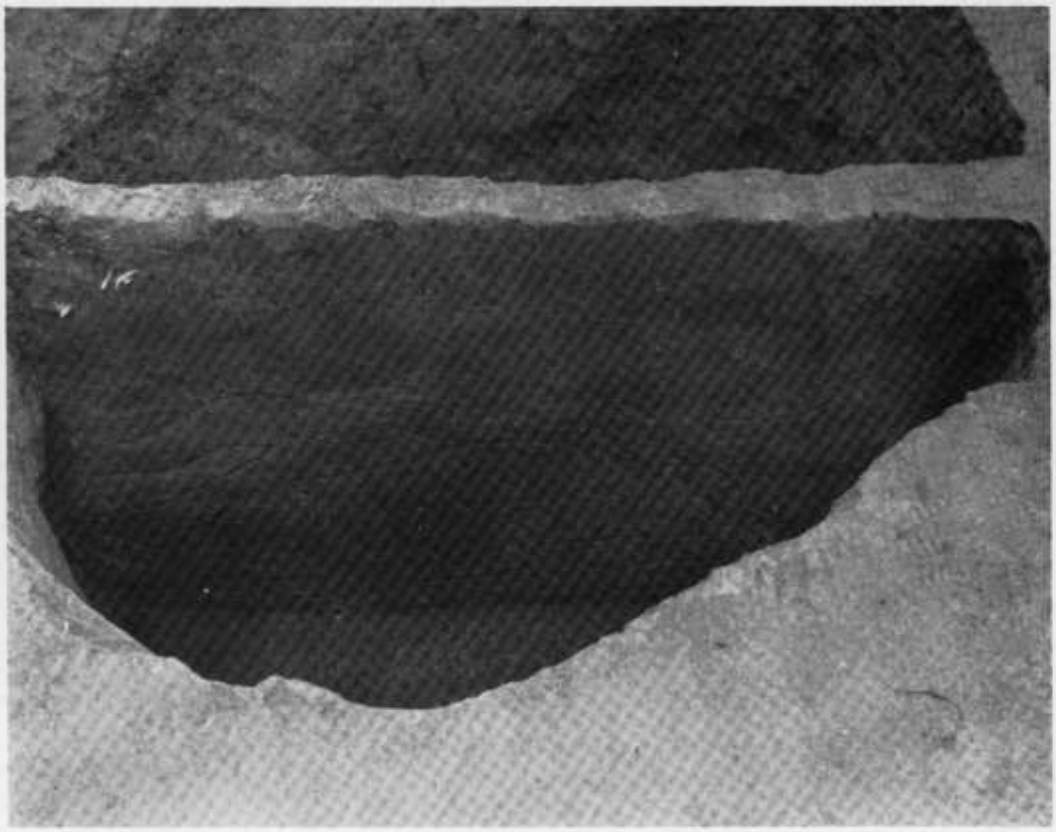
(1) 畑添1地点　遠景　(東から)

(2) 畑添1地点　北半部遺構　(南から)

期終1地点　面半部全景　(ゴム面)

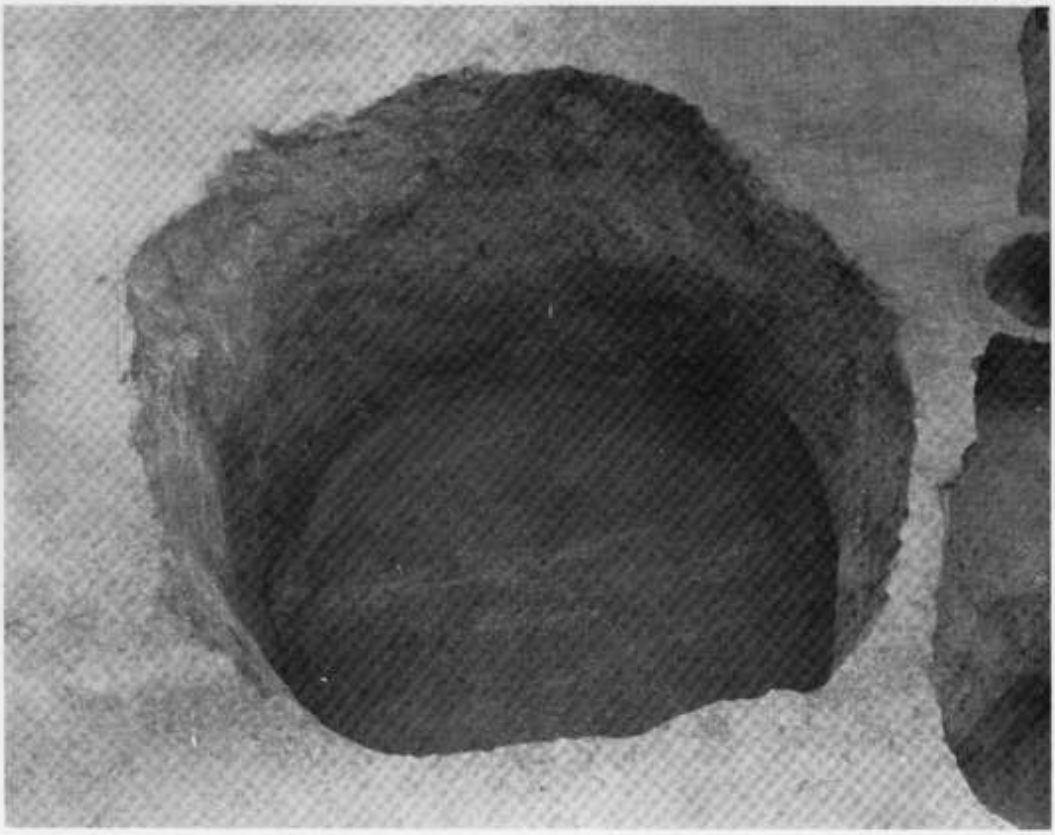
(1) 畑添1地点　遺構全景（南から）

(2) 畑添1地点　第1号袋状竪穴



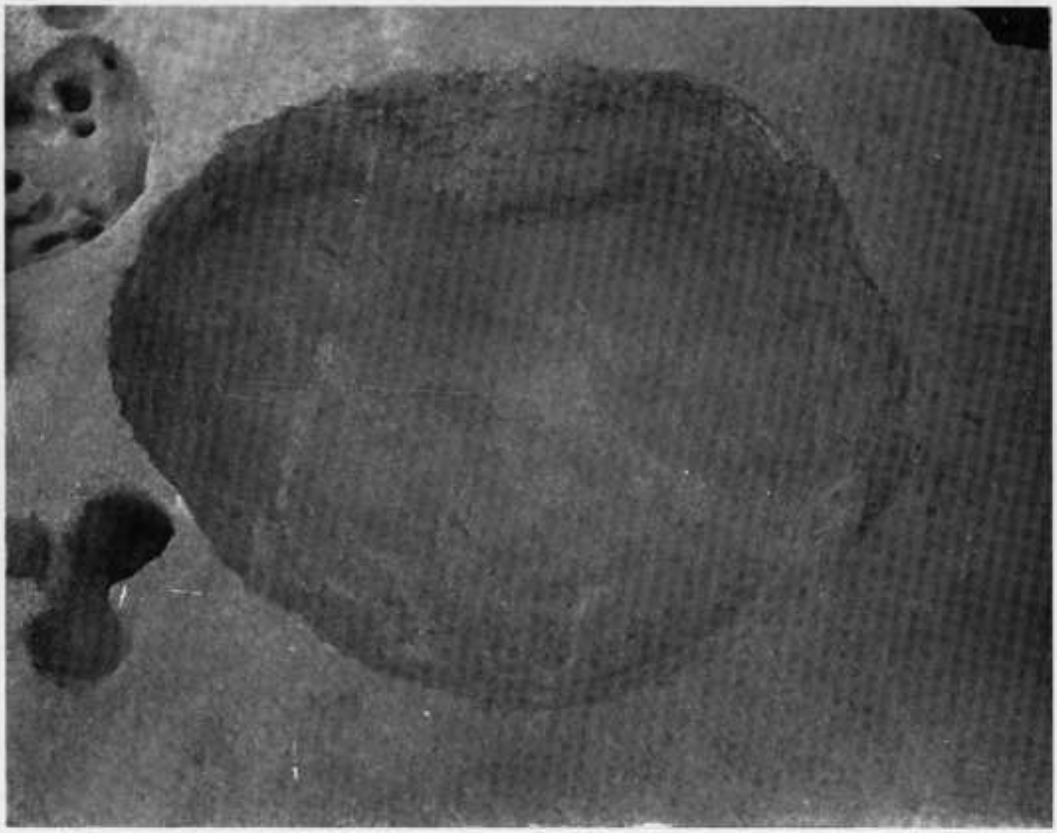
（1） 畑添1地点　第2号袋状竪穴土層断面

（2） 畑添1地点　第6号袋状竪穴土層断面

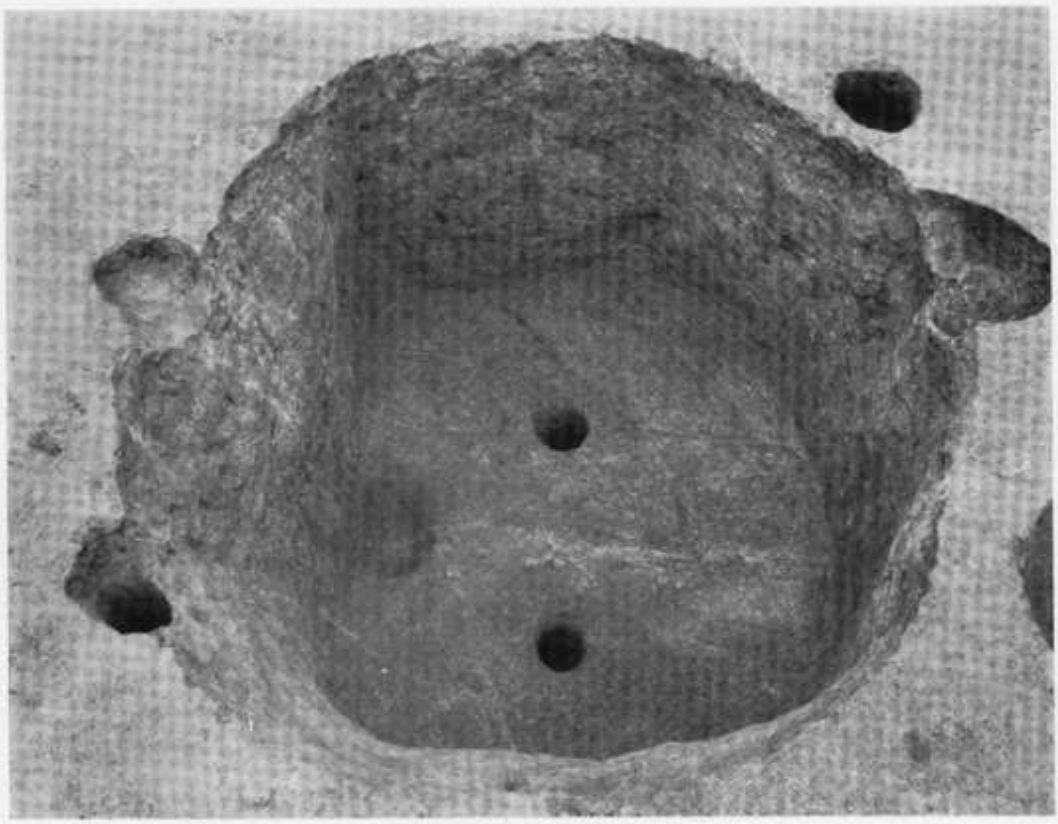


（1） 畑添1地点　第2号袋状竪穴

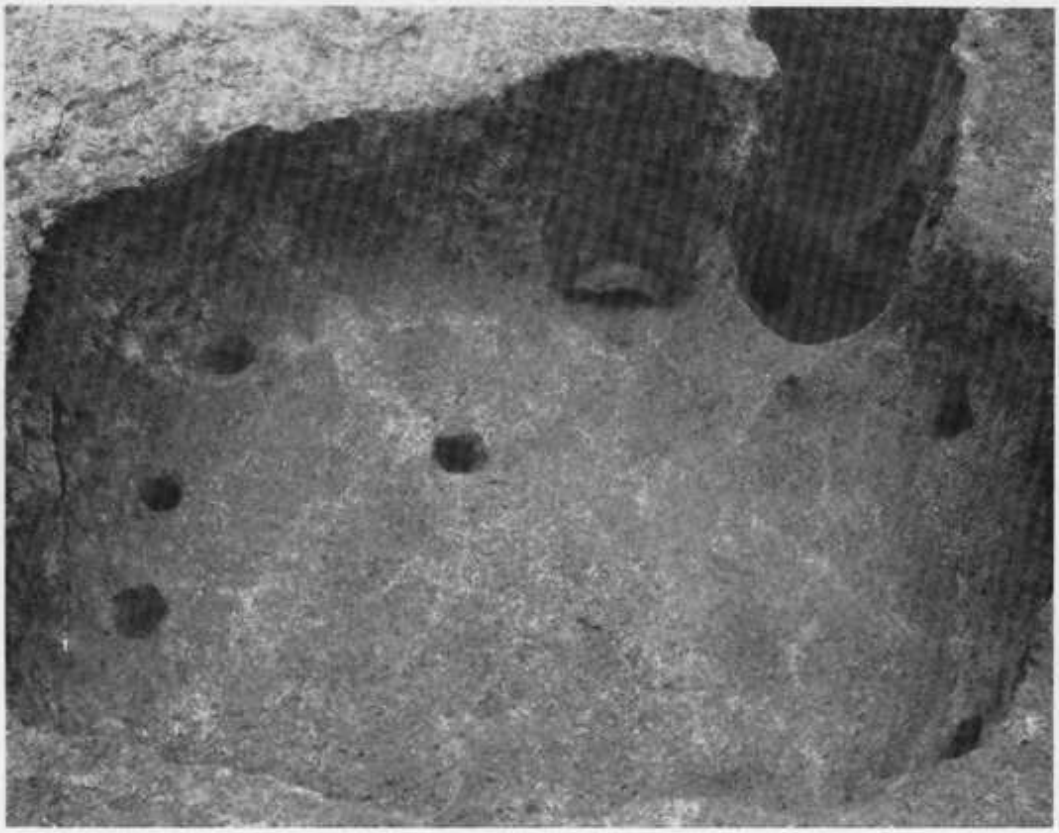
（2） 畑添1地点　第3号袋状竪穴



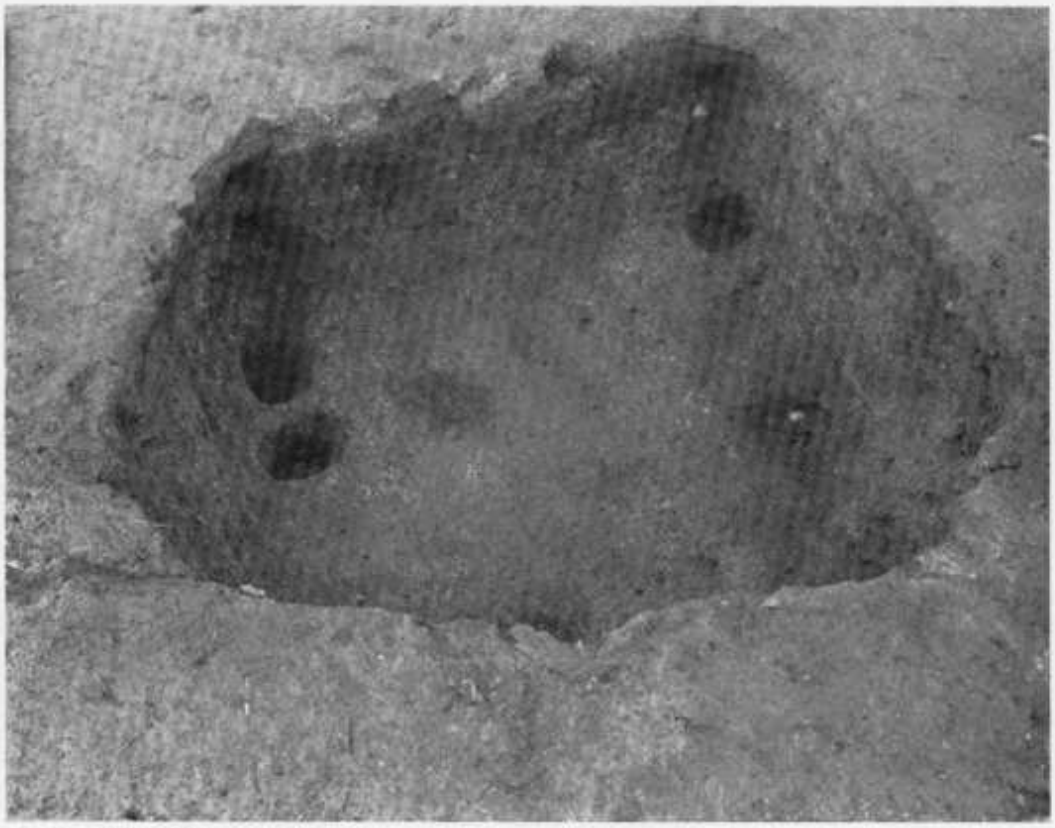
（1） 畑添1地点　第4号袋状竪穴



（2） 畑添1地点　第5号袋状竪穴

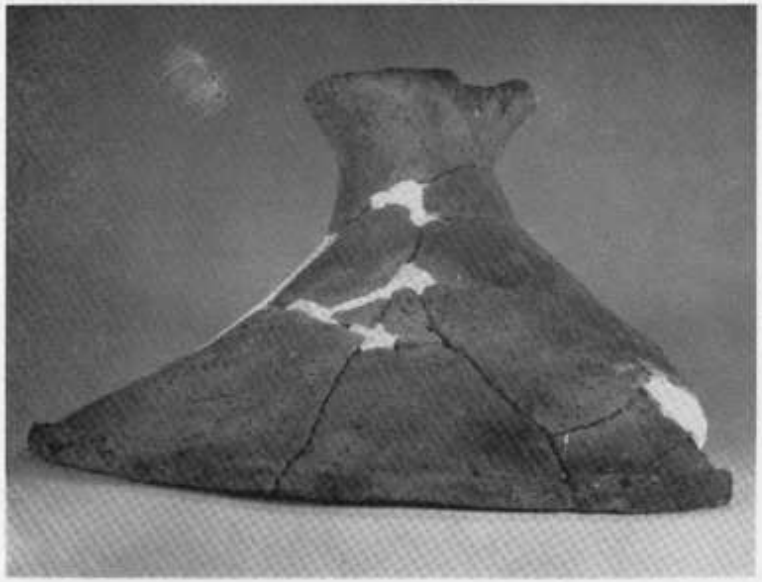


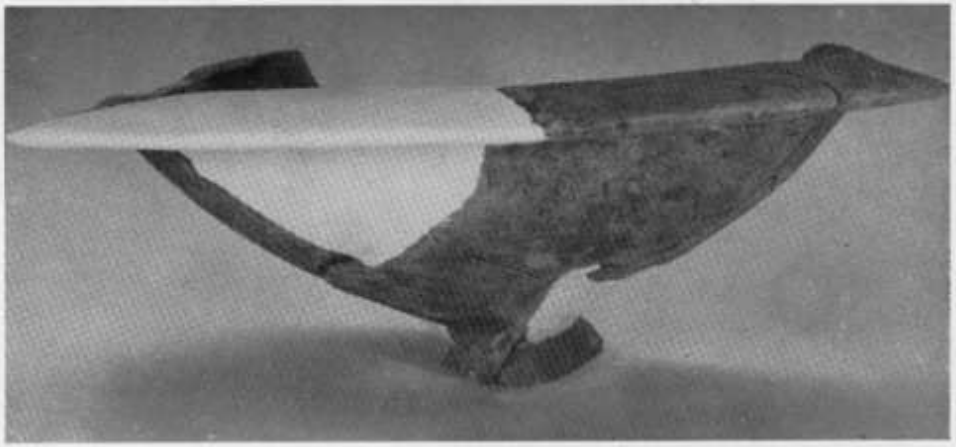
（1） 畑添1地点　第3号土壙

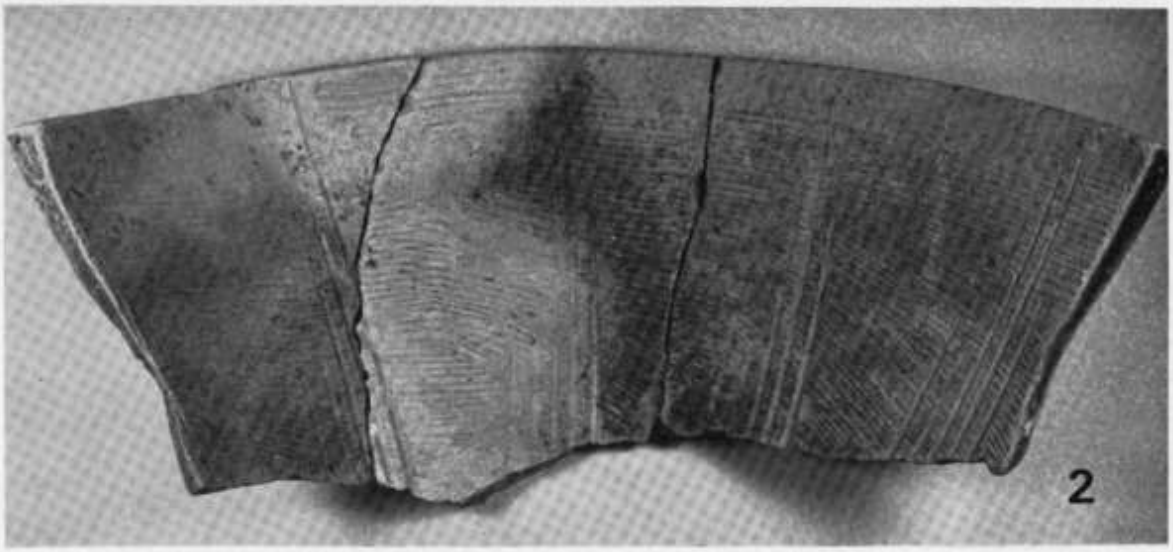


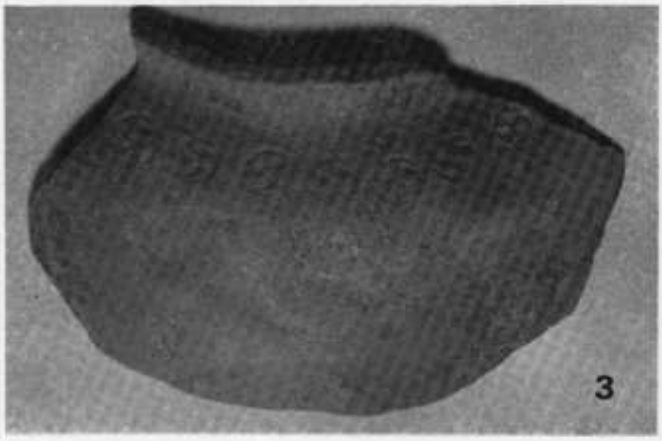
（2） 畑添1地点　第5号土壙

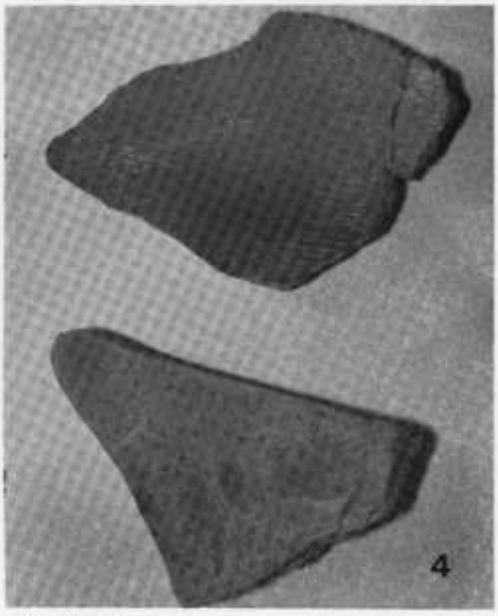
畑添1地点　弥生式土器



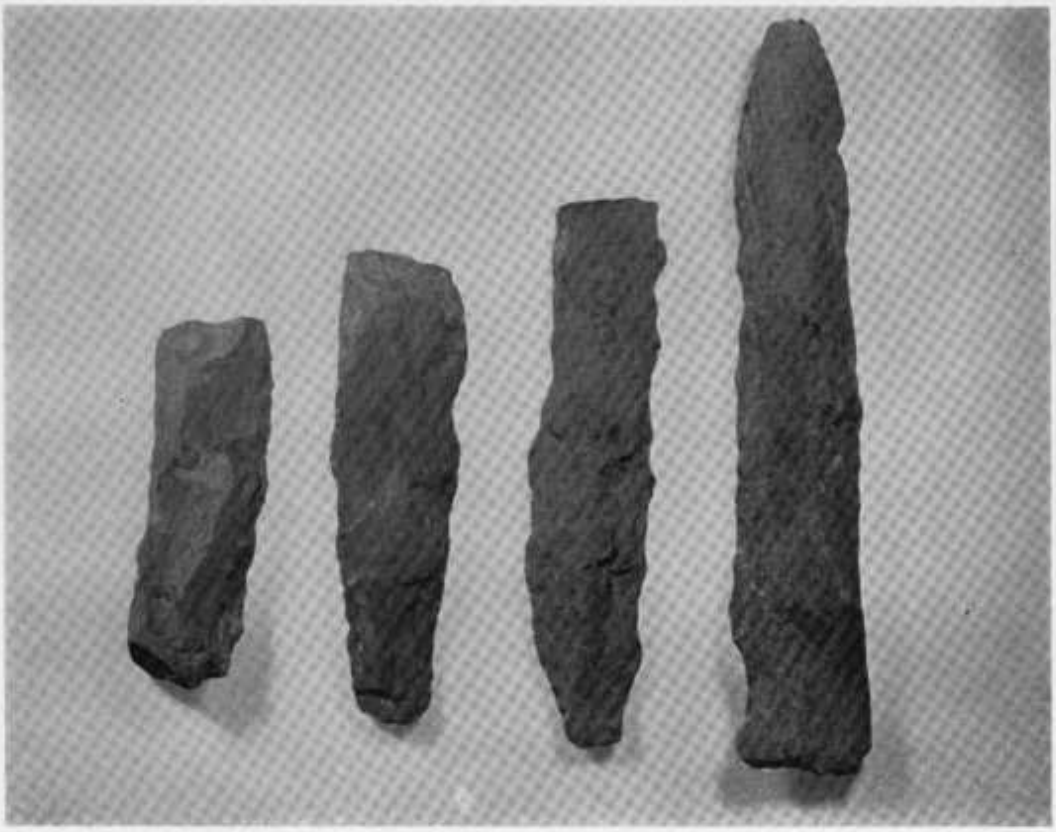








畑添1地点　日常雑器　(1・2は第2号土壙，3は3号土壙)



(1) 畑添1地点　石剣未製品

(2) 畑添1地点　石斧

Ⅶ 畑 添 2 地 点

筑紫野市所在古墳時代住居跡の調査

Ⅶ 畑添2地点の調査

1 調査の経過

畑添2地点の調査は，1974（昭和49）年1月7日から3月31日まで実施した。調査団は下記のとおりである。また，作業員として古賀，武蔵，萩原，山口の人達の協力を得た。

調査担当者	福岡県教育庁文化課	技師	川述昭人
調査補助員			川述公紀
庶務担当者	福岡県教育庁文化課	主事	瀧　龍二
		嘱託	因　将太

以下に，調査日誌によって経過をたどってみよう。

1月7日（月）　晴。本日より調査を開始する。まず草木の伐採や取りかたづけを行う。平板測量用の杭うちをする。公団 BM から絶対高をひく。

1月8日（火）　晴。伐採と取りかたづけを続行する。近景と遠景写真撮影。平板による地形測量を縮尺1/100で開始する。

1月9日（水）　晴。縦貫道本線工事に先だつ側道仮設のため，第3区より調査を開始する。本日は人数が少いため，第1トレンチだけを発掘する。

1月10日（木）　地形測量を続行する。第1トレンチで石組みの遺構を検出する。

1月11日（金）　晴。第1トレンチは石組み遺構の性格をつかむため幅を広げる。地形測量は終了する。

1月12日（土）　晴。第1トレンチの地山は下降を続ける。石組み上層は砂土の堆積層である。第1トレンチは平板ポイント1まで延長する。

1月14日（月）　晴。第1トレンチを東側端部のＰ3まで続ける。有段の丘陵であるため，上段を1区，中段を2区，下段を3区とし，3区では斜面部分を全面発掘して石組み遺構を追求する。

1月15日（火）　晴。3区の発掘を続行する。

1月16日（水）　晴。第1トレンチは地表よりかなり深く掘る必要があるため，ユンボを入れる。2区には第1トレンチと直交する第2トレンチを設定する。第2トレンチで石組みが出るが，かなり二次的に移動しており，原位置はとどめでないようだ。

1月17日（木）　晴。第1トレンチは1区のＰ4まで延長する。1区は南西部の表土剝ぎを行う。3区は引き続き斜面の調査を行う。

1月18日（金）　曇。１区南西部を発掘する。南側からは耕作土下に灰黒色土層があり，弥生式土器と須恵器が混ざって出る。中央部には丸味をもつ大石が数個検出されるがまだ性格はわからない。側道となるため急を要する第１トレンチ東側（３区）の土層断面図をとる。

1月19日（土）　晴。１区は西北部の表土剝ぎ作業を行い，20cm程で黄褐色土に到る。第３区は斜面の下方は堆積層が厚いためユンボを導入する。

1月21日（月）　雨。雨のため作業を中止して報告書作製のための室内作業を行う。

1月22日（火）　曇。１区の西南部は茶褐色面を清掃して遺構の検出をはかる。西北部は西端にトレンチを入れ土層を観察する。２区は南半部の茶褐色上層面の堆積土を剝ぐ。

1月23日（水）　晴。１区は東南部の灰黒色土を除き茶褐色土遺構面を検出する。ベルコンを１区へ搬入する。

1月24日（木）　曇。１区は東北部を黄褐色土層まで下げる。西南部崖側は灰黒色土層を除去する。

1月25日（金）　晴。１区は東北部で黄褐色土層を追求する。

1月26日（土）　晴。前日と同様，黄褐色土層を追求する。

1月28日（月）　晴。１区は東北部，東斜面で遺構を追求する。

1月29日（火）　曇。１区は前日と同様の作業を行い，２区は北側で黄褐色土層で遺構を追求する。

1月30日（水）　晴。１区はあらたに南北トレンチの北側がけ寄りを地山面まで下げて，土層を観察するが，盛り土を行っているようである。２区は北側で黄褐色盛り土を追求する。

1月31日（木）　晴。１区は昨日のトレンチ設定の結果，がけ寄りにわずかに盛り土が残存していることがわかったため，がけ寄りの表土を剝ぎ盛り土を出す。

2月１日（金）　晴。１区は前日と同様に盛り土層を追求する。２区は黄褐色地山を追求して遺構の検出をはかる。

2月２日（土）　晴。１区，２区とも前日と同様の作業を行う。１区では盛り土部分はくずれているため残存状態は不良である。丸味のある人頭大もしくはそれ以上の石を主に用いてつき固めているようだ。

2月４日（月）　晴。１区は東北部で盛り土を追求する。２区は南部と北部で黄褐色地山を追求する。

2月５日（火）　雨。雨のため作業を中止し，報告書作製のための室内作業を行う。

2月６日（水）　曇のち晴。雨は止んだが足元がベトついて作業に支障があるため中止する。

2月７日（木）　曇。１区は東北部の表土剝ぎ作業を行って遺構を追求する。２区は地山面での遺構の有無を確かめる。

2月８日（金）　晴。新たに２区では第１トレンチの両側を発掘する。南斜面部の堆積土除去作業を行う。

2月９日（土）　雪。２区，３区の南斜面を発掘して石組みと盛り土の全貌を追求する。２区では第１トレンチ北側部で遺構掘りを行う。

2月11日（月）　曇時々小雪。第３区の南斜面部を発掘する。正午にヘリコプターによる写真撮影を行う。

2月12日（火） 晴。第1トレンチの第1区10mから22m間の土層断面図をとる。1区西南部のがけ寄り部分の厚い堆積土の除去作業をする。第3区は南斜面の堆積土の除去作業をする。

2月13日（水） 晴。第3区東斜面の発掘を行う。第1トレンチは0mから10mまでと，22m以上の土層断面図を作製する。

2月14日（木） 晴。第3区東斜面を発掘する。午後からは第1トレンチのセクションベルトを除去する。第2区，3区の土層断面図をとる。

2月15日（金） 曇のち雨。第1区の南北トレンチの土層断面図を作製し，セクションベルトを除去する。第2区の第1トレンチのセクションベルトを昨日に続いて除去する。第1区は遺構面を清掃して，遺構のプランを検出する。

2月16日（土） 晴。第1区は東部から遺構掘りを開始する。溝とピットである。1号住居跡の遺構掘りをする。4.5m×4.3mの長方形を呈する。

2月18日（月） 晴。1号住居跡は遺構掘りを続行する。住居跡は北側の壁の中央部にカマドをもつ。住居跡内からは須恵器が出土する。1区東部の遺構掘りを続行する。2号住居跡遺構掘りを開始する。

2月19日（火） 曇のち雨。1号，2号住居跡は遺構掘りを続行し，新たに3号，4号住居跡の遺構掘りを開始する。いずれも3.5mを測る方形の住居跡である。2号住居跡に墓壙を一部切られた小児甕棺1基を検出する。

2月20日（水） 晴。3号，4号住居跡の遺構掘りを終る。2区と3区のセクションベルトの除去作業を行う。

2月21日（木） 晴。5号，6号住居跡遺構掘り。6号住居跡内からは7世紀代の須恵器を検出する。

2月22日（金） 晴。5号，6号住居跡遺構掘り。5号住居跡からは柱穴と思われるピットが2個検出される。7号，8号住居跡はプランを確認して，遺構掘りを開始する。小児甕棺の写真撮影を行う。

2月23日（土） 雨。小雨の中，発掘作業を進める。6号住居跡の遺構掘りを続行する。2区では溝状遺構を発掘する。

2月25日（月） 曇。7号，8号住居跡遺構掘り。7号住居跡は弥生式土器片を検出する。2区は溝状遺構の発掘。周辺部をわずかに削ってプランを追求する。

2月26日（火） 曇。8号住居跡の遺構掘りを行い弥生式土器片を多数検出する。2区は昨日に続いて遺構掘りを行う。

2月27日（水） 雪。雪の中，調査を進める。雪のため住居跡内の調査ができないので，2区の平坦部でプランを追求して遺構掘りをするが中・小のピットが多い。

2月28日（木） 晴。3号住居跡内の土層断面図を作製する。8号住居跡の遺構掘りを続行する。8号住居跡の東上部には配石遺構があり西端は整っている。

3月1日（金） 晴。8号住居跡の遺構掘りを続行し，床面を一部検出する。住居跡内中央部の床上面に炭化物がある。1号住居跡内の土層断面図を作製する。2区平坦部の遺構の掘り残しを

調査する。1区は，全体清掃と掘り残しを調査する。

3月2日（土）　晴。8号住居跡遺構掘りを続行。住居跡内より須恵器を検出する。3号，4号住居跡内の土層断面の写真撮影を行う。2区平坦部と斜面部の調査を行う。

3月3日（日）　曇のち小雨。3号住居跡のセクションベルトを取り除く。4号，5号住居跡の土層断面図を作製して，セクションベルトを取り除く。8号住居跡は遺構掘りを続行。

3月4日（月）　晴時々曇。1，3，4，5号住居跡の清掃をして写真撮影を行う。8号住居跡は遺構掘りを続ける。写真撮影にそなえて配石遺構の清掃を行う。1区の全体清掃をあわせて行う。

3月5日（火）　雨。3区は排土除去作業と斜面遺構の清掃をする。

3月6日（水）　曇時々雨。2区と3区の清掃と補足調査を行う。

3月7日（木）　曇のち雨。2号，6号住居跡の写真撮影を行う。2区は平坦部の清掃をする。

3月8日（金）　晴。清掃後写真撮影を実施する。

3月9日（土）　曇のち小雨。写真撮影を終了する。午後より器材の撤収をする。

3月10日（日）　晴。第1区より割りつけを開始する。

3月11日（月）　晴。割りつけを続行する。

3月12日（火）　小雪。実測を開始する。

3月13日（水）　晴。住居跡ごとの割りつけを行い実測を続行する。1号住居跡は平面，断面見透し図を作製する。

3月14日（木）　晴。4，6号住居跡の平面図を作製する。

3月15日（金）　曇。2，3，5号住居跡の平面図を作製する。

3月16日（土）　晴。7号住居跡の実測を行う。2区の割りつけをして実測を開始する。

3月18日（月）　曇。2区の実測を続行する。午後より平板で2，3区の遺構面での地形測量を行う。

3月19日（火）　晴。2，3区の地形測量を縮尺1/100で続行して終了する。2区平面図作製を続行する

3月20日（水）　晴。2区は平面図作製を終了し，午後よりエレベーションをとる。

3月21日（木）　曇。2区はエレベーションを続行する。

3月22日（金）　晴。住居跡の断面，見透し図を作製する。1区の平面図を作製する。

3月23日（土）　晴。住居跡の断面，見透し図を作製する。1区の平面図を作製する。

3月24日（月）　晴。1区の平面図を作製する。

3月25日（月）　雨。雨のため実測を中止する。

3月26日（火）　雨。雨のため実測を中止する°

3月27日（水）　曇のち晴。実測を続行する。

3月28日（木）　晴。実測を続行する。配石遺構の平面図を作製する。

3月29日（金）　晴。実測を続行する。配石遺構は断面，見透し図を作製する。

3月30日（土）　晴。実測を続行する。配石遺構の実測を終る。平板で割りつけ基線と，各住居跡のポイントを測量する。

3月31日（日）　小雨のち曇。窯棺の実測を終り，本日をもって畑郡2地点の調査を終了する。

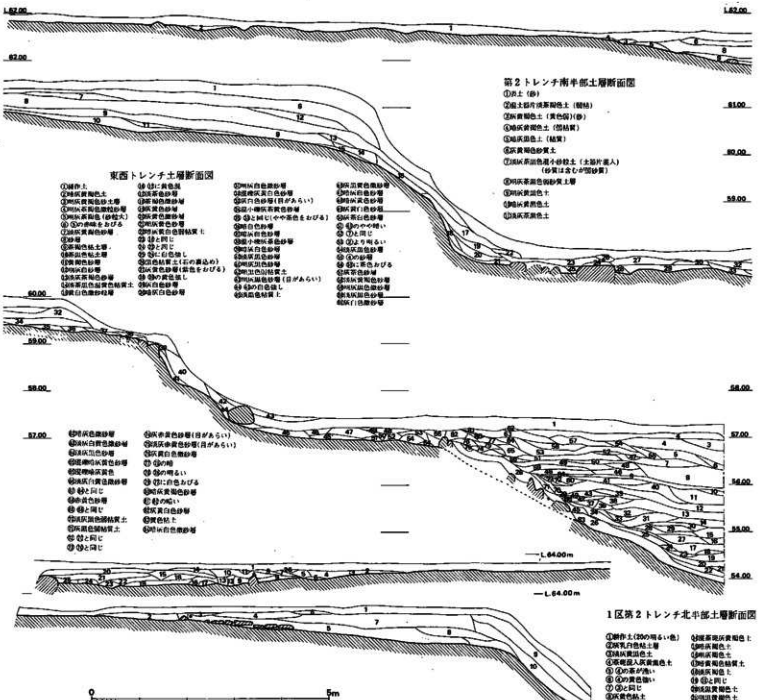


Fig. 55 畑添2地点土層断面図（縮尺1/60）

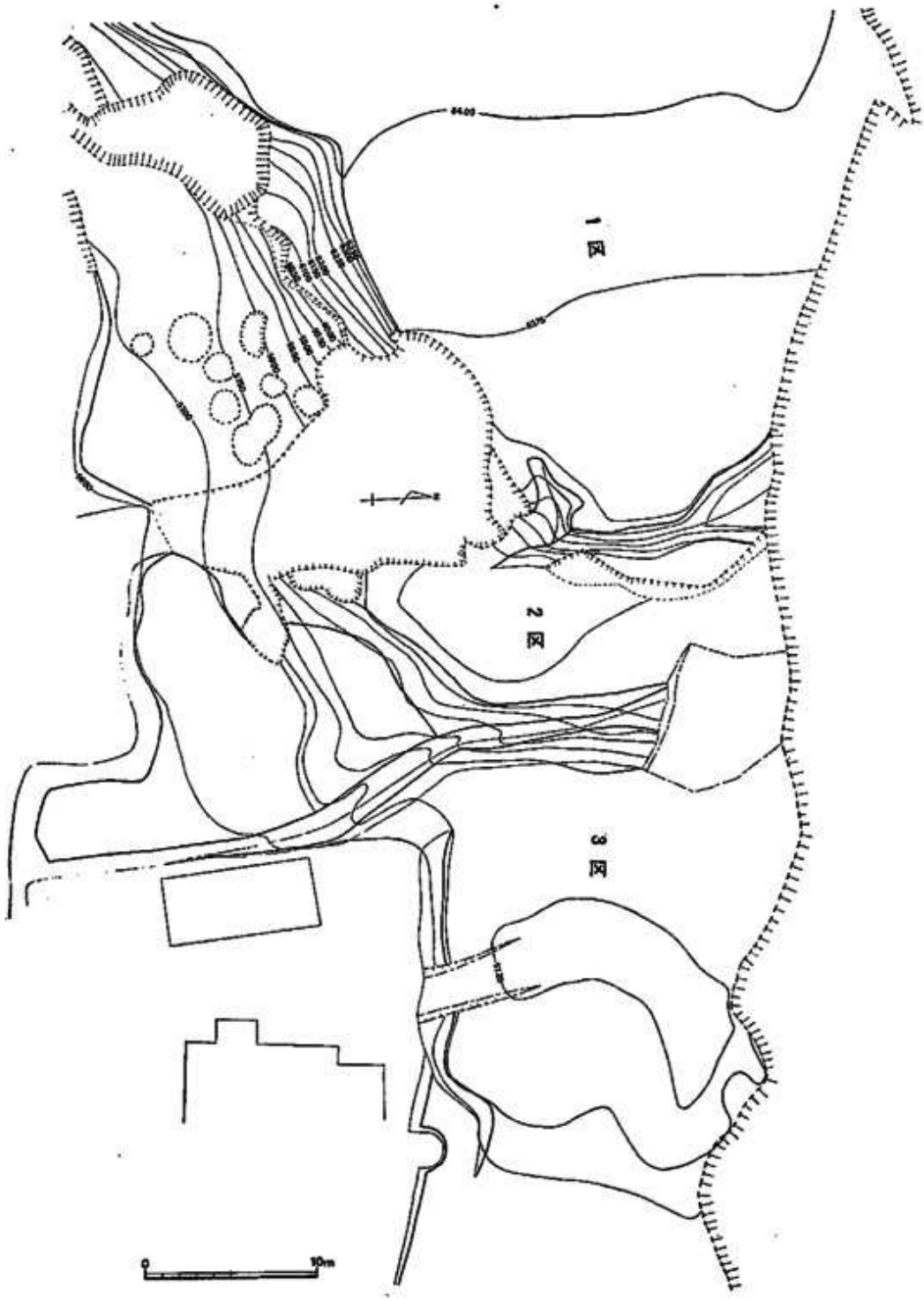


Fig. 56 畑添2地点地形測量図（縮尺1/300）

2 調 査 の 内 容

東西に延びる階段状の丘陵で，標高64mの上段部を１区，標高60mの中段部を２区，標高57.5mの下段部を３区とした。１区西側は20cm程で花崗岩バイラン土地山であり，東側に移行するにつれ地山は傾斜し，こちらは混礫の地山であり，上層部の堆積層，もしくは後世の盛り土からは，弥生時代から中世に到る遺物が不規則に出土しており，層位による遺物の新旧関係はない。１区からは弥生時代中期の小児用甕棺１基と，古墳時代後期の住居跡が８軒，中世の配石遺構が検出された。２区は住居跡かも知れないが判然としないのがあり，ピット，溝状遺構がある。３区は２区裾部から斜面に粘土と礫で土止めをした遺構があり，裾部をめぐる。

（川述昭人）

（a）１区の遺構と遺物

弥生時代の遺構と遺物

甕棺（Fig. 57, PL. 42）小児用甕棺であり，１基だけ検出された。軸線はN—75°—Eである。２号住居跡の西・北壁のコーナーで墓壙の上面を削られていた。墓壙は，一辺0.45mの方形を呈していたものと思われ，西壁を掘り込んで下甕をさし込んでおり，この時，口縁部は底面より７cm～８cm上方になり，安定をよくするために，口縁部付近まで埋土して，上甕を接合したものである。上甕も墓壙との空間が多いため，上甕の接合と同時に埋めもどしをしなければならない。接合部には粘土などのめばりは施していない。傾斜は30°ほどである。なお，掘り方は，意識したのかどうかは不明であるが，南壁は地山の大形の石で一辺をなしていた。現在地山より，わずか上面に面を出しており，案外，意識的に，この大石の傍らに墓壙を掘ったものかも知れないが推測の域を出ない。上下とも同大の甕を用いている。口径31cm，器

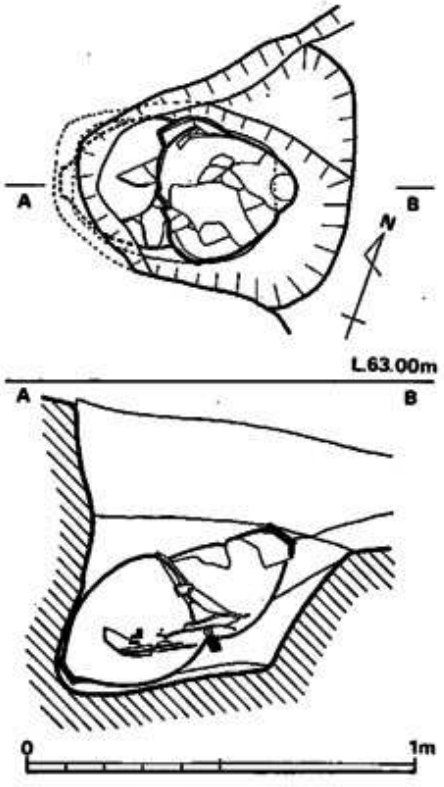


Fig. 57　畑原２地点甕棺墓実測図（縮尺1/20）

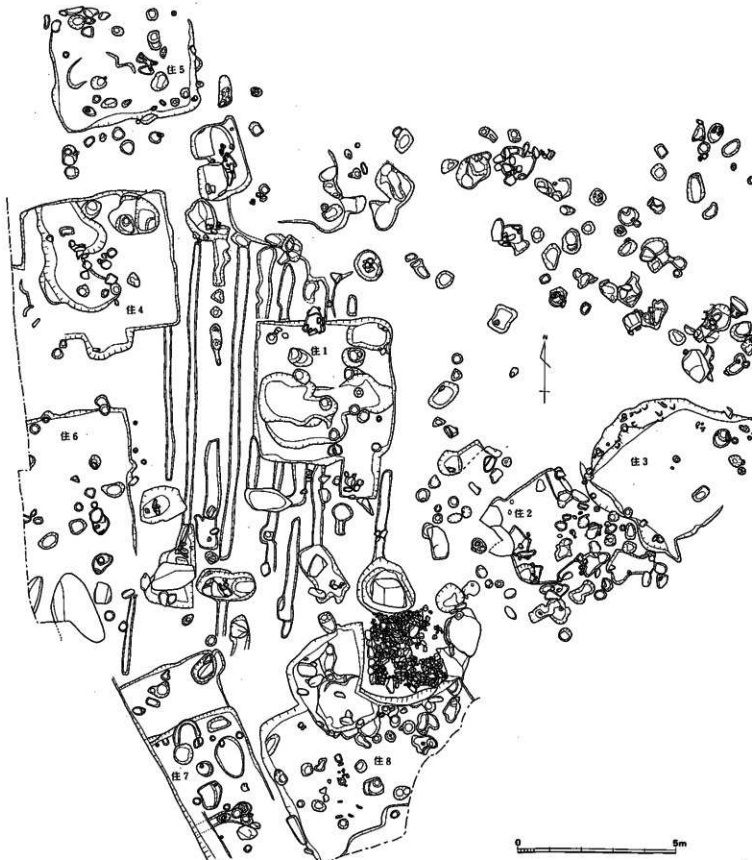


Fig. 58 1区遺構配置図（縮尺1/60）

高36cm，胴部最大幅31cmである。色調は黄褐色であり，風化がかなり進んでおり，うすくてもろいため，甕とりあげ後は，復原が不可能であり，断面図をもって，土器の実測図に変えさせてもらう。時期は中期後葉に属する。 (川述公紀)

古墳時代の遺構と遺物

第1号住居跡 (Fig. 59, PL. 41・43) 方向は軸線がほぼ南北を向く。北壁の中央部にカマ

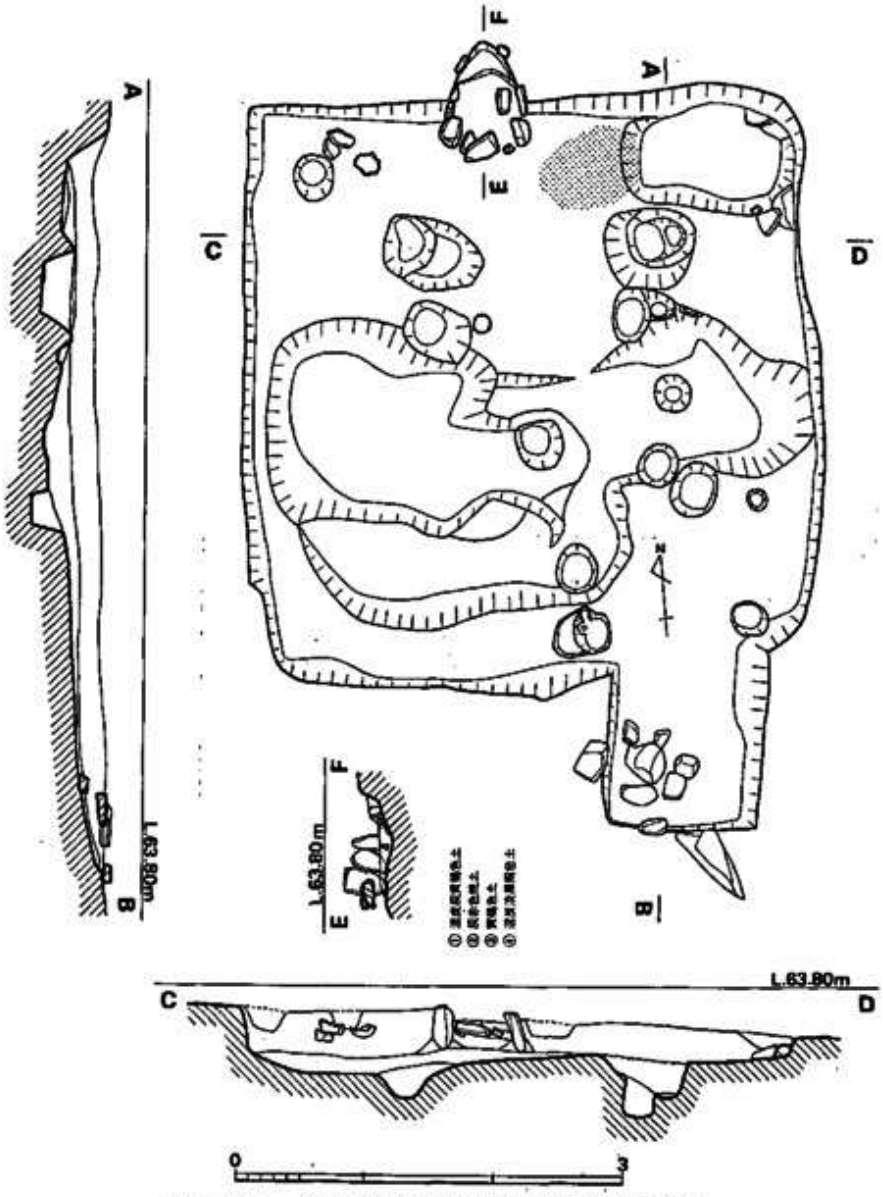


Fig. 59 畑添2地点1号住居跡実測図 (縮尺1/60)

ドがある。カマドの前面部は扁平な石材で構造を強化している。石材は縦長にして，下部は埋め込まれて，しっかりしており，壁面を切って造られている。カマドは奥行80cm，最大幅70cm，間口40cm，床面からの高さ30cmである。なお，支柱は存在しておらず煙出しは判然としない。焚き口は南向きであり，焚き口の東側には80cmの範囲に灰が堆積しており，北東隅には1.35m×0.8mの長方形を呈する浅い土壙がある。住居跡は，南北4.6m，東西4.5mの方形の竪穴であり，南東コーナーには，1.3m×1.2mの長方形の付けたし部が存在する。この部分の床面は，住居跡内床面へと緩傾斜する。プランは住居跡と連続しており，住居跡の出入口に相当するものであろうか。床面にはピットが多数と，浅い土壙がある。柱穴は3個検出され，床面からの深さは35cm～40cmで，柱穴間は1.9mであり，各コーナーごとに存在したと思われる。掘り込みの深さは，床面より現存高30cm程である。住居跡内からは，土師器の壺，甕か甑の把手，鉢，須恵器の杯蓋，杯身が出土しており，7世紀前半から後半に属する。

遺物

土師器（Fig. 60-1～9）　1から4は甕形土器である。口径のわかるのは1と3で，1は19.6cmであり，茶褐色を呈する。胎土には多量の砂粒を含んでおり，焼成は良い。3は口径13.3cmであり，外面には刷毛目が入る。灰茶褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。5から8は甑の把手であり，4個とも別個体である。9は鉢であり，器表は研磨されている。一様にうす手造りであり，焼成は良好である。胴部最大径は20cmである。

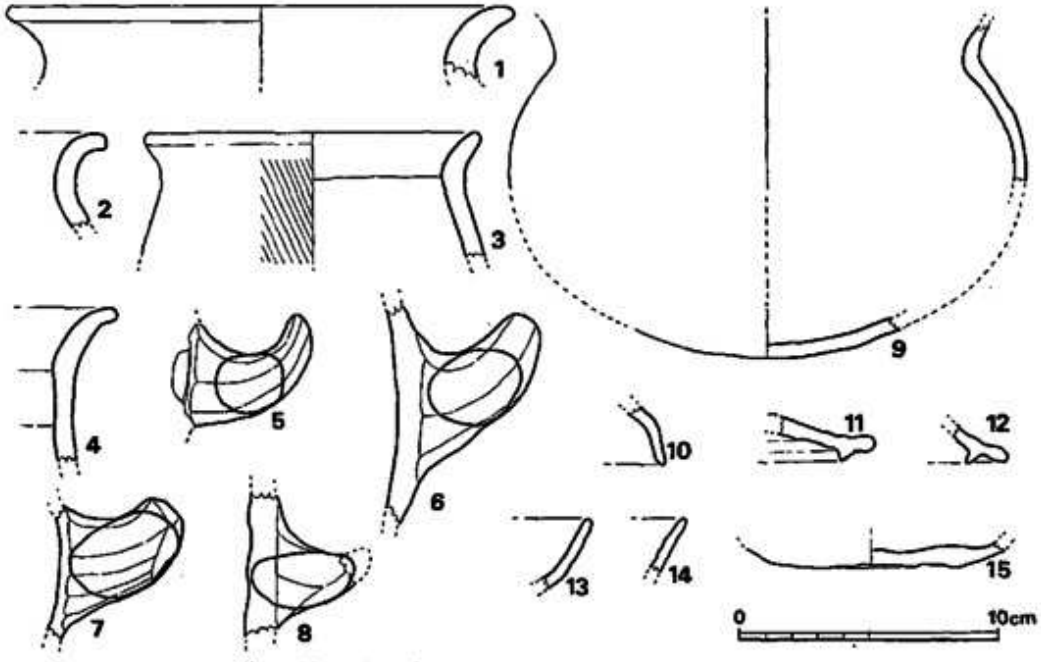


Fig. 60　畑添2地点1号住居跡土器実測図（縮尺1/3）

赤褐色を呈する。胎土は精選されていて良好である。

須恵器 (Fig. 60-10～15) 10, 11, 12は杯蓋で11, 12は身受けのかえりがつく。10は小片であるため不詳であるが蓋とした。口縁内面には重ね焼きの痕跡がある。色調は灰色を呈する。13, 14は杯身である。14は暗灰色を15は灰褐色を呈しており，ともに焼成は良好である。15は底部だけであり，底部は未調整である。

砥石 (Fig. 74-2, 3) 2は粘板岩製であり，割れて小片となっている。仕上げ用に適する石材である。3は硬質砂岩製であり，荒砥石であろう。

第2号住居跡 (Fig. 61, PL. 43) 方向は軸線が北より30°西に振っている。西壁の北側のコーナーには，弥生時代中期の甕棺があり，これを切っている。同じく西壁は，地山の石が露出している。東壁は斜面となり，壁面には長さ60cm，厚さ30cm大の石を2個ならべており，延長上には倒立した石があり，緩傾斜面となる東壁部に石材を用いたものであろうか。残存壁の高さは20cm程である。東，南のコーナー部は削減されて不明である。竪穴は，2.95m×2.7mの方形状の平面形である。カマドは検出されなかった。竪穴内外には多数のピットがあるが，

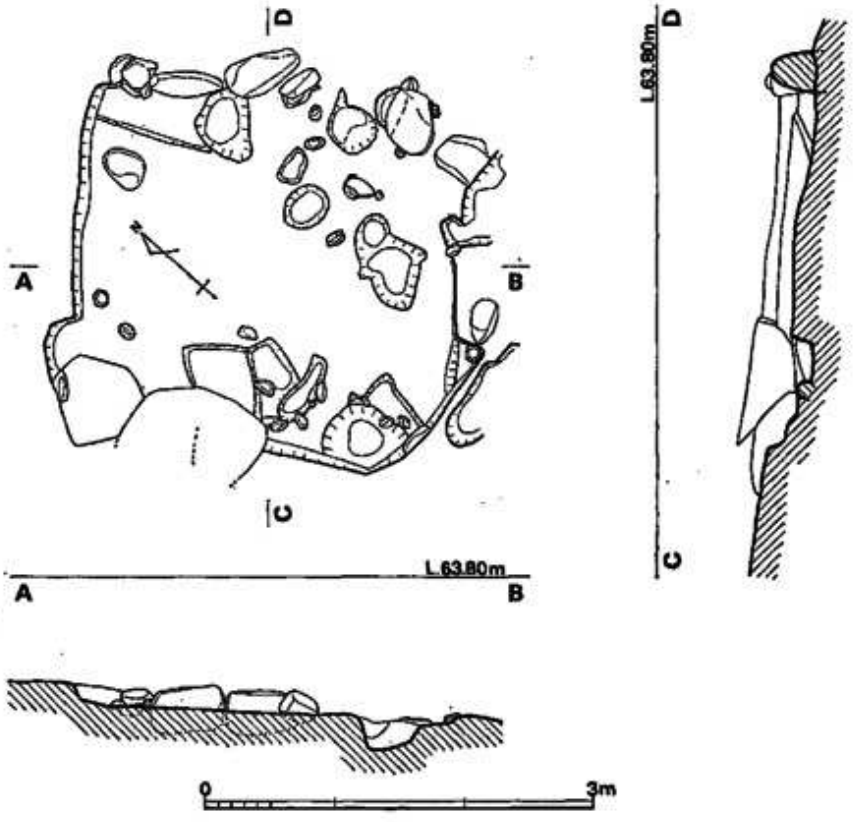


Fig. 61 畑添2地点2号住居跡実測図 (縮尺1/60)

柱穴としてはまとまらなかった。遺物の出土も皆無であり，年代は不明である。

第3号住居跡 (Fig. 62, PL. 44)　1区の南東斜面にあり，不定形である。斜面端部にあたる東側の壁面は残存していない。軸線は北より40°～45°西に振れている。地山は礫まじり土であるため，壁面には，石材が多数露出している。北東の壁ぎわには，カマドが存在しており，地山を掘りぬいたしっかりした支柱の石材と，焼土に混って，土師器の破片が出土した。支柱の南側には厚い焼土層があり，この部分が焚き口であったことがうかがえる。周辺には灰が散在する。カマドは破損されていたが，北側に造られ，焚き口は南面する。住居跡内の中央部には，1*m*にわたって炭化層がある。床面はふみ固められており，非常に硬い。竪穴内にはピットは少く，周辺部にもピットがあるが住居跡に伴うものかどうかは不明である。住居跡の規模は上辺部で4.4*m*×4.1*m*～4.3*m*，底辺部では3.5*m*×3.9*m*。深さは最大長60*cm*である。住居跡内からは，弥生式土器若干点と須恵器，土師器が出土した。

遺物

住居跡内からは，弥生式土器，須恵器，土師器が出土している。

弥生式土器 (Fig. 63-1～3, 7～9)　1，2は甕の口頸部である。1は口縁内面の上端部がはね上り，頸部下に三角突帯がつく。褐色で焼成は良好である。2は器表の磨滅が著しい。3は小形甕であろう。7は甕の底部である。明褐

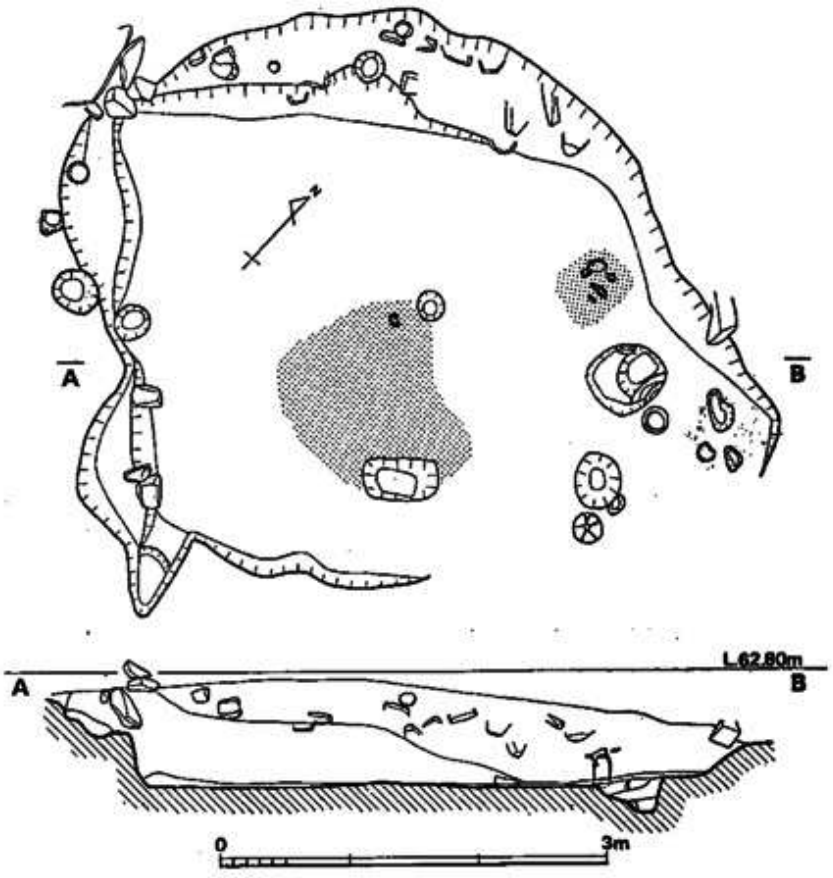


Fig. 62　畑添2地点3号住居跡実測図（縮尺1/60）

色で焼成は良好である。8は器台の下半部である。外面には刷毛目が入る。黄褐色で焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。8は壺形土器の蓋である。口径21.7cm，器高3cmである。天井部はうすでとなる。外面は丹塗りである。頂部を中心にして対称形に2個ずつ合計4個の孔が口縁部にあく。褐色で焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

須恵器（Fig. 63-11～18） 11は壺の口頸部から肩部にかけてである。内外面は叩き目がわずかに残存する。口径19.2cmである。色調は茶褐色を呈しており，焼成は不良である。12，13，14，15は杯蓋である。12は口径15.2cm，器高4.3cmと大形である。調整法は天井部は篦削りを，天井内面は，ナデを，以外は横ナデである。灰色で，焼成は良好である。15はつまみの部分である。16，17，18は杯である。16，17は底部は篦削りを施す。16は口径10.4cm，最大径12.8cm，器高3.9cm，立上りは1cmである。暗灰色で焼成は良い。胎土には多量の砂粒を含

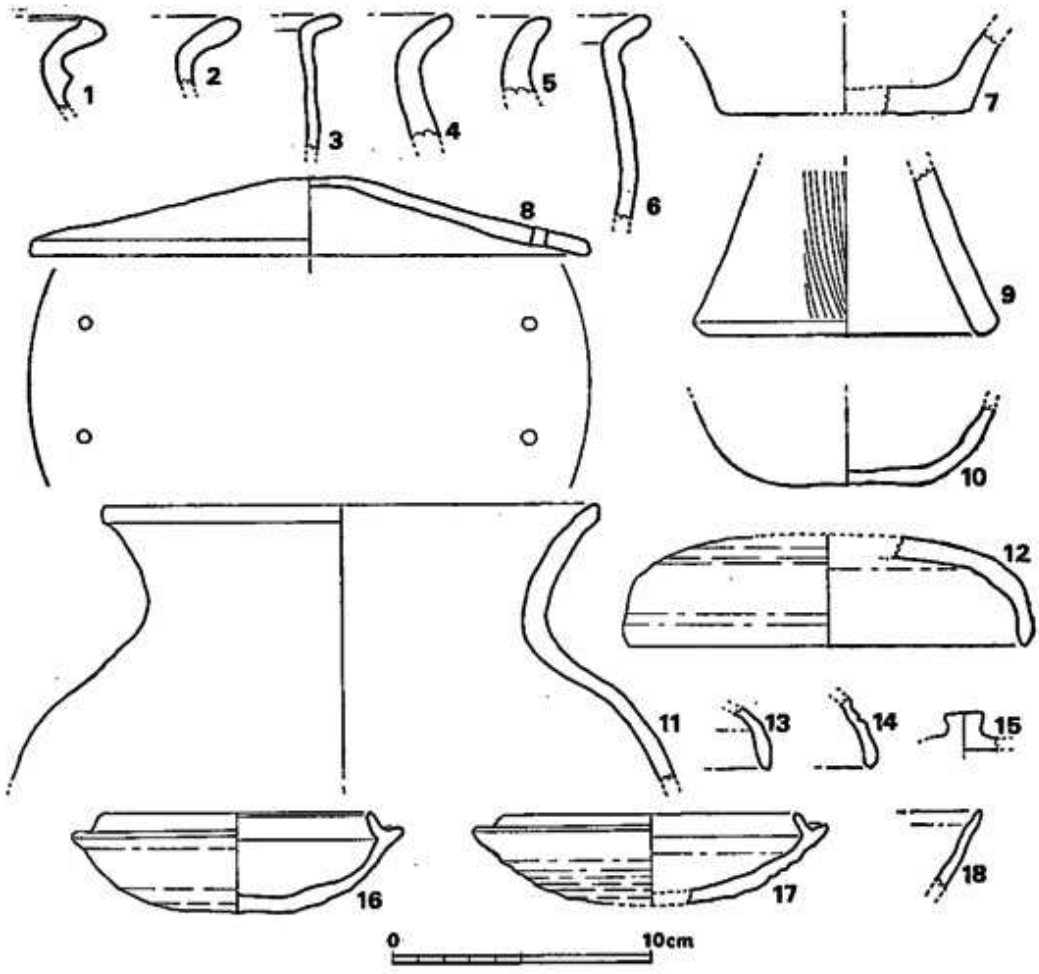


Fig. 63 畑添2地点3号住居跡土器実測図（縮尺1/3）

む。17は体部外面には横ナデの凹凸が著しい。口径11.3cm，最大径13.7cm，立上りは0.9cmで内傾する。色調は暗灰色で，焼成は良好である。18は蓋受けのない形態である。残存全面は横ナデ調整である。灰色で焼成は良い。胎土は精選されて良好である。

土師器（Fig. 63-4～6, 10）　4，5，6は甕である。6は外面に粗い刷毛目が入る。灰褐色で，焼成は良好である。いずれも胎土に多量の小砂粒を含む。10は壺か小甕の底部である。焼成はやや不良である。時期としては6世紀末から7世紀にかけての年代を比定できよう。

第4号住居跡（Fig. 64, PL. 45）　軸線は，ほぼ南北である。南北4.4m，東西4.8mの方

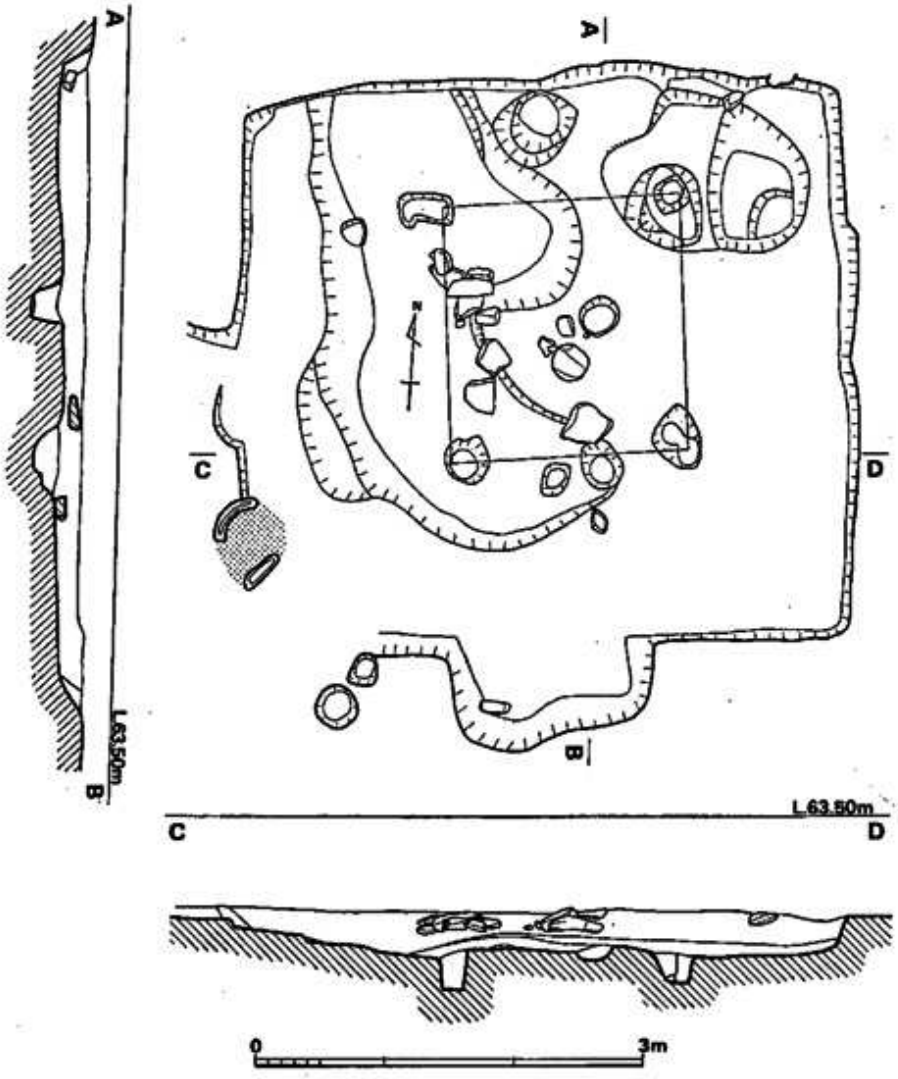


Fig. 64　畑那2地点4号住居跡実測図（縮尺1/60）

形の竪穴である。表土より20cmほどで花崗岩バイラン土の地山に到り，住居跡は，この地山を掘り込んで造られており，深さは，現存高20cmである。南壁中央部には，幅1.5m，長さ50cmの付け出し部があり，その底面は，住居跡床面と同一レベルである。床面は幅広くて浅いくぼみがある。柱穴は4隅にあり，柱穴間は，東西1.8m，南北2mであり，深さは，床面から，15cm～50cmほどである。中央部には石が散乱しているが，かなり上面にあり，住居跡とは関係がなさそうである。西南コーナー部は削減されて現存しておらず，焼土が一部あり，カマドとも考えられ，もう一軒存在したかも知れないが，上部を削られているため，プランはつかめなかった。住居跡内からは，須恵器の杯蓋と杯身，土師器，砥石が検出された。

遺物

須恵器（Fig. 65-1～6） 1～3は杯蓋であり，2，3は身受けのかえりがつく。このかえりは，口縁部水平面よりも突出する。1は天井部に篦削りを施している。2も天井部に篦削りを施し，ほかの部分は横ナデ調整である。色調は灰色で，ともに焼成は良好である。4は杯であり，残存部よりみると，大形である。底部には篦削りしているのがうかがわれる。5は高杯の杯部の可能性もある。6は高杯の脚柱部であり横ナデ調整を整す。灰色であり，焼成は良好である。

土師器（Fig. 65-7） 高杯である。脚外面は篦削りをする。色調は褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土に小砂粒を含む。

砥石（Fig. 74-4） 粘板岩製である。仕上げ用に適する石材である。

遺物の時期は，6世紀末から7世紀にかけての年代を比定できよう。

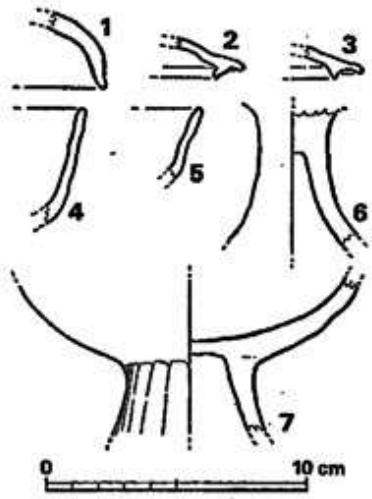


Fig. 65 畑瀬2地点4号住居跡土器実測（縮尺1/3）

第5号住居跡（Fig. 66, PL. 45） 調査地点の西端部にあり，軸線は南北を向く，西壁は発掘範囲外であるため，調査はできなかった。南壁は表土が浅くて削平されており，はっきりしない。現存長は南北5m，東西3.5mであり，深さは，北壁で20cmである。床面からは，上辺径20cm～60cm，深さ10cm～20cmで円形，楕円形を呈するピットが検出されたが，柱穴としてはまとまらない。住居跡内からは，須恵器では杯蓋，杯身，土師器では，壺，甕，甑が出土している。

遺物

住居跡内からは，土器では弥生式土器の小片が数個と須恵器の杯蓋と杯身の，土師器が出土しており，石器では砥石が検出された。

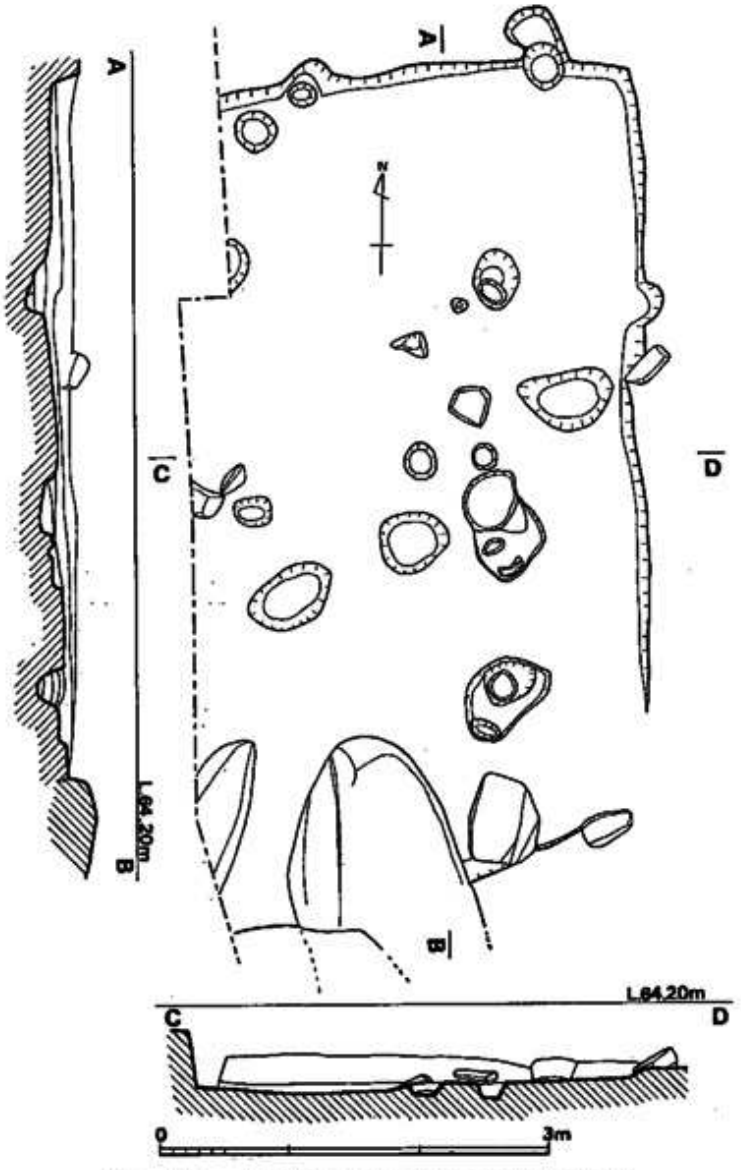


Fig. 66　畑添２地点５号住居跡実測図（縮尺1/60）

須恵器（Fig. 67-1～4）杯蓋と，杯である。１は杯蓋で，頂部につまみがつき，身受けのかえりを有する。かえりは短く，直立し，口縁水平面とほぼ同等の位置になる。最大径14.4㎝，器高3.8㎝である。天井部には一条の沈線が入る。調整法は，頂部は横ナデ，頂部より天井部の沈線までは篦削りを，以下を横ナデする。色調は灰色を呈するが，焼成は不良である。２，３，４は杯であり，２は高台が付かない。口径10.7㎝，器高3.5㎝である。調整法は底部の内外面はナデを，以外は横ナデを施す。灰色で焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。３

は長くて，外反する高台がつく。調整法は底部内外面はナデを，以外は横ナデする。口径12.7cm，器高4.8cmである。体部外面には凹凸が多い。灰色で焼きは良い。胎土には小砂粒を含む。

土師器 (Fig. 67-5～7)　5は壺の口頸部である。灰白色で焼成は不良である。6は甕の口頸部である。灰茶褐色を呈していて，焼成は良好である。7は甑になるのであろうか。外面部には刷毛目と思われる痕跡がある。褐色で焼成は良好である。時期は7世紀前半から後半にかけてであろう。

砥石 (Fig. 74-1)　粘板岩製である。材質が硬くて滑らかであり，仕上げ用であろう。

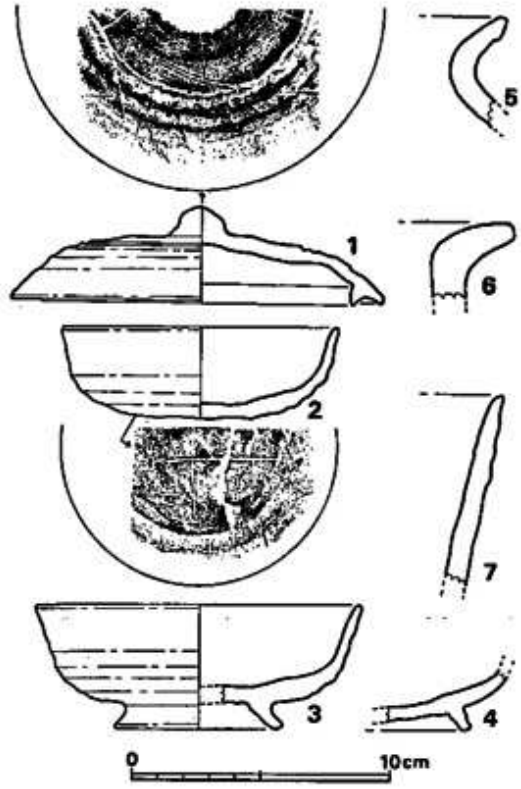


Fig. 67　畑原2地点5号住居跡土器実測図 (縮尺1/3)

第6号住居跡 (Fig. 68, PL. 46)　1区の西北端部にあり，北壁は墓面で削除されている。軸線は，ほぼ南北である。規模は，東西は4.5mを測り，南北は，北壁が残存していないので正確な数値はわからないが，残存長3.3mであり，方形に近い形状を呈するものと思われる。カマドは，他の住居跡からみて，北壁に存在した可能性が強いが，推測の域を出ない。北西隅には数個の石があるが，これは，2号住居跡に存在した，壁面の一部をなすものとは違うようである。床面には多数のピットが存在しており，2m間で4隅にピットがあり，柱穴と思われる。上辺径は，30cm～60cm，底辺径は15cm～25cm，深さは20cm～30cmの不整円形である。竪穴は混礫地山を40cm程掘りくぼめている。住居跡周辺にもピットが所在する。住居跡内からは須恵器の杯蓋，杯身，高杯，壺が，土師器では甑か甕の口頸部が出土している。

遺物

須恵器 (Fig. 69-1～8)　1，2は杯蓋である。2は内面に，わずかにかえりを有する。1は口唇部が折れまがって口縁となる。灰色で焼成は良好である。残存部は横ナデ調整である。3，4，5は杯の底部であり，4，5は貼付高台が付く。3は底部に箆記号があり，ナデ調整である。体部は横ナデ調整である。暗灰色で焼成は良好である。4，5の高台は端部がわずかに，はね上る形態である。灰色ないし暗灰色で焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。6，7は高杯であるが，別個体である。6は口径13.9cmであり，底部と体部の境には稜がつく。7

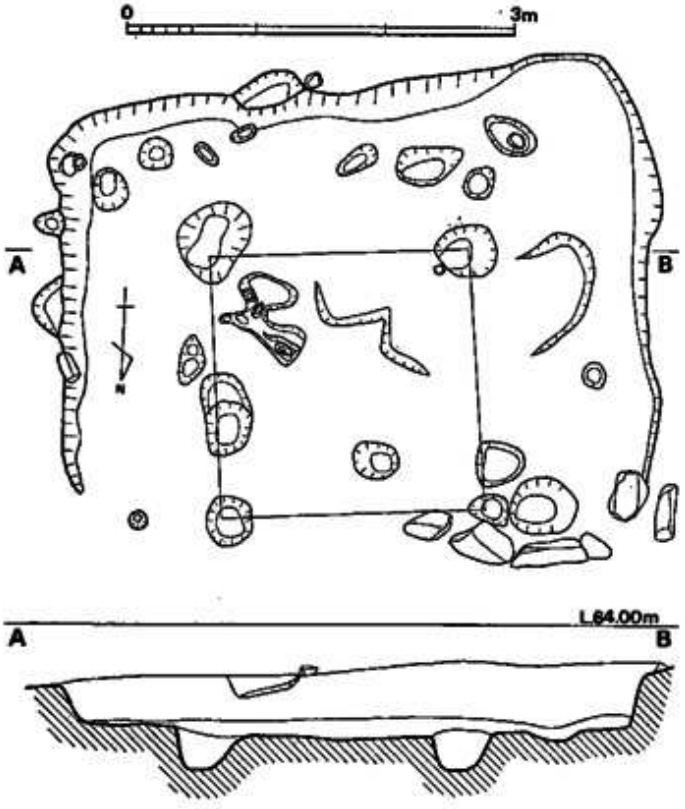


Fig. 68　畑添２地点６号住居跡実測図（縮尺1/60）

は脚裾径 8.5 cmである。内外面とも横ナデ調整であり，凹凸著しい。灰色で焼成は良好である。８は壺の口頸部と肩部にかけてである。口唇部は粘土を貼り付けて造っている。外面には格子状叩き目が，内面には同心円叩き目が残る。色調は灰茶褐であり，焼成は不良である。胎土には細粒を含む。

土師器（Fig. 69-9～11）

9，10は同一個体であり甑もしくは把手付甕である。口径は22.7cmで，外面には刷毛目が入る。内面はナデ調整である。色調は赤褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土

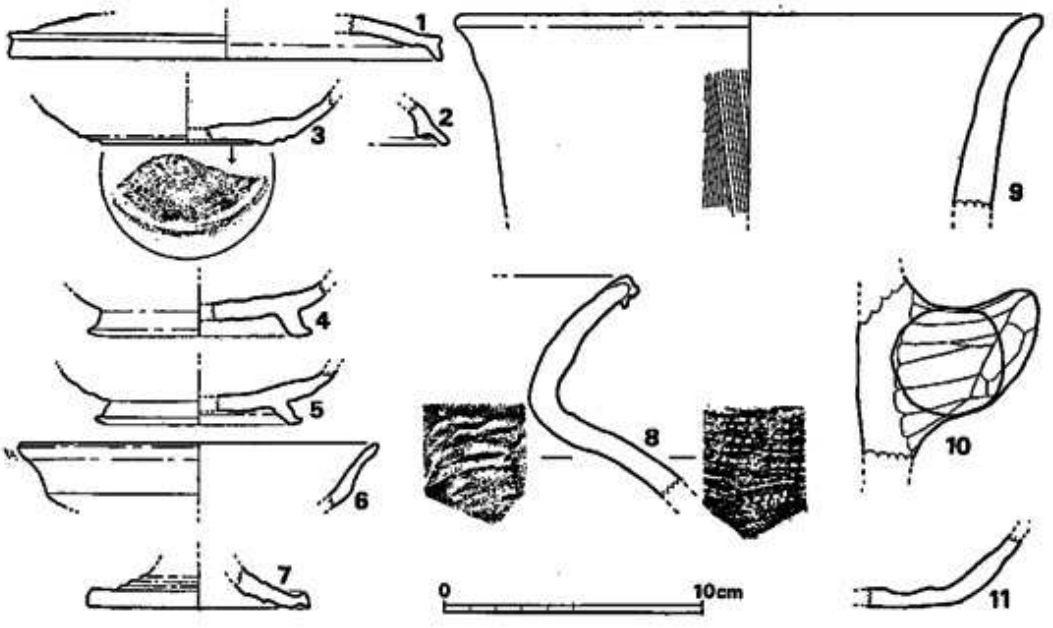


Fig. 69　畑添２地点６号住居跡土器実測図（縮尺1/3）

には小砂粒を含む。11は壺か甕の底部である。褐色で焼成は良好である。

須恵器の杯蓋，杯より，年代は7世紀後半に比定される。

第7号住居跡 (Fig. 70, PL. 46) 発掘区の西南端部にあり，西壁は調査範囲外であるため，検出できなかった。南側は崖面で，削られており，地山は傾斜しており，斜辺部は，地山の石が存在している。住居跡外の北側には，長方形もしくは方形を呈すると思われる，浅い竪穴の一部があり，7号住居跡がこれを切って造られている。住居跡は，軸線を北から20°ほど西に振っており，灰黄褐色粘土で造り付けのカマドが北壁にそってある。カマドは馬蹄形に残存しており，奥行70cm，最大幅90cm，間口50cm，高さは床面から20cmである。東西は確認した範囲では2.9m以上，南北は，現存3.5mであり，深さは，20cmである。床面には，15cm～60cm大の円形のピットと，楕円形の浅い土壙があるが，柱穴としてはまとまらなかった。遺物は，弥生式土器数点と，カマドの西側から，土師器が検出されており，他の住居跡とそう変らない7世紀代のものであろう。

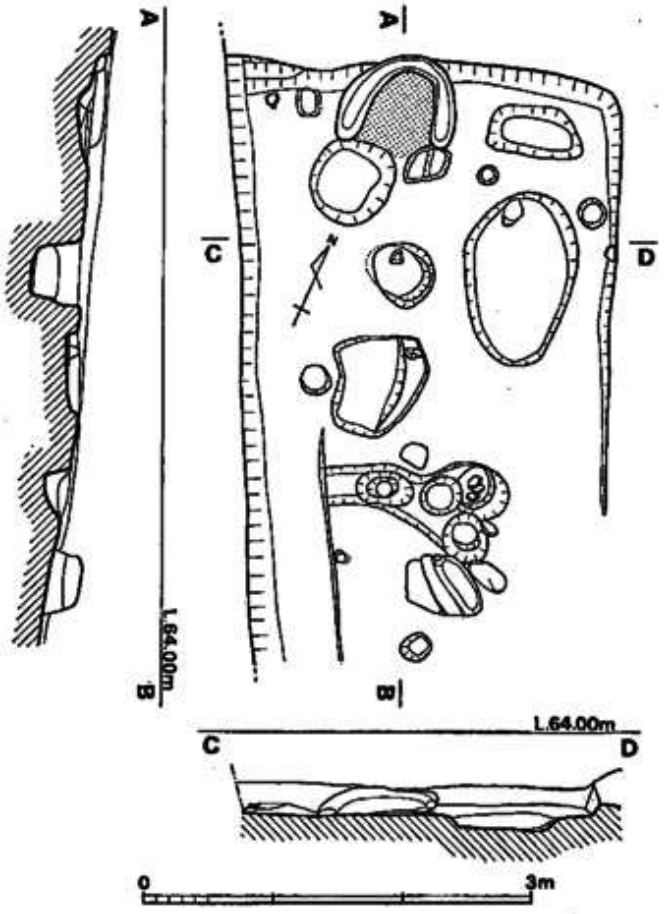


Fig. 70 畑添2地点7号住居跡実測図（縮尺1/60）

遺物 (Fig. 71-1～4)

住居跡内から，弥生式土器と土師器が出土している。1と2は弥生式土器である。1は突帯部だけであり，外面に丹塗りがわずかに残存する。2は底部のみである。3，4は土師器であり，胴部から底部

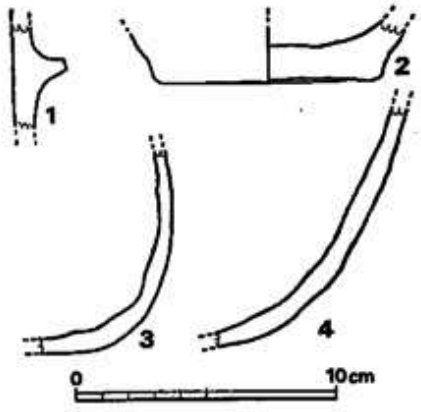


Fig. 71 畑添2地点7号住居跡土器実測図（縮尺1/3）

を一部残存するのみである。3は赤褐色であり，焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。4は外面には刷毛目が入り，内面には残存部の全部にわたって，こげつきがみられる。赤褐色を呈し，焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。以上のほかに須恵器で壺か甕の一部と思われる小片も出土している。

時期は，決め手となる遺物が少いので判然としないが，他の遺構に比して，あまり時期差はないと思われる。

第8号住居跡（Fig. 72, PL. 74）　南端に所存しており，崖面で削られている。残存する壁のうち西壁が最も残りが良く，4.9*m*を確認した。軸線は北より25°西に振っている。北壁はさらに，北へ1.8*m*ほど長方形状につき出しており，このつき出し部の北壁には，周囲が火熱のため硬くなった煙り出しがあり，壁面を，幅25*cm*，奥行15*cm*，深さ60*cm*程，掘り抜いており，長方形状を呈する。すぐ前面には，暗赤褐色焼土が5*cm*～10*cm*程あるが，カマドは破壊されていて旧状をとどめていない。この北壁より1*m*程の位置には方形を呈する，長さ1.7*m*，幅1.7*m*，深さ45*cm*の土壙がある。この土壙内には，灰がたくさんつまっており，カマドの灰が堆積したものと思われる。この上面には，中世に属すると思われる配石遺構があり，日時の関係で，北壁部分は全部調査していないので不明な点が多い。住居跡の形状は一軒とするには北壁部に疑問があり，重複しているものと思われる。西壁の中央あたりには1*m*の範囲で焼土があり，周囲からは床面に近い位置や，やや上方より弥生式土器が多数検出されており，弥生時代の住居跡と古墳時代の住居跡の重複が考えられる。床面には多数のピットがあるが，柱穴としてのまとまりは不明である。住居跡内からは，弥生式土器，須恵器，土師器，それに砥石が検出されている。

遺物

弥生式土器（Fig. 73-1～18）　1～4，13～15は甕形土器である。口縁部の形態はいずれも，「く」字を呈する。13，15は口縁直下に，三角突帯がつく。13は口径30.7*cm*。褐色で，焼成は良好である。14は，口径32*cm*。褐色で焼成は良好である。15は口径35.4*cm*。胴部外面には刷毛目が入る。黄褐色で焼成は良好である。5は胴部の突帯部であり，外面は丹塗りである。6～8は底部であり，厚さはうすい。いずれも，外面には刷毛目が入る。8の底部内面には指頭圧痕が見られる。10～12は器台である。11のくびれ部は，上方にある。10は黄褐色を，11，12は明褐色を呈しており，焼成は良好である。16は，内外面とも丹塗りされている。口径は17.4*cm*。胎土に小砂粒を含んでおり，焼成は良好である。9は高杯の脚部，17，18は高杯の口縁部である。17は口径24.9*cm*であり，内面は器表が剝落していて不明だが，外面は丹塗りしている。胎土には多量の砂粒を含んでおり，焼成は良好である。19は，内外面とも丹塗りしている。胎土には小砂粒を含んでおり，焼成は良好である。9は内面は不明だが，外面は丹塗りしている。

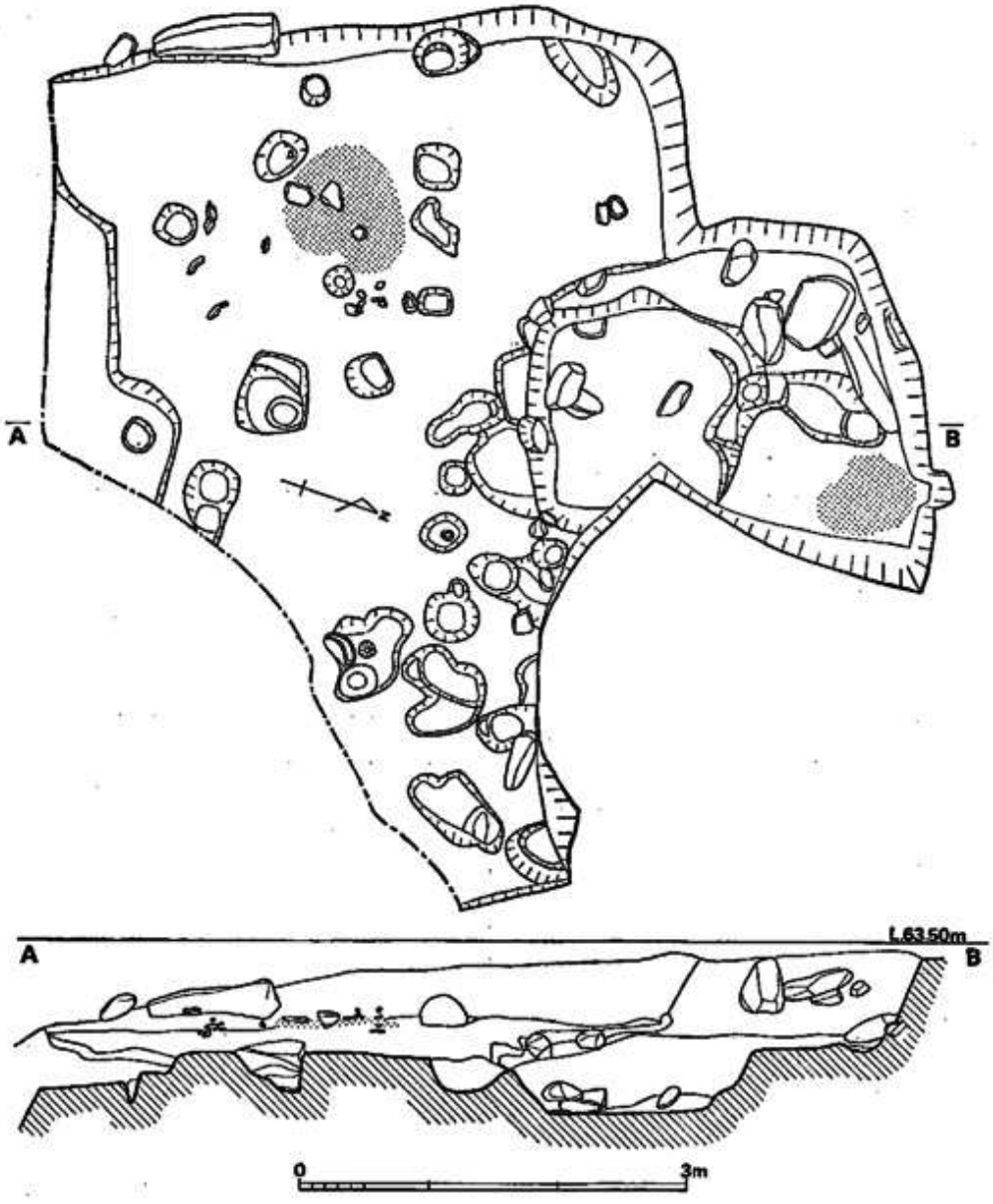


Fig. 72 畑添2地点8号住居跡実測図（縮尺 1/60）

須恵器（Fig. 73-23～31） 23は甕の小片であり，球状部の中程に2条の沈線が入る。底部は篦削り調整である。色調は暗灰色で焼成は良好である。30は杯蓋であり，口縁部は体部よりわずかに折れまがるだけであり，器高は非常に低い。口径は16.2cmである。灰色で，焼成は良好である。24～29，31は杯である。24，25は口縁内面が平坦となる。28，29，31は高台が付き，端部を外方へひき出す。色調は灰白色ないし灰色を呈しており，いずれも，焼成は良好で

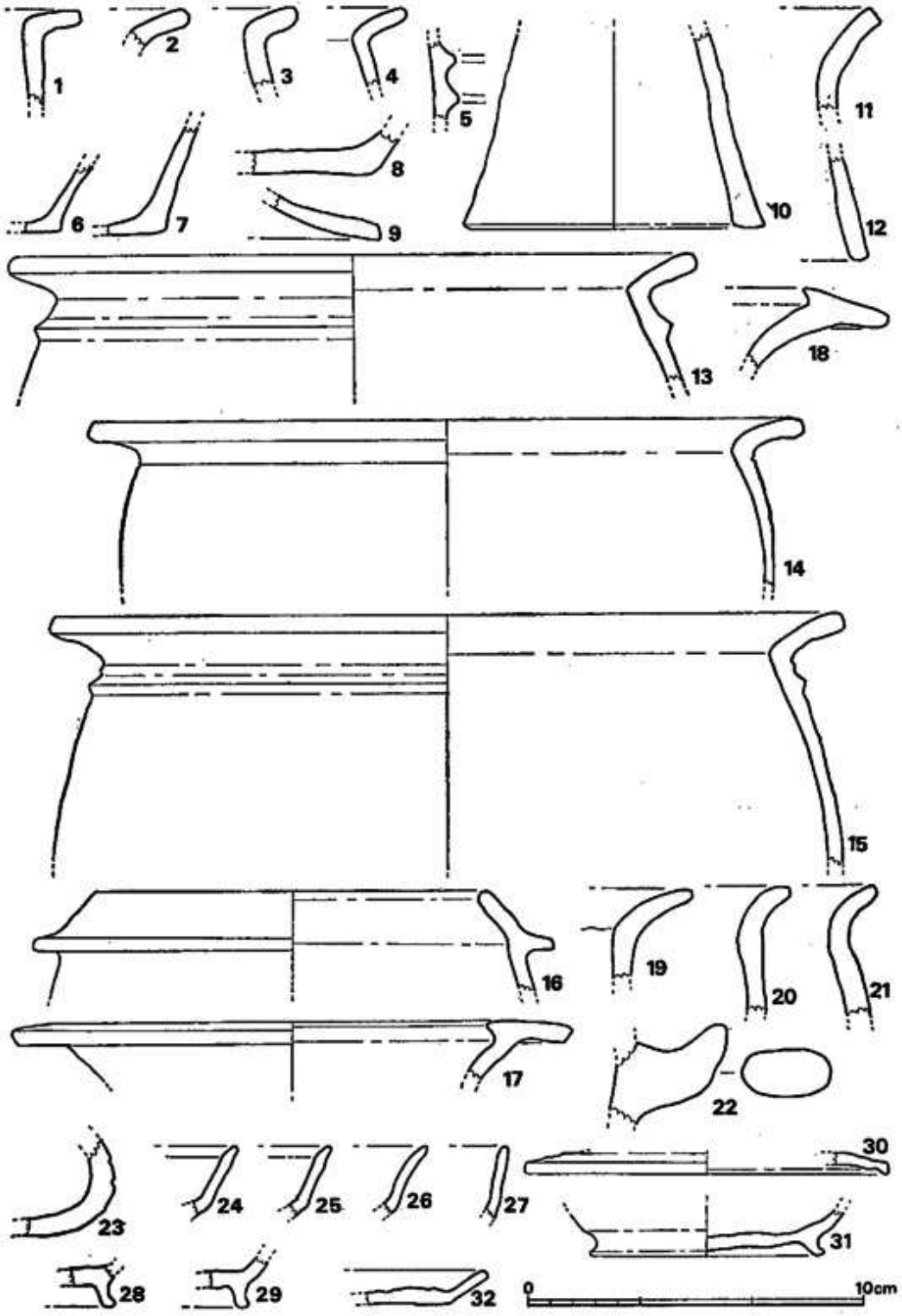


Fig. 73　畑添２地点８号住居跡土器実測図（縮尺 1/3）

ある。

土師器 (Fig. 73-19～22, 32) 19～21は甕の口縁部である。19, 21は外面に刷毛目が入る。色調はいずれも褐色を呈しており，焼成は良好である。22は把手であり，1個だけ出土している。32は皿である。色調は灰赤褐色であり，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

弥生式土器は，中期から後期に属しており，須恵器は6世紀後半から8世紀に属し，7世紀後半から8世紀のものが主である。

砥石 (Fig. 74-5) 硬質砂岩製である。荒砥石であろう。

中世の遺構

配石遺構 (Fig. 75, PL. 48) 8号住居跡上にあり，黄褐色覆土上面に石材の底面を置く。表土より30cm～40cmで遺構面に達する。遺構は方形を呈し南北2.5m，東西2.4mの範囲に花崗岩の小石を敷きつめている。軸線は，ほぼ南北である。西端部は長さ25cm～40cm，幅20cm，厚さ5cm～10cmの扁平でやや大き目の石材を南北に一列に並らべてつらを整えている。内面には，この端部に用いた大きさの石材と小礫とがみられるが，大き目の石材は小礫上に乗った状態である。本来は，この大き目の石材は周辺部をとりかこむために使いわけている事がわかる。配石の北には0.9m～1mの大石があり，大石周辺には掘り込みがみられるが，土層断面からは，これは大石を取り除くための掘り込みである事がわかり，配石遺構との関係は不明である。この配石遺構は，建て物の一部であろう。

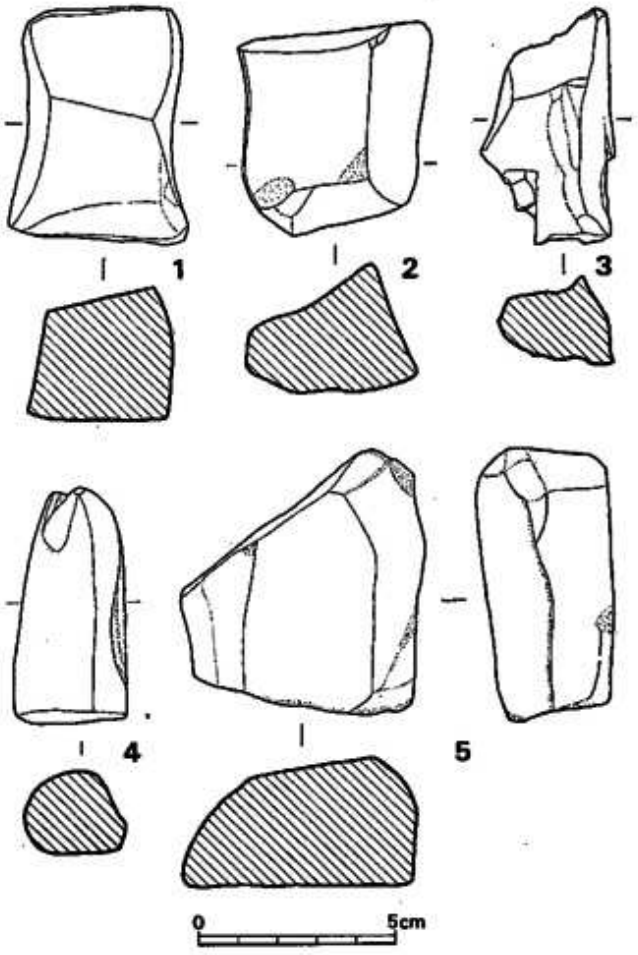


Fig. 74 畑添2地点砥石実測図 (縮尺1/2)

ピット　多数のピットが検出された。平面形は円形，楕円形，方形，長方形など様々であり，大きさは0.1m～2mである。深さは10cm～60cmである。ピットの性格としては，柱穴，杭，柵列などが考えられ，個々の区別は困難である。地山は，場所によっては礫や石を含んで

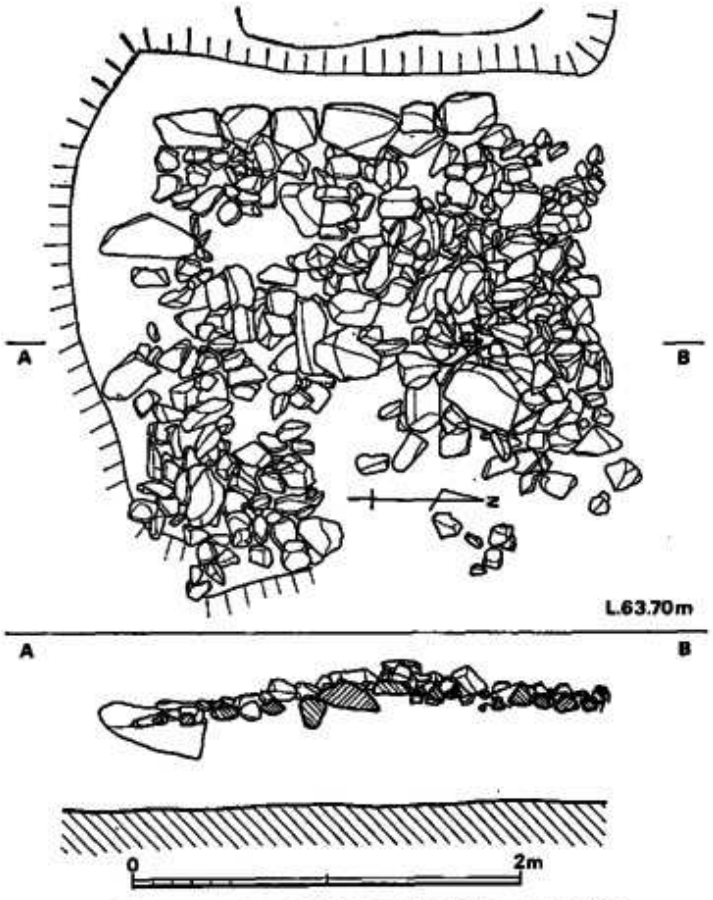


Fig. 75　畑添２地点配石遺構実測図（縮尺1/40）

おり，最初は，大きな石は，人為的に置かれたと思っていたが，地山のものである事がわかり，又，ピットの中には耕作の際に石をとり除こうと，周辺を掘り込んだために，できたものがあった。なお溝状の遺構はすべて，耕作用のうねであり，遺構も，このうねで壊されているものがある。

１区出土遺物（Fig. 76-77）

１区は，畑添２地点の最上位の平坦部であり出土遺物は最も多かった。１区に属する住居跡群の遺物については別記するため，これには含まない。層位としては耕作土以下，遺構上面まで層別にとりあげたが，層位による遺物の新旧関係は見られず雑然と混入していたため一括資料として取り扱う。出土した遺物は，弥生式土器では，壺，甕，高杯，甕棺があり，須恵器では杯蓋，杯，椀，高杯があり，土師器では杯，甕があり，磁器では青磁が，さらには中世日常雑器が出土しており，弥生時代から中世までと時期の幅も広い。

弥生式土器（Fig. 76-1～10）　１は高杯の口縁部であり，平坦口縁であり，口唇部には刻目が入る。篦磨きしており，内外面とも丹塗りである。２，３は甕である。３は口縁直下に三角突帯がつく。褐色で焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。７，10は壺である。７は内外面とも篦磨き調整をしており，重弧文が入る。赤褐色であり，焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。10は，口縁部に小孔を有する蓋付き壺であり，２孔確認されており，これと対称の位置に，もう２孔存在するものと思う。口径は15.5cmである。黄褐色で焼成は良好である。胎土には，小砂粒を含む。６，８，９は底部であり，８は内外面とも，丹塗りしている。焼成は良

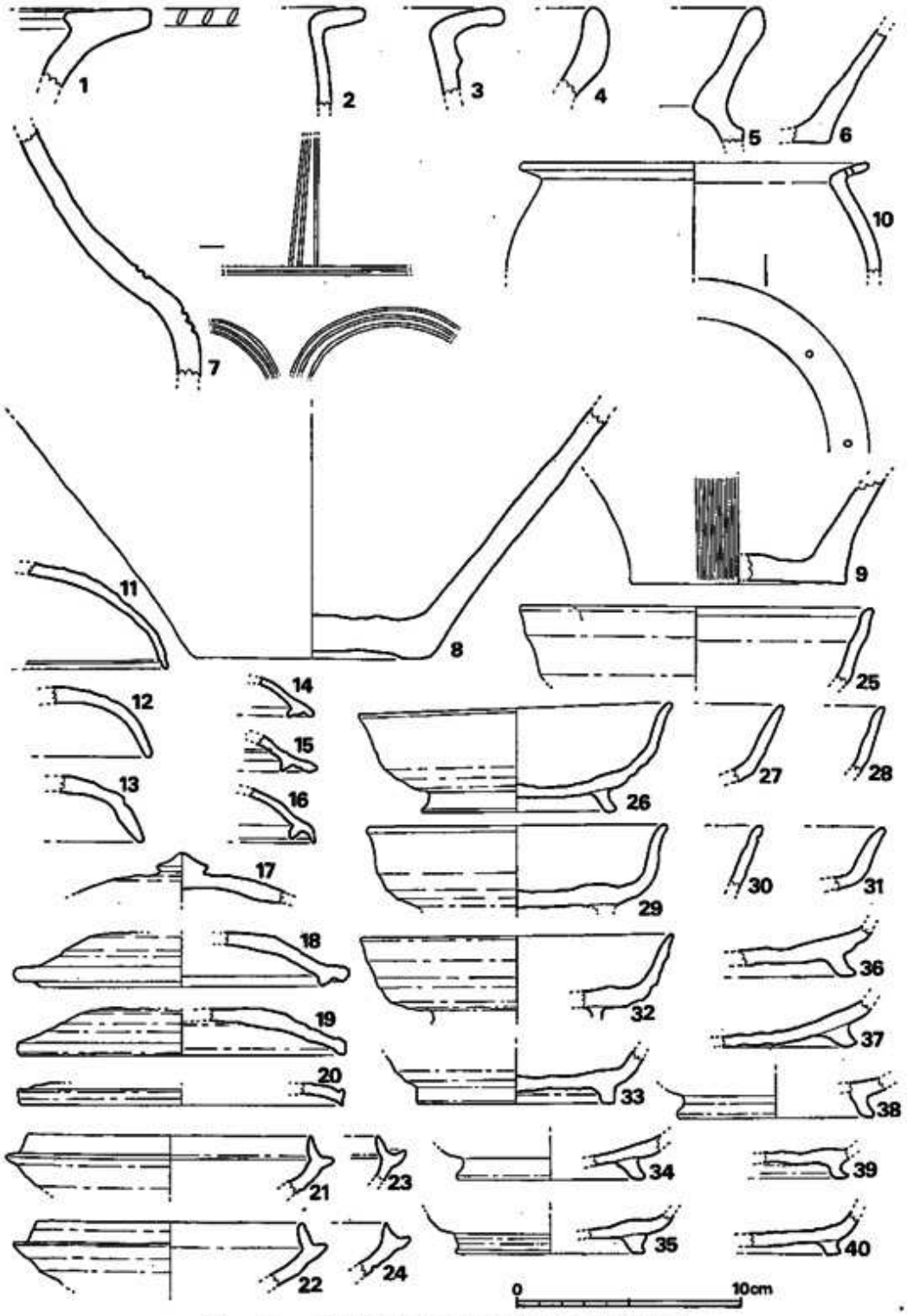


Fig. 76　畑原 2 地点 1 区出土土器実測図① (縮尺1/3)

好であり，胎土には多量の砂粒を含む。9は外面に刷毛目が入り，平底であるがわずかになかくぼみである。色調は黄褐色を呈する。4，5は後期初頭の甕棺の口縁部である。4は内外面とも篦磨きをする。灰黄褐であり，焼成は良好である。胎土に小砂粒を含む。5は口縁直下に突帯がある。黄褐色であり，焼成は良好である。胎土には大粒の砂粒を含む。

須恵器（Fig. 76-11～40, Fig. 77-41～43）

杯蓋（Fig. 76-11～20）　口縁部の形態により，5類に分類される。

I類（Fig. 76-11・17）　口縁部内面に古式の特徴である段を有するが，体部と口縁部の境には段がつかない。天井部は篦削りであり，天井部内面はナデを，以外は，横ナデ調整である。灰色で焼成は良好である。17は擬宝珠形つまみを有する。天井部は篦削りしている。灰色で，焼成は良好である。

II類（Fig. 76-12・13）　口縁部は丸くなり，器高は低い。天井部は篦削りし，以外は横ナデ調整である。13は天井部との境に沈線が入る。灰色で焼成は良いが，12は，焼成不良である。

III類（Fig. 76-14・15・18）　蓋に身受けのかえりがつくが，かえりは短く，口縁水平面より，下方に出るか，同じ位かである。18は最大径15cmであるが，器高が低い。15，18は焼成不良である。

IV類（Fig. 76-16）　身受けのかえりを有しており，口縁部水平面より，内方につく。器壁はうすでであり，横ナデ調整を施す。灰色で，焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。

V類（Fig. 76-19・20）　口縁部は退化形態となり，わずかに下降するのみである。口径は14.5cm～14.6cmで，器高は低い。色調はともに暗灰色であり，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。横ナデ調整である。

以上の如く5類に分類したが，この時期は，I類はIIIB期に，II類はIV期に，III類はV期に，IV類はVI期に，V類はVII期に属するものと思われ，6世紀後半から8世紀にわたるものである。

杯（Fig. 76-21～40）

I類（Fig. 76-21～23）　立上りは1cm～1.1cmと短く，わずかに内傾する。口径は14cm～14.5cmである。立上りと内傾斜面との境は稜線が入る。残存部はすべて横ナデ調整である。灰色で焼成は良好である。胎土には細粒を含む。

II類（Fig. 76-24）　立上りは0.8cmと短くなり，直立する。立上りと内傾斜面との境は不明瞭である。残存部はすべて横ナデ調整である。灰色で，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

III類（Fig. 76-26～32・34～40）　高台の付くものである。杯部は，口径に比して器高は低い。口縁部は端部が外湾する。高台は，細長く，外方へのびるものと，先端部はわずかに上るもの，短くて，先端部がわずかに上るものの3種類がある。調整法は底部の内外面をナデ，以

外は横ナデを施す。口径は13.5cm～14cmである。色調は灰色ないし暗灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には細粒，小砂粒を含んでいる。

IV類（Fig. 76-33） 高台は，短いが，断面は方形を呈して，しっかりしている。底部内外面はナデであり，以外は横ナデ調整である。色調は暗灰色を呈しており，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

以上の如く4類に分類したが，この時期は，I類はIIIB期に，II類はIV期に，III類はVI期に，IV類はVII期に属すると思われ，6世紀後半から8世紀にわたる。

椀（Fig. 77-41） 口径19cmと大型品である。内外面とも横ナデ調整であり，外面には横ナデの凹凸が著しい。色調は暗灰色を呈しており，外面には灰黒色の自然釉が付着する。胎土には細砂粒を含んでおり，焼成は良好である。

高杯（Fig. 77-42） 脚部の小片である。内外面とも横ナデ調整であり，凹凸が著しい。色調は灰色で，焼成良好である。

土師器（Fig. 77-45～49）

杯（Fig. 77-45・46） 45は口径14.7cm，器高3cmである。底部の内外面はナデ調整であり，

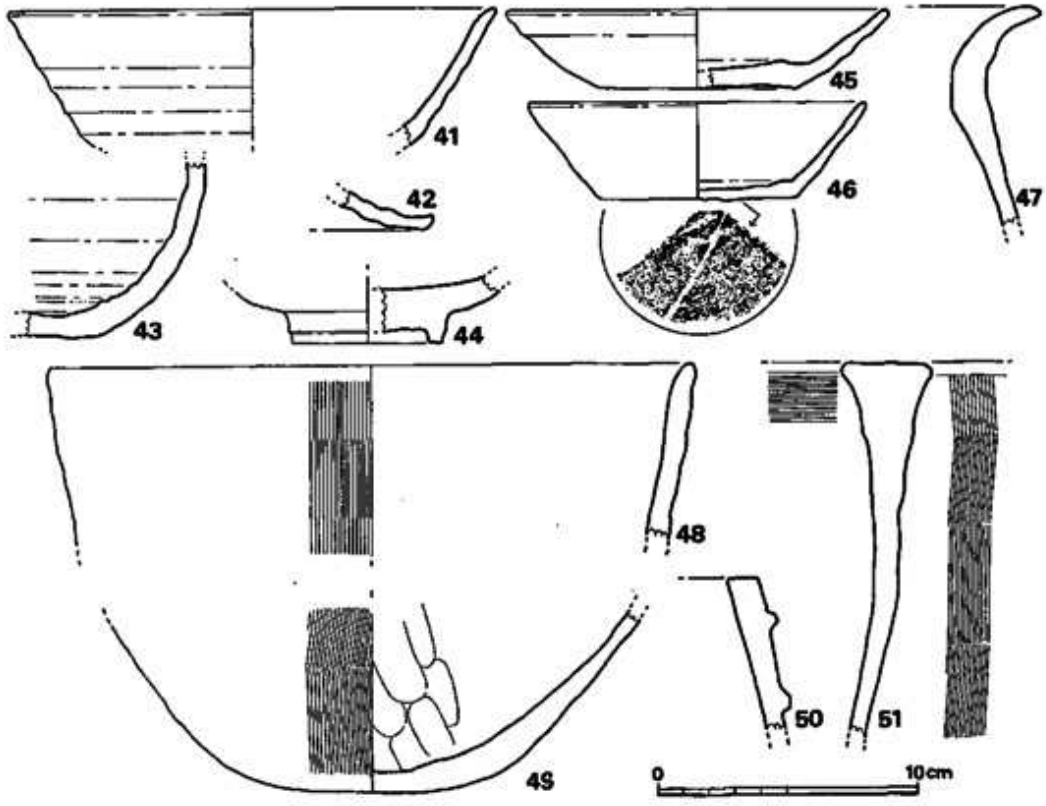


Fig. 77 畑瀬2地点1区出土土器実測図③（縮尺1/3）

以外は横ナデ調整である。褐色で，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。46は底部に板目が入る。口縁部，体部は横ナデ調整である。口径13cm。器高3.7cm。黄褐色で，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

甕（Fig. 77-47～49）　47は口縁部の外反する甕形土器である。外面の口縁以下は，わずかに刷毛目が入る。黄褐色で，焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。48は直口の口縁部を有しており，甕か甑であろう。外面は刷毛目調整を施す。色調は黄褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。49は平底に近い丸底の底部である。底部外面は，火熱を受けて黒変している。刷毛目が入る。内面には，ナデ痕が観察される。灰黄褐色を呈しており，焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。なお，48と49は別個体である。

中世日常雑器（Fig. 77-50・51）　50は火舎の口縁部であろう。色調は灰白色の瓦質であり，焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。二条の突帯が付く。51は，外面に縦方向の刷毛目が入り，内面は口唇部にのみ横方向の刷毛目が入る。口縁端部は平坦であり，体部に比して，著しく肥厚する。灰黄褐色であり，焼成は非常に堅緻である。胎土に砂粒を含む。

青磁（Fig. 77-44）　淡緑色の釉である。底部は厚手造りである。高台は削り出し高台である。

以上の如く述べてきたが，1区出土とした遺物はいずれも遺構上層部より出土しており，弥生時代前期から中期，後期にわたり，古墳時代後期から奈良時代，さらには中世に属する。

（b）2区の遺構と遺物

遺構（Fig. 78）　中段に位置し，表土より40cmほどで，暗黄茶色弱粘質土の地山となり，遺構は地山面で検出された。上層は堆積層であり，弥生時代から，古墳時代，さらに中世の遺物が出土しており，主として，地山直上層より多く検出した。遺構は，竪穴，土壙，ピット，溝状遺構，根石などが検出された。

竪穴　　深さ10cm～20cmであり，方形，もしくは長方形を呈するのかも知れないが，東方部は残存していない。竪穴内には，円形，不定形，のピットが多数検出された。この竪穴は，住居跡になるのであろう。南壁添いの位置より，砂岩製の砥石が検出されており，生活遺構であった事は確かであろう。砥石は，調査中に盗難にあったため現存しない。南北6.8m，東西は残存長4mである。

土壙　　不定形を呈しており1.8m×2m，3m×1.5mで深さ20cm～30cmの浅い土壙であり，土壙内からの遺物の出土はない。

ピット　　円形，楕円形，不定形のものがあり大きさは，10cm～50cm，深さは10cm～50cmである。ピットの性格は柱穴，杭など，多種にわたると思われ，区別は難しい。

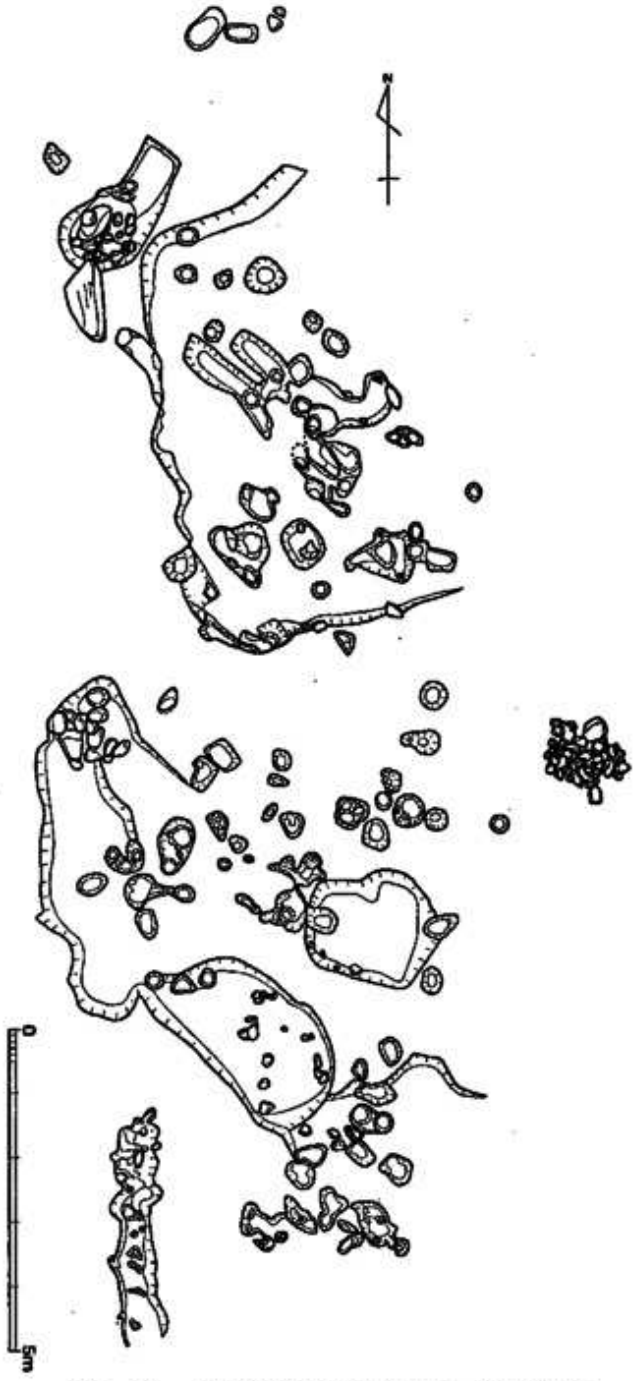


Fig. 78 畑原2地点2区遺構配置図（縮尺1/120）

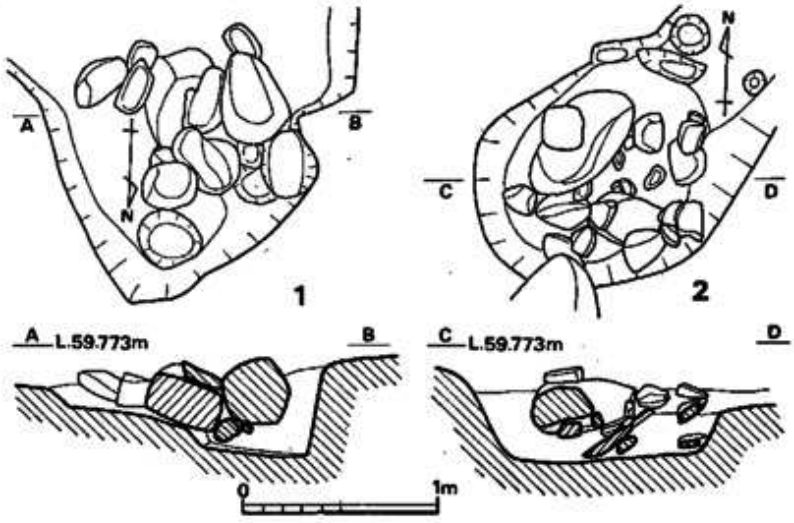


Fig. 79　畑添2地点根石実測図（縮尺1/40）

溝状遺構　長さ3.5m，幅0.7m，深さ20cmで浅くくぼむ。溝状遺構内からは，後述する中世の遺物が検出された。

根石（Fig. 79-1・2）　1区より段落ちした裾部に，二箇所検出された。北側（2）のそれは，1.1m～1.3mの円形状を呈するピット内に，花崗岩の礫石がつまっている。ピットの深さは40cmほどであり，そばには，0.5m×1.2m大の石材があり，この根石上にあったものかも知れない。この根石の，ほぼ，南方7.5mの位置にも，根石（1）がある。ピットは，溝状遺構で切られており，根石の範囲は0.8m～1mであり，ピットの深さは60cmである。

遺物（Fig. 80・81）　遺物は表土以下，遺構面上層より出土し，層位による年代の新旧はなく，特に，遺構直上層より，弥生式土器，土製紡錘車，須恵器が出土し，溝状遺構より中世の遺物を検出している。

弥生式土器（Fig. 80-1～17）　1～4は甕の口縁部であり，2，3，4は「く」字型口縁である。2は外面は，口縁部より刷毛目が入り，口縁部と胴部は刷毛目の方向が逆となる。内面は胴部に刷毛目が入る。色調は黄褐色を呈しており，焼成は良好である。3は口縁部下の内外面に刷毛目が入る。内面のそれは，単なる刷毛ナデであり粗雑である。外面は黒変している。黄褐色で，焼成は良好である。4は内面に叩き痕が残る。灰黄褐色で，焼成は良好である。

甕棺（Fig. 80-5）　後期初頭の甕棺の口頸部である。口縁部直下には沈線が入る。褐色で焼成は良好である。胎土に砂粒を含む。

底部（Fig. 80-6～15）　壷と甕の区別は明瞭でない。いずれも平底であるが，13，14，15は底部と胴部の境は丸味を帯びてくる。6はわずかに上げ底であり，外面には刷毛目が入る。7は外面を篦磨きする。11は，内外面とも刷毛目が入る。13は外面に刷毛目が入る。14は，内面

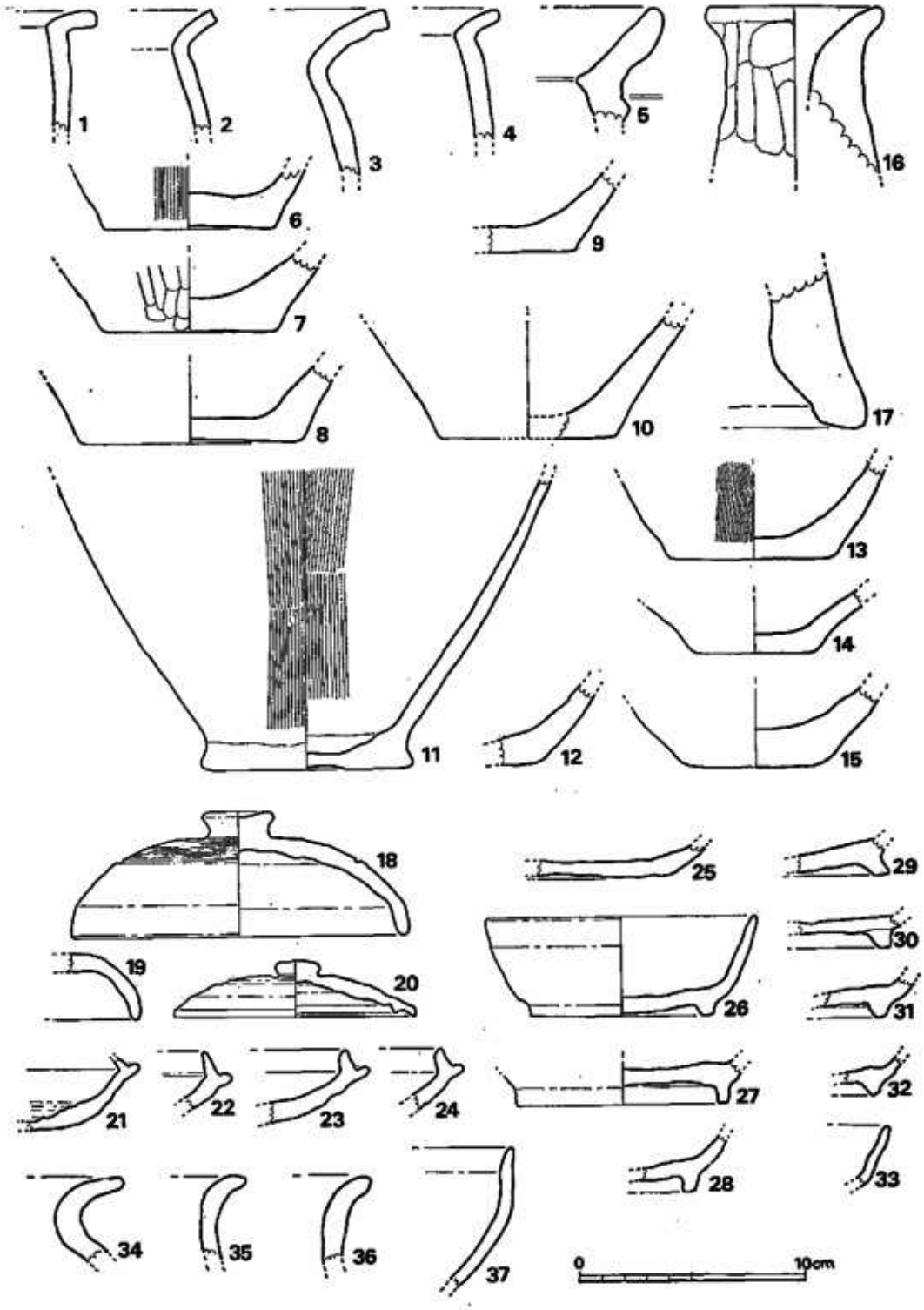


Fig. 80 畑添2地点2区出土土器実測図（縮尺1/3）

を丹塗りしており，外面は不明である。壷であろう。15は底部は平坦ながらも全体に丸味を有する。色調は全体に黄褐色を呈しており，焼成は良好である。

器台（Fig. 80-16・17）　16と17は同一個体と思われる。厚手づくりである。くびれ部は上方にあり，外面は篦削りしている。黄褐色で，焼成は良好である。胎土には多量の小砂粒を含む。

以上の如く，弥生時代の中期から後期にかけての遺物を出土している。

須恵器（Fig. 80-18～33）

高杯の蓋（Fig. 80-18）　高杯の蓋であろうと思われる。頂部を押さえたつまみがつく。天井部と体部の境には一条の沈線が入る。つまみ周辺の天井部には篦削りの上から櫛描目が入る。全体に一様の厚さがあり，口縁部に到っても，特に器壁をせばめない。口径15cm，器高5.5cm。灰色で，焼成は良好である。

杯蓋（Fig. 80-19・20）　口縁部の形態により2類に分類される。

Ⅰ類（Fig. 80-19）　口縁部は丸く造られている。天井部は篦削りしており，以外は横ナデ調整である。灰色で，焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

Ⅱ類（Fig. 80-20）　口縁部には身受けのかえりがつくが，かえりは，わずかであり，口縁部水平面より内方にある。天井部のつまみ周辺部は篦削りしている。以外は内外面にわたって，横ナデ調整である。灰色で，焼成は良好である。

Ⅰ類はⅢB期に属し，6世紀後半であり，Ⅱ類はⅥ期に属し，7世紀後半頃のものである。

杯（Fig. 80-21～33）　身に蓋受けのかえりを有するものと，かえりはなく高台の付くものとに2分類される。

Ⅰ類（Fig. 80-21～24）　小片であるため，全体の大きさは不明であるが，立上りは1cm～1.1cmで同一時期のものである。23，24の立上りは太くて，上部は外反する。22は灰黄褐色で焼成は不良であるが，他は灰色で，焼成良好である。

Ⅱ類（Fig. 80-26～32）　高台の形態によりa，b，cに細分される。

Ⅱa類（Fig. 80-26～28）　高台は短いが，底面は平坦である。26は口径12cm，器高4.4cmであり，底部内外面はナデ，以外は横ナデ調整である。灰色で焼成は良好である。胎土には砂粒をわずかに含む。

Ⅱb類（Fig. 80-29・30）　高台は底面は平坦であるが，外方へ引き出される。残存部はナデ調整であるが，高台部は横ナデ調整である。29は溝状遺構内より出土している。灰白色で，焼成は不良である。胎土には細砂粒を含む。

Ⅱc類（Fig. 80-31・32）　高台は内方のみが地につく。底部内面はナデであり，外面は横ナデ調整である。灰色で，焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。

Ⅰ類はⅢB期に属し，6世紀後半に比定されⅡ類はⅥ期に属し，7世紀後半に比定されよう。

土師器 (Fig. 80-34～37) 34～36は，口頸部であり，35, 36は甕であり，34は壺であろうか。34は黄褐色で，焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。35, 36は淡茶褐色ないし茶褐色で，焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。37は鉢であろう。器壁はうす手づくりであり，焼成は良好。色調は，灰赤褐色を呈し，胎土には小砂粒を含む。

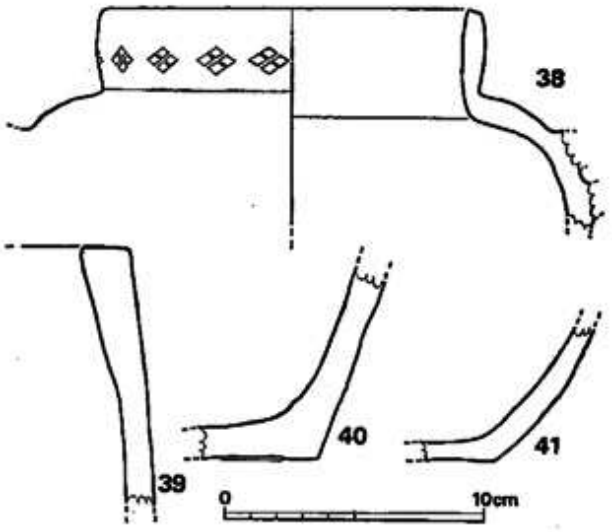


Fig. 81 畑添2地点2区出土土器実測図 (縮尺1/3)

中世日常雑器 (Fig. 81-38～41) 38は直立する口縁部をもち，口縁外面には「四つ菱」のスタンプが入る。胴部には中空の把手が付く。色調は灰白色で，焼成は不良である。胎土には多量の小砂粒を含む。39, 40は同一個体であり，暗灰色の瓦質である。胎土は良好である。火舎であろうか。溝内より出土している。41は溝内より出土しており，外面には刷毛目が入る。底部周辺には煤が多量に付着する。暗灰黄色で，焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。

紡錘車 (Fig. 82) 土製品である。黄褐色で，焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。直径4㎝，厚さ1.2㎝。弥生時代に属する。孔は0.7㎝×0.6㎝である。

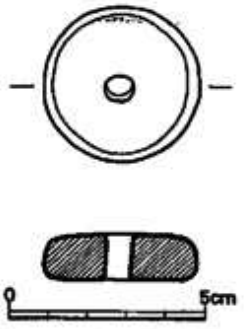


Fig. 82 畑添2地点紡錘車 (縮尺1/2)

(c) 3 区の遺構と遺物

遺構 (Fig. 83, PL. 49) 3区は調査範囲内では最下段にあたる。東西にトレンチを入れた結果，地山は，東方へ急激に下向していた。東端部では，地表より3.4mで灰黄色粘土の地山に到達する。地山上層は表土まで堆積土層であり，砂層が主である。斜辺は地山上に石材を黒色粘質土でおおっており，この粘土は非常にかたい。この3区の斜辺は1区，2区をとり囲んでおり，1区，2区を意識して造られた事は確かである。遺物は黒色堆積土より，弥生式土器，須恵器が出土している。

遺物 (Fig. 84)

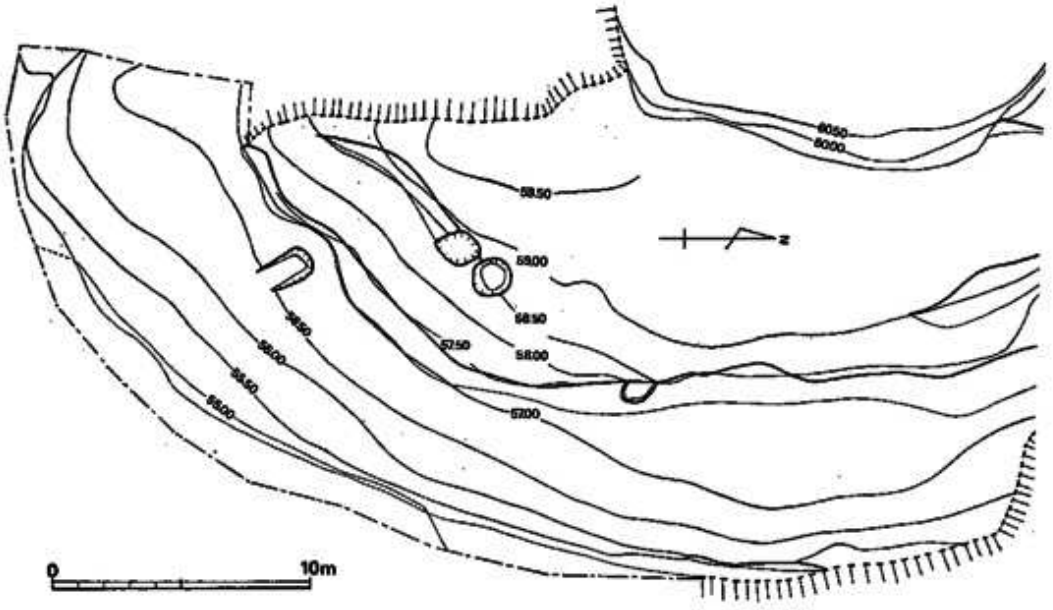


Fig. 83　畑添２地点３区遺構実測図（縮尺1/300）

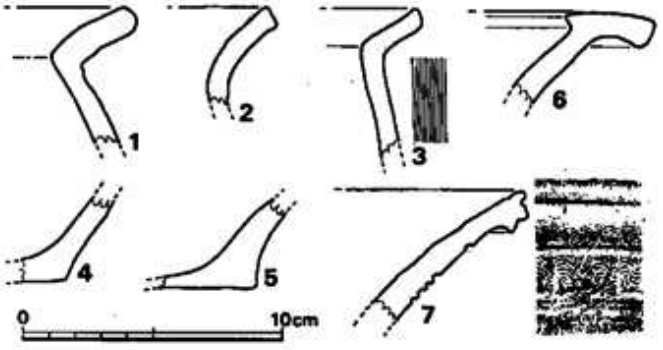


Fig. 84　畑添２地点３区出土土器実測図（縮尺1/3）

弥生式土器（Fig. 84-1～6）　1～3は甕の口頸部と胴部の小片である。1，3はいわゆる，「く」字型口縁である。3は胴部外面に細い刷毛目が入る。4，5は底部で，平底である。6は高杯であり，口縁端部は，わずかに下降している。

須恵器（Fig. 84-7）　甕の口頸部の断片である。口唇部には沈線が入り，頸部外面にも，1条と，4条の沈線が入り，この間に櫛描波状文が入る。須恵器は図示した以外に甕か壺の胴部の小片と杯の小片が出土している。3区には弥生時代から，古墳時代の遺物が散在していた。

3 小　　結

弥生時代から中世にいたる遺構と遺物の説明をしてきたが，1区で検出された住居跡について，もう少しふれて見たい。住居跡は8軒検出されており，遺物より見た年代は，6世紀終末から7世紀，さらには8世紀に入るものもある。

1号住居跡は，7世紀前半に属し，2号住居跡は遺物がなく不明であるが，弥生時代中期の甕棺の墓壙を切っており，これよりも後出する事は確かである。3号住居跡は6世紀終末から7世紀前半に属する。4号住居跡は3号住居跡と同時期である。5号住居跡は7世紀前半～7世紀後半に属し，1号住居跡と同時期である。6号住居跡は7世紀後半に属する。7号住居跡は，はっきりしないが，カマドを有することから，他の住居跡と大差ない時期であろう。8号住居跡は6号住居跡と同時期の7世紀後半に比定され，さらに8世紀まで続いたものであろうか。以上，出土遺物より，その年代を考えて見たが，住居跡群は3類に大別されそうだ。まず，Ⅰ類は，3，4号住居跡の6世紀終末の時期，Ⅱ類は，1，5号住居跡の7世紀前半の時期，Ⅲ類は，6，8号住居跡の7世紀後半を中心とした時期に分けられそうである。そうすると，同一時期の住居跡は，2～3軒の単位で存在したということになろう。それ位だと，1区の小範囲でも充分の空間は保たれたことであろう。カマドの付設がはっきりしていたのは，1号，3号，7号，8号の4軒であった。この時期としてはカマドの付設は普遍化しているのであるが，調査時にはすでに削除されていたものや，ほとんどのカマドが北，ないしは北西に付くが，その北壁を欠損している6号住居跡などを除くと，はっきりカマドがないと断言できるのは5号住居跡である。そうすると，年代不詳の2号住居跡を除くと7軒のうち6軒はカマドが付設されていた。住居跡の方位は，北もしくは北西と統一している。規模は，大は4.4m×4.8m，小は2.95m×2.7mであり，4m大のものが多数をしめている。

ところで，本遺跡周辺での調査により古墳時代から奈良時代の集落跡を検出した遺跡には，まず，太宰府町の裏ノ田遺跡(註1)がある。この遺跡からは27軒もの6世紀前半の住居跡が検出され，しかも，カマドを付設していた。ついで筑紫野市野黒坂遺跡(註2)がある。ここからは，6世紀前半から7世紀にかけての住居跡が24軒検出されており，そのうち，7世紀に入るものは1軒で以外は全部，6世紀代のものである。このうち，カマドを持つものは18軒ある。規模は，大は6.68m×6.55m，小は2.88m×2.55mであり，4m大のものが多い。形状はすべて方形である。筑紫野市大曲り遺跡(註3)では5世紀後半のカマドのまだ付設されていない時期の住居跡1軒と，6世紀末から7世紀初頭にかけての住居跡7軒を検出している。7軒のうち，5軒はカマドが付設されており，残りの2軒は焼土は存在するがカマドとしては不鮮明とされている。規模は，大は8.3m×7.8m，小は4m×4mであり，4mから5mの間が多い。形状は，方形，

長方形，隅丸方形がある。

筑紫野市塔ノ原遺跡(註4)では7世紀後半を中心とし，カマドを付設した3軒の住居跡が検出されている。ここでは大きいもので，3.7m×2.6mの規模である。太宰府町成屋形遺跡(註5)では，7世紀後半の住居跡が2軒と8世紀後半の住居跡1軒の総数3軒の住居跡が検出されている。ここでは円形と方形とがあり，規模は3m×3.15mである。以上，周辺部の遺構をとりあげたが，県内では，古墳時代から奈良時代の集落の発掘調査が相次いでおり，従来，少なかった，カマドを付設した住居跡が次々と検出されてその数を増やしてきている。カマドの付設については6世紀前半から行なわれて，以後は，普遍化しているが，5世紀代のものは，住居跡の資料も少ないが九州ではまだカマドを付設した住居跡は検出されていない。　　(川述昭人)

註　1）酒井仁夫「教育福岡」No.274，1972年.

2）松岡史・前川威洋・副島邦弘「野黒坂遺跡」福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ，1970.

3）伊藤玄三・近藤喬一・寺島孝一「大曲り遺跡」福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ，1970.

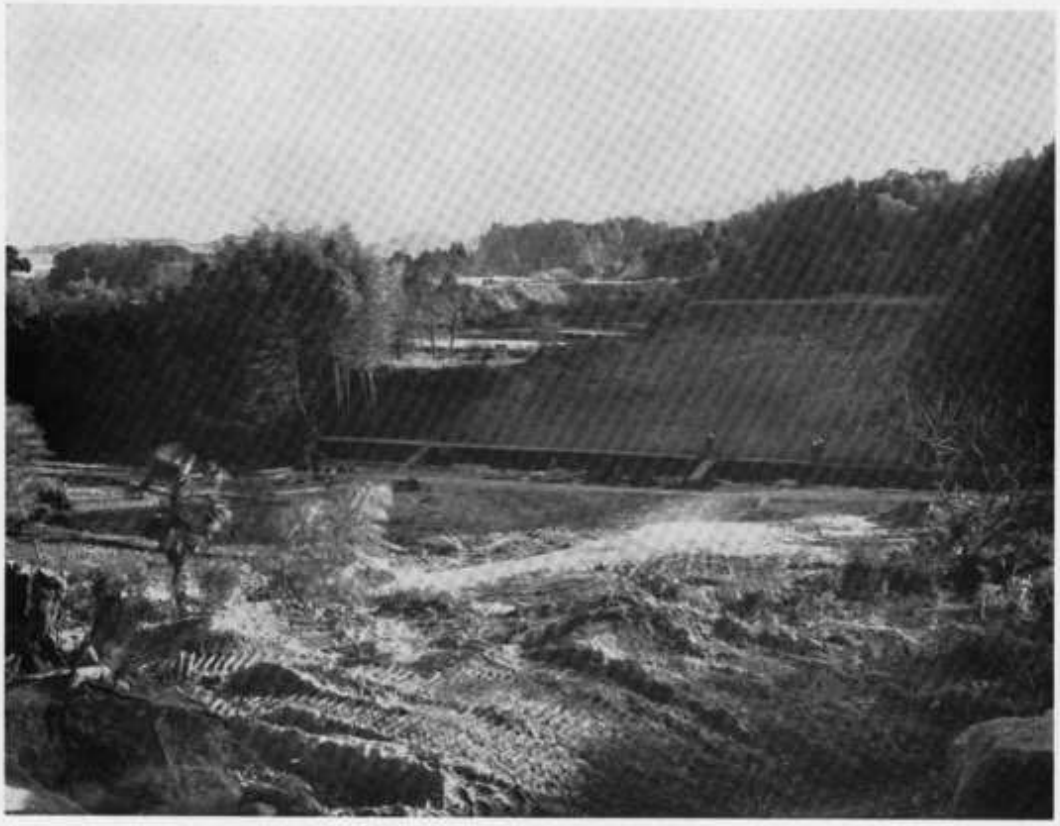
4）酒井仁夫・中間研志「塔ノ原遺跡」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ，1974.

5）亀井明徳・横田賢次郎「成尾形遺跡」古代住居跡発掘調査報告，福岡県教育委員会，1970.

畑添2地点

PLATES

(1) 畑添 2 地点 遠景 (南から)



(2) 畑添 2 地点 遠景 (北から)

畑添2地点　全景

（東から）

畑添2地点　1区全景

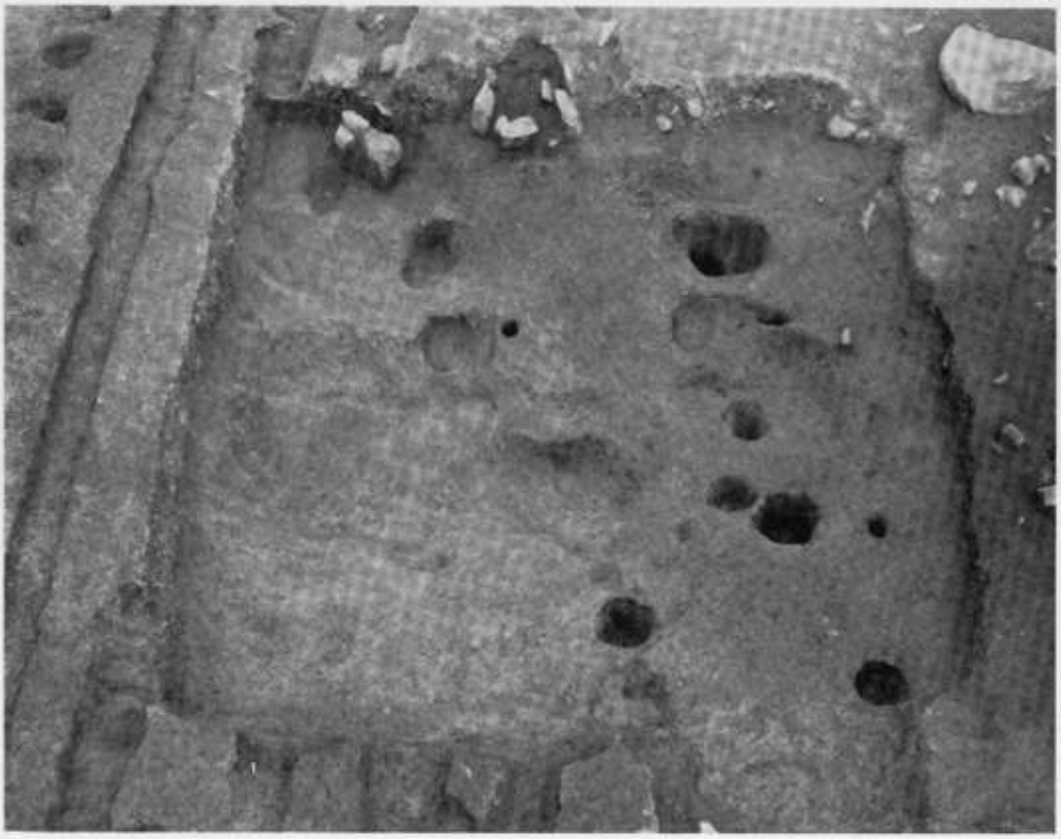
（東から）

（1） 畑添２地点　１区北半部　（西から）

（2） 畑添２地点　１区南半部　（西から）

(1) 畑添2地点　甕棺墓

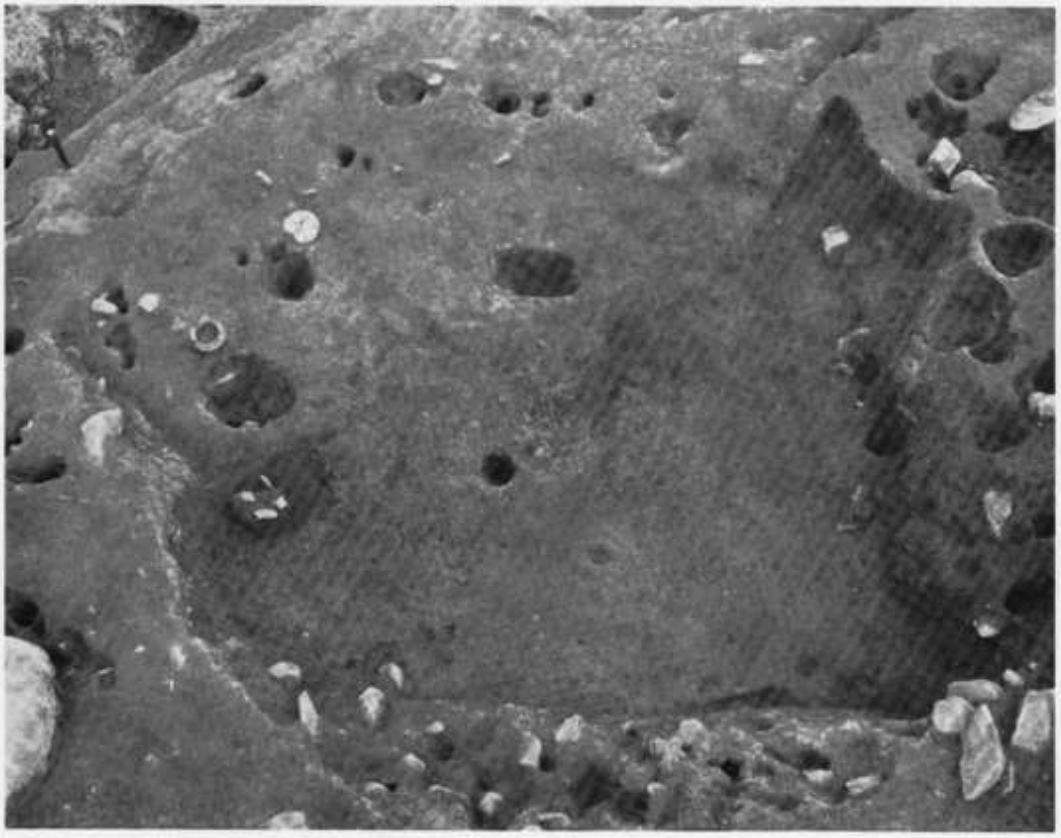
(2) 畑添2地点　第1号住居跡竈



（1） 畑添２地点　第１号住居跡　（南から）

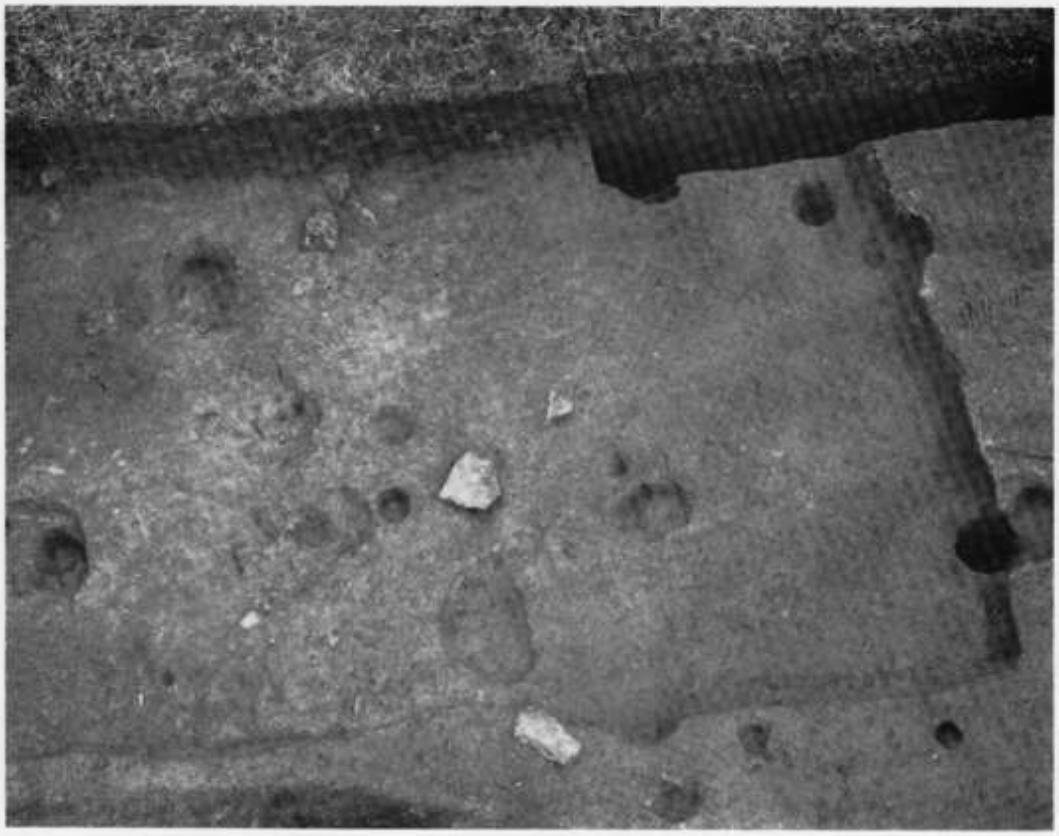
（2） 畑添２地点　第２号住居跡　（東から）

（1） 畑添2地点　第3号住居跡 土層断面　（西から）

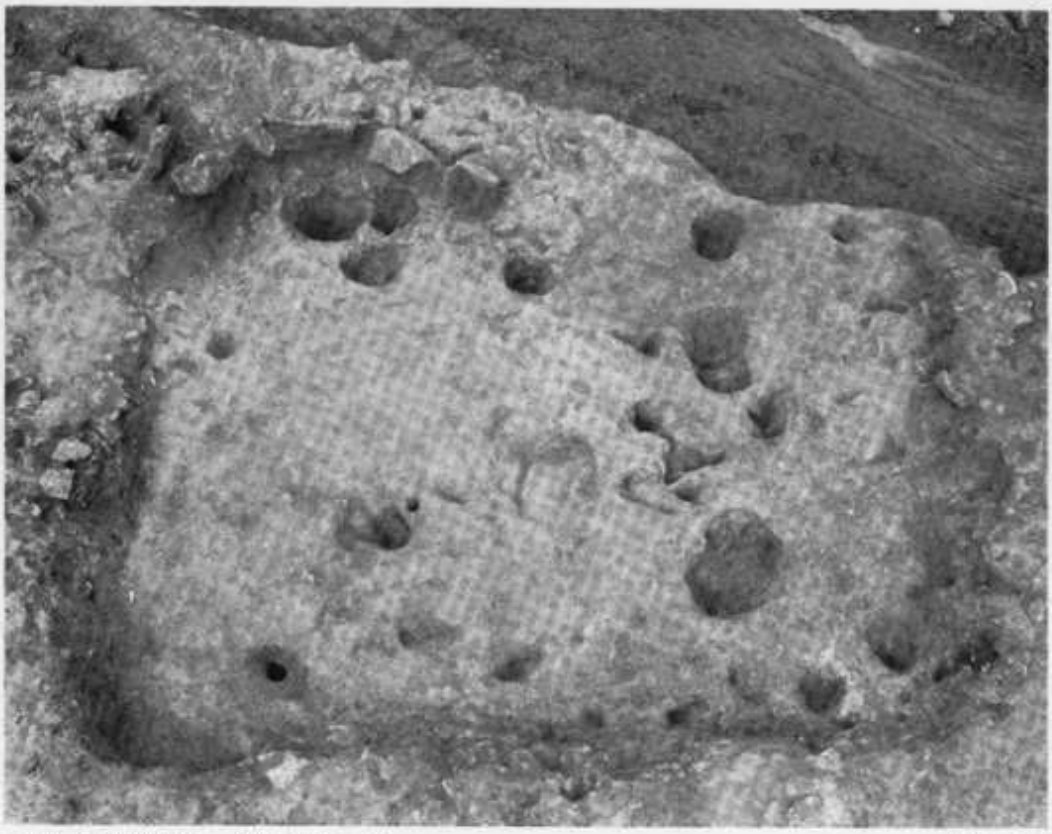


（2） 畑添2地点　第3号住居跡　（北から）

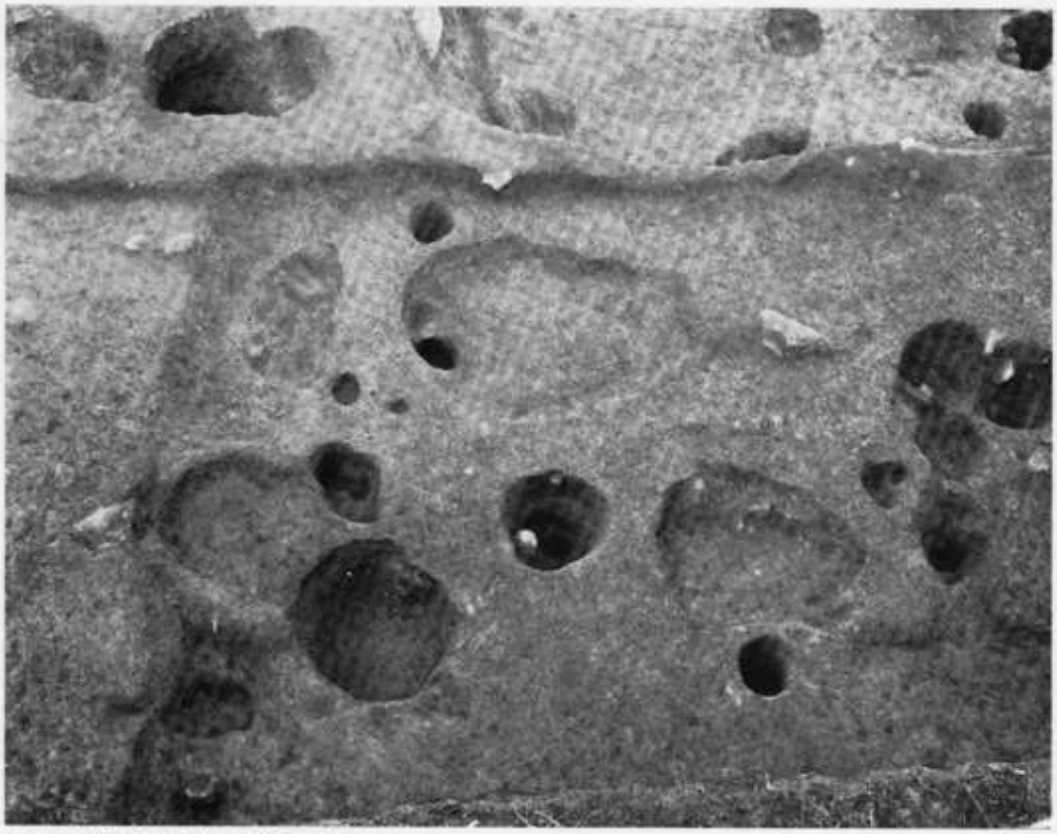
（1） 畑添２地点　第４号住居跡　（南から）



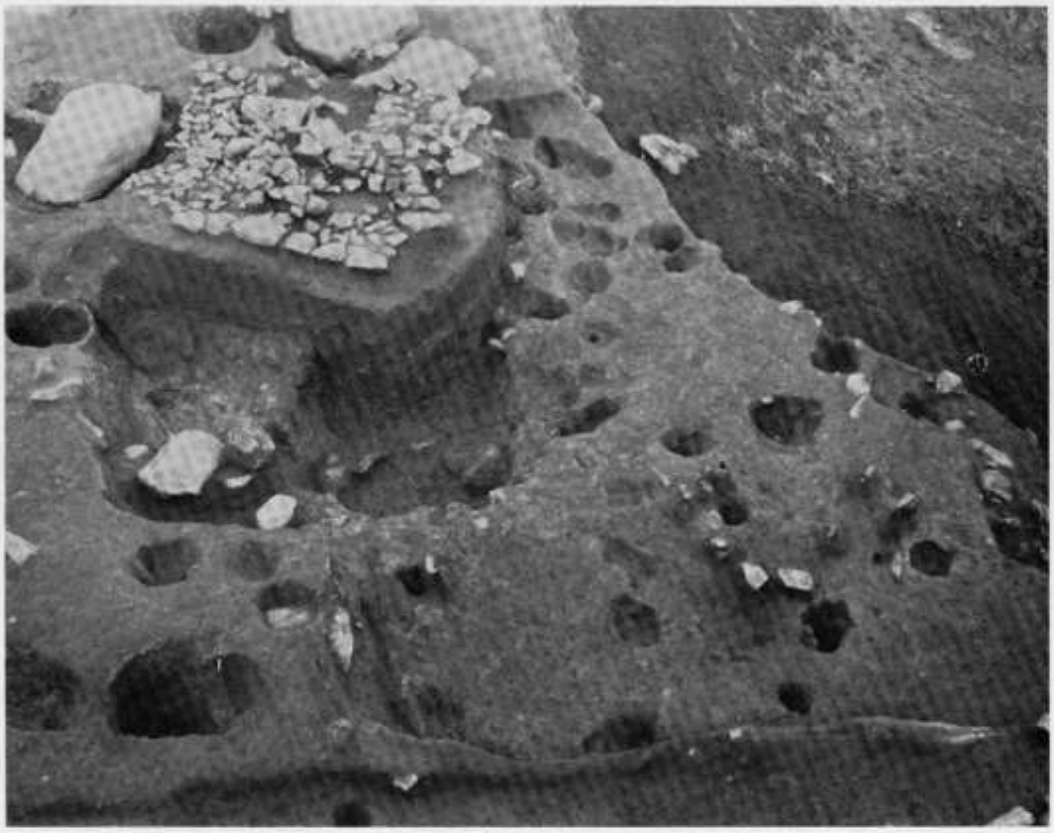
（2） 畑添２地点　第５号住居跡　（東から）



（1） 畑添2地点　第6号住居跡　（南から）



（2） 畑添2地点　第7号住居跡　（西から）

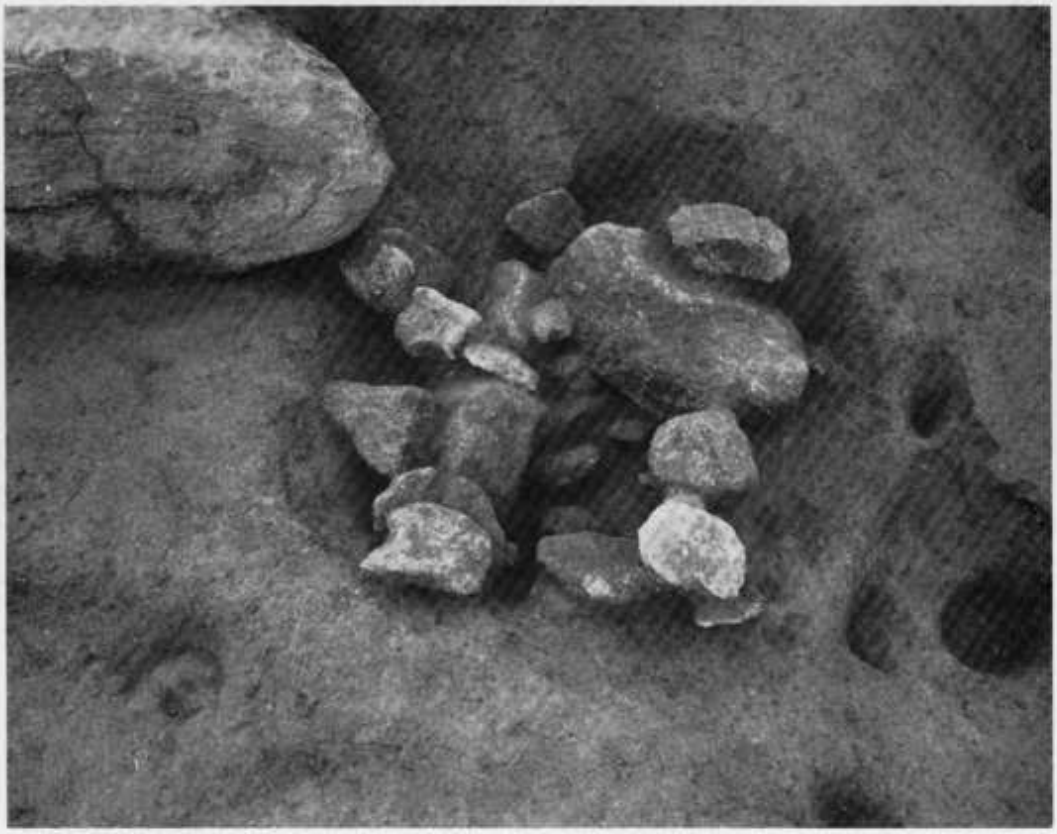


（1） 畑添２地点　第８号住居跡　（西から）

（2） 畑添２地点　第７号・８号住居跡　（西から）

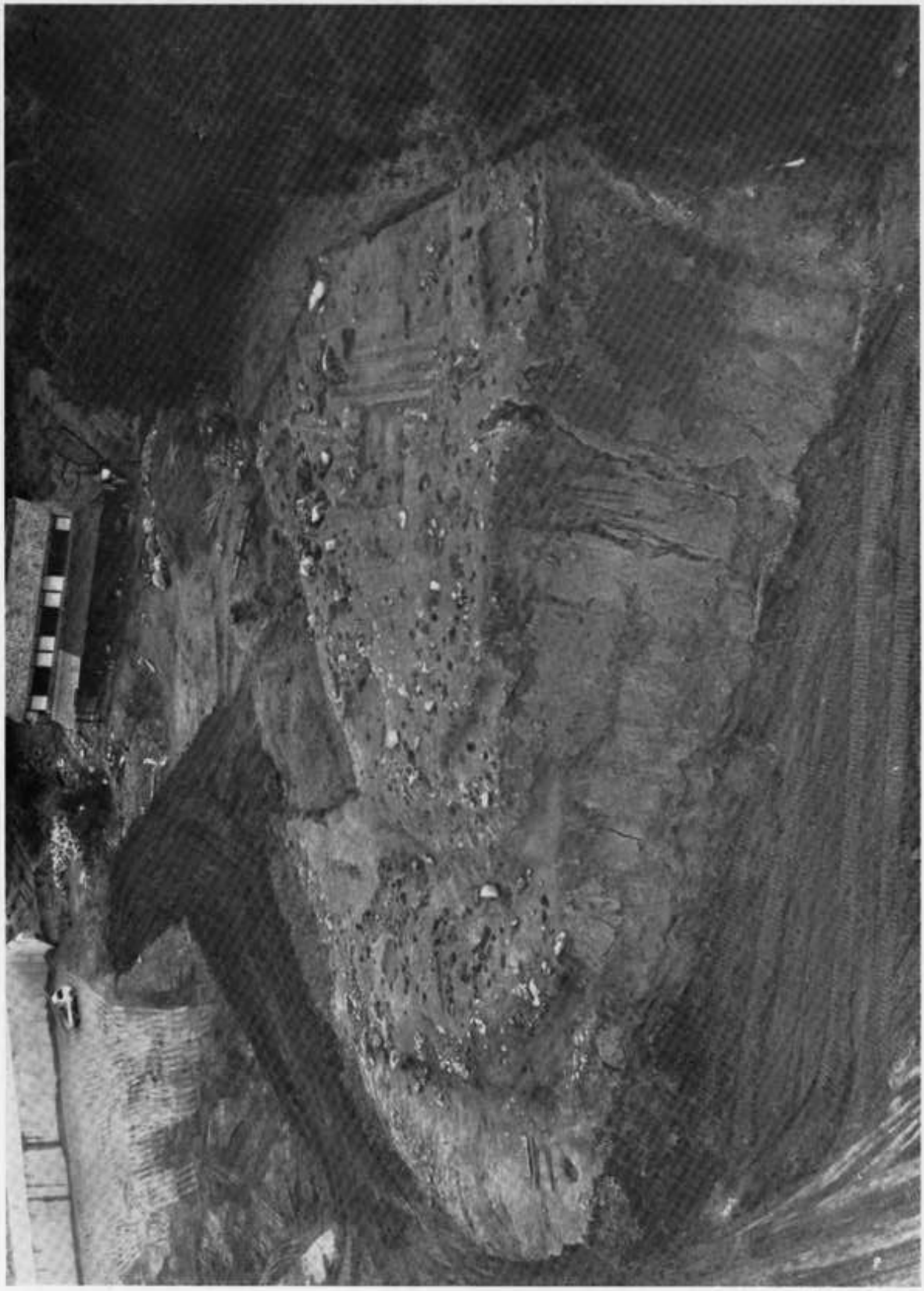
(1) 畑添2地点　配石遺構　(北から)

(2) 畑添2地点　2区全景　(西から)

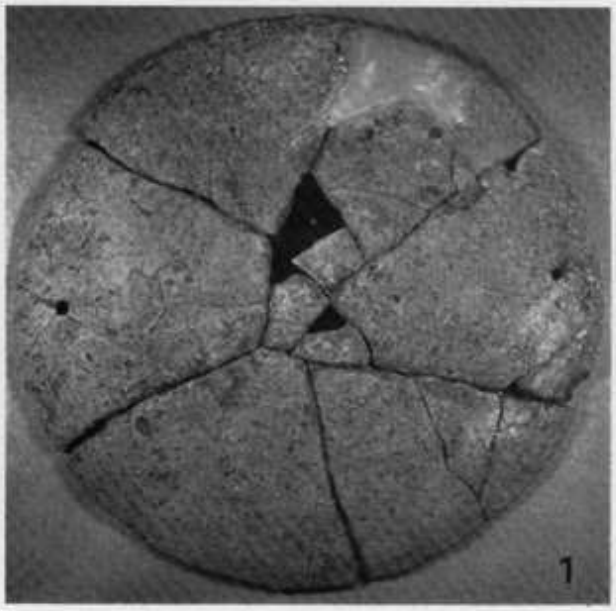


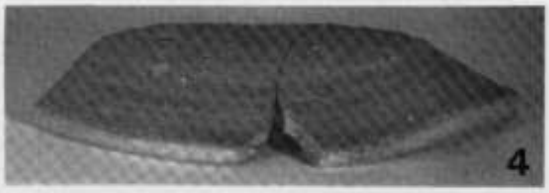
(1) 畑添 2 地点　根石

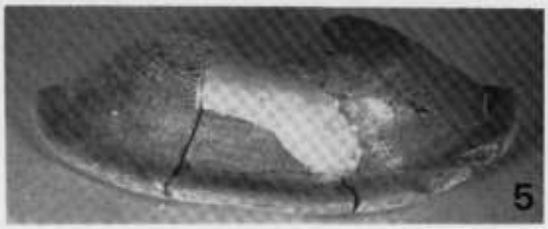
(2) 畑添 2 地点　3 区全景　(南から)



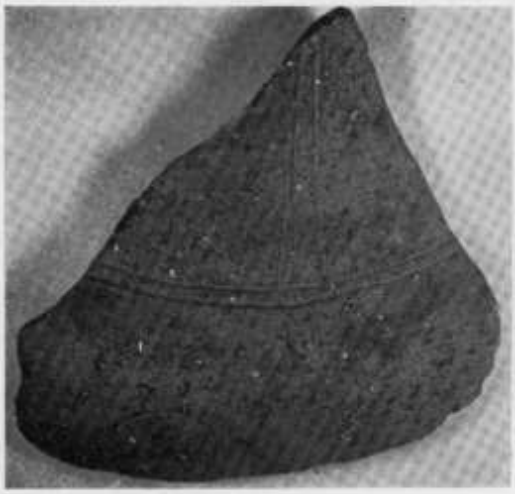
期 線 2 地 点　全 景　(北から)



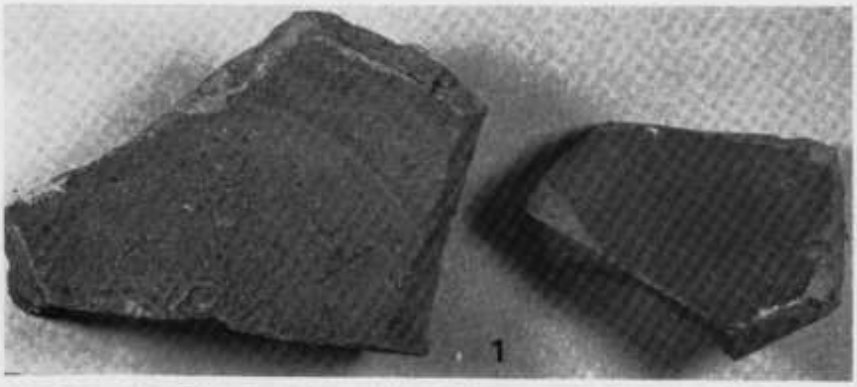


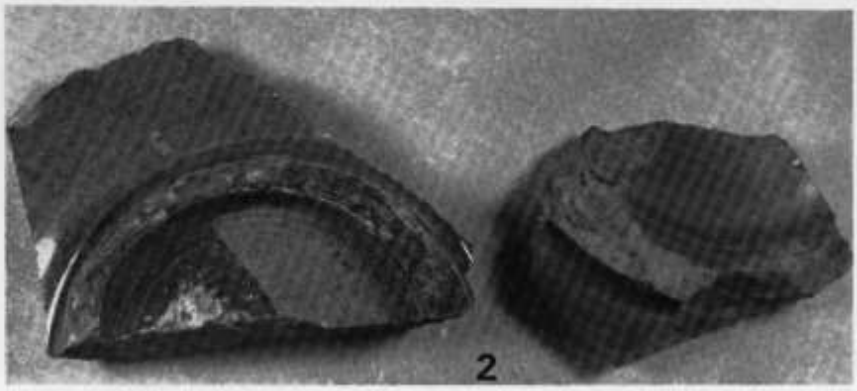


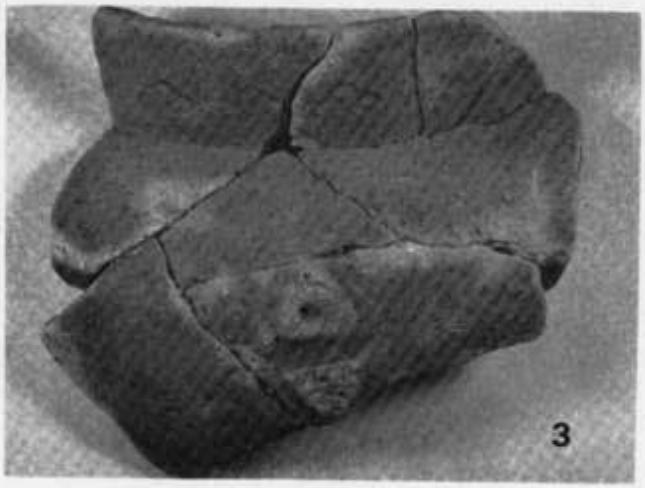
畑添２地点　　１区出土土器　（１・９は３号住居跡）

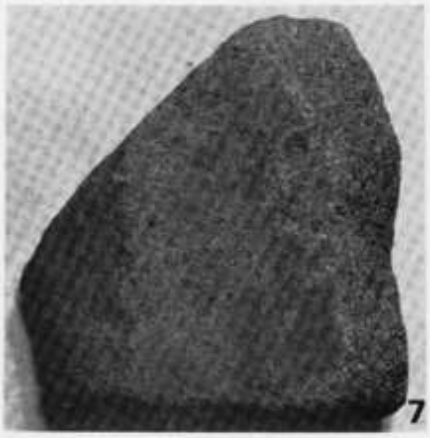


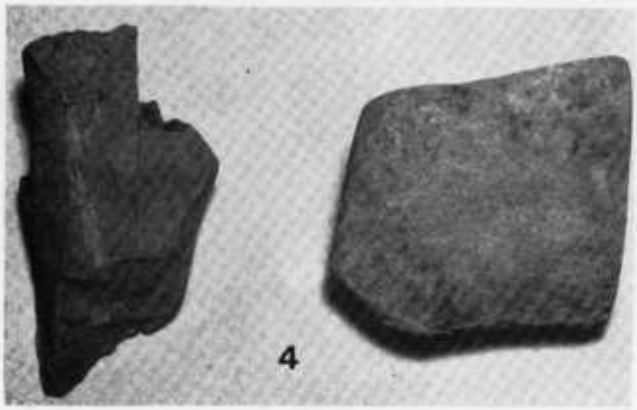
畑添2地点　弥生式土器，紡錘車











4は1号住居跡出土
5は5号　〃
6は4号　〃
7は8号　〃

畑添2地点　砥石・磁器など

Ⅷ 桶田山遺跡

筑紫野市所在墓地群・土壙群の調査

Ⅷ 桶田山遺跡の調査

1 位置と環境 (Fig. 85)

桶田山遺跡は太宰府町の南方，背振山塊の東北端にある天拝山（標高257m）麓に位置している。大宰府郭内は奈良時代から平安時代にかけて平城京や平安京とともに「遠の朝廷」と呼ばれ繁栄を誇っていたところであり，数々の遺跡や寺院跡がある。また，桶田山遺跡の丘陵からは西方から東方にかけて，二日市の町並とその南北に広がっている筑紫平野を一望にでき，更に宝満・三郡・若杉山がせまり，大根地山や四王寺山もみえる。弥生時代から古墳時代にかけての遺跡である針摺野黒坂遺跡や永岡遺跡，立明寺古墳群，阿志岐シメノグチ遺跡，裏の田遺跡，乙金古墳群などがある。

桶田山遺跡は筑紫野市大字塔の原にあり，この遺跡に至るには，国鉄鹿児島本線二日市駅で下車し，この踏切を渡って西方の神亀5年（727年）に大伴旅人が逗留したという二日市温泉街を横切ると県道5号線に出る。この5号線を北へ向って約800mあまり歩くと左手上方に原口池の土手がみえる。桶田山遺跡はその右手約30m行った所の標高49mの丘陵である。これより更に北へ数10m行くと道脇に，十王堂跡なる大きな礎石がある。これは塔の原廃寺と伝えられている。更に北へ行くと塔の原遺跡，唐人塚遺跡，杉塚廃寺，剣塚遺跡へと続くのである。九州縦貫道路は，剣塚，唐人塚，塔の原，桶田山，道場山，八隈，畑添，山の口，蔵祇，立明寺の各遺跡を破壊してゆくのである。天拝山麓は至るところに舌状台地が張り出し，背後の山，前方の平野と好条件が揃っており，先人の住むところとなったのであろう。では桶田山遺跡周囲の遺跡はどうであろうか。年代別に述べてみたい。

まず，縄文時代の遺物としては塔の原遺跡がある。ここでは後期西平式土器や石器類が出土している。

弥生時代前期は，住居跡と貯蔵穴群・甕棺墓・木棺墓・土壙墓が調査された剣塚遺跡，甕棺墓・木棺墓を検出した塔の原・道場山遺跡がある。道場山・畑添・山の口遺跡はそれぞれ貯蔵穴も検出されている。

弥生中期になると，甕棺墓の遺跡数が多くなり，道場山・八隈・原口遺跡が上げられる。住居跡は八隈遺跡にみられる。

弥生後期は，八隈・剣塚遺跡の住居跡，道場山遺跡の甕棺墓があげられる。

弥生終末期から古墳時代初頭にかけては，剣塚・桶田山・唐人塚・道場山遺跡の箱式石棺墓や石蓋土壙墓を検出した唐人塚・剣塚遺跡がある。

古墳時代前期になると，剣塚の前方後方墳や方墳，原口の前方後円墳があげられる。住居跡は八隈遺跡に確認されている。

更に時代が下がると剣塚前方後円墳が営まれ，古墳が多くなり，埴安・剣塚・原の前・唐人塚・八隈・萩原・扇祗古墳があげられる。

7世紀になると住居跡が塔の原・八隈遺跡に認められ，奈良時代になると，塔の原廃寺，杉塚廃寺，武蔵寺などが建立される。

平安時代以降になると，木棺墓が検出された剣塚・塔の原・桶田山遺跡があり，剣塚遺跡では瓦窯趾も1基確認されている。土壙墓が剣塚・唐人塚・桶田山遺跡にみられる。

鎌倉時代の遺構としては，火葬墓を3基検出した剣塚遺跡，堀状の溝のある桶田山遺跡があげられる。

江戸時代の遺構として，八隈の円墳を築山として利用した庭園がある。これに付随して屋形の跡も検出されている。

ところで桶田山遺跡は花崗岩を基盤とするバイラン土壌から成っている。本遺跡はひとつの独立した丘陵になっているが，以前は西側の原口池附近と同じ比高をもった舌状台地であったと推定され，中央附近が道路や水田，堤防造成等により切断されたのであろう。(中牟田貫治)

参　考　文　献

(1) 福岡県教育委員会『塔原廃寺』　福岡県文化財調査報告書第35集　1967

(2) 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ』　1971

(3) 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』　1974

(4) 島田寅次郎『異例の古墳』　『福岡史蹟名勝天然紀念物調査報告巻第10輯』　1935

(5) 福岡県教育委員会・筑紫野市教育委員会『祖先のあしあと』　九州縦貫道関係筑紫野市所在遺跡の調査報告会資料　1974

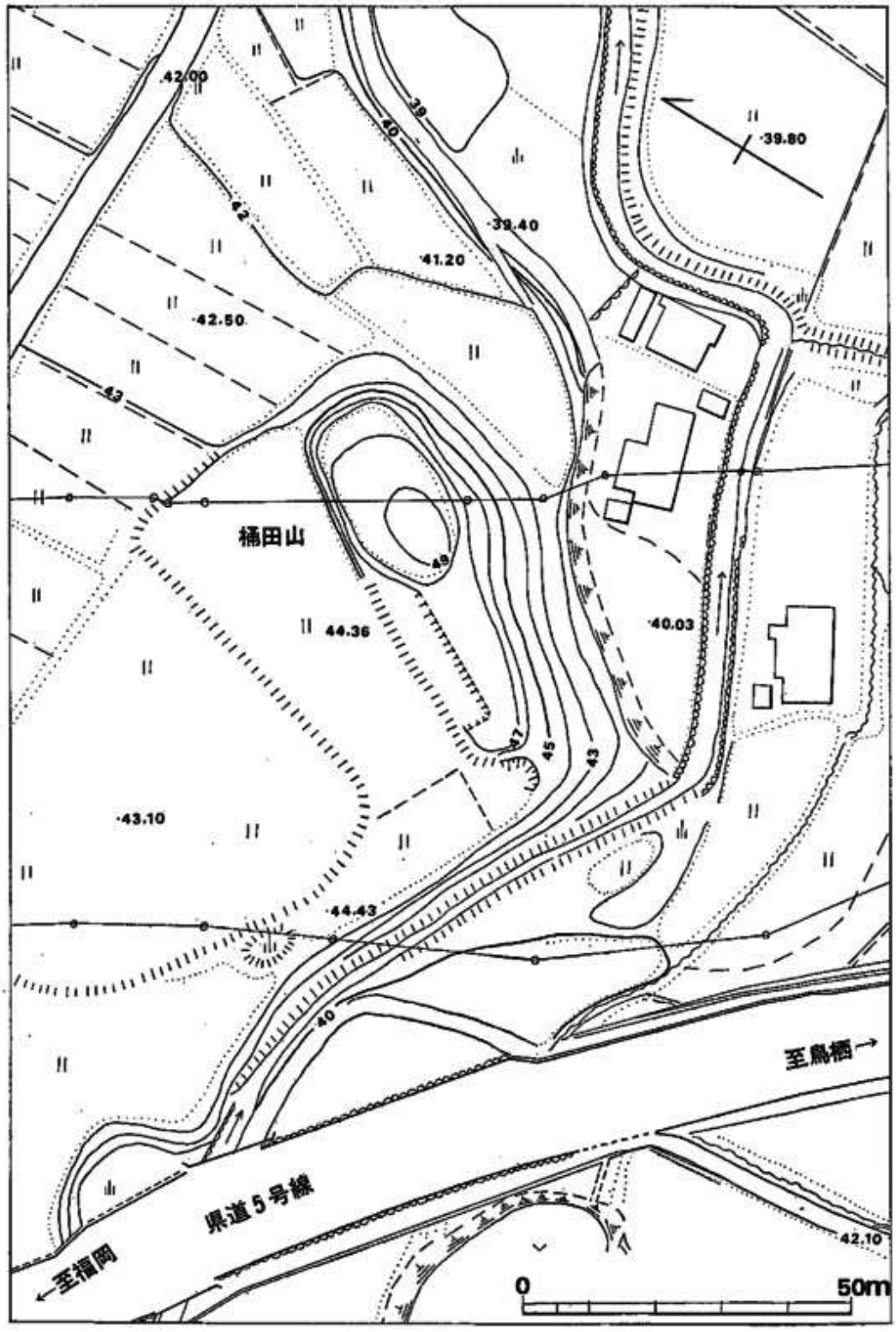


Fig. 85 桶田山遺跡周辺地形図（縮尺1/1,000）

2 調 査 の 経 過

九州縦貫自動車道路の建設工事は進み，埋蔵文化財の調査は，昭和49年度に入って太宰府町・筑紫野市地区では数ケ所の遺跡の調査を残すだけとなっていた。

桶田山遺跡は，3月中旬にＳ４号の箱式石棺の所在が確認されたため，4月以降，調査体制を新たに組み調査することとなった。

総　　括	福岡県教育庁管理部文化課	課　長	藤井　功	
	同	課長補佐	平井元治	
	同	調査係長	松岡　史	
	同	庶務係長	前田栄一	
調　査　員	同	技　師	栗原和彦	（現場担当者）
	同	同	中間研志	
調査補助員			中牟田賢治	
庶務会計	福岡県教育庁管理部文化課	主　事	山本文和	
	同	嘱　託	因　将太	

なお，この他に文化課の石山勲・酒井仁夫・川述昭人・佐々木隆彦の協力があり，実測にあたっては，次郎丸達朗・進博次・福島均・佐藤保雄・森和代・三津井和幸の協力があった。また，報告書の作成にあたり重松絢子・伊東登美子の協力があった。現場作業は，太宰府町大字水城の方々・筑紫野市大字杉塚の方々にあたっていただいた。

桶田山遺跡は，土地の人々から「オケラ山」とか「オケタ山」とか呼ばれ，一部に「平塚」と呼ぶ場所もあり発掘調査開始当初には，横穴式古墳の残骸が発見されるのではないかと予想された。

発掘調査は，高速道路の工事の進行状況に合わせ，まず本線部分の調査を優先させ，その東側，側道部分・宅地移転予定地の部分までを実施することになり3月27日から開始した。最初に見つかっていたＳ４号に次いで，Ｓ１・Ｍ１・Ｓ３・Ｓ２などが見いだされ，5月10日にはＰ10からＳ10を結ぶ本線部分の遺構は，おおかた検出された。次いで，本線部分の実測と平行して東側の遺構の検出を行い，6月上旬に東半部の遺構検出を終了，6月27日に実測までのすべての作業を完了した。

（栗原和彦）

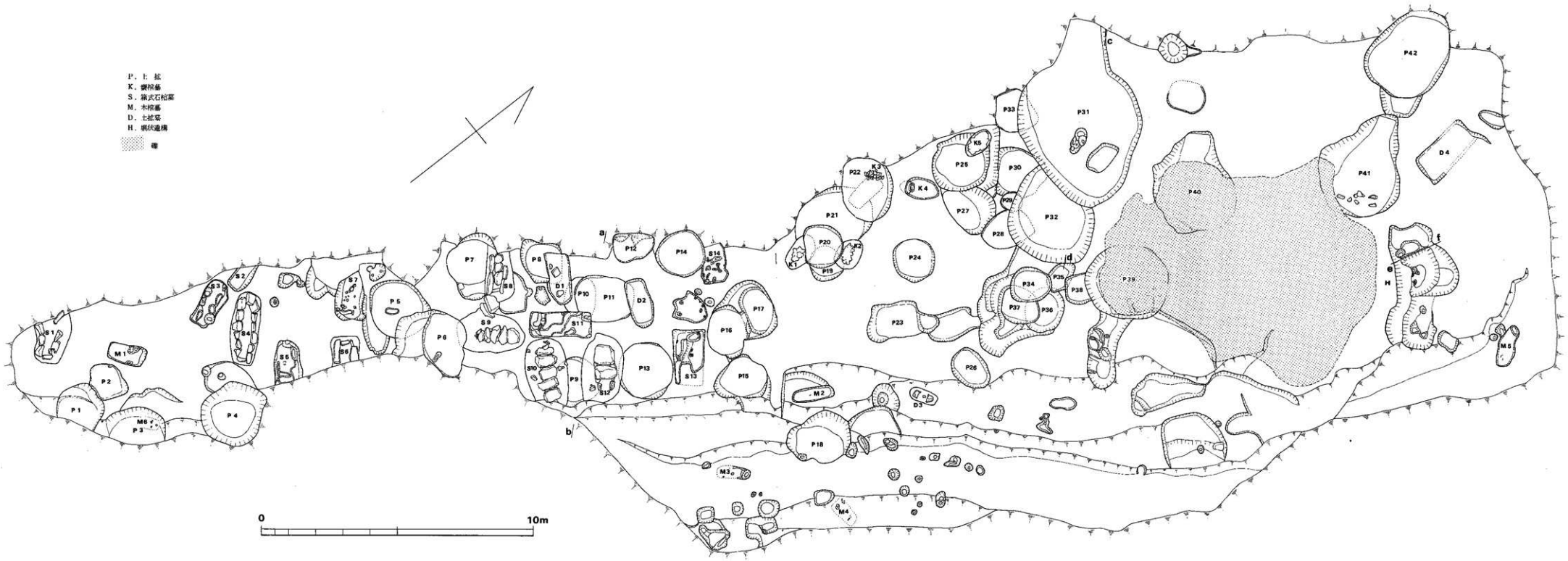


Fig. 86 稲田山遺跡遺構配置図（縮尺1/60）

3 調 査 の 内 容

桶田山遺跡から発見された種々の遺跡については，以下順に報告するがその遺構の主要なものは，土壙と墓に2分出来る。土壙は，弥生時代の貯蔵穴と中世の土壙とに分けられ，墓は，甕棺・箱式石棺・土壙墓・釘の使用されている木棺墓・中世の甕の使われた墓などが見つかっている。

それぞれの遺構は，丘陵の南・北両面が削りとられ狭長な鞍部となっているため，原形を留めているものは特に西半部では少ない。比較的丘陵の幅を残している東半部では，逆に遺構の密度が西半部より薄かった。この東半部では直接遺構と結びつくものはなかったが地山の上に拳大の礫が一面にあるのがめだった。

(1) 土壙群の調査

ここで言う土壙とは，弥生時代の貯蔵穴から中世の遺物を含む不正形の穴を含めて墓地以外のものを言うことにする。土壙は，形状・出土遺物・埋土などから，

(a) 弥生時代の貯蔵穴

P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P13・P14・P15・P16・P17・P18・P19・P21・P22・P24・P25・P27・P28・P30・P33・P35・P36・P37・P38・P41・P42

(b) 中世の土壙

P20・P29・P31・P32・P34・P39・P40

(c) 性格不明の土壙

P12・P23・P24

の3つにわけられる。なお，土壙の1つ1つについての説明は Tab. (1) に記しておいた。

(a) 弥生時代の貯蔵穴

いわゆる袋状竪穴で，桶田山遺跡のなかでは最も数が多い。大きさも底径で150cm前後のものから300cmを越えるものまでさまざまである。丘陵の削平が進んでいるためか，花崗岩の風化土壌がもろいためかフラスコ状の原形を残しているものは少ない。Fig. 88 は，その形状に近いP10および切り合い関係のあるP11・D2の図である。床の形状も，円・楕円・帆立貝状のものなどがある。P41は，床の形状が帆立貝状をしているため長方形の平面のものと円形の平面のものの切り合い関係を追求したが切り合っていず，同一のものであることがわかった。

Fig. 89 は，P41の実測図であるが，P21・P42と共に当遺跡のなかで最も大きな貯蔵穴の1つである。上層に瓦器質の鍋ないしは，鉢の破片の出土した土壙がある。貯蔵穴からは，遺物の出土はなかったが，焼けている石が床面で数点発見された。

桶田山の貯蔵穴のなかで，いくつかからは弥生式土器の小破片が出土したが，形状を推定出来るようなものはまったくなく，無遺物の状態で検出されたものが多い。このことがなにを意味しているのか興味のある点であるが後にゆずりたい。桶田山遺跡では，甕棺墓との切り合いや，表面採集の土器，中世の土壙中より出土の土器から，これらの貯蔵穴の年代を城ノ越式の時期を上限に，下限に須玖式の時期を考えられようか。

（b）中世の土壙

桶田山遺跡では，瓦器質の土器を含む土壙は明瞭であった。P20は，P21のなかに掘られた土壙で釘と土師器の杯を出土している。釘が出土したため墓かとも思われたが，その状況がレベルにして50cm以上の差があり投げ込みと判断されるものであった。K3は，P21を切る形で甕棺の破片を多量に出土した。このためKの記号を付したが遺物を復元して行ううちに，4点組上り，まとめて投げ込んだものと判断された。従ってその時期はわからないが，この土壙の中に含めて考えることとした。

P31・P32は，その断面土層を Fig. 90 に示した。P31からは，土製鍋や火舎などの出土があった他，弥生式中期の土器片が含まれていた。

P32は，P31に切られるが，P34と同じ赤褐色の埋土が特徴的であった。P34は，P31と共に遺物の出土はなかったが，P35・P39・P37の後に新たに掘られているため，この群のなかにおいた。

P39・P40は，形状・埋土などの点に非常に類似したものであった。

Fig. 90 は，P40の実測図であるが，特に出土遺物の多い土壙であった。弥生式土器片や鍋・鉢などの破片を出した他，最下層から施釉陶器（萩焼風のもの）が出土している。(Fig. 92)

P39からも，火舎などの破片が出土したが，箱式石棺の棺材が一隅にまとめて棄てられていた。P39・P40は，ともに形状が類似しており，一見弥生時代の貯蔵穴を掘りなおして，ゴミ穴として再利用したような感じがする。

中世の土壙として上げたものの中から出土する土器の下限は，鎌倉時代よりは新しくはならないようである。土壙の形状や遺物が破片ばかりであるため，いわゆるゴミ穴としてか推量しえないが，1個所にこれだけの数の土壙がある例はあまりないのではなかろうか。

（c）性格不明の土壙

形状・深さなど(a)・(b)以外で遺物の出土のないものを上げた。P12は，平面形は貯蔵穴に類似するが，床が著しく斜めになっている。P23・P26も同様のものであった。これ以外に No. を付していない遺構もこれと大同小異である。　　（栗原和彦）

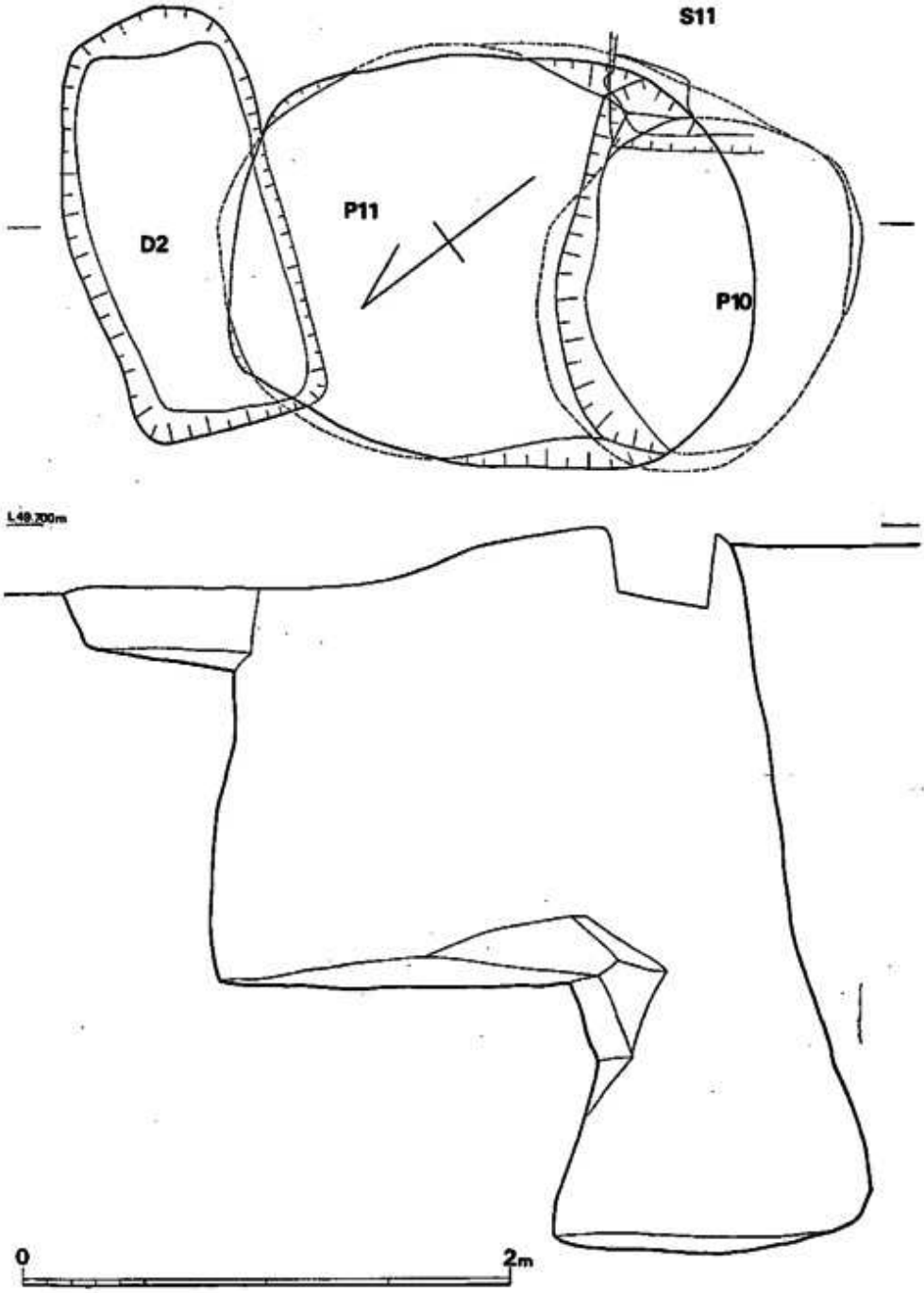


Fig. 88 栖田山遺跡第2号土壙墓，第10号・11号土壙実測図（縮尺1/30）

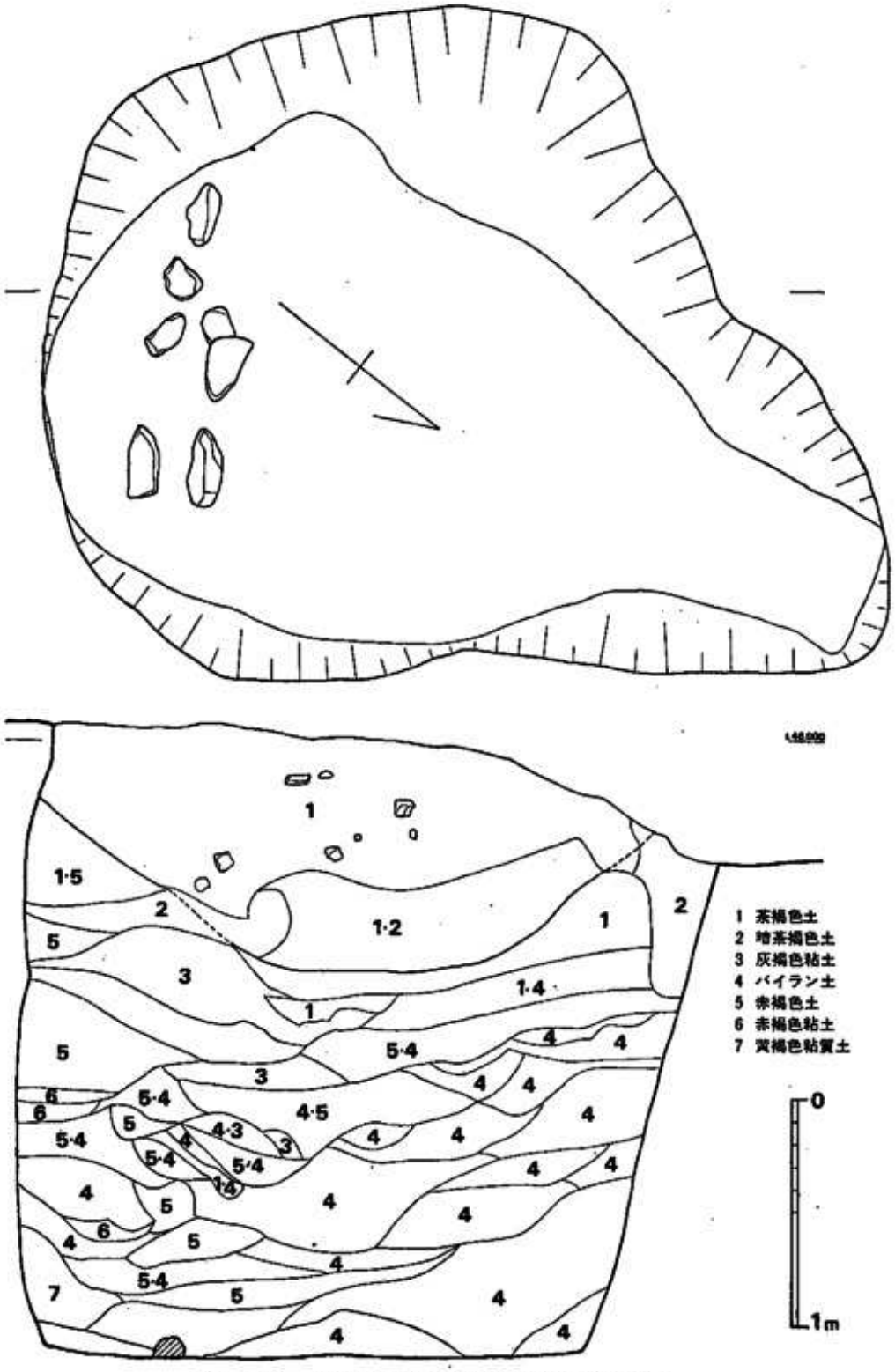


Fig. 89　桶田山遺跡第41号土壙実測図（縮尺1/30）

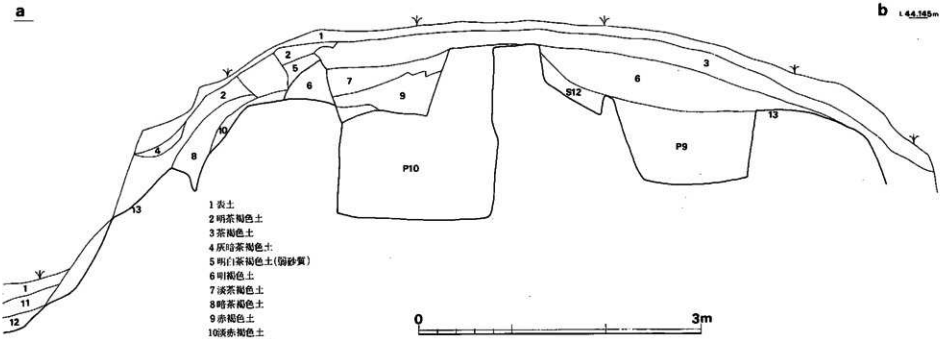


Fig. 87 稲田山丘陵南北断面層位実測図（縮尺1/40）

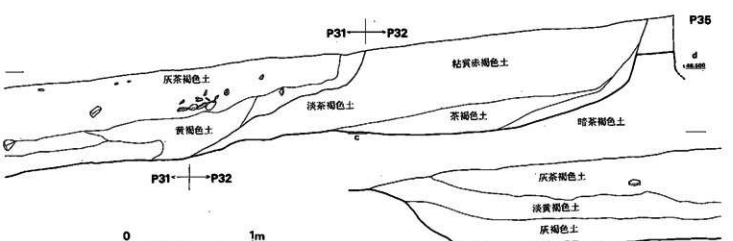


Fig. 91 第31号土拡・32号土拡土層断面図（縮尺1/40）

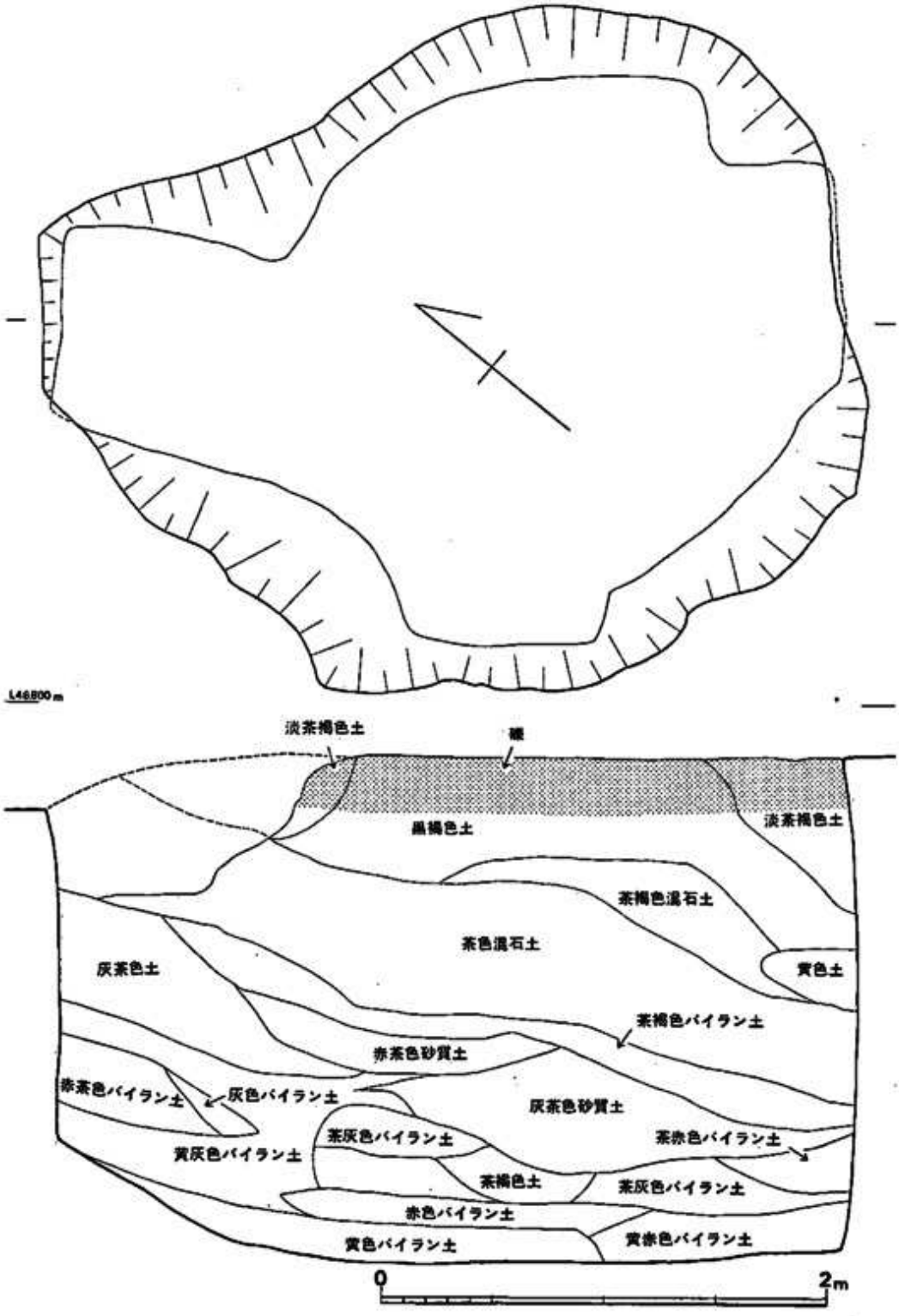


Fig. 90 桶田山遺跡第40号土壙実測図（縮尺1/30）

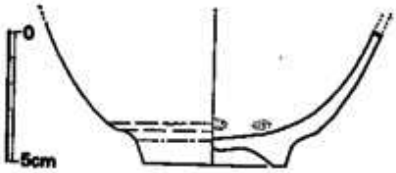


Fig. 92　楯田山遺跡第40号土壙出土陶器実測図（縮尺1/3）

P40出土遺物（Fig. 92）　高台付の椀形施釉陶器である。削り出しの高台を有し，伸びやかに上方へ開く。内面と外面体部に乳白色の釉をかける。体部下方境部と高台部にヘラ削りを施し，明確な稜をつくる。内面に素地の儘の小円部5個が配置されている。粘質の低い胎土を用い，器表はザラザラしている。底径5.6cm，現在高4.5cmを測る。

（中間研志）

Tab. 3　楯田山土壙一覧表　（単位cm）

No.	Plan（床面）	上面径	床面径	深さ	備考	時期分類
1	不整円形 不整円形	180×112＋α	162×108＋α	77	東南の半分は削平されている。	a
2	不整円形 不整円形	140×119	114×104	50		a
3	円形 円形（？）	220×130＋α	200×105＋α	77	M6が上にある。 南東端半分削平。	a
4	不整円形 不整円形	216×？	168×？	211	南東は半分削平されている。	a
5	円形 円形	205×225	200×200	115	中央に楕円形 Pit あり。 P6に切られる。	a
6	不整楕円形 楕円形	220×175	240×175	154	S9の掘り方を切る。青色粘土混入。Pの5を切る。二段になっている。	a
7	不整円形 楕円形	185×197＋α	189×173	172	S8に切られている。	a
8	不整円形 円形	149×148	139×125	176	D1に切られる。	a
9	円形 円形	190×178	144×150	107	S12とS10に切られる。	a
10	楕円形 楕円形	不明	152×120	290	P11とD1に切られている。	a
11	楕円形 楕円形	213×167	220×165	164	D2に切られる。P10を切る。 S11に切られる。	a
12	不整長方形 不整長方形	150×95	144×85	80＋α	東北の端の辺にそって掘りこみあり。	c
13	円形 不整円形	205×200	190×183	189	S12に切られる。	a
14	円形 円形	168×190	153×173	110＋α		a
15	楕円形 楕円形	190×160	170×136	164		a

16	円　形 円　形	180×159	164×162	153	P17を切る。	a
17	楕円形 楕円形	214×16+α	160×103	176	P16から切られる。 二段になっている。	a
18	不整円形 不整円形	240×190+α	180×130+α	93	南東の端カットされている。	a
19	円　形(?) 円　形(?)	175+α× 70+α	?×5.1+α	96+α	K2とP20に切られている。	a
20	円　形(?) 円　形(?)	155×?	185×?	126+α	K1とK2から切られP19を切っている。	b
21	帆立貝形(?) 帆立貝形	不　明	380×240	216	P20、P22に切られている。北側端カット。 帆立貝形(武両プラン)。	a
22	長方形(?) 長方形(?)	不　明	不　明	130	P21を切っている。 K3が投げこまれている。 北側端カットされている。	a
23	不整長方形 不整長方形	260×132	223×119	69	二段になっている。	c
24	円　形 円　形	152×161	138×139	135		a
25	不整円形 不整円形	207×187+α	184×153	152	P27を切っている。 K5に切られている。	a
26	楕円形 楕円形	163×122	137×90	65	P35、P36、P37を切る。	c
27	不整円形 不整円形	188×147	197×55	178	P25に切られている。	a
28	楕円形 楕円形	200×124	196×144	150	P32に切られる。P29に切られる。P27を切っている。	a
29	円　形 円　形	97×90+α	90×50+α	42	P30を切っている。 P32に切られている。	b
30	不整円形 不整円形	183×184	165×161	158	P29とP32に切られている。	a
31	帆立貝形 帆立貝形	640+α× 450+α	630+α× 382+α	39	P32を切っている。 北側削平、帆立貝形。	b
32	円　形(?) 円　形(?)	350×330+α	253×260+α	78	P28、P29、P30を切っている。P31に切られている。	b
33	不整方形 不整方形	154×?	191×?	137	P31に切られている。	a
34	円　形 円　形	146×130	130×110	52	P36を切る。	b
35	不整長方形 不整長方形	131+α× 80+α	111+α×58	108	P36を切っている。 P34、P38に切られている。	a
36	不整円形 不整円形	97+α× 124+α	80+α× 85+α	128	P34、P35、P37に切られている。	a
37	円　形 円　形	140×122	128×103	152		a

38	隅丸長方形 隅丸長方形	144×99	138×88	123	P39に切られる。P35を切る。	a
39	円　形 不整方形	305×？	235×？	180	P38を切る。中に石棺石材4枚投入されている。	b
40	帆立貝形 帆立貝形	359×309	349×255	240	長方形のほりこみあり。 帆立貝形である。	b
41	帆立貝形 帆立貝形	391×321	375×200	305		a
42	楕円形 楕円形	341＋α×257	307×224	310		a

堀状の遺構　(Fig. 93)

堀状の遺構として東側傾面にある不正形の土壙を1例別に上げておきたい。特に上げたわけは，南側の崖線と連続し，P41の上部の土壙まで一連の連続性が感じられたからである。土壙の中からは，火舎が出土している。　(栗原和彦)

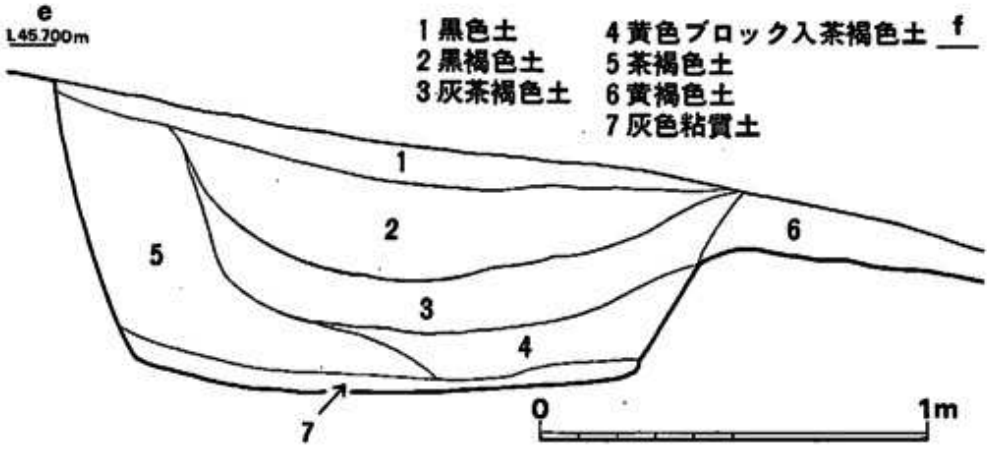


Fig. 93　稲田山遺跡堀状遺構土層断面図（縮尺1/40）

遺物　(Fig. 94, PL. 66)

いずれも瓦器質土器の破片であるが，大小の火舎類と壺及び雑器類に分けられる。1～3は幾らか内傾するものもあるが，ほぼ直行する火舎口縁部である。いずれも口縁下外面に断面半円形貼り付け凸帯を2条施し，その間に印文を配している。口縁上面はフラットでやや内傾するもの（1）と外傾するも（2）がある。1は，復原口径34.4cmを測り，内面には右下がり横方向のやや細かいハケ調整を行なう。胎土に砂粒を少量含み焼成軟質にて内外面黒褐色を呈す

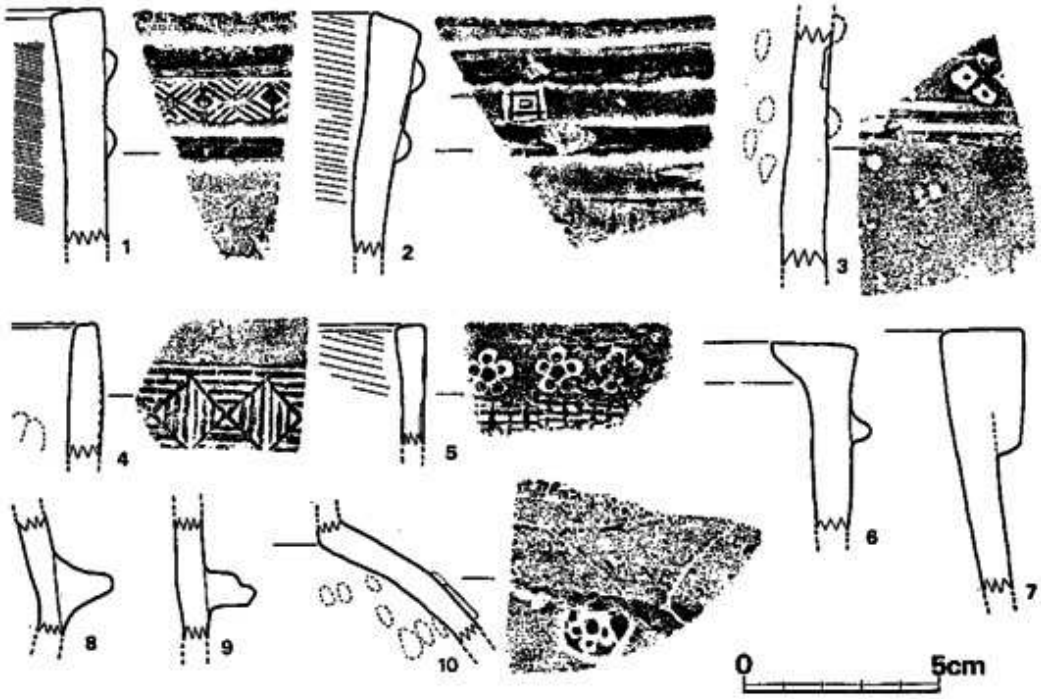


Fig. 94 桶田山遺跡火舎類他拓影（縮尺1/2）

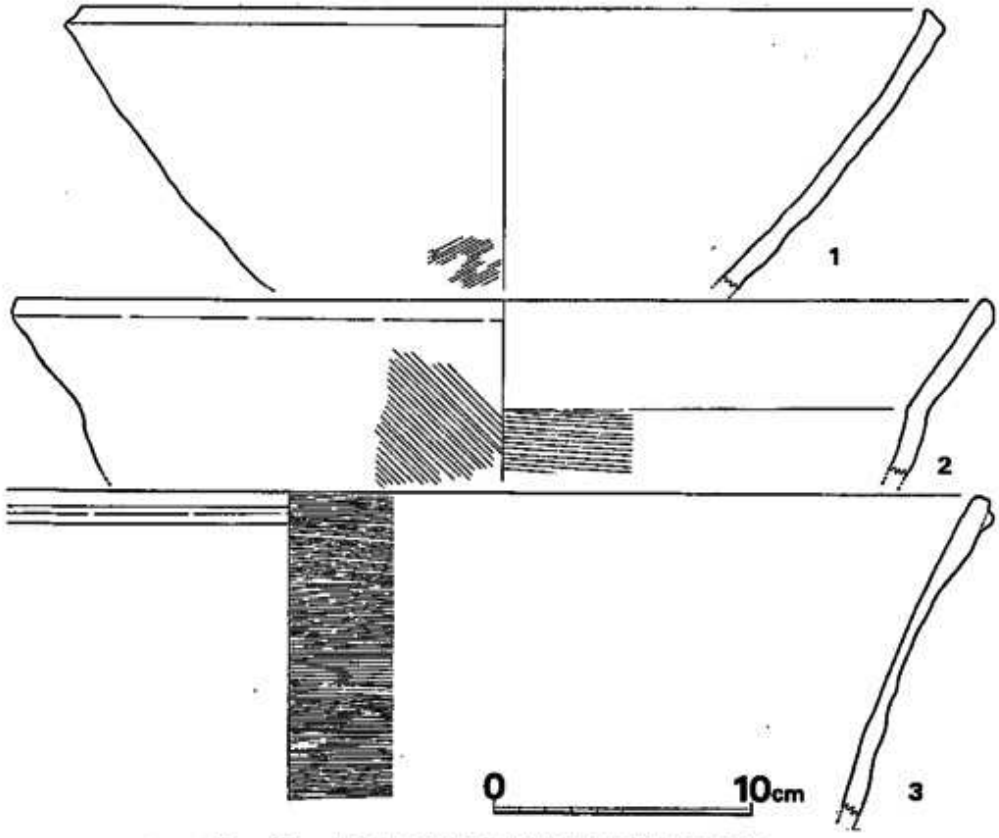


Fig. 95 桶田山遺跡土師質埦形土器実測図（縮尺1/3）

る。2は，井形印文を飛び飛びに施し，内面に粗い横方向ハケ調整を行なう。胎土に砂粒を少量含み焼成軟質にて外面黒色，内面灰黄褐色を呈する。3は，凸帯は剝げて不明であるが，その器地に沈線を巡らし接着の強化或いは凸帯位置割り付けの用を成している。恐らく1，2と同様断面半円形凸帯を貼り付けていたものと思われる。武田菱形印文を施し，内面に指オサエ痕が見られ，焼成軟質にて外面黒色，内面暗黄褐色を呈する。4，5は，僅かに内傾する薄手の器形を成す。1～3と比して小ぶりの火舎となるか。いずれも胎土に少量の砂粒を含み焼成軟質にて黒色ないし暗褐色を呈する。4は，外面に雷文様連続印文を施し，内面にやや指オサエの痕が見られる。5は，外面に梅花文印文を連続させその下位に格子文を施す。内面は粗い右下がり横方向ハケ調整を行なう。8，9は，土製釜の鍔部となるものか。内外面ともナデ調整にて焼成軟質黒褐色を呈す。10は，壺形土器肩部と思われる。内外面黒褐色にて内面に指オサエ圧痕が見られ，外面に円形浮文を貼り付けその上に梅花文を押している。いずれも掘状遺構出土品である。　　（中間研志）

土師質埴形土器（Fig. 95, PL. 66）

1は口辺部が約4分の1現存している。口縁から下部へ向かって，わずかに内彎している。口縁端はわずかに凹みがあり，横ナデがなされている。外面は上部と下部に煤が付着し，一部にハケ目が残る。かなりの凹凸がある。内面は黄褐色を呈し，一部ハケ目が残る。胎土は粗砂粒を含む。焼成は良い。復原口径は34cmを測る。コネ鉢の類であろう。

2は口辺部3分の1現存。口縁下2.5cmのところを内外から強く押さえて，ナデて口縁部をつくっている。口縁部は急に外反する。口唇部はナデにより丸みをもっている。外面は，口縁部下より，右下がりの粗いハケ目があり，一部ナデにより消えている。一部に濃い二次的煤が付着している。内面は，口縁下4cmまで横ナデ，内彎するところから粗い横ハケ目がある。焼成は軟質で，内，外面淡黄色を呈する。胎土精良で，わずかに粗砂粒を含む。復原口径38cmを測る。

3は口辺部が約5分の1現存している。下部から口縁部にかけて，わずかに外反している。口唇部は少し窪んでいる。すぐ下に1条の断面かまぼこ形の貼付凸帯を有する。外面は凹凸が激しい。内面は全体にハケ目があり，丁寧に調整している。焼成は不良で，胎土は粗砂粒を少し含み，黒褐色を呈する。復原口径は54.4cmを測る。　　（中牟田貴治）

（2）甕棺墓群の調査　(Fig. 96・97・98・99, PL. 58・59・63)

丘陵中腹北西側の削除された斜面のすぐ上に，一つの共同墓地を形成して発見された。全部で5基であるが，1号，2号，5号は上半部が削平されて，下半部の一部だけをとどめている。4号は石蓋単棺の壺棺で完存していた。3号はバラバラの状態で，袋状竪穴22号の上部に散乱していたのを，一応3号とした。復原してみると，甕形3個体分と鉢形1個体分になり，合口甕棺の2基分に推定されるのではなかろうか。1号，2号，5号はいづれも袋状竪穴を切って埋設されている。

第1号甕棺墓

(Fig. 96, PL. 58)

袋状竪穴の20号，21号を切っている。甕棺の上半部は消失しており，現状を呈していたのは墓壙床面に付着している下半部の4分の1程度である。墓壙はわずか南側4分の1が確認できたが，平面プランは不明である。

傾斜角も不明であるが，ほぼ水平に近い。

復原不可能であったが，口縁は逆L字形である。口縁下に三角凸帯をめぐらし，頸部から胴部にかけて張り出している。胴

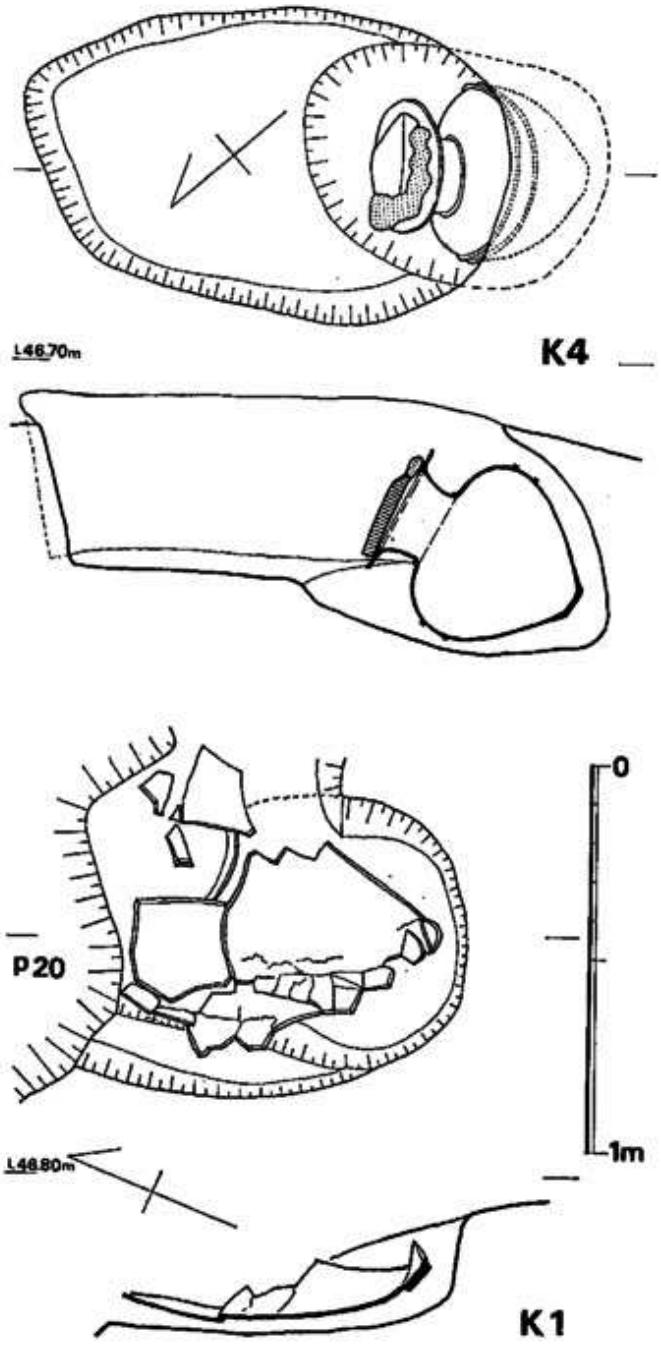


Fig. 96　稲田山遺跡第1号・4号甕棺墓実測図（縮尺1/20）

部は2条の三角凸帯をめぐらす。底径は12.6cmを測る。下甕であろう。2号甕棺の上甕に類似している。

第2号甕棺墓　(Fig. 97, PL. 58・63)

1号甕棺と同様に，19号，20号，21号の袋状竪穴を切っている。上半部は削平されて散乱しており，下半部の一部が僅かに遺存していた。下甕であろう。墓壙プランや掘り方は不明である。復元すると約3分の1が欠損していた (Fig. 97)。合口甕棺で，下甕は口径45.5cm，器高74cmで，口縁上面は内側へゆるい傾斜をもち，僅かに窪んでいる。口縁部外端はやや窪みをもち，内端は鋭く内に張り出している。口縁直下に，三角凸帯を1条めぐらしており，頸部から胴部上半にかけてはりを有している。その結果，胴部最大径が，胴部凸帯の上の胴部上半にある。胴部中央に，高く鋭い断面コの字形凸帯が2条めぐらされている。下半部はゆるやかにすぼまるが，底部近くなると急にすぼまる。底部はやや上げ底である。焼成は不良で，粗砂粒を多く含む。外面には縦方向のハケ目が残り，3分の1が黒色を呈する。

上甕は胴上半部に最大径を有し，肩の張った器形を有し，逆L字形口縁下に三角凸帯をめぐらす。胴部最大径下に，1条の断面梯形凸帯をめぐらす。底部はかなり厚く，やや上げ底である。胴部の凸帯やや上から底部にかけて縦のハケ目が残っている。焼成，胎土，及び全体的なつくりは下甕に類似している。口径50.6cm，器高65cmで，全体的に下甕に似ている。

第3号甕棺墓　(Fig. 97, PL. 58・63)

袋状竪穴22号の上の方に，投げ捨てられたようにして発見された。バラバラの状態で，P22号の上層部から30cm下までの間に，重なって出土した。

復原してみると，甕形3個体分，蓋形1個体分となる。口径が大体一致することから，合口式の甕棺2基分と考えられる。鉢形を上棺とするものをK3A，他をK3Bとする。

(イ)　第3号甕棺A　(Fig. 97, PL. 58・63)

上甕は2分の1残っていた。口径65cm，底部径7cm (推定)，器高34.2cmの鉢形土器である。口縁部は上面がフラットで，逆L字に内外にはり出しを有する。頸部には1条の三角凸帯があり，底部近辺に縦のハケ目が残る。下甕は下半部を3分の1欠損している。口径49cm，器高83.5cm (推定) である。口縁断面は，内端が強くはり出したT字形で，上面がふくらみを有し，内へ傾斜を持つ。やや厚手である。外端部は凹線状を呈する。口縁直下に断面梯形凸帯を有する。2条の断面梯形凸帯より上の胴上半部に最大径を有し，肩がはり出している器形をなす。下の凸帯が上より大きい。この凸帯の上部から底部へはすぼまっている。焼成はあまり良くないが，胎土は精良で，つくりは丁寧である。内外面とも，ナデ調整を施す。

(ロ)　第3号甕棺B　(Fig. 97, PL. 58・63)

上甕は，口縁上面の平坦部が僅かに窪み，内端が鋭く内側へ稜をなし，立ち上がっている。くの字形に近い口縁を有し，口縁直下に三角凸帯を有する。最大径は胴部上半部にあり，以下は

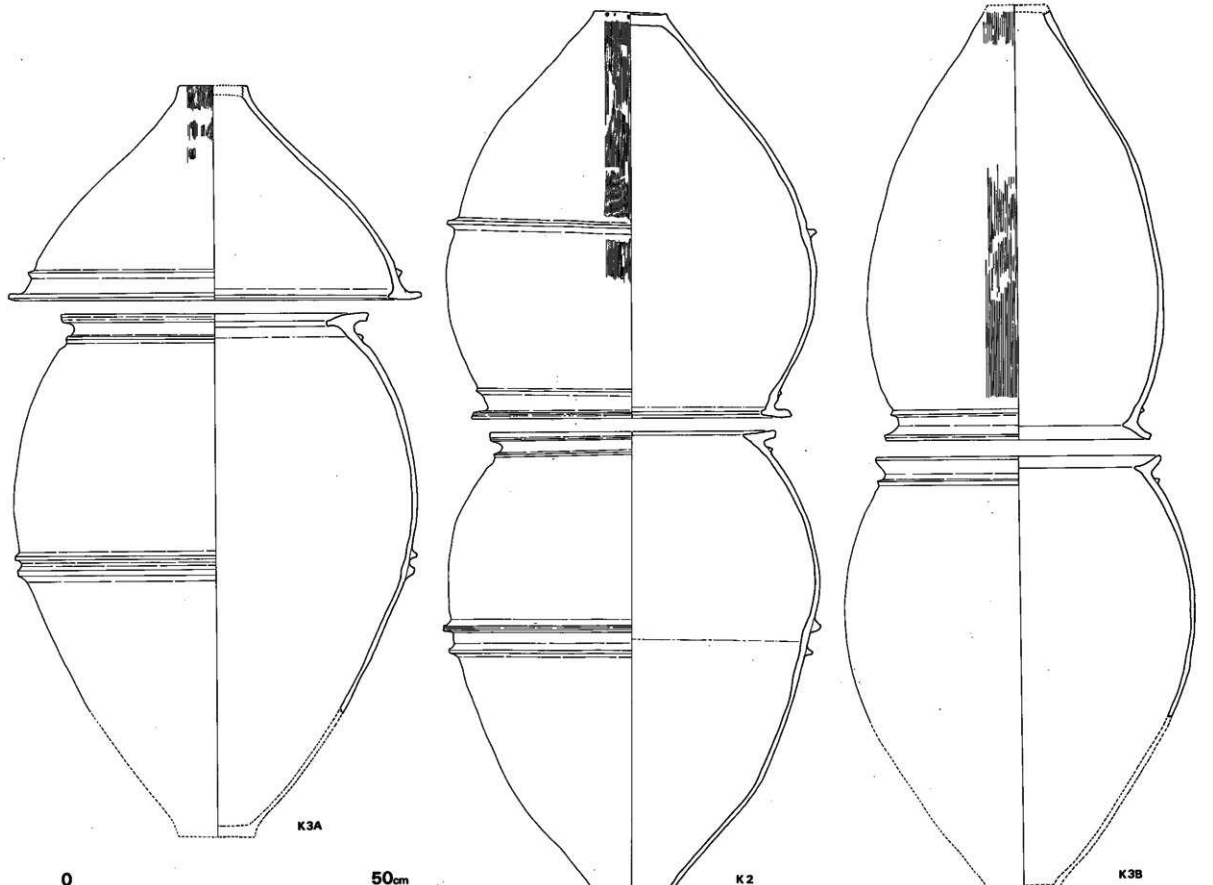


Fig. 97 甕 棺 実 測 図 (縮尺1/4)

スマートなすぼまりをみせる。全体として細長い感じを与える。胴部に凸帯は無い。底部は欠損している。口径42cm，器高69cm（推定）である。外面は縦方向のハケ目調整で，胎土は粗砂粒を多く含み，焼成は不良で，黄褐色を呈する。口縁部平坦面に1ヵ所籾痕（日本型）が発見された。

下甕は下半部が欠損していた。口径45.4cm，器高は約68cm（推定）を測る。口縁断面は，内側へ鋭い稜を有し，外端が立ち上がる，くの字形口縁で，平坦部は窪んでいて，口唇部は丸みをもっている。口縁直下に，断面三角凸帯をめぐらしている。胴部最大径は胴部上半部に有り，全体的に上甕と余り変らないが，やや胴張りである。胴部に凸帯は無い。外面は黄褐色を呈し，つくりはやや不良であり，砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整である。

第4号壺棺　(Fig. 96・98, PL. 58・63)

墓壙の平面形は不整長円形で，墓壙の一角に横穴を掘って埋葬された小児壺棺である。一枚の板石を用いて蓋にし，間隙に青灰色粘土を詰めて密閉している。

墓壙の長さ118cm，幅81cm，深さ67cmを測る。この壺棺は，出土状態は良かったが，遺物は何も検出されなかった。

壺形土器は，口径34.9，器高52.4cm，頸部の最狭部径17.2cm，底径8.5cmを測る。頸は朝顔状に広がる。鋤先形を呈する口縁部の外端は，刻目が左斜めに施されている。刻みは貝殻復縁痕に似ているが明確ではない。頸部に三角凸帯がある。胴部最大径は，凸帯の位置する胴上半にあり，肩のはる器形を有する。胴部に2条の「コ」の字形凸帯を有し，その中央にはヘラによる沈線状の窪みがある。

口縁平坦部は横ナデによるゆるやかな窪みがある。外面は縦ハケ目調整が一部にある。胎土は粗砂粒をかなり含み，焼成はやや不良ある。器面は黄褐色を呈する。

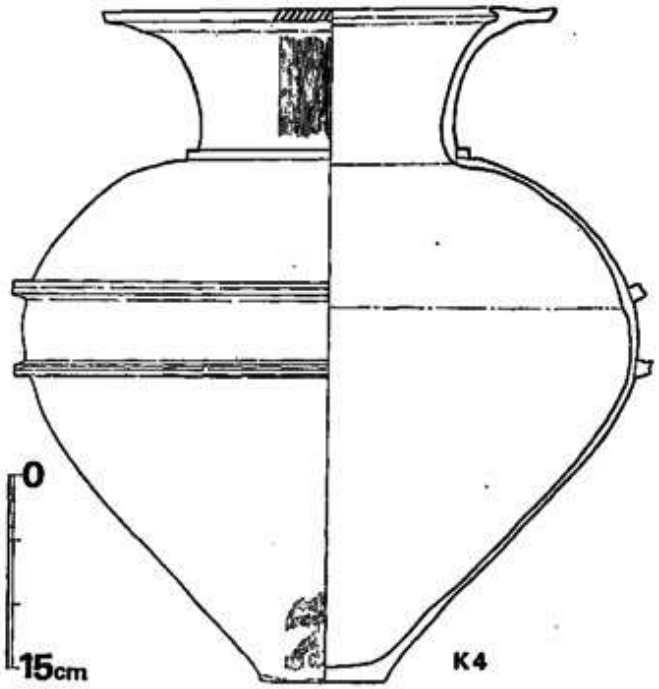


Fig. 98　桶田山遺跡第4号壺棺実測図（縮尺1/6）

第5号甕棺墓

袋状竪穴25号の北側上部を切って埋置している本甕棺は，下半部が残っていた。墓壙は，北側が少し残存していたが，プランは不明である。合口甕棺の下

甕ではなかろうか。桶田甕棺群の中では最大であろう。口縁は不明。胴部に2条の三角凸帯をめぐらし。1号，2号上甕と同じ器形であろう。

以上，甕棺墓群を詳述してきたが，この他にも表採分として下記のものがある。

（中牟田賢治）

Fig. 99-6

口縁部のみの小片である。外反した上面に，はり付けした肥厚部を有し，内側で段をなす。外端には，上下両端にヘラによる刻目を有する。胎土に粗砂粒が極めて多く含まれる。前期後半期の甕棺破片であろう。

Fig. 99-7, 8, 9

内側に張り出す口縁内端を有し，上面フラット，または内傾する胴張りの器形を有する。口縁直下に三角凸帯を有するもの（8，9），有しないもの（7）があり，胴部のはりは，9，8，7の順で強くなる。

11は鉢形蓋で，K3の上甕と類似する。10の様な胴部凸帯片もあり，明瞭な口唇上の断面を有する。12は，底部片で，その大きさ形態から見て，他甕棺のそれと類似する。

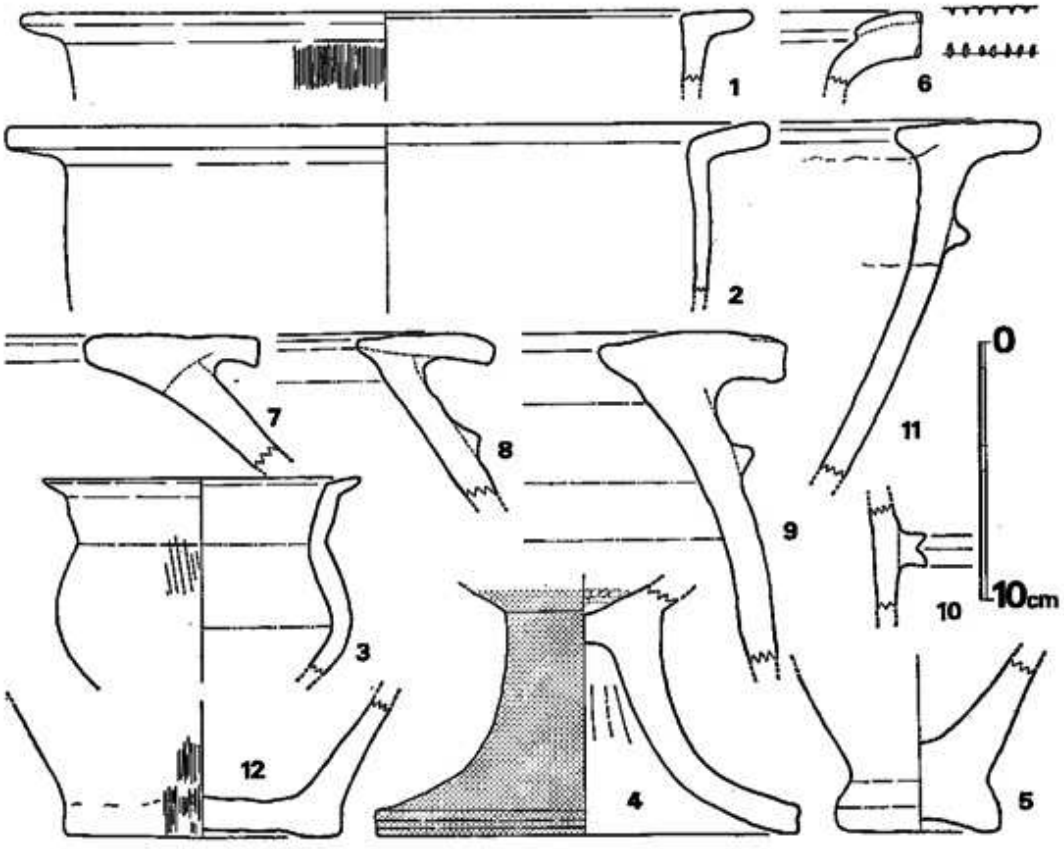


Fig. 99　桶田山遺跡弥生式土器・甕棺片実測図（縮尺1/3）

以上の甕棺の使用土器は，甕，壺，鉢の3種であり，甕は2類に分類される。即ちI類は口縁上面がフラット，或は僅かに内傾するもの（K1下，K2上下，K3Aの下，Fig. 99-7, 8, 9）である。II類は，口縁内端に鋭い稜を有しながらも，立ち上がって，断面「く」の字形をなす類（K3Bの上下）である。　（中間研志）

弥生式土器　(Fig. 99)

甕形土器（1，2，5）1は，口縁内端が稜を成し上面が平坦を成すもので，復原口径28.4cmを測り，頸部以下に粗い縦方向ハケ調整を行なう。淡褐色を呈し，粗砂を幾分含む。2は，内面に不明瞭な稜を有する「く」の字口縁片である。復原口径29.6cmを測り，内外面ナデによる調整と思われ，胎土に細砂粒を多く含み，黄赤褐色を呈す。5は，肥厚する底部の脚台を有し，底径6.3cmを測る。底部は指押えによる上げ底で，胎土に粗砂を多く含み，外面は二次焼成により器表の剝落が見られる。

壺形土器（3）は，広口で球形の胴部にやや開く短かい頸部に，更に外方へ強く開く短かい口縁を有する。頸部以下に僅かに粗いハケ調整が残るが，他はナデで消している。口径12.2cmを測り，胎土に砂粒を含むが焼成やや良にて淡黄褐色を呈する。

台付土器（4）は，外面丹塗り磨研にて下方へ緩やかに開く脚部である。脚部外端は凹部を成す。脚部内面にはシボリ痕が見られ，体部底内面は指オサエ痕が顕著である。体部底面の様相等より台付壺或いは台付盌となると思われる。　（中間研志）

Tab. 4　甕　棺　墓　一　覧　表　（単位 cm）

No.	方　位	傾　斜	墓　壙 長さ×幅×深さ	土　器	形　式	時　期	備　考
1	N22°5′W			甕＋？	合口？	中期終末	P21、22を切る。
2				甕＋？	合口？	中期終末	P19、20、21を切る。
3						中期終末	2組4個、P22に投棄。
4	N41°E	29°30′	118×81×67	壺	単　棺	中期終末	石蓋、粘土張り。
5	N10°W			？＋甕	合口？	中期終末	P25を切る。

（3）箱式石棺墓の調査

箱式石棺と確認できたものは14基である。うち2基は完存，6基は破壊されていたが，棺材は残存していた。他の6基の棺材は全く無かったが，棺材抜き跡および掘り方，粘土などの残存状態により箱式石棺として扱った。

これら石棺は，台地の西半部一帯に群を形成している。旧舌状台地の先端ではなく，基部寄りに位置する。

桶田山箱式石棺群は，発見当初は，表土下20cm前後の浅い所に棺材上部が検出されており，墳丘および小盛土は，後世の削除によるものか，または当初より無かったものか不明である。

しかし，この密集状況から考えると，墳丘をもっていたとは考えにくい。

これら石棺群は主軸方向を，尾根方向と同一するもの（9号，11号）と，尾根方向と直交するもの（9号，11号以外）の2類に分けられる。

他種遺構との切り合い関係は，袋状竪穴を切っているもの（S 8号→P 3号，S10号→P 9号，S11号→P10号とP11号，S12号→P 9号とP13号）と，袋状竪穴から切られているもの（P 6号→S 9号）があるが，石棺どうしで切り合っているものは，全くない。

以下，各石棺について述べたい。

第1号箱式石棺墓（Fig. 86）

舌状台地の西端に位置している本石棺は，すでに破壊されて蓋石は無く，長側壁(以下側壁)も一部失われ，残存している石は7個，短側壁（以下小口）も北側は破壊されているが南側は残っていた。側壁の北側左右2個は，原位置から移動している。

この墓壙の平面形は，北側が削除されていて明確にはわからないが，隅丸長方形と思われる。断面をみると，地山を掘り下げているが，側石を据えつけるためにさらに穴を掘っているものと，そのまま側石を並べて，粘土や土で埋めて固定させているものとがある。

石材は花崗岩であるが，側壁の石は形や大きさが一様でなく，全体的にぶ厚い石材を使用している。小口の石は側壁の両端より外側に置かれている。石材は板石状を呈する。側石の間隙には青色粘土が詰めこまれているが，その粘土はかなりの量になる。

内法は，長さ126cm＋α，幅40cm～45cm，深さ45cmである。側石の内側全面は朱塗されている。

第2号箱式石棺墓（Fig. 86）

第3号，第4号箱式石棺墓の北側にすぐ隣接している本石棺は，北半分削平されており，蓋石，側壁の石とも消失していた。石の抜き跡は見当たらないが，床の上9cmの所に青色粘土があり，また墓壙プランも考えて，これを一応箱式石棺の中に入れた。

第3号箱式石棺墓（Fig. 86）

第4号箱式石棺の西横にある本石棺は，蓋石，側石とも消失している。墓壙プランは，隅丸長方形で，長さ186cm，幅87cm，深さ18cm＋αである。石の抜き跡は明確である。西壁側の抜き跡が3個分，東側壁が4個分ある。両小口の抜き跡は不明である。南小口の西側隅にかなりの量の青色粘土がある。また東側側壁の石の中央の所にも粘土が少量残存している。両側壁の抜き跡は，墓壙の壁にそってすぐ下にあり，墓壙壁と両側壁の石との間は密着していいたと思われる。

第4号箱式石棺墓　（Fig. 100, PL. 60）

本石棺は当遺跡発掘調査の端緒となったもので，桶田山遺跡箱式石棺群の中では墓壙，内法の長さが最も大きいものである。隣接して西側に3号石棺，北西部に2号石棺，東南に隣接して5号石棺がある。

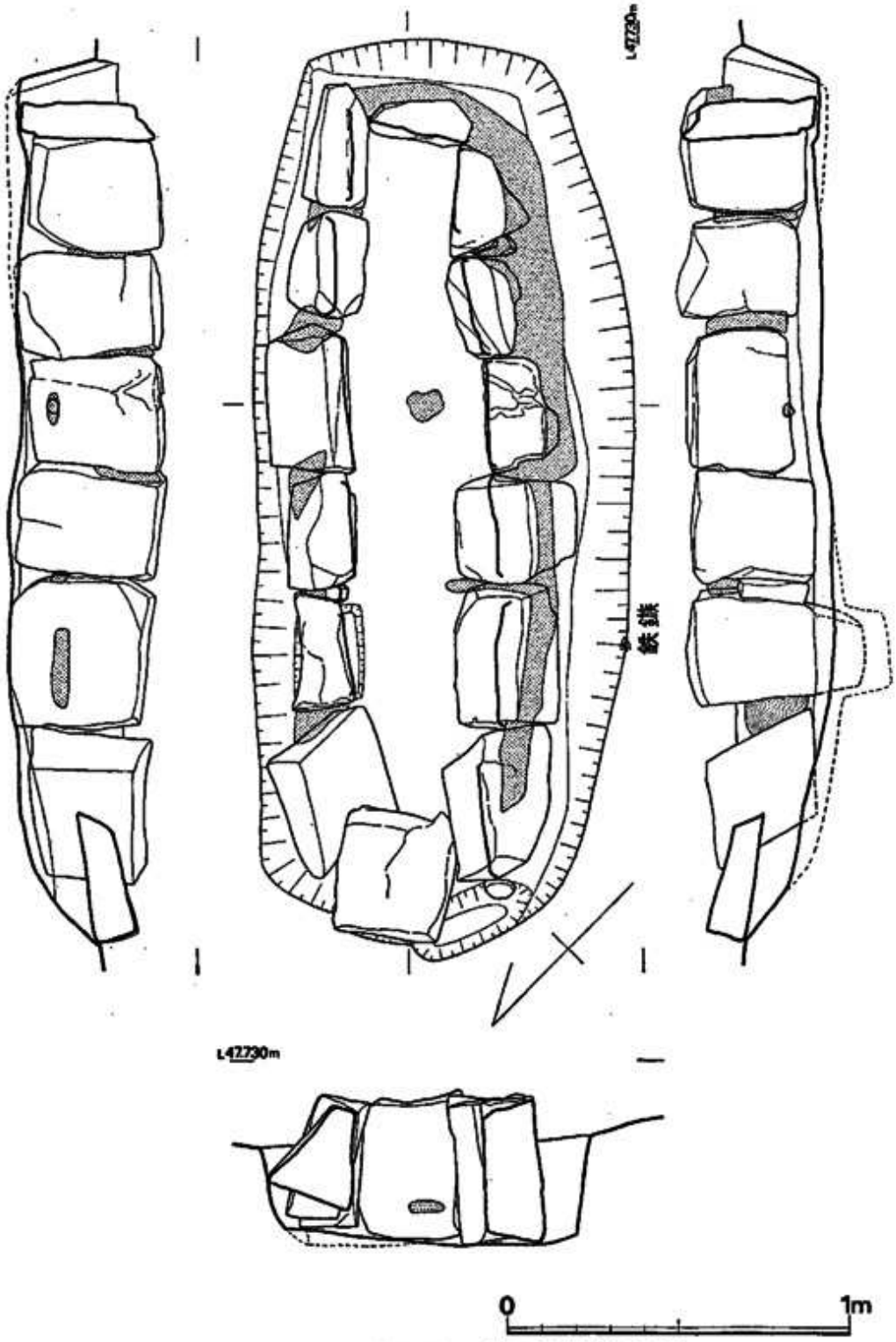


Fig. 100　桶田山遺跡第4号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）

墓壙プランは，長さ266cm，幅103cm，深さ42cm＋α で隅丸長方形を呈し，やや胴張りである。断面をみると，墓壙は一定の深さに掘り，床面を平にして，その上に両側壁の石，両小口石を縦に立てて並べている。両側壁各石材の隙間には，青色粘土が詰め込まれている。東側壁の石の隙間に，1個だけ小石が入れ込まれている。両側壁の石材が長いために，約15cm下に掘り込まれて構築されているが，他は認められない。両側壁の石は，内に傾斜している。北端部の小口石を含めて3個の棺材は移動している。

石材は花崗岩で，両側壁の石は厚い石材が使用されている。両小口石は板状の石を使用している。石棺の内法は，長さ190cm＋α，幅38cm，深さ42cmである。石材の大きさと，北側の幅が広いことを考えると，頭部は北西か。側石の内面，床面とも朱塗は無い。遺物は墓壙内（棺外）より，無茎鉄鏃が検出された。　　（中牟田貫治）

遺物　(Fig. 101, PL. 64)

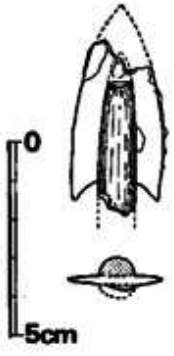


Fig. 101　第4号石棺出土鉄鏃実測図（縮尺1/2）

石棺掘方線付近の西南側より無茎鉄鏃1が出土した。長い茎部を有する類ではないことは確かであるが，短少なる舌状突起の有無は明確でない。厚さ2mmの扁平な鏃身に，断面半円形の箆状木質にて表裏より挟んでいる。先端部は欠損しているが，復元長5.0cm，幅2.3cmを測り，磨製石鏃の形態と関連する凹基部を成す長三角形小形鏃に類するものと考えられる。　　（中間研志）

第5号箱式石棺墓 (Fig. 86)

棺材は全く無く，南半分の墓壙も削除されていた。墓壙プランは不整長円形で，長さ151cm＋α，幅100cm，深さ30cm＋αを測る。

石棺の抜き跡は残っている。青色粘土が床面の6ヵ所に少量付着していた。また，小石片が3個床面に残している。

第6号箱式石棺墓 (Fig. 86)

南端が3分の2削除されているが，幸いにも側壁の石が両側とも2個，北側小口石1個が残存していた。内法は，幅38cm，深さ44cm，長さは不明である。

西側側壁の石は，長さ約90cm，高さ約50cmの大きなぶ厚い板状の石材を使用している。北側小口石と東側側石は，ほぼ同程度の小さい板状石を使用しており，両側壁の石は，小口部の石をはさんでいる。石材は花崗岩である。

両側石や小口石との隙間には青灰色の粘土で目貼りをしている。床面には少量の青色粘土が散在していた。

墓壙プランは隅丸長方形である。掘り方は，一定の深さまで掘り下げて平らにしたあと石材を固定，揃えるためにさらに掘り下げている。抜き跡は2個分確認される。遺物は何も検出されなかった。

第7号箱式石棺墓 (Fig. 86)

大部分が破壊されて棺材はほとんど無く，辛うじて南側小口石と数個の礫が床面に散乱していた。

墓壙の北端は削除されている。隅丸長方形の平面形である。掘り方は，一定の深さまで掘り下げて床面をつくる。棺材の抜痕は確認できなかった。南側小口部の石材は花崗岩である。

第8号箱式石棺墓　(Fig. 102, PL. 60)

敷石の遺存している唯一の石棺である。北西部が削除され，半分近く破壊されている。

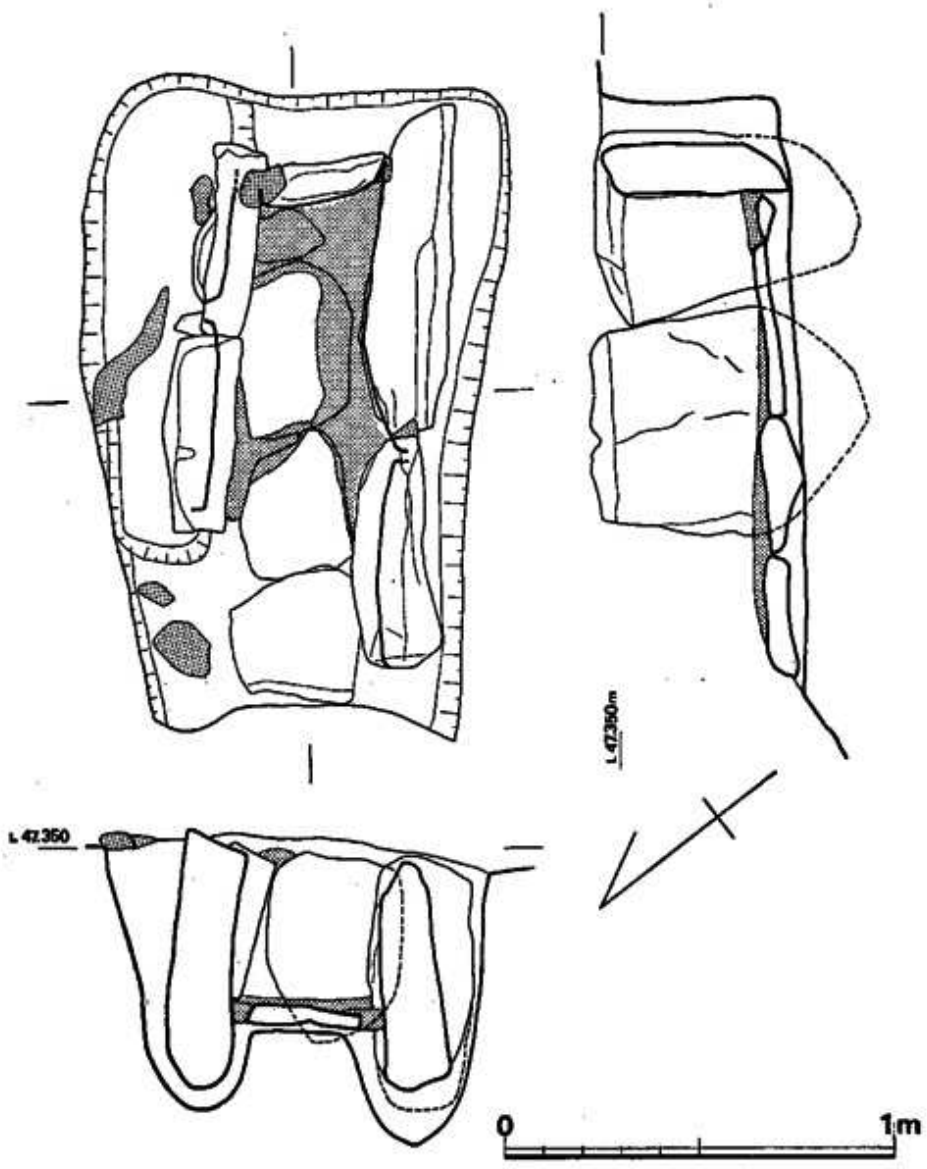


Fig. 102　栖田山遺跡第8号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）

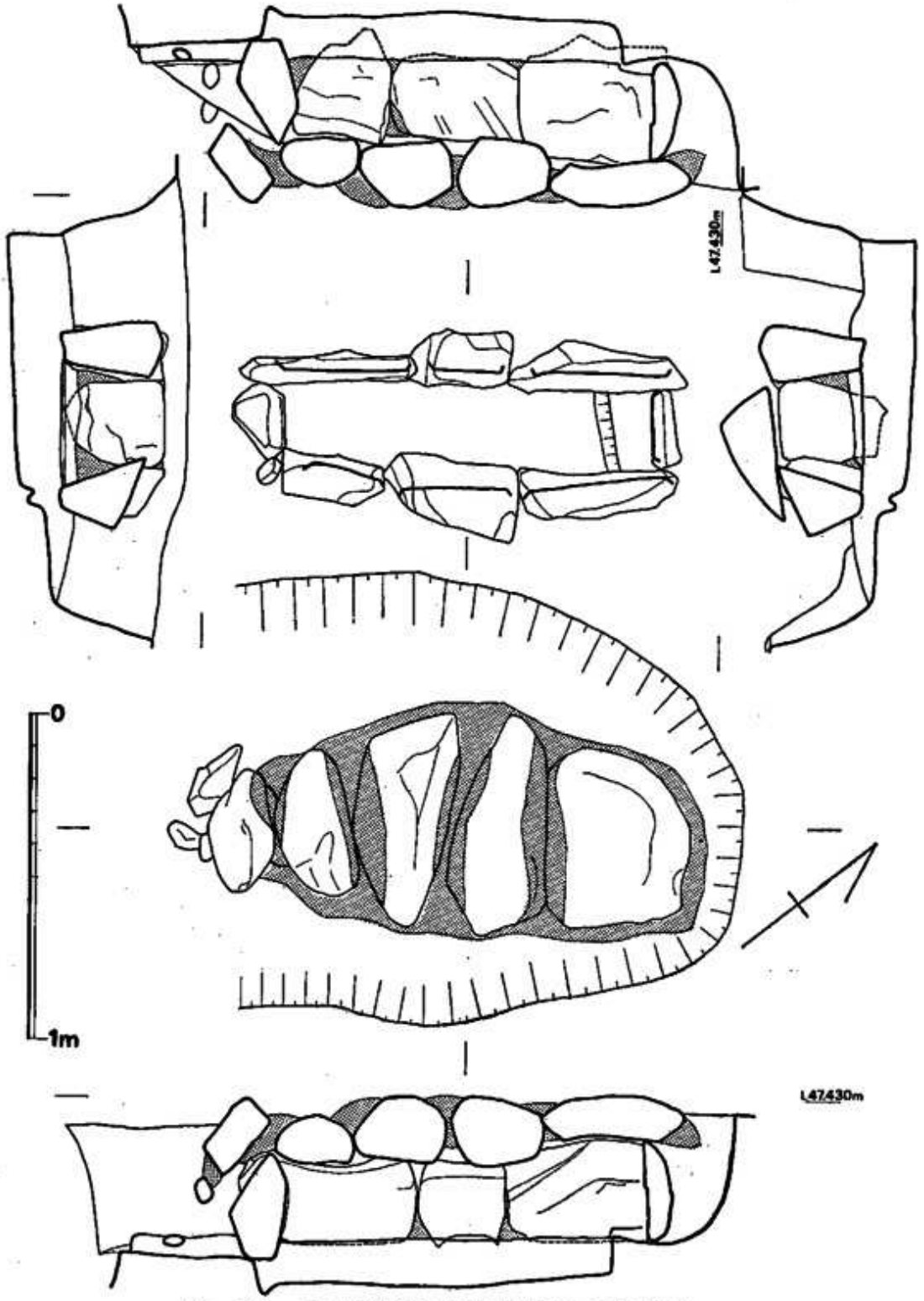


Fig. 103　桶田山遺跡第９号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）

墓壙平面形は，不整長円形で，長さ157cm＋α，幅99cm，深さ40cmを測る。掘り方は，一定まで掘り下げて石棺の内法に必要な棺床をつくり，これに合わせて，石材を組み立てるに必要な穴を掘っている。床面の敷石は，地山の上に約6cmの埋土をのせて，その上に板状の石材（花崗岩）を4枚（内1枚は小さい）敷き，隙間には青色粘土を詰め込み約4cmの厚さにはりつけている。棺床を平らにするため，粘土を敷石の一部に張りつけている。

内法は，長さ128cm＋α，幅39cm，深さ45cm＋αを測る。両側壁の石は，極めて大きい石材を使用しており，東側2個，西側2個は板状の花崗岩である。両側壁とも上部がやや内に傾斜して，残っている南小口石を挾んで組立てている。両側壁の石は，地山より約15cm掘り込まれて埋められており，床面からは約30cmも下に埋められていることになる。両側壁とも青色粘土で目貼りされている。南側の小口石は，地山に掘られて固定されているのでなく，両長側壁と裏込めの土と粘土で固定させている。蓋石は，棺身の上にあるものは一つも無く，南側小口石のすぐ南に，大きい2個の板状石（花崗岩）が発見されているので，本石棺の蓋石と思われる。床面と側壁全面に朱塗されていた。副葬品等の遺物は何も無かった。

第9号箱式石棺墓　(Fig. 103, PL. 62)

本石棺は枕を有する唯一の例である。墓壙の西端が，袋状竪穴6号に僅かに切られているだけで，原状をとどめている。墓壙平面形は不整長円形で，長さ210cm＋α，幅140cm，深さ54cmである。

石棺の蓋は，不揃いの花崗岩石材5個を使用しており，西南端に小石を3個詰めている。北東端に最大の石を用い，次第に小さいものを使用。西南端の石は，実際には蓋の用をなしていない。蓋石の間と周囲には青色粘土を多量につめている。

両側壁は，それぞれ3個の石材を組み，薄手の板状石と厚みのある石材とで構築している。間隙には青色粘土で目貼りをしている。また壁の上部が内に傾斜している。

小口壁は墓壙床面上にそのまま立てて，両側壁から挾まれて固定されている。東側壁の南端部が短いため，小石を1個使用している。床面は地山より中央で14cm高くなっているが，これは埋土して床を作っているからである。注視されることは，土枕が床面北端に設置されていることで，高さ3.5cmを測る。遺物は無い。

第10号箱式石棺墓　(Fig. 104, PL. 61)

桶田山の箱式石棺14基のうち，原状を保っていたのは本石棺と第9号石棺の2基のみである。東南側墓壙端が僅かに後世により削除されているが，盗掘を受けた痕跡は無かった。また，棺内に副葬品を持っていたのは本石棺だけである。

墓壙プランは隅丸長方形を呈する。長さ240cm＋α，幅180cm，深さ65cmを測る。墓壙横幅が，14基中最大である。掘り方は，6号石棺と同じである。棺と墓壙壁とが大きく開いており，最大の所は50cm～60cmにもなる。

蓋石は，花崗岩の河原石で，4個は同程度の大きさ，他の1個は小さい。間隙には多量の青灰色粘土を詰めて密閉している。

床面は，ゆるやかに南へ傾斜した地山に，10cmから5cmの土をはって，床面を平らにして作っている。側壁は東側5個で構築しており，上部がやや内傾している。間隙には青色粘土で密閉している。石材は花崗岩で，選定したと思われる同程度の大きさを有している。両側壁とも，南側3個の石材は，墓壙からさらに同程度に一段掘り下げて組み立てているのが面白い。

東南の小口石は，両側壁で挾まれているが，北西の小口石は両側壁の外端に接合されている。内法は，長さ171cm，幅40～25cm，深さ40cm～34cmを測る。蓋石，長側壁，小口壁の全てに，内面に朱塗をしている。

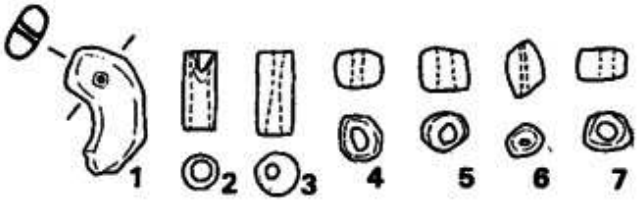


Fig. 105　桶田山遺跡第10号箱式石棺墓出土玉類実測図（実大）

遺物は，床面より10cmから2cmの間の棺内中央より東南側に，白色の腐蝕したガラス勾玉1個，碧玉製管玉2個，ガラス小玉4個が出土した。頭位部は，内法の幅と副葬品の位置から，東南部に推定される。

（中牟田賢治）

玉類　(Fig. 105, PL. 64)

玉類の形状については下表の通りである。なお小玉の上面形はいずれも正円形を成さず歪曲して，孔の大きさもまちまちである。

（中間研志）

Tab. 5　第10号箱式石棺墓出土玉類計測表　（単位 cm）

	種類	材質	色	長	巾	径	厚さ	孔径	備考
1	勾玉	ガラス	白色	1.65	0.75		0.4	0.1	腐蝕して脆い。白色化。
2	管玉	碧玉	淡緑色	1.0		0.4		0.25～0.2	両面穿孔。一部欠損。
3	管玉	碧玉	濃緑色	1.1		0.5		0.2 ～0.1	両面穿孔。
4	小玉	ガラス	濃紺			0.6	0.55	0.25～0.2	
5	小玉	ガラス	濃紺			0.6	0.4	0.2	
6	小玉	ガラス	濃紺			0.5	0.7	0.1	形歪曲。
7	小玉	ガラス	濃紺			0.63	0.5	0.3～0.15	

第11号箱式石棺墓

4基の石棺から囲まれたようにして位置している本石棺の墓壙プランは，明確な長方形を呈する。長さ266cm，幅94cm，深さ40cmを測る。

棺材は全て消失しているが，石材の抜き跡と，少量の粘土塊が残存しており，箱式石棺であることが認められる。

墓壙は，袋状竪穴10号と11号の端を切って位置しているので，袋状竪穴が廃棄された後で埋

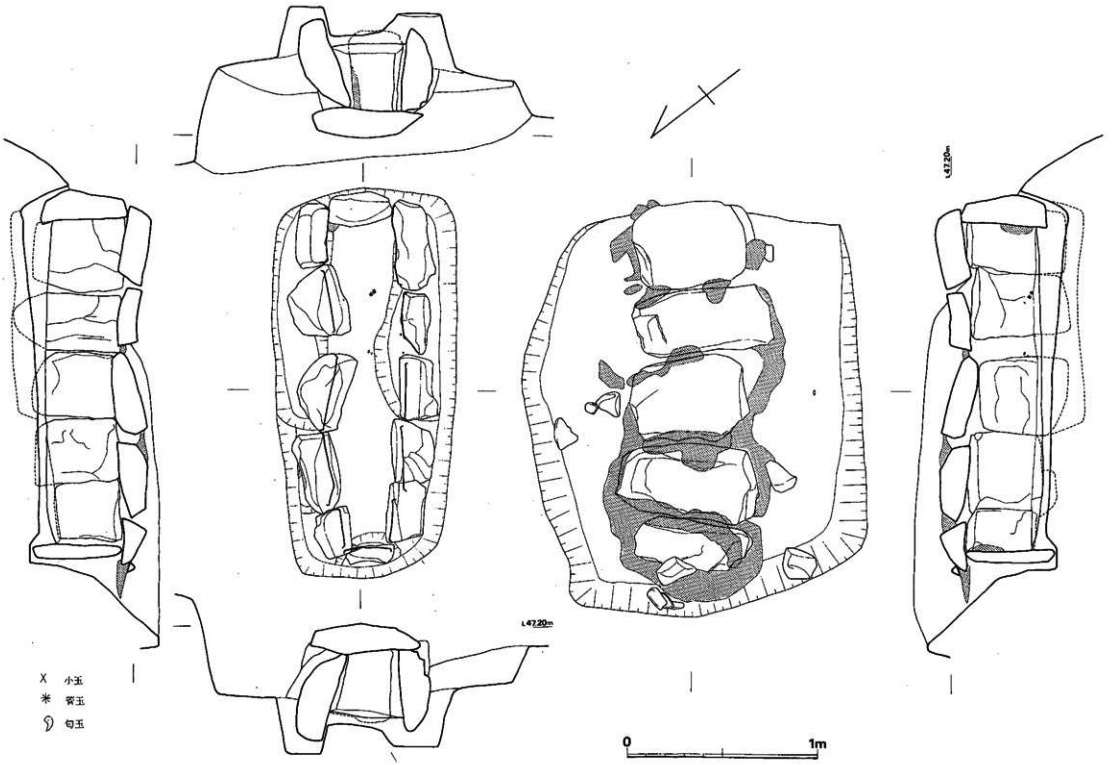


Fig. 104 第10号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）

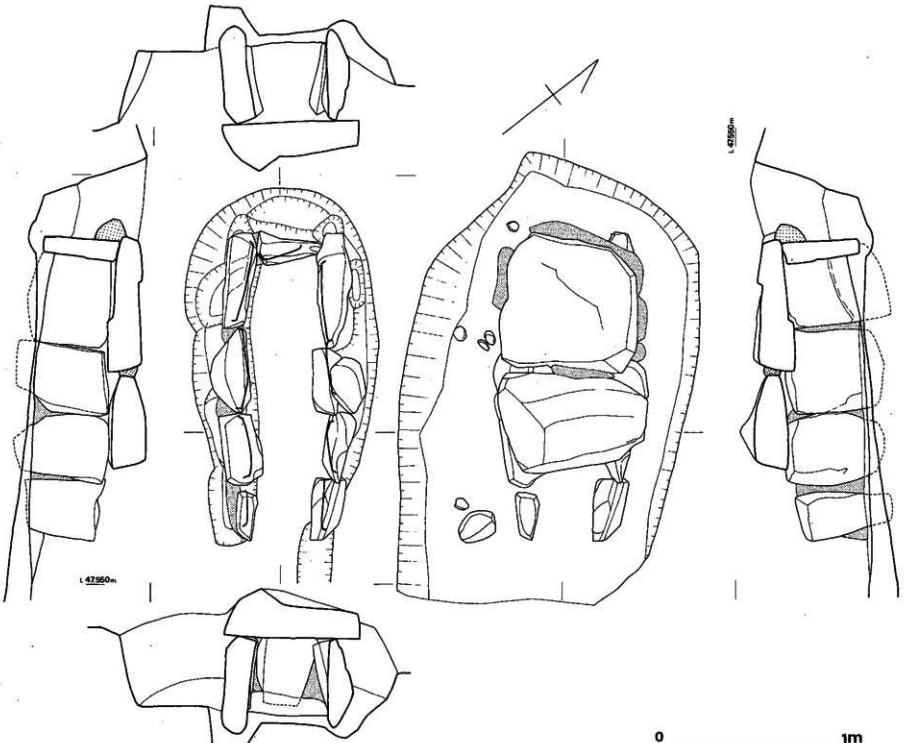


Fig. 106 第12号箱式石棺墓実測図（縮尺1/20）

殺されたのではなかろうか。副葬品やその他の遺物は検出されなかった。

第12号箱式石棺墓（Fig. 106）

本石棺は，ABトレンチ（土層断面図，遺構配置図参照）の調査時に発見されたものであり，本石棺の中では蓋石が最大である。

本石棺の南端はすでに削除されており，南端側の小口石と側壁とが消失していた。墓壙は，袋状竪穴9号，13号の西側端を切っている。不整長円形の平面を呈する。長さ235cm＋α，幅149cm，深さ63cmを測る。墓壙はゆるやかな傾斜地の地山を掘っており，石棺埋置部分は一段深く掘り下げられている。床面から25cm測る。床面は，削った地山の上に厚さ約15cm土をのせて，整えて水平にしている。棺身は墓壙の中央よりやや東に偏して，墓壙に平行に作られている。蓋石は，大きい板石状の石材が2個残っている。花崗岩である。隙間には青色粘土をかなり厚く貼付けて密閉してある。

棺身は，側壁各4個，北側小口石1個で組立てている。北側小口石は，やや内側に傾斜して立つ長側壁によって挟まれており，隙間には青灰色粘土を詰めている。棺身内面は全面に朱塗されている。側壁の各接続部も青灰色粘土で目貼りが施されている。石材は花崗岩である。

内法は，長さ185cm＋α，幅37cm～43cm，深さ34cm～42cmを測る。遺物は何も検出されなかった。

第13号箱式石棺墓（Fig. 86）

墓壙プランが長方形を呈する本石棺は，長さ197cm＋α，幅122cm，深さ41cm＋αを測る。棺材は全て消失している。4個分と思われる石の抜き跡が確認されたが，東南半分の墓壙は削除され，あとは不明である。粘土塊，遺物は無かった。

第14号箱式石棺墓（Fig. 86）

石棺群の最東端に位置する石棺であるが，13号石棺と同じく，破壊されて棺材は全く無い。墓壙プランは長方形を呈する。長さ142cm＋α，幅85cm，深さ21cm＋αを測る。西端は削除されている。石の抜き跡と少量の粘土塊が検出された。遺物は無い。　（中牟田賢治）

Tab. 6　箱式石棺墓一覧表　（単位 cm）

No.	方位	墓壙プラン	石棺内法 長さ×巾×深さ	副葬品	備考
1	N51°30′W	隅丸長方形	126＋α×40～45×45		内面朱
2	N16°W	長方形			
3	N24°W	隅丸長方形			石抜跡有
4	N46°W	隅丸長方形	190＋α×38×42	鉄鏃(棺外)	北西が頭部か、内面朱
5	N51°30′W	不整長円形			
6	N52°W	隅丸長方形	80＋α×38×44		

7	N49°W	隅丸長方形	150＋α×？×？		小口部のみ石残る
8	N46°W	不整長円形	128＋α×39×45		内面朱、敷石有
9	N38°E	不整長円形	115×38×28～40		内面朱、枕有
10	S62°E	隅丸長方形	171×25～40×34～40	勾玉1、小玉4、管玉2	内面朱、頭部東南、P9を切る
11	N37°E	長方形			石抜跡有、P10、11を切る
12	N55°W	不整長円形	185＋α×37～43×34～42		内面朱、P9、13を切る
13	N54°30′W	長方形			石抜跡有
14	N60°30′W	長方形			石抜跡有

（4）木棺墓の調査　(Fig. 107･108･109)

6基の木棺墓の位置は，西端部附近に2基（1号，6号），中央南端傾斜面に3基（2号，3号，4号），東端斜面に1基（5号）である。いづれも，丘陵東南斜面に占地している。また，それらの長軸は丘陵主軸方向にほぼ平行である。6基のうち5基が木質の付着した鉄製角釘を出土した。それは木棺に使用されたと考えられ，よってこの類を木棺墓と呼称したい。破壊削除されて不明瞭なものが多いが，どうにか墓壙を確認できるものは3基である。

第1号木棺墓 (Fig. 86)

木棺墓の中で最も西に位置している。上面がかなり削平されており，現状の墓壙プランは長方形を呈し，長さ190㎝，幅68㎝，深さ33.5㎝＋αを測る。墓壙内に西側附近を中心として全面に鉄釘が22本出土した。床面はかなりの凹凸がある。副葬品は皆無である。(中牟田賚治)

遺物　(Fig. 107, PL. 65) 木質の付着した鉄製角釘である。大小2類に分けられる。全長8.3㎝前後を測り，頭部が逆L字形を成す大形のもの（1～4）が，出土釘22本中大部分を占め，いずれも同規格品と思われる。木質付着状況により3類に細分される。杢目方向が上下全面に横位のもの（1，2），頭部よりに1.5～2.0㎝幅の横位杢目で，以下は縦方向杢目を残すもの（3）これは他に3例見られる。さらに頭部より幅2㎝に斜めに杢目が見られ，以下横方向杢目を呈するもの(4)である。いずれの杢目付着状況も，木棺に使用した部位による差を示すものであろう。他に小

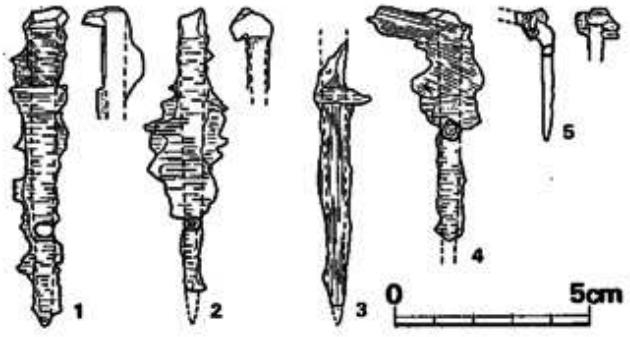


Fig. 107　楯田山遺跡第1号木棺出土鉄釘実測図（縮尺1/2）

ぶりのものが数例ある（5）。頭部を欠くが，中途で曲げられており，その上部に横位の杢目を有する木質を残し，以下には全くその痕跡は見られない。中途で曲げられたものは，他に2例あるが，いずれも小ぶりで下半部には木質は見られない。下半部は板よりはみ出た部分で，意図的に曲げられたものと思われる。

他の鉄釘出土木棺墓4基の釘についても，同類，同規格であるので，ここではこの第1号木棺出土分で代表して示した。（中間研志）

第2号木棺墓 (Fig. 108)

中央南側斜面に，径2mの浅いピットを切って埋設されている。墓壙の平面形は長円形を呈する。長さ156cm，幅48cm，深さ38cmを測る。墓壙床面は中央が少し窪んでいて両小口に向かってゆるやかに上っている。上面は傾斜地のため南側の長側壁が北側に比較して約20cm下がっている。床面上8cmに鉄製刀子1点が出土した。鉄釘は床面上の3本のみ遺存していた。

（中牟田實治）

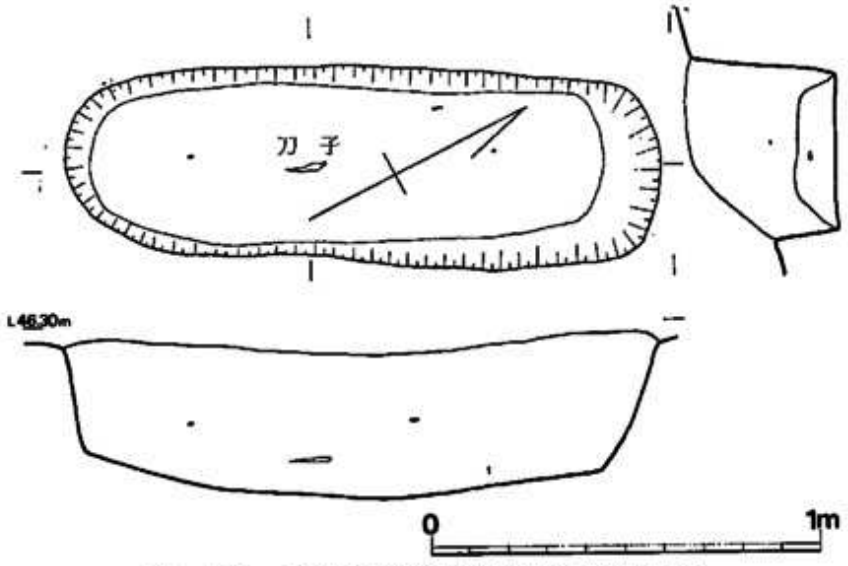


Fig. 108 稲田山遺跡第2号木棺墓実測図（縮尺1/20）

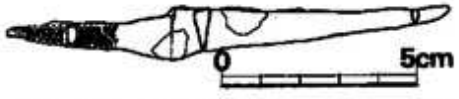


Fig. 109 稲田山遺跡第2号木棺墓出土刀子実測図（縮尺1/2）

副葬品 (Fig. 109, PL. 65)

鉄製刀子1点が副葬されていた。背側に角関を有し，鋒先へ細身となり，背部は幾分反身を成す。全身11.4cm，身長7.0cm，関部幅1.3cmを測る。茎部には木質付着をみる。（中間研志）

第3号木棺墓 (Fig. 86)

第2号木棺墓の南側斜面に位置し，作業排土を再度除いて後発見されたので，東西を主軸とする墓壙の東隅一部のみ検出した。床面より土師器杯1点と少量の土師器片および鉄釘3本を

検出した。

第4号木棺墓 (Fig. 86)

中央最南端傾斜面に位置する。墓壙は削除され確認できなかったが，土師器杯3点，須恵器片，鉄釘2本を1ヵ所に検出したので木棺墓と推定した。

第5号木棺墓 (Fig. 86)

上半分が削除されており現状では墓壙プランは不整長円形をなす。床面は北へ緩やかに傾斜する。北側小口部に深さ20cmの長円形ピットがある。床面中央附近に赤色顔料がかなり付着していた。床面南側より鉄釘3本が出土した。

第6号木棺墓 (Fig. 86)

破壊されて墓壙プランは不明であるが，土師器杯3点が1ヵ所に検出されたので木棺墓と推定した。袋状竪穴3号を切っている。　　(中牟田賢治)

Tab. 7　木　棺　墓　一　覧　表　　(単位 cm)

No.	方　位	墓壙プラン	棺身　長さ×巾×深さ	副　葬　品	釘数	備　考
1	N50°E	長方形	190×68×33.5+α		22	
2	N26°E	長円形	156×48×38	刀子1	3	
3				土師杯1+α	3	墓壙不明
4				土師杯3、須恵片	2	墓壙不明
5	N30°W		154+α×65+α×50+α		3	床面朱
6				土師器杯		P3を切る

(5) 土壙墓の調査 (Fig. 110·111·112, PL. 59)

土壙墓は4基である。1号，2号土壙墓は，はじめの段階で箱式石棺群に一応いれていたが，その後の調査で箱式石棺とは確認できなかったので土壙墓として入れた。

土壙墓4基の位置は，中央北端に2基（1号，2号），中央南側傾斜面に1基（3号），東端に1基（4号）である。土壙墓どうしの切り合いはなく，袋状竪穴8号，10号を土壙墓1号が，袋状竪穴11号を土壙墓2号が切っている。1号，2号，4号とも削平されたりして完存していない。3号土壙墓は特殊な形態をしており注目される。4基とも主軸方位はまちまちである。以下各土壙墓を述べる。

第1号土壙墓 (Fig. 86)

袋状竪穴第8号と第10号を切っている墓は不整長円形を呈する。北西側が約4分の1削除されている。長さ185cm+α，幅77cm～90cm，深さ45cmを測る。床面は地山面より10cmから20cm上になっており，貼り床を形成している。床上には全面朱塗されていた。壁面はほぼ垂直に下に掘りこんでいる。南側壁面上部にも朱が付着している。遺物は何も検出されなかった。

第2号土壙墓 (Fig. 86)

長さ175cm，幅89cm，深さ35cmの隅丸長方形の墓である。袋状竪穴11号を切っている。遺物は検出されなかった。

第3号土壙墓 (Fig. 110, PL. 59)

南側斜面の地山に掘りこまれている墓壙は，長さ107cm，幅46cm，深さ37cmの長円形プランを呈する。床面上6cmのところに土師器杯を中央にして左右を2個の甕がはさむようにして口縁を向かい合わせて出土した。杯は一部欠損しているがほぼ完形である。土師器の甕は，両方とも同形で半分が欠損している。

床面は地山を掘ってつくっているが，2個の甕を埋置するためか床面両端を凹めている。

(中牟田賢治)

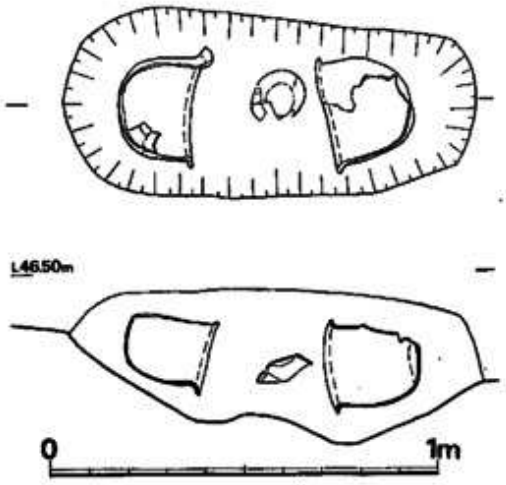


Fig. 110 柳田山遺跡第3号土壙墓実測図 (縮尺1/2)

遺物 (Fig. 111・112, PL. 65)

1，2は，口縁部相対して土壙両端に置かれていたもので，1は，口径30.1cm，器高23cm，2は，口径27.9cm，器高23.1cmを測る。1は，頸部内面に稜をつくり，外方へ強く開く短い口縁を有し，寸の短い胴部に丸底を有する器形である。口縁稜上内面に横位のハケを施し，外面頸部以下に粗い縦方向ハケ調整を行なう。内面稜以下4cm幅は横ナデであるが，以下は粗い上方へのナデ上げが行なわれる。胎土に粗砂を含み赤茶褐色を呈する。2の器形は，1と同類である。外面頸部以下に上方向へのヘラ削り上げが見られ，以下胴部は，ハケ調整の上をナデの仕上げが施されている。内面は，斜め方向のヘラ削りが見られる。胎土には細かい石英粒を含むが，精製されたものである。3は，中央に副葬されていた土師器杯である。口径12.8cm，器高3.6cmを測り，底部ヘラ切離しにて，体部底部の境は明確である。内面および外面上半はナデ調整にて，体部下半はヘラ削りにより稜を有する。胎土に少量砂粒を混じ，焼成軟質にて淡褐色を呈する。

なお，1，2に類似するものとして，Fig. 112-9，10がある。いずれも表採品であるが，口径各々26.4cm，25.4cmを測り，頸部内面に稜をつくる。外面いずれも縦方向ハケを残し，胴部内面上位は横ナデ，下位はナデ上げを行なう。9は，全体的に粗いつくりで胎土に粗石英粒を多く含み，焼成軟質で赤茶色を呈する。10は，口縁外面に僅かに二次的煤付着が見られ，胎土に粗石英粒を多く含み，焼成軟質にて暗褐色を呈す。

(中間研志)

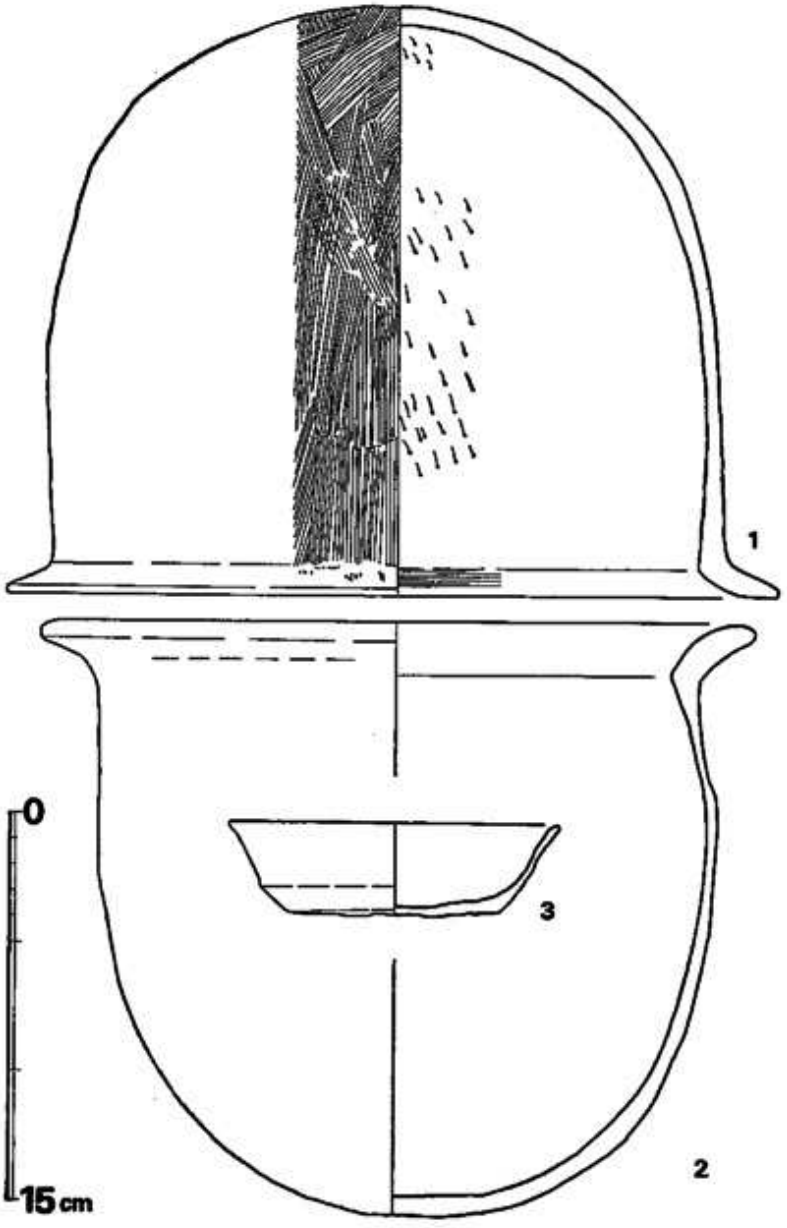


Fig. 111　稲田山遺跡第3号土壙墓使用土器・剛葬土師杯（縮尺1/3）

第4号土壙墓

舌状台地の北東端に位置しているが，墓壙の北側が大半破壊されており南側墓壙の一部だけが確認された。平面形は明確ではないが長方形と思われる。幅は南側で106cmを測る。遺物はなかった。（中牟田貴治）

土師器杯及び皿

(Fig. 112-1～8, PL. 65)

1はM3，2，5，6はM4，3はM6，8はD33出土のものであり，4，7は表採品である。4類に分けられる。

Ⅰ類（1，2，3）

底部ヘラ切離しで，体部底部の区別が明らかであり，口径約12cm，器高3～3.5cm内外を測る類である。いずれも，内面および体部外面はナデ調整を行なう。1の外面は，強いナデによる稜が見られる。3は口縁が幾分外へ開く。焼成いずれも軟質である。1は胎土精良赤茶褐色を呈し，2，3は胎土に粗砂を幾分含み，淡褐色を呈する。

Ⅱ類（4）

底部ヘラ切離しで，Ⅰ類より法量大きく，口径14.2cm，器高4.5cmを測るものである。体部

外面と内面底部は強いナデによる稜が見られる。焼成軟質にて暗茶褐色を呈し，胎土は精良である。体部底部境目にはヘラ削り痕が残る。

Ⅲ類（5，6，7）

底部がヘラ切離しで体部底部の境が明確でなく，口径はほぼ14cm内外で，器高2～3.5cmの広くて浅い所謂皿形の器形を成す類である。いずれも胎土に少量の粗石英粒を含み，焼成軟質にて淡褐色を呈す。

Ⅳ類（8）

底部糸切離し痕を有するもので，口径6.2cm，器高1.5cmを測り器壁の薄い小形の類である。体部内外面ともに回転ナデ調整を行ない，底部内面は指で縦ナデを行なう。胎土精良にて，焼成軟質で淡褐色を呈す。

なお，これらの年代を推定，あるいはその編年的考察は，現段階においてはいまだむつかしいが，一応結語の項で述べてみたい。

（中間研志）

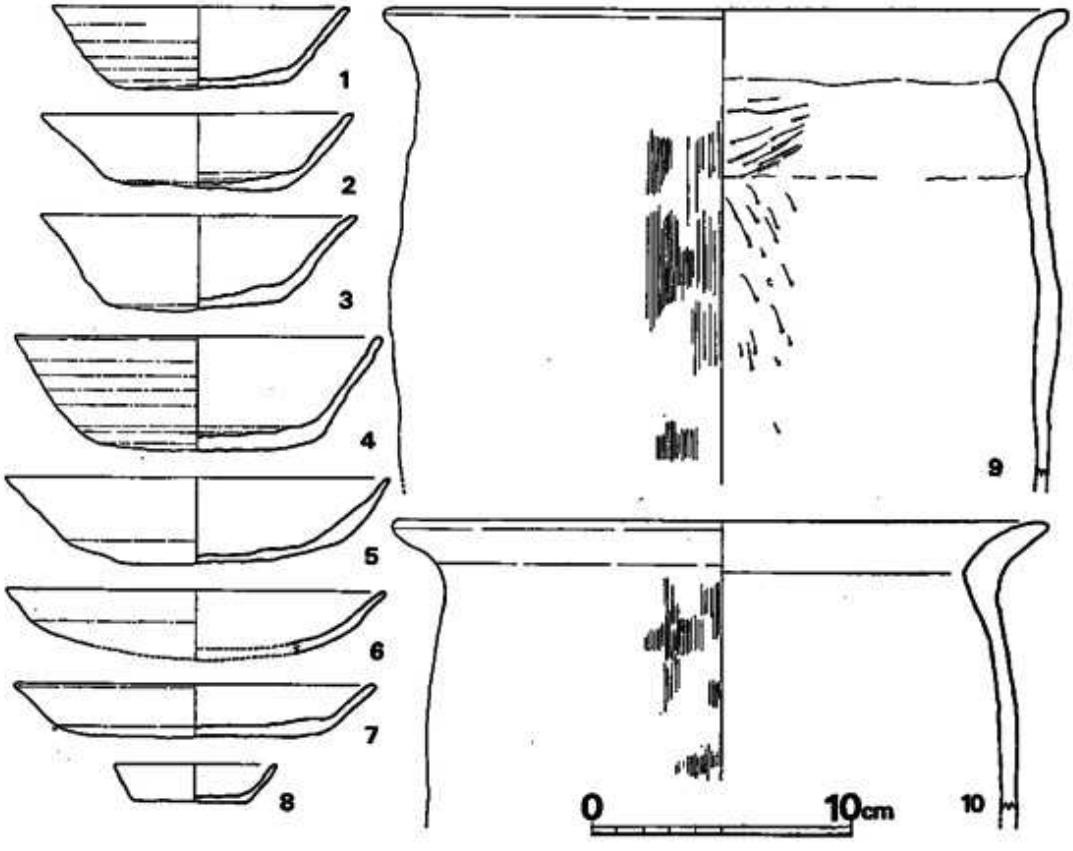


Fig. 112 稲田山遺跡木棺墓・他出土土師器実測図（縮尺1/3）

Tab. 8　土　壙　墓　一　覧　表　　(単位 cm)

No.	方　位	墓壙プラン	墓壙　長さ×巾×深さ	遺　物	備　考
1	N59°30′W	不整長円形	185＋α×77～97×45		床面朱塗
2	N77°W	隅丸長方形	175×89×35		P11を切る
3	N55°E	長　円　形	107×46×37	甕2、杯1	
4	N12°W？	長方形　？			北東半不明

その他の表土出土遺物

当桶田山遺跡においては，その東半部上面をほとんど削平されており，その結果として，表土（畑地耕作土）中に以下のような遺物が出土した。石器類・鉄器類・紡錘車・須恵器等がそれであり，丘陵削平前の各々の時期遺構の存在を推定する上で重要な証左となろう。

石器類　(Fig. 113, PL. 64)

石鏃 (Fig. 113-1, 2)　1は，黒耀石製で裏面に原剥離面を残し，粗製である。右側辺に両面リタッチを加えている。2は，サヌカイト製で片面加工を行なう。長いポイント状を成し，表面縁辺部には，割と丁寧にリタッチを加えている。1は表採品，2はＳ９掘方内出土品である。

スクレーパー (Fig. 113-3)　サヌカイト製で裏面は原剥離面のままで片面加工を行なう。縁

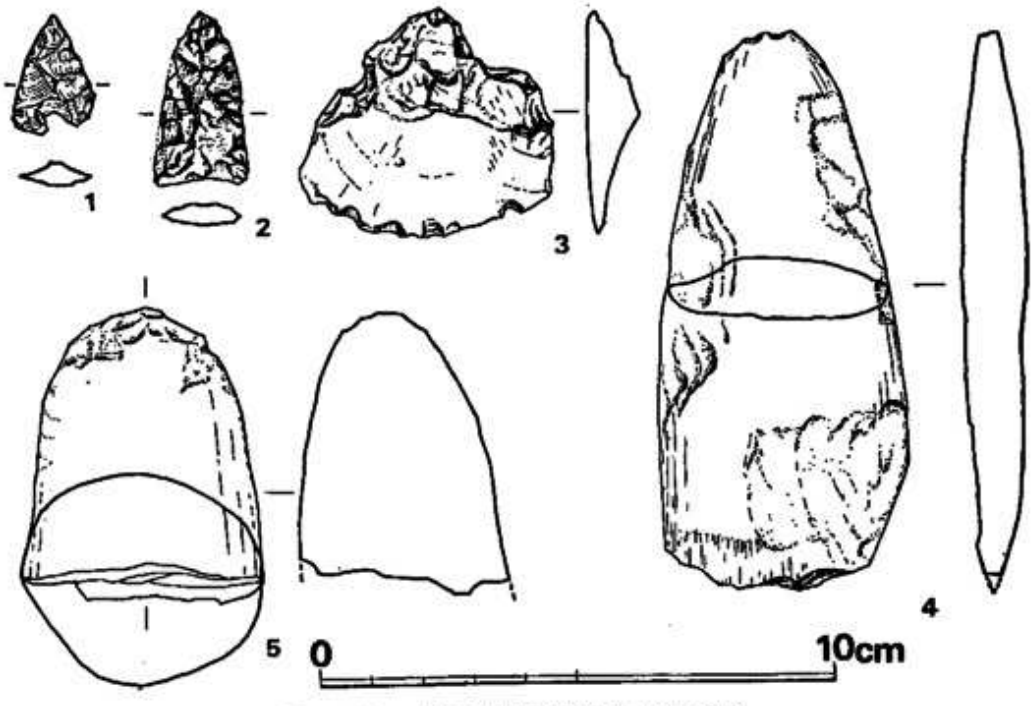


Fig. 113　桶田山遺跡石器実測図（縮尺2/3）

辺部のみにリタッチを加える粗製品である。

扁平磨製石斧（Fig. 113-4）小形の扁平な磨製石斧である。部分的に原剝離面を残す。刃部は欠損しており，使用痕は不明である。硬質の蛇紋岩系の石材を用いる。現存長10.9cm，幅4.9cmを測る表採品である。

太型蛤刃石斧（Fig. 113-5）太型蛤刃石斧の基部である。縦面略円形を呈し，基部先端に二次的打痕が残るが，磨きは丁寧である。玄武岩製でP39上部出土品である。

表土出土鉄器（Fig. 114）

1は茎部および鋒先部を欠く鉄刀である。現存刃渡り長18.1cm，身幅3.0cm，身厚1.1cmを測る。背部近くに僅かに木質付着をみる。全身30～35cm程の短刀となるか。表採品で保存悪く，銹錆著しい。

2は，円筒形木質に差し込まれたような形を成す小鉄器片である。中の鉄器部は，幅9mm，現存長2.4cmを測り，その先端は，上下より曲げて合わせている。さらにそれは，折損部において見ると，片刃の刀身断面形を成し，木質部は，折損部手前で明確に止まっている。これらにより，当鉄製品は，茎部を円筒形木柄に差し込んだ刀子様工具の茎部であろうと思われる。

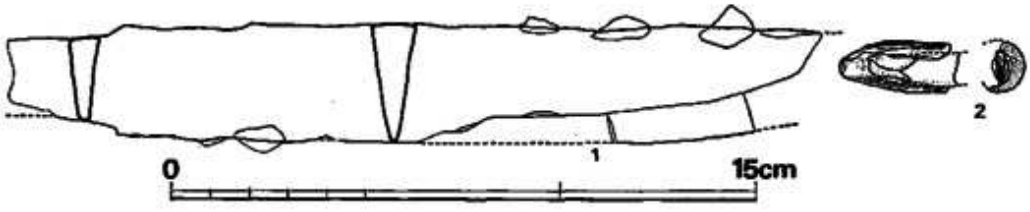


Fig. 114　稲田山遺跡表土出土鉄器実測図（縮尺1/2）

紡錘車（Fig. 115, LP. 64）

南側斜面表土中よりの出土品である。いずれも滑石製である。1は，径4.4cm，厚さ0.7cm，孔径0.6cm，2は，径4.1cm，厚さ0.5cm，孔径0.5cmを測り，いずれも丁寧な作りで，2は片面穿孔と見られる。

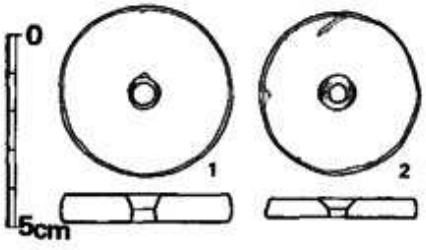


Fig. 115　紡錘車実測図（縮尺1/2）

須恵器（Fig. 116）

杯蓋（1）は外縁端部を押し曲げ鋭い先端を成す。口径11.8cm，器高1.9cmを測る。内外面に回転ナデが見られるが，内面中央部は縦横の指ナデ調整が見られる。頂部につまみ貼り付け痕が残る。胎土精良焼成堅緻で青灰色を呈す。

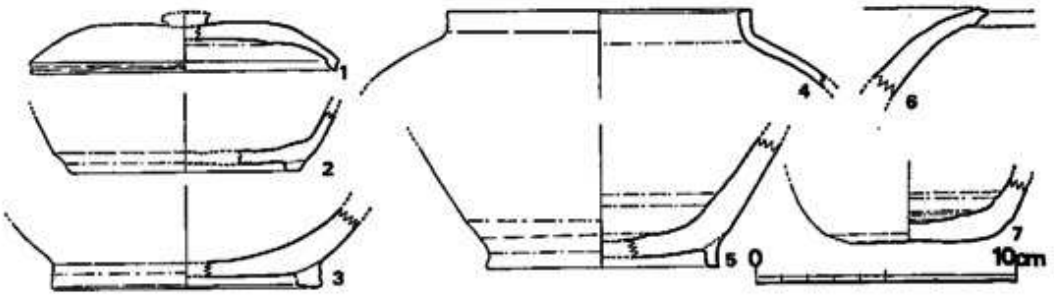


Fig. 116　桶田山遺跡須恵器実測図（縮尺1/3）

杯身（2）は低い貼り付け高台を有し，体部底部境にヘラによる稜を残し，他は，ナデ調整を行なう。内面底部位は，縦ナデを施す。胎土精良焼成やや良にて灰色を呈し，底径 9.0cm を測る。

壺類（3～7）3は，底径10.4cmで，やや外方へ張り出した太い高台を有し，体部は底部から緩やかに開きながら立ち上がり，厚い器壁を有する。内外面ともナデ調整を行ない，胎土に粗砂を幾分含み，焼成堅緻で外面黒色，内面ねずみ色を呈する。5も同じく底部片である。底径9.0cmを測り，細い高台に厚い器壁を有する。内面は，強いナデによる凹凸が幾らか見られ，底部外面は，ヘラ切離しの上をナデる。体部外面は，回転ナデ調整を行なう。胎土に粗砂を幾分含み，焼成堅緻で灰黒色を呈する。4は，短頸の壺口縁部で，口径11.8cmを測る。僅かに内傾した頸部は，平坦な口唇部を有し，薄手の器壁を有する肩部へと広がる。内外面ともにナデ調整を行ない，胎土精良ではあるが僅かに粗砂粒を含み，焼成は堅く，外面黒色，内面灰黒色を呈する。小形の蔵骨器であろうか。6は，著しく外方へ開く口縁片で，口唇部上面とその下位外面に凹線を巡らし，それらの境目に稜をつくる。内外面ともにナデ調整を行ない，焼成堅く灰黒色を呈し，胎土に少量の細砂粒を含む。甕，壺類の口縁部であろう。7は，丸底に近い平底を有する底部片である。器壁厚く，内面は強い指による渦巻き状ナデ調整で，凹凸著しく外面体部と底部の境部はヘラ削り痕が残る。焼成堅緻胎土精良にて灰色を呈す。甕あるいは小形短頸広口壺の底部か。

（中間研志）

4 結　　語

背振山塊の東北端にある天拝山麓には，多くの舌状台地があり，筑紫平野に向かってのびている。これらの低い舌状台地の間には，水田が狭い低地に形成されて東方にのびているが，桶田山遺跡はこれら舌状低丘陵地帯の一つに位置する。遺構は，土壙群と甕棺墓，箱式石棺墓，木棺墓，土壙墓，堀状の溝が発見されており，墓地群をともなった複合遺跡である。

遺構と遺物は出土状態を主にして詳述してきたが，調査の成果や問題点をいくつか整理しておきたいと思う。　　（中牟田貴治）

土壙群　(1)　弥生時代の貯蔵穴　全部で33の貯蔵穴を数えた。桶田山の丘陵が削平をうける以前には50前後の貯蔵穴があったものと想定してもそうあやまりはあるまい。この貯蔵穴を使用した人の住居は，原口川のある南側以外に求めるべきであろうが，九州縦貫道の建設工事にともなう調査では望むべくもなかった。

また，貯蔵穴と甕棺墓，石棺墓との切り合い関係は１例を除いて貯蔵穴が古くなっており，ある短期間に利用された様相がうかがえた。さらに，貯蔵穴からの出土遺物が皆無に近い状況ではあっが，他の遺物から城ノ越式の時期から甕棺の出現する時期（須玖式の時期）までの間を考えて大過あるまい。この遺跡に限ったことではないが，貯蔵穴内からの出土遺物がなぜ少いのか疑問として残った。

(2)　中世の土壙　この項でとりあげた土壙の時期は，P40出土の時期不明の施釉陶器を除いて一応鎌倉時代の範囲におさまっている。さらに遺構全体図を見るとき，弥生時代の遺構に比較して，中世の土壙，甕棺墓，木棺墓（平安時代の遺構も含めて）など削られているものもあるが，残りのよいことに(少なくとも遺構の全体が丘陵上に残っている)気がつく。このことは歴史時代の遺構に前後関係があるにせよ丘陵の削りとりがこの時期の前後にあったであろうと推察される。鎌倉時代元寇の起こる頃までは北部九州は比較的安定していたように思うとき丘陵の削平は開墾，開田などによるものではなかろうか。丘陵上で旧地表をどこにも見いだせず，東半部で挙大の礫が地山の直上で多量に見つかったこと，中世の土壙としてとり上げたもの，ゴミ捨場的な感じのものが多かったのは，このことを裏付けているように思える。堀状の遺構も，例外ではあるまい。ただ，見逃してならないと思うのは，筑後，肥前，豊後，に近いこの場所は，室町時代以降，数々の戦跡，城などの遺跡を残している点でこの場所も砦の役を鎌倉時代においてもはたしていた可能性はある。　　（栗原和彦）

甕棺墓　天拝山麓に分布する弥生甕棺墓の遺跡については位置と環境の項で簡単に述べたが，調査された遺跡を挙げ参考にしたい。

弥生前期の甕棺墓は，剣塚遺跡17基(註1)，塔原遺跡10基(註2)，道場山遺跡10基(註3)がある。中期は，道場

山遺跡112基（後期初頭を含む），八隈2基[註4]，畑添1基[註5]，原口古墳々丘下[註6]からも出土している。後期は，道場山遺跡に数多く調査されている。この天拝山麓の現在までの調査では，中期前半および中葉に至るまでの期間が空白であり，さらに後期初頭以降に激減していることがわかる。またその分布は，道場山遺跡を中心として，前期の分散傾向から，中期を経て後期初頭へと集中傾向がみられる。

さて，桶田山遺跡では一応5基を確認したが，復原により2基分が増え，数の上では7基に数えることが出来る。

甕棺墓の使用土器は，甕・壺・蓋の3種類であるが，甕については2類に分類した。Ⅰ類は，口縁上面が水平，あるいは僅かに内傾するもので，K1下・K2上下・K3A下（Fig. 99-7・8・9）である。Ⅱ類は，口縁内端に鋭い稜を有しながらも立ち上がって断面が「く」の字形をなすもので，K3B上下がこれにあたる。桶田山Ⅰ類に類似したものに次の遺跡例が挙げられる。現在発見された甕棺としては最大のものを有している春日市一の谷甕棺群[註7]がある。Ⅰ～Ⅳ型式に分類されているが，桶田山甕棺群は一の谷Ⅲ式に該当すると思われる。また佐賀県三津永田遺跡[註8]の例があげられる。即ち，三津永田Ⅲ式に該当する。太宰府町吉ケ浦出土[註9]の甕棺および三輪町栗田K43下は桶田山Ⅰ類に酷似する。桶田山Ⅱ類にあたる甕は，栗田B地点K15下・K8下，福岡市早良町長峰[註10]K4下があり，素環頭大刀・内行花文鏡3面を出土した福岡市丸尾台甕棺群[註11]もこれに該当する。以上それぞれ検討した結果，桶田山甕棺は大まかに弥生中期後葉の飯塚市立岩式甕棺[註12]の中に含められ，その中でも中期終末期に位置づけられよう。Ⅱ類も中期終末期に比定されると考えられるが，Ⅰ類と比較して口縁がやや立ち上がりつつあることを考慮するとやや時期的に下り，あるいは後期初頭に位置づけられるかと推定される。

石蓋単棺の壺形土器は，筑紫野市大字永岡出土[註14]のP5 No. 2が器形としては類似しているが，頸部に凸帯がない。また，太宰府町吉ケ浦の壺棺[註15]がよく似ているが，口縁外端に刻目がなく2条の胴部凸帯の間がやや狭い。中期後葉甕棺墓群である三輪町栗田遺跡出土の丹塗り壺156・196が極めて類似している。この種の壺は須玖期に盛行し，桶田山K4はこの系統のものであり，年代的には当遺跡他甕棺の時期と大差ないように考えられる。

また，表面採集品の中に前期後半の伯玄社タイプの口縁片があり注目される。至近の塔原・剣塚遺跡にも10基・17基の前期甕棺墓がみられるのも興味深い。

甕棺の埋葬位置は箱式石棺群の北東側で，丘陵北西部斜面に群をなしていて一定の墓域を形成しているが，後世による削除がなければ，表面採集で甕棺破片多量がみられることなどからこの北西部斜面に箱式石棺墓と同じく何基かの甕棺が埋葬されていたことが予想される。箱式石棺墓と甕棺墓とを同一遺跡内に検出する遺跡例は多く，本遺跡もそのひとつだが，一般的に箱式石棺墓より盛行期の甕棺墓の方が先行すると考えられており，桶田山甕棺群もその類と思われる。

（中牟田賢治・中間研志）

箱式石棺墓　14基中完存していたもの2基，棺材が遺存するもの8基である。丘陵中部より西方に全て位置している14基の石棺は，甕棺墓地とは位置を異にしておりひとつの墓域を形成している。桶田山のこの低丘陵は後世において西側斜面がかなり削除されているが，甕棺の墓域より北東側には箱式石棺があった痕跡は見られない。西南道側の方は丘陵が切断されており，1号石棺の位置と削平状態から石棺群の墓域が西南側に拡大されていた可能性は充分にある。

次に方位についてみると，大きく2類に分類され，さらに細かく分けるとⅠ類がAとBに分けられる。Ⅰ類のAは，北と西の中央付近に主軸を持っているもの（1，4，5，6，7，8，10，12，14），Bは少し北よりに主軸を持つもの（3，2），Ⅱ類は，北と東のほぼ中央に主軸を持ち位置するもの（9，10）とがある。箱式石棺の方位については，鏡山猛氏による(註16)とある種の規範が存在しており，これは世界的な現象であることも論じられているが，本石棺群の中では9号と11号のⅡ類の石棺がⅠ類の石棺と直交する。この事はS8，9，10，11，12，D1（石棺）の何らかの密集させなければならない理由を有する一群において，S9，11のみが狭い範囲でむりやり埋葬する手段を取った結果と考えられる。それは即ちこの二つの石棺が他に比して後出することをも示唆すると考えられる。密集することの理由を考えるならば小単位の墓域が限定されていた事が考えられ，家族墓的様相をみる。この事はS2，3，4，5，6，7の一群の存在からも考えられる。さらに同様にS13，14の群などもこの1支群としてその存在が推定される。

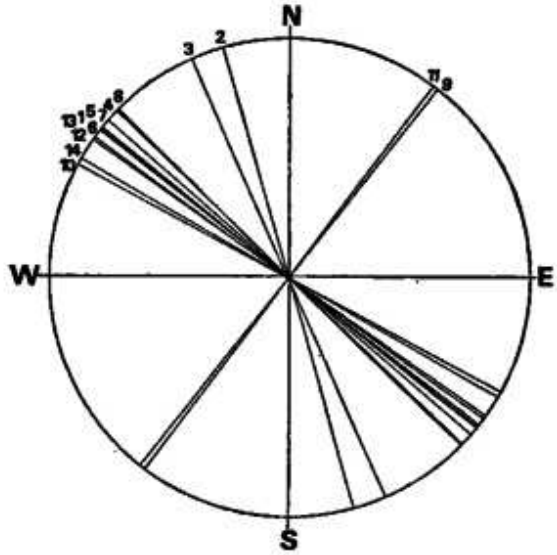


Fig. 117　桶田山遺跡桶田山箱式石棺墓主軸方位一覧

棺材の残っている石棺が少ない現状では，あまり論じる事はできないが残存している石棺について構築などについて述べてみたい。

構造や形態は，地山を深く掘りこんだ墓壙内に石材を用いて遺骸を収納する施設をつくり四方を石材で囲み石蓋をしたものであり，墳丘は一応現状においては認められない箱式石棺である。棺の構築については，Ⅰ分厚い立体的な石材を使用して組立てたもの（1号，4号）Ⅱ板石に近い石材をも一部選定して墓壙内をさらに深く掘り固定させ，組立てたもの（6号，8号，9号，10号，12号）とに分けられる。また，棺材の大きさをみると特に6号と8号がかなり大きな石材を使用していることがわかる。床に敷石を持つものがこの8号石棺であり，大き

さから言っても本石棺群最大のものであるようだ。床に敷石を有する石棺は朝倉町天皇山6号石棺，宮の前C地点1号，2号，3号，4号棺(註17)，朝倉町堂本石棺，甘木市二塚4号石棺(註18)などが知られる(註19)。箱式石棺において敷石を有するものは全体から見ると数少なくその分布は宮の前の例を除き，筑前南部一帯に偏するかのように見える。敷石を敷くということは，より厚葬であることは間違いなかろう。そこに身分的差が見られる事実は管見の少ない現状では認められない。

棺材を密閉したり目貼りしたりする粘土は全て青灰色か青色を呈しているが，かなりの量が各石棺に使用されている。同じ地域における剣塚遺跡の後期前半に比定される石蓋土壙墓は，黄白色の質の悪い粘土を用いている。

次に墓壙の平面形をみてみると3つの形に分けられる。Ⅰ隅丸長方形，Ⅱ不整長円形，Ⅲ長方形である。Ⅰは，1，3，4，6，7，10の各石棺，Ⅱは，2，11，13，14の石棺，Ⅲは，5，8，9，12の各石棺である。

副葬品を検出した石棺は，10号と4号であるが，10号は床面から勾玉，小玉，管玉が出土し，4号石棺は墓壙内から無茎鉄鏃が出土した。他の石棺についても精査したけれども副葬品は確認できなかった。床に枕をもっている9号石棺は，本石棺中最も小さいものである。棺材内面および床面での赤色顔料の痕跡は，7号を除き全てに付着している。

14基の中で石棺どうしが切り合っているものは全くみられずその位置からみて，一つの規則的な配置が考えられるのではなかろうか。袋状竪穴を切っているものに，10号，11号，12号がある。

以上，桶田山における箱式石棺の位置，構造や特徴的な点を簡単に述べたが，ではこの石棺群が構築された時期はいつだろうか。

弥生時代には墓制として，甕棺墓，土壙墓，石蓋土壙墓，木棺墓，箱式石棺墓があげられるが，主に群集して営まれていたことは周知のとおりである。本遺跡と同じ群集した遺跡に，亀の甲遺跡がある。『亀の甲遺跡は弥生中期から後期にわたる群集墓で，箱式石棺101基，甕棺98基，土壙墓83基が確認されている(註20)。副葬品は，小形内行花文仿製鏡2面，舶載方格規矩文鏡片1個，貝輪6個，素環頭鉄刀1口で，特定の墳墓に集中して副葬品がみられるのではなく散在的に副葬されている。また群集墓のあり方からみても，これらの副葬品をもった墳墓は特定のあり方を示していない。しかしながら中期から後期におよぶ過程の中で甕棺は減少し，石棺，土壙にかわる傾向がある。しかも土壙の中には組合せ式木棺の痕跡をとどめるものがあって注意をひく』として弥生時代の墓制の移行状態を述べている。また日佐原遺跡は『また日佐原遺跡では亀の甲遺跡よりもさらに顕著に甕棺が消滅して石棺や土壙が盛行する様相を示している(註21)』といわれている。本石棺出土の甕棺は器形からみて弥生時代中期終末期に比定され得るが(註22)，甕棺墓の副葬品も検出されず，いえることは石棺とも切り合いはなく，袋状竪穴を切って埋設されていることであるが，その前後関係を断定することはできない。しかし，墓域が形成

され，それぞれ一定の範囲があることや他の類例からみて甕棺墓は石棺墓に先行すると考える。

副葬品についてみると，8号石棺の墓壙内より出土した無茎鉄鏃1個，勾玉1個，管玉2個，小玉1個を出土した10号石棺がある。無茎鉄鏃は，墓壙内より検出されたがその出土状態から石棺と同時期か，その上限を示すものと考えられる。弥生の鉄鏃の出土例は全国で100余例，九州でも51例が知られている。福岡県内では管見によると11例が知られている。福岡市日佐原の石棺外副葬として4本，飯塚市立岩堀田2号甕棺内（中期中葉），筑後市狐塚住居跡内[註23]（後期末），甘木市宗原石棺内，福岡市福岡女学院敷地石棺内，糸島郡志摩町御床松原（表採），朝倉町山田外隈（表採），朝倉町大福大庭上原石棺内，甘木市栗田E-EEP306（溝中），福岡市小笹石蓋土壙内[註24]2本，太宰府町吉ケ浦甕棺内[註25]3本（中期後葉）などがある。弥生中期のものの出土例は少なく，大半は弥生後期の出土である。また『九州では中期中頃に国産される。……中期後半以降，全国的に製作が進められているが，形態的には打製石鏃を模倣した無茎凹基式の身の短かい例が多い。中期末（後期初）になると鉄鏃は大型化して重量が増加し……』[註26]といわれているが，本遺跡例は特に小型でもなくそれほど大型ともいえない。

勾玉，管玉，小玉については下条信行氏によれば『弥生時代の管玉は古墳時代の管玉に比して一般にその大きさ，とりわけ長さと径が小さな値を示すことに時代的特徴を求めることができる』[註27]と述べており，これに従えば桶田山出土の管玉は弥生時代的特徴を有するといえよう。

以上，立地・環境・位置・副葬品などを検討したが，この箱式石棺墓は弥生時代的特徴を有しており，その末期に位置づけられよう。　（中牟田貴治・栗原和彦）

土壙墓　桶田山遺跡における土壙墓4基の位置は，それぞれ異なり纏まりは全く無い。平面プランにおいても不整長円形1，隅丸長方形1，長円形1，不明1であり異なる。方位については，D1とD2がほぼ同一方向に主軸を持つが，D3，D4は独自な方向で位置している。D1，D2は初め石棺群に入れていたが，その痕跡が無く土壙墓群に入れた。4基のうち副葬品を出土していたのはD3号である。土師器甕2個，杯1個である。この土壙墓の出土状態は注目され，類例は寡聞にして聞かない。先学の御教示を仰ぎたい。土師器甕は2個とも同じ器形をしており，生活土器である。表採によってこれと同じ口縁部片が検出されている。杯は土師器で，同遺跡木棺墓からもかなり出土している。一括して木棺墓で述べたい。

他の土壙墓の時期は袋状竪穴を切っており，それよりも新しいということはわかるが，正確な年代は不明である。近辺においては，剣塚，唐人塚，塔ノ原遺跡等に検出されており，平安期のヘラ切底の土師杯，糸切底の土師杯（浦ノ城Ⅱ-3類該当）や青白磁類を副葬品として有しており，当桶田山土壙墓もほぼ同時期の所産と推定したい。　（中牟田貴治）

木棺墓　6基のうち墓壙を確認できたものは残念ながら3基で，長円形，長方形の墓壙を掘っただけのものである。6基すべて東南斜面に位置しており，その占地は興味深い。1，2，5号

はほぼ南北方向に向いている。他は不明である。副葬品を持つものに，2号の刀子1，3号の土師器杯1＋α，4号の土師器杯3と須恵器片1，6号の土師器杯3個がある。釘が出土したのは1，2，3，4，5号である。2号木棺墓から出土した刀子は，身幅が先端に細くその形態は，鞍手郡若宮町柳ケ谷遺跡の蔵骨器内から検出された刀子に類似しているが，ちなみにその須恵器蔵骨器は，奈良末〜平安初頭に比定されている。(註30) この木質付着鉄釘を有する木棺墓は，当遺跡の他，この時期のものとしては，剣塚，塔ノ原の両遺跡より各々7基，1基が発見されている。副葬品として，土師器杯，小皿，高台付椀，白磁等が見られる。長方形プランを有するこの類は，これらの天拝山麓においてのみ見られ，他地域においては類例を聞かない。狭い範囲の地域的現象と見るべきか，今後の類例の増加を待ちたい。

木棺墓および土壙墓出土の土師器杯について述べたい。土師器杯については近年北九州の各地でもよく出土するが，編年されている例は，太宰府町所在の中世城跡の浦ノ城遺跡がある。(註31) それによると，大別して底部糸切の類（Ⅱ類）と底部ヘラ切りの類（Ⅰ類）とに分けられ，底部糸切の方が新しいことが層位的にも確認されている。糸切り底の類は，Ⅱ-1，Ⅱ-2，Ⅱ-3の順に編年されている。最近報告された大宰府東大溝出土土師杯（全て糸切り底）は，「貞応三年十一月日」(1222年) と裏面に墨書された木札が共伴している。(註32) この土師杯を法量により分類すると，浦ノ城のⅡ-1-c類に該当する杯群とⅠ-a類に該当する小皿類とに大別される。ところが浦ノ城Ⅰ-a類というのは，ヘラ切底であり，糸切底同士の比較をすると，東大溝の小皿群は浦ノ城Ⅱ-1-a類よりも口径において大型化の傾向が見られる。これを目安として考えると，東大溝出土土師器群は浦ノ城Ⅱ-1類よりもやや古く，ヘラ切底のⅠ類よりも新しいということが予想される。

東大溝出土の土師器杯は，木札共伴という事実より鎌倉初頭に編年される。よってヘラ切底の杯はそれ以前に位置づけられる。しかるに本桶田山遺跡木棺墓，土壙墓出土の土師器杯を見るに，全てヘラ切底である（例外として桶田Ⅳ類糸切底小皿があり，これは鎌倉後半以降に考えられる）。ヘラ切底の土師器杯の編年が殆んど進んでいない今日において，桶田山の例では，明確にいえるのは浦ノ城Ⅰ類に属し，その年代は鎌倉初頭以前に位置づけられるということである。大宰府政庁の調査でこの種の土師杯が越州窯青磁を伴い，さらに浦城跡では荊窯白磁を伴うことが明らかにされており，(註33) 凡そ平安時代後半の11世紀前後に求められようか。今後の類例の編年研究の成果を待ちたい。

以上の如く，当桶田山遺跡においては，平安時代〜鎌倉時代にかけての木棺墓・土壙墓が造られている。この時期においては，古代からの政治的中央権力強大化とともに仏教的思想，文化の浸透と定着が行なわれつつあったとされ，その葬制に関しては火葬の風が広く行なわれていったと考えられている。しかるにこのような土葬(直葬)の風が現に行なわれており，また近辺遺跡例からもみてあながち特殊な例外的産物とのみ受け取れないところもある。しかも数多く

の古代寺院を有し西日本における仏教文化の一大中心地とも見做される大宰府近辺においてさえである。ごく一般民衆の墓制として，このような土葬形態も見逃せないことは，今後の古代～中世における葬制研究において極めて重要な状況になりつつあるといえよう。

堀状遺構出土の**火舎類**および**土師質鍋形土器**などについて少しく述べたい。まず，火舎類については，北九州における出土例として，太宰府町浦ノ城址から口縁内湾して菊花状スタンプを付すもの，大宰府史跡第8次調査から内湾した菊花状スタンプ文の類があり，同じく大宰府史跡第5次調査(註34)において口縁直立した（やや内湾）菊花状スタンプ文の類が永楽通宝を共伴する層より発見(註35)されている。また，大宰府史跡28次調査(註36)において，浦ノ城Ⅱ-3類の土師器杯を伴って口縁内湾して巴文スタンプを施す類と，直口の梅花文をめぐらすものとが石組遺構内より出土している。また，福岡南バイパス五条地区調査(註37)においては，本遺跡出土の Fig. 94-1·3·4と酷似する破片が出土している。また筑紫野市八隈遺跡出土品(註38)に，口縁直立して2条凸帯を有し連点文を施す類がみられる。これらを大別すると，**A**類―口縁直立するもの（やや内湾気味），**B**類―口縁部が弧状に内曲するもの，**C**類―口縁を外側に外反させ平坦面を有するもの，**D**類―外面に2条凸帯を有し直口するものになる。これらのうち，現状では諸報告を検討するに，**B・C・D**類が鎌倉末～室町時代，**A**類が15～16世紀におけるものとして例示されている。本遺跡例はこれらの類例からして**D**類に属し鎌倉末～室町時代に比定されよう。

土師質鍋形土器は，大宰府史跡第5次調査において前述**A**類火舎と同じ層より出土しており15～16世紀に比定されている。また同遺跡第8次調査においても1例みられる。また，福岡市多々良遺跡(註40)において2例みられ，共伴遺跡の土師器小皿，杯は，浦ノ城Ⅱ-1類よりも大きく，大宰府史跡東大溝出土（貞応3年木札共伴）の類とほぼ同じ時期と考えられる。以上類例をみると，鎌倉初頭期のものと15～16世紀のものとがあり，年代的に幅を持つものと考えられる。本遺跡例は時期決定の共伴土器類を欠くが，前述の火舎類とほど同時期と推定されようか。

最後にこの桶田山丘陵について少し補足すると，この丘陵の伸びている方向は天拝山麓から北の方向である。前述したように中腹より西側の斜面は大きく削除されており，おそらく地形図から見て台地上の約半分近くが破壊されていると思われる。また，中腹より北側が約2*m*高くなっており，この丘陵では一番高い所である。本遺跡調査の時はすでに削平されており畑として利用されていた。また，近所の人の話によると，以前水害があり，その補修工事のため丘陵の土を使用したということである。以上の事から立地条件としては，古墳築造には好条件を有していいると考えられ，表面採集では古墳時代終末の須恵器もあり「平塚」の呼び名もあるので削平部分に古墳がなかったとは言いがたい。なお，甕棺群および箱式石棺群を営んだ人々の生活の場は，今回の調査では確認できなかったが，両者の位置関係をも知りたいと切に願むのは一人私のみであろうか。

（中間研志・中牟田貫治）

註　1）九州縦貫自動車道建設に伴う福岡県教育委員会調査による。1973～1974.
2）福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』1974.
3）九州縦貫自動車道建設に伴う福岡県教育委員会調査による。1974，福岡県教育委員会・筑紫野市教育委員会『祖先のあしあと』1974，『教育福岡』1974，11～12月号.
4）九州縦貫自動車道建設に伴う福岡県教育委員会の調査による。1973～1974，福岡県教育委員会・筑紫野市教育委員会『祖先のあしあと』1974.
5）九州縦貫自動車道建設に伴う福岡県教育委員会の調査による。1974，本書にて報告.
6）島田寅次郎「異例の古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第10輯』1935.
7）春日町教育委員会『一の谷遺跡』1969.
8）日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』1961.
9）福岡県教育委員会『教育福岡』No.274，1972.11.
10）朝倉郡三輪町教育委員会『栗田遺跡』1974.
11）岩瀬正信氏の御教示による。
12）日本住宅公団『宝台遺跡』1970.
13）児島隆人『立岩』学生社，1969.
14）日本考古学協会編『日本考古学年報25（1972年版）』1974.
15）前掲書 9).
16）鏡山猛「原始箱式石棺の姿相」史淵25，1941，同書に「地形的制約の結果と解されぬわけでもない。しかし特にかかる方向に作られる所が択ばれ，……方角の観念も彼等にとっては墳墓造営にあたって重要な一要素をなしたと考えねばならぬ。シベリヤ，ミヌシンスク地方の，……或はスイス，シャンプランドの石棺が，……新石器時代以降の原始箱式石棺埋設に方位の観念が働いていることは世界的な現象といってよいであろう」と述べ，このことを太陽信仰と関連づけていることは注目される。
17）朝倉町教育委員会『須川遺跡群』1968.
18）福岡県労働者住宅生活協同組合・福岡市教育委員会『宮の前遺跡―A～D地点―』1971.
19）福岡県立朝倉高校史学部『埋もれていた朝倉文化』1969.
20）八女市教育委員会『亀ノ甲遺跡』1964.
21）小田富士雄「発生期古墳の地域相―北九州について―」歴史教育第15巻4号，1967.
22）小田富士雄「畿内型古墳の伝播」古代の日本3九州，1970.
23）藤田等・川越哲志「弥生時代鉄器出土地地名表」たたら研究会『日本製鉄史論』所収1970.
24）鏡山猛「環濠住居址小論(四)」史淵78，1959.
25）筑後市教育委員会『狐塚遺跡』1970.
26）福岡市教育委員会『小笹遺跡発掘調査報告書』1973.
27）龍川威洋『日本考古学年報24（1971年版）』1973.
28）川越哲志「金属器の製作と技術」古代史発掘3，講談社，1975.

29) 下条信行「出土遺物各論(2)，管玉」宮の前遺跡（A～D地点）所収，1971.

30) 九州縦貫自動車道建設に伴う福岡県教育委員会の調査，1974.

31) 福岡県教育委員会，前川威洋「(1)土師器」『浦城跡』所収，1970.

32) 横田賢次郎・高橋章・石丸洋「大宰府条坊の調査」考古学雑誌60の3，1974. 12.

33) 九州歴史資料館『大宰府史跡第30・31・32次発掘調査概報』1974，同書の第31調査において報告されている。

34) 福岡県教育委員会『大宰府史跡昭和45年度発掘調査の概要』1971.

35) 前掲書 34).

36) 九州歴史資料館『大宰府史跡昭和48年度発掘調査概報』1974.

37) 福岡県教育委員会が，福岡南バイパス建設に伴って調査したもので，前川威洋・新原正典両氏による。

38) 前掲書 4).

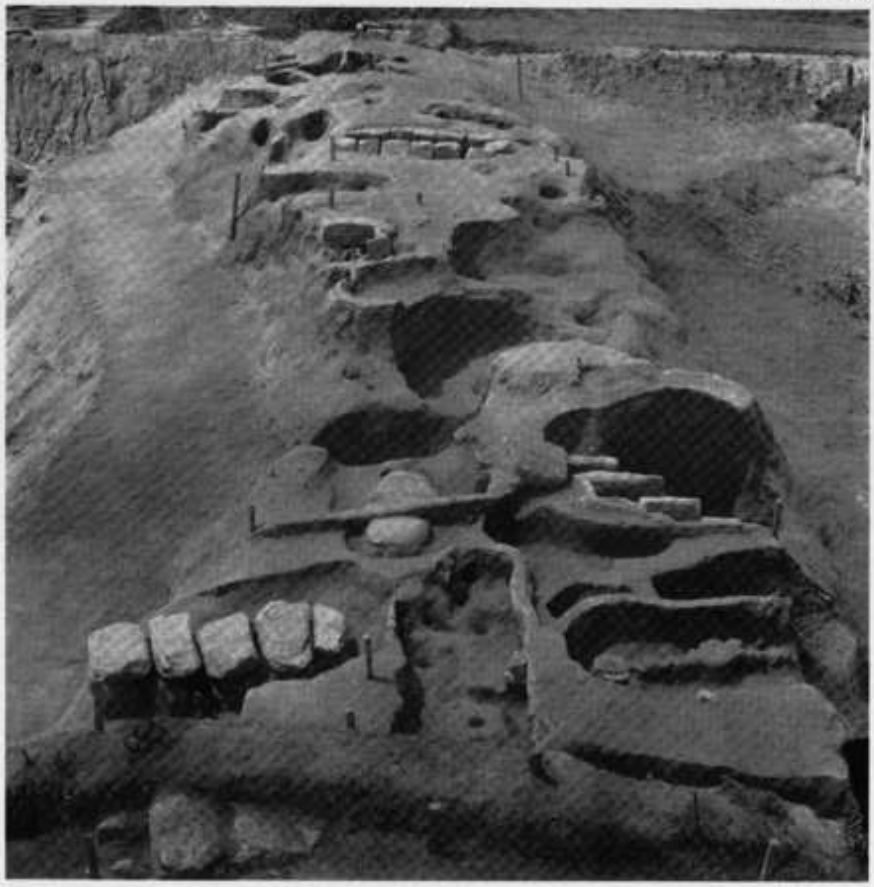
39) A～Cの分類は，前掲書 35) による。

40) 福岡市教育委員会『多々良遺跡』1972.

桶田山遺跡

PLATES

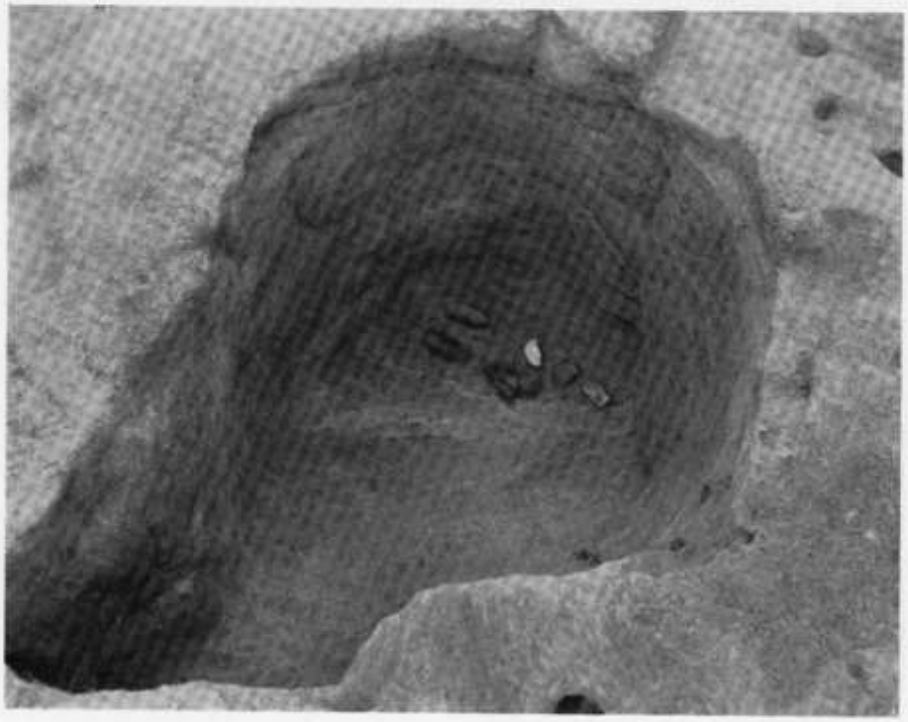
桶田山遺跡　全景（朝日新聞社撮影）



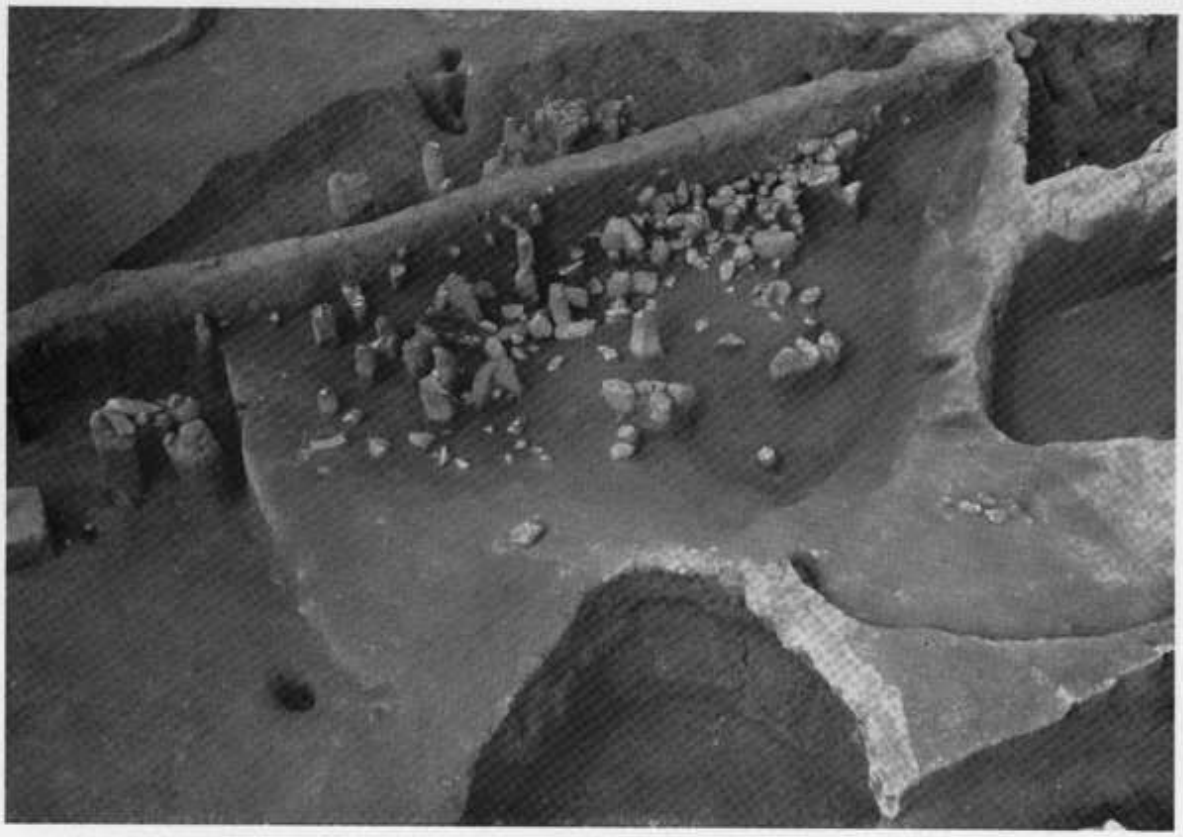
(1) 桶田山遺跡　西半部の遺構の状況（東から）

(2) 桶田山遺跡　東半部の遺構の状況（北西から）

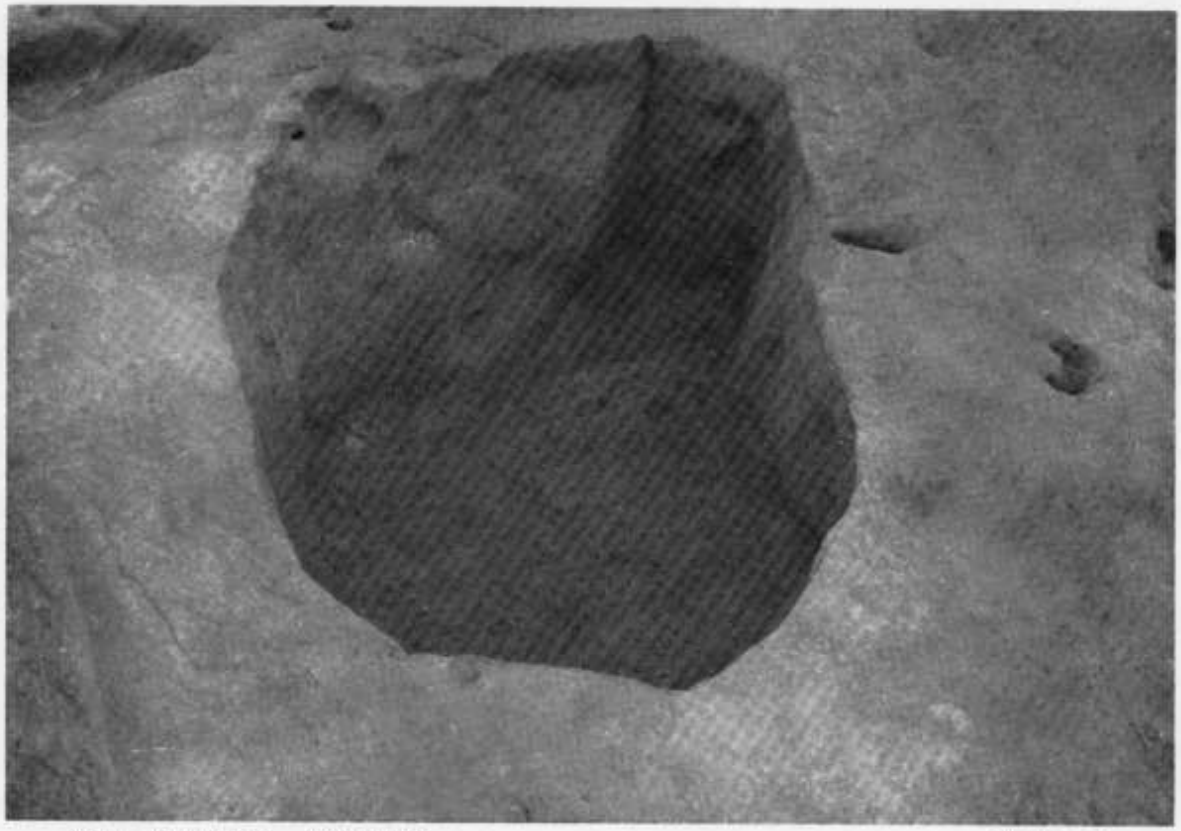
(1) 桶田山遺跡　第11号貯蔵穴と第2号土壙墓（西から）



(2) 桶田山遺跡　第41号貯蔵穴（北から）



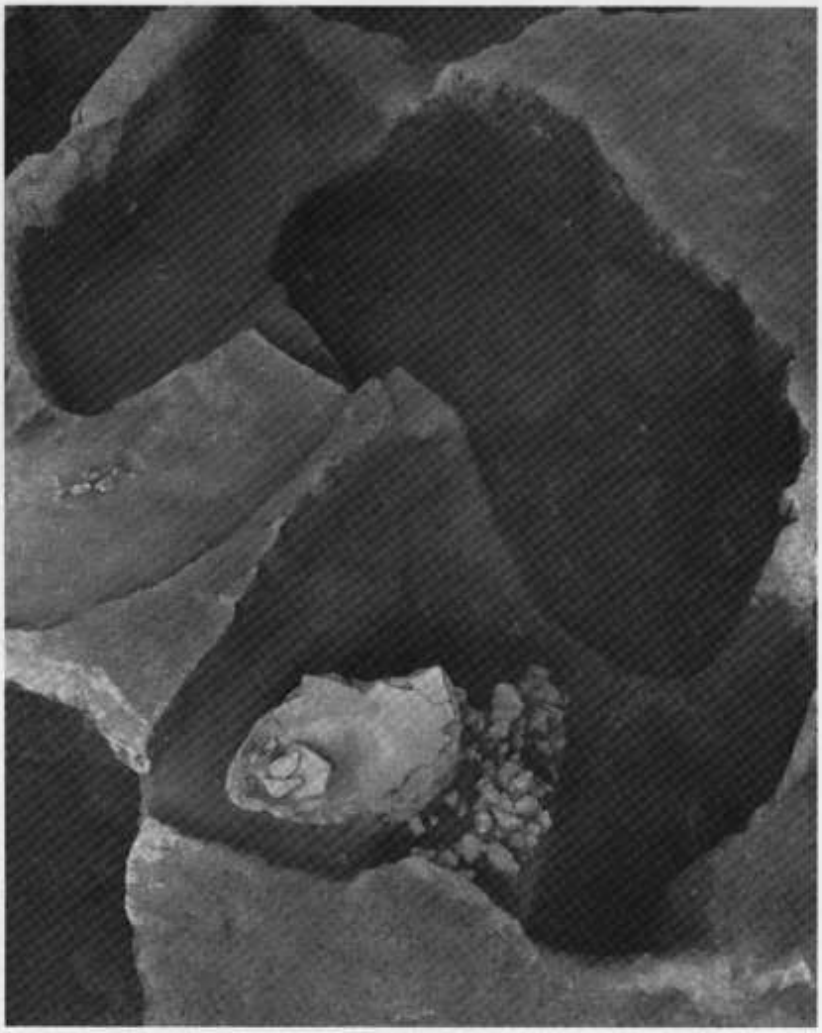
（1） 桶田山遺跡　第32号土壙　（北西から）



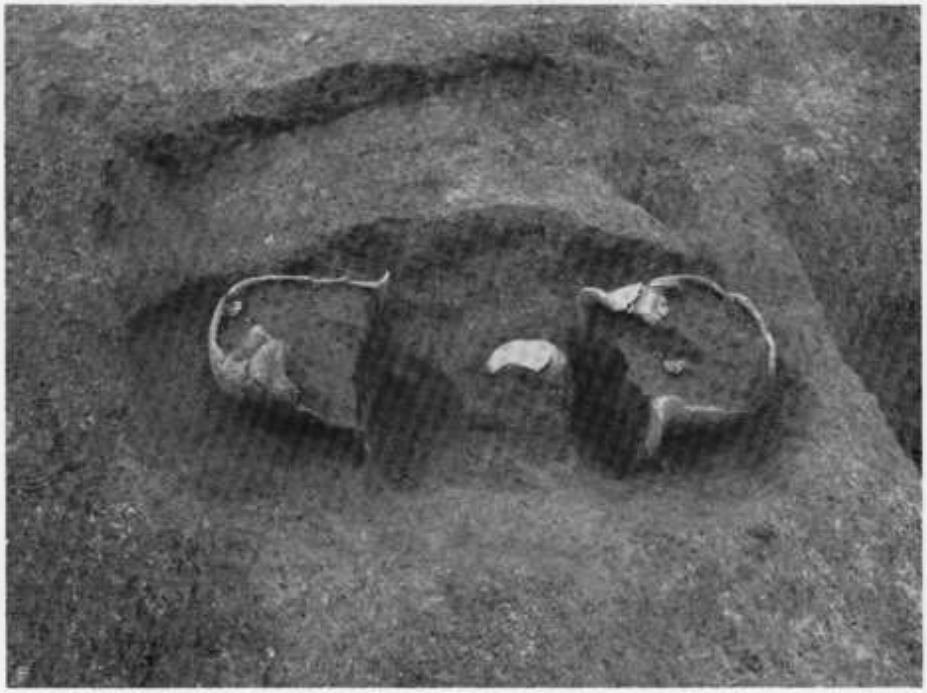
（2） 桶田山遺跡　第40号土壙　（南東から）

(1) 桶田山遺跡
第1号・第2号・第3号甕棺墓と第21号貯蔵穴 (北から)

(2) 桶田山遺跡 第4号甕棺墓 (東から)



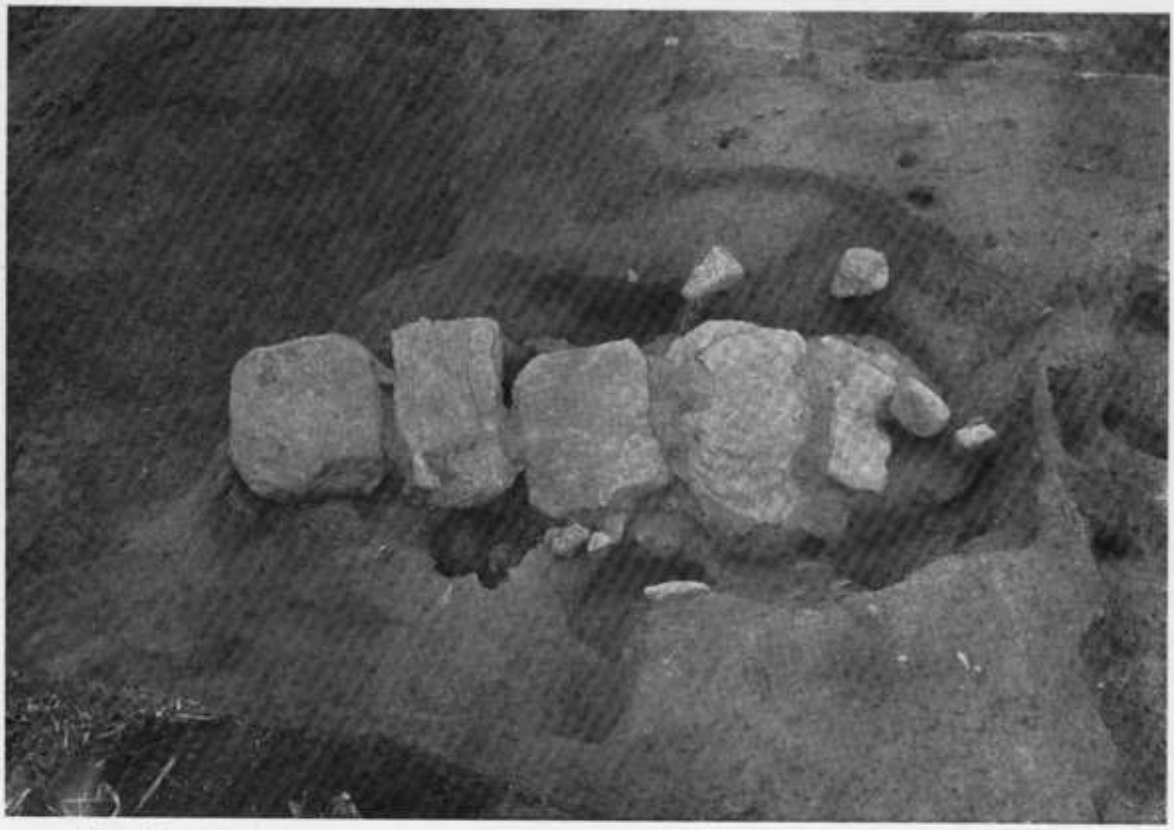
(1) 桶田山遺跡　第5号甕棺墓と第25号貯蔵穴（北から）



(2) 桶田山遺跡　第3号土壙墓（南から）

(1) 桶田山遺跡　第4号箱式石棺　(北から)

(2) 桶田山遺跡　第8号石棺墓と第7号貯蔵穴　(北から)

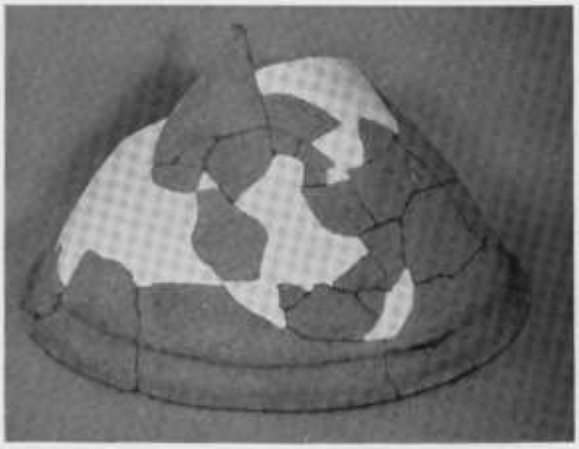


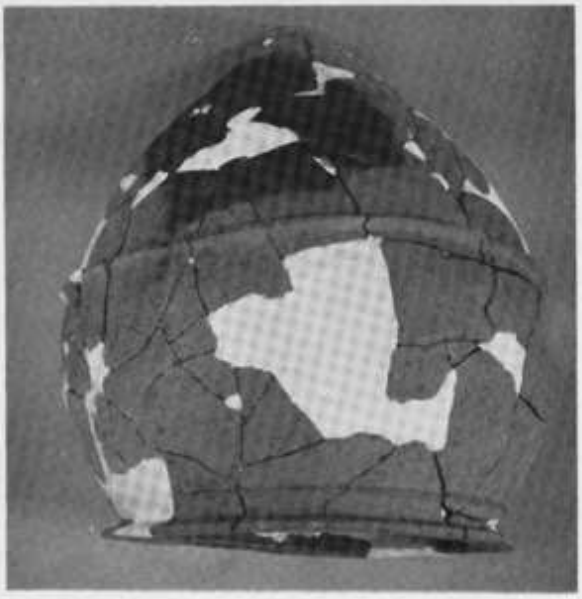
（1） 桶田山遺跡　第10号石棺墓　（東から）

（2） 桶田山遺跡　第10号石棺墓・蓋石除去後の状況　（東から）

（1） 桶田山遺跡　第9号石棺墓　（南から）

（2） 桶田山遺跡　第9号石棺墓・蓋石除去後の状況　（南から）

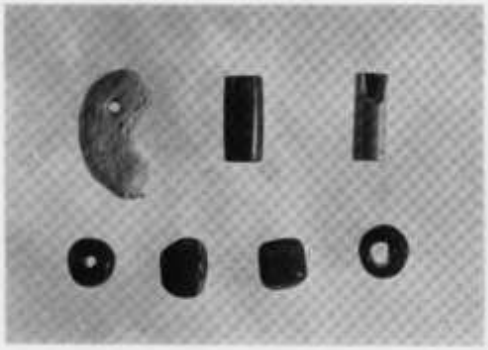


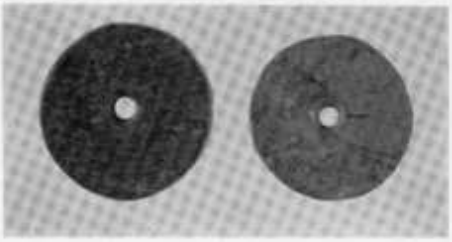


桶田山遺跡

右 (1) 第3号A甕棺の蓋
(2) 第2号甕棺の上蓋
(3) 第2号甕棺の下甕

左 (1) 第4号甕棺
(2) 第3号B甕棺の上甕





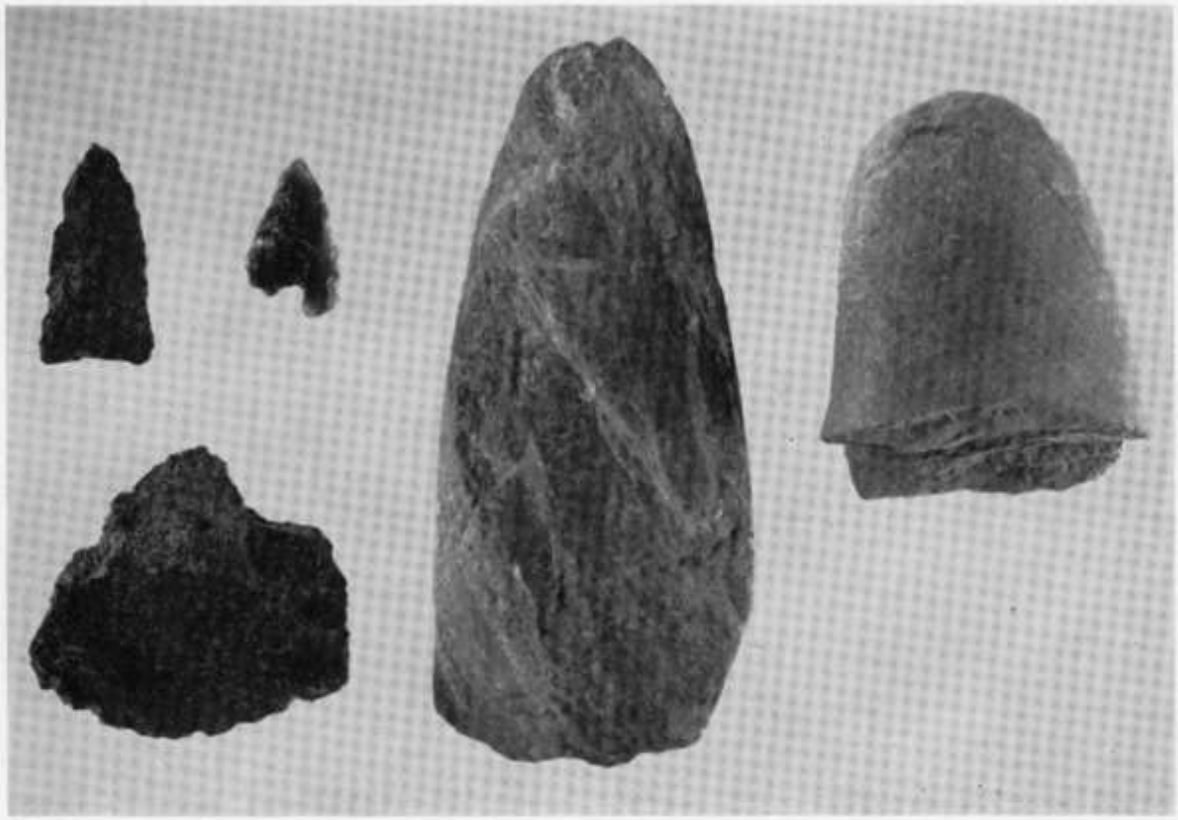
桶田山遺跡

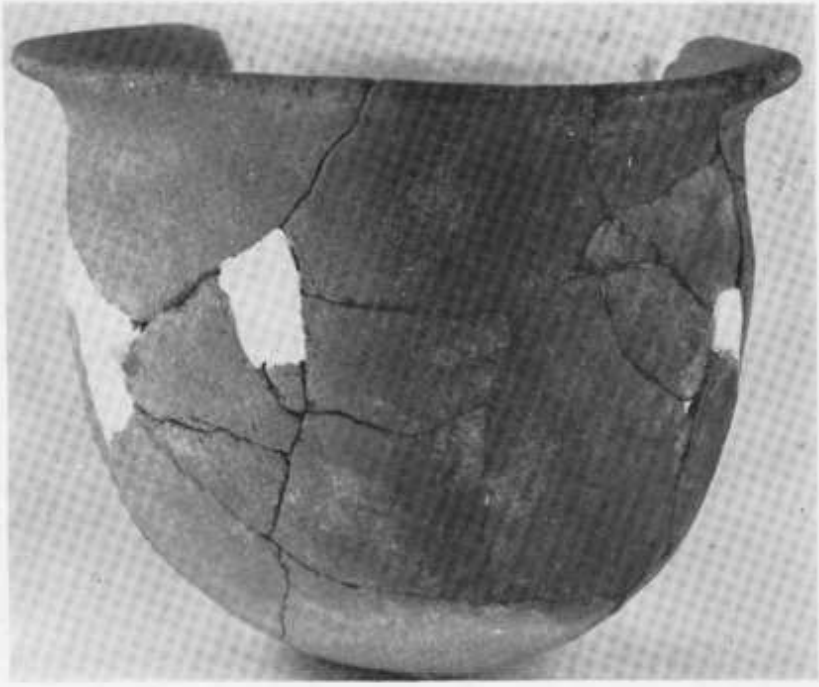
右 (1) 鉄鏃（実大）

(2) 紡錘車（½）

左 玉類（実大）

下 石器類



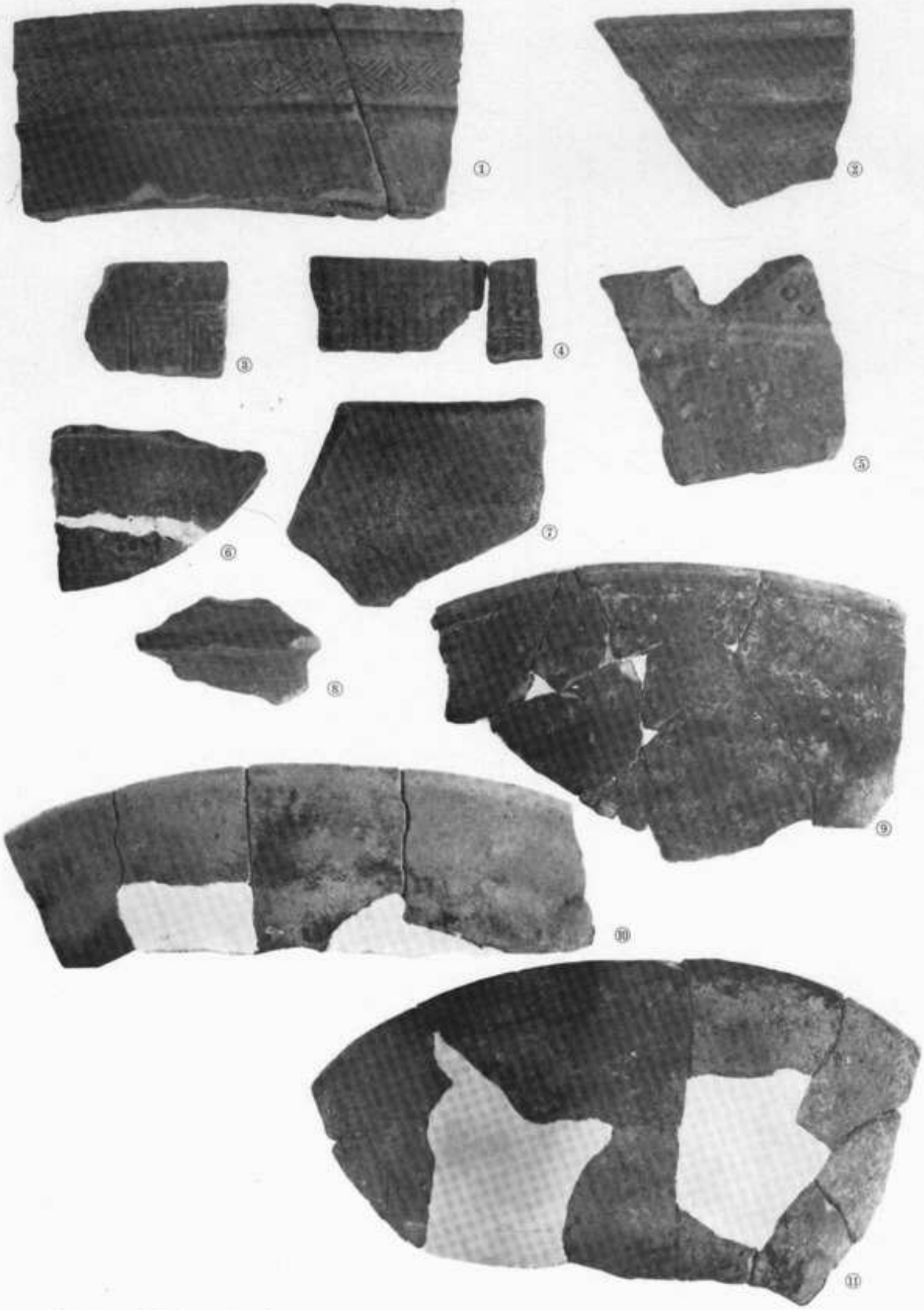


桶田山遺跡

(上) 木棺墓出土鉄釘・刀子 (1/3)

(中) 木棺墓出土土器 (1/2)

(下) 土壙出土土師器甕 (1/3)



桶田山遺跡　火舎類（1～8火舎9～11土鍋）

Ⅸ　向佐野，長浦窯跡の調査

Ⅸ 向佐野，長浦窯跡の調査

1 遺 跡 の 概 況

向佐野窯跡は，筑前須恵器窯跡として知られている牛頸古窯跡群の東端に位置する一支群である。牛頸窯跡群については既に調査が数回行われ，その概要が知られているので詳述はここではさけるが，現在のところ22の支群にわけられ，窯跡総数54基が確認されている。この窯跡数については未確認のものも十分に考えられ，さらに増加するものと思われる。今回九州縦貫自動車道の建設に伴い土砂採取地として破壊された，向佐野支群窯跡は，もっとも東に位置し，すなわち牛頸窯跡のうちで大宰府に最も近く，政府跡とは直線距離にして約2㎞である。発掘調査を行ったのは，標高78.6mの三角点の北に接するところに占地する長浦窯跡，ここから東南へ150mの向佐野1号窯跡である。前者は従来分布調査では未確認の窯跡で今回あらたに発見されたものである。後者は，県道5号線により既に破壊され，その法面にわずかに残存していた窯跡である。

地番は福岡県筑紫郡太宰府町大字向佐野小字長浦と小原字前田である。　（亀井明徳）

2 調 査 の 経 過

昭和47年秋は大道端遺跡，北牟田遺跡，乙金古墳群等の大発掘調査が実施されていたが，この間，筑紫野工事に伴う土取り工事が行われることになり，太宰府町大字向佐野所在の山林2地点が土取り場に指定された。10月に分布調査をした結果，県道5号線の崖面に須恵器窯が2個所発見された。公団側と協議の結果，10月23日より調査を開始した。ただし，地主側の都合が変更し，当日になって土取り作業そのものは中止になったので，調査は遺構崩壊の恐れのある崖面に限定した。

10月23日（月）　断面が崖面に現れた窯体を検出するため，表土を剝ぐ。焼成部の一部が残っているにすぎないので，この日で全容が明らかになった。

10月24日（火）　窯跡の写真撮影，ならびに平面図，横断面図を作製する。崖下の散乱している須恵器を採集する。

10月25日（水）　昨日に引き続き，遺物を採集する。

10月26日（木）　BMよりレベルを移動する。

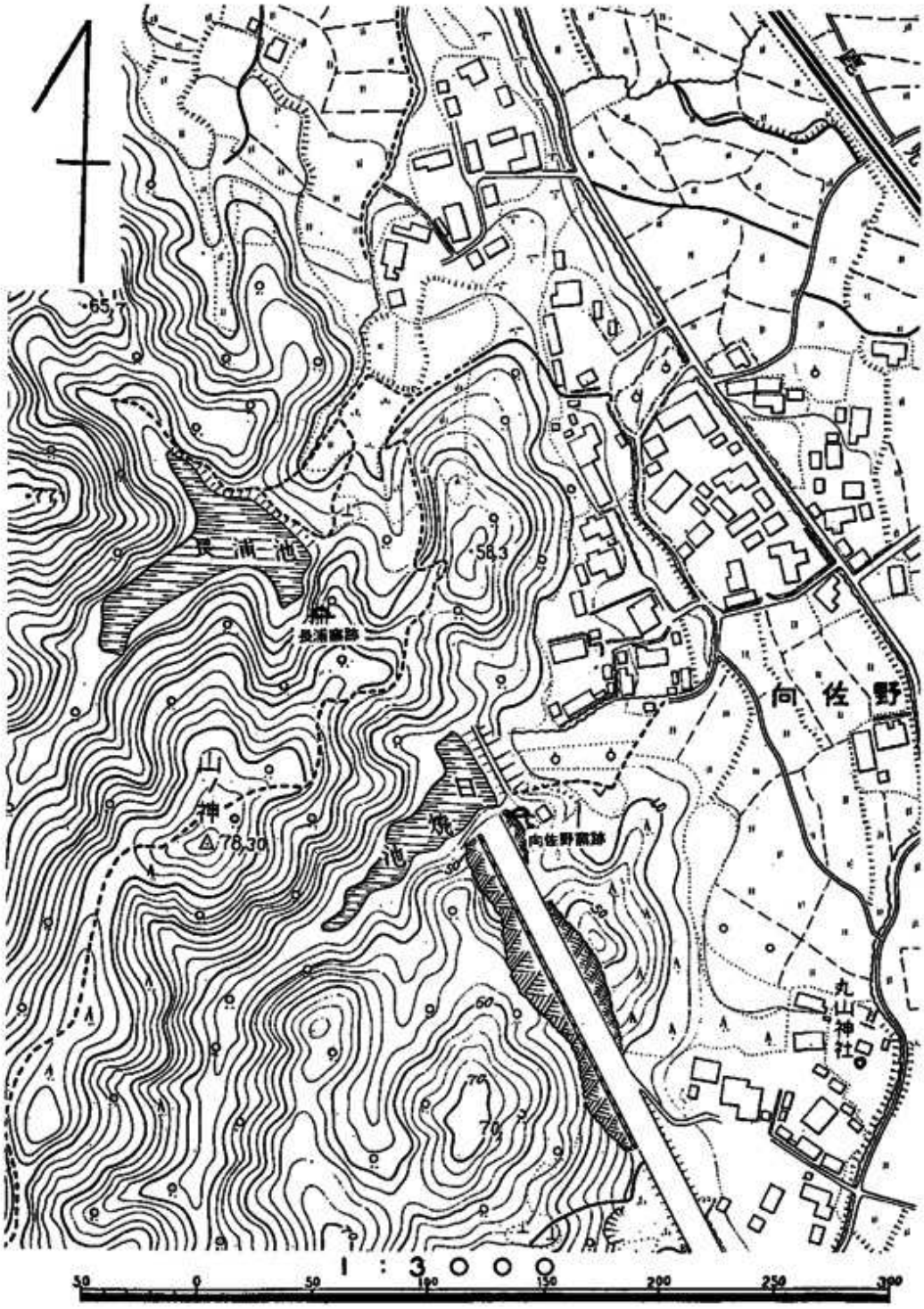
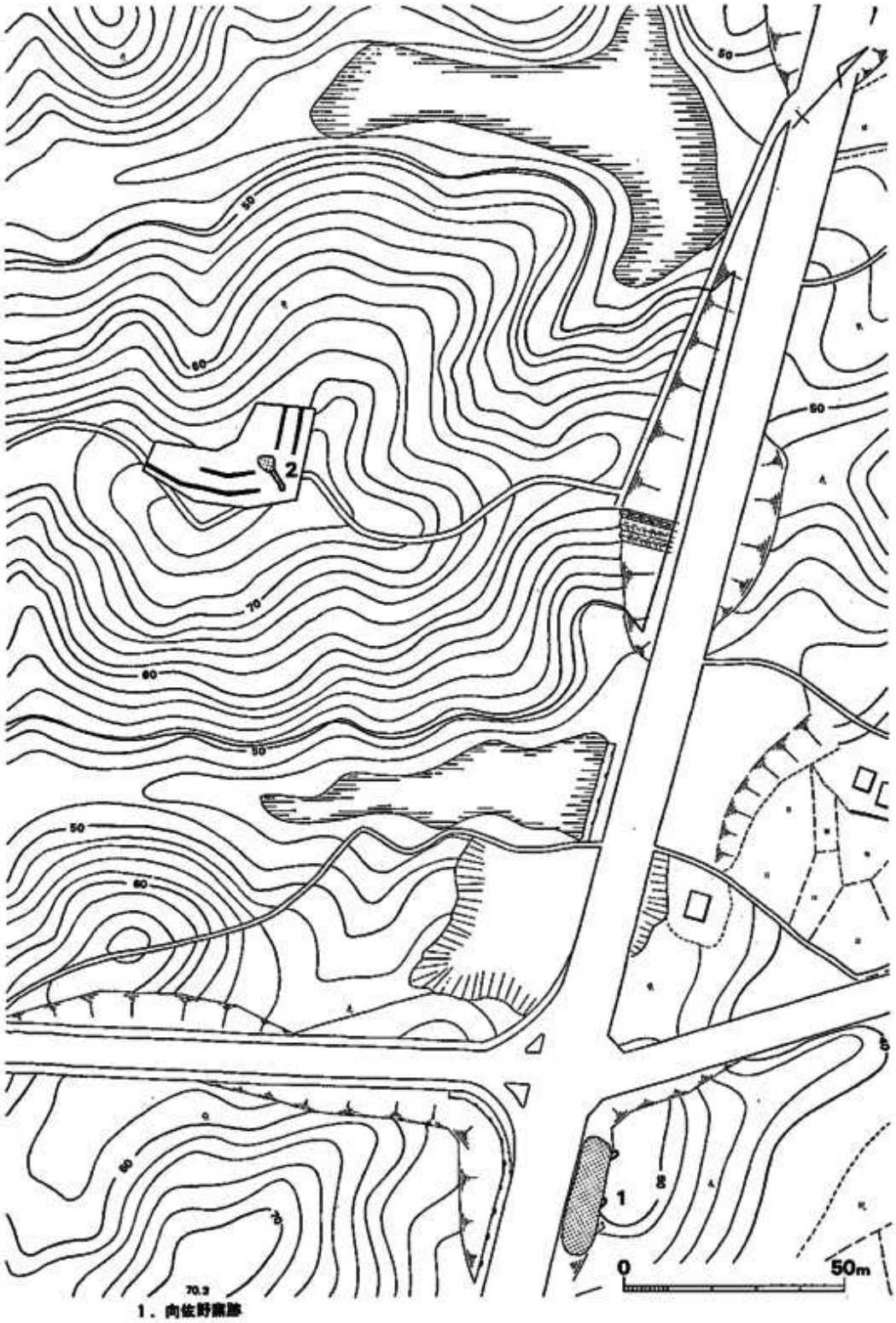


Fig. 118　遺跡群の位置（縮尺1/3,000）



1．向佐野窯跡
2．長浦窯跡

Fig. 119 向佐野，長浦窯跡周辺地形図（縮尺1/1,500）

本日で向佐野窯跡の調査を終了する。

向佐野窯跡と県道5号線を挟んで西側に接する丘陵も土取り場として指定してあるとのことで，10月26日公団側と現場を立会した。すでに伐採が終わっていたが，遺構の確認をすることができず，表土剝ぎ後，改めて分布調査しなおすこととする。11月29日になって表土剝ぎがほぼ完了したとのことで調査をすると，窯の煙道が露出していた。長浦窯跡と命名する。即公団側に連絡すると共に，調査の準備に取りかかる。九州歴史資料館より高橋章技師を派遣してもらい，12月1日より調査を開始することとする。

12月1日（金）雪。　機材を若干遅ぶも，天候が不順であるため，作業員が集まらない。作業員確保のため向佐野部落をまわる。

12月2日（土）晴。　機材を運搬し，テントを設営してから，いよいよ調査を開始する。

12月4日（月）晴。　すでに露出していた煙道を中心として表土清掃を行う一方，その南側斜面をブルドーザーによって表土を剝ぐ。しかし窯跡らしきものはない。窯は1基のみらしい。焼成部から煙道にかけての窯体プランを確認する。灰原附近から焼成不良の須恵器若干が出土した。

12月5日（火）晴。　昨日，ブルドーザーで表土を剝いだ地区に3本のトレンチを設定し，深さ1m～1.2m程掘ったが，窯跡は全く認められなかった。最初検出の窯（1号窯）を掘り始める。焚口部及び燃焼部附近を検出。生焼けの須恵器杯が床面より出土した。窯は全長が3m強にしかすぎないと判明した。

12月6日（水）晴。　煙道部は径50cm～60cmで，焼成部との境に5cm程度の段がつくことが確認された。また煙道は窯体のやや右側寄りに作られている。焼成部の床面は張り床で，9個体分の杯が生焼けの状態で出土した。1号窯跡の西側にトレンチを2本設定したが，窯は確認されなかった。

12月7日（木）曇後雨。　燃焼部から焼成部にかけて28個体分の杯が出土する。いずれも焼成不良である。灰原の調査を行う。

12月8日（金）晴。　窯全体を清掃し，写真を撮影する。本日より全体地形測量を開始する。発掘作業を全て終了し，機材を撤収する。

12月9日（土）晴。　全体測量及び窯体の平面図を作製する。

12月11日（月）晴。　窯体断面図を作製する一方灰原の調査を実施する。

12月12日（火）曇後雪。　灰原を掘り上げる。遺物はほとんど生焼けで，特に蓋杯が多かった。

12月13日（水）雪時々曇。　灰原の断面図を作製したのち，窯跡全域を清掃し，写真を撮影する。午後3時機材を撤去し，全ての作業を終える。

調査団の構成は次の通りである。

向佐野窯跡

調査員　　福岡県立九州歴史資料館　技師　　亀井明徳

	福岡県立九州歴史資料館 技師	高橋 章
	同	児玉真一
調査担当者	福岡県教育庁文化課 技師	酒井仁夫
調査補助員		内田 始
庶務担当者	福岡県教育庁文化課 主事	植田 実
	長浦窯跡	
調査員	福岡県立九州歴史資料館 技師	高橋 章
調査担当者	福岡県教育庁文化課 技師	酒井仁夫
	同	川述昭人
調査補助員		川述公紀
		内田 始
		八尋直子
庶務担当者	福岡県教育庁文化課 主事	植田 実

(酒井仁夫)

3 調査の内容

a. 長浦窯跡の調査

(1) 窯の構造 (Fig. 120, PL. 67, 68)

窯跡は山麓西面の山頂部標高78.6mに達する附近に構築しており，全長約3.3mの小形のものである。天井は煙道部において若干残存していたが，発掘調査中に崩壊してしまった。窯の主軸はS—69°—E，勾配は約31度であるが，焼成部から煙道部にかけて傾斜が急になる。窯体は花崗岩バイライン土に掘り込まれたもので，地下式ないし半地下式の区別は明らかでない。また最終床面以前に1時期確認され，総合して2時期の床面を確認した。

焚口部

焚口部は前庭部にやや広がる形態を呈し，幅約81cmで勾配はほとんどない。I期とII期の床面の厚さは約13cmで，その間に炭の堆積層，厚さ約3cmがあり，遺物は含まれていない。

燃焼物

燃焼部と焼成部の区分は，傾斜変換部もなく判然としないが，炭化物の広がりから長さ約70cm程度のものと思われる。燃焼部において左・右壁が若干狭ばまり幅約76cm，床面勾配約17度である。左右の壁は花崗岩バイライン土に粘土を貼り付けて構築したものであり，赤褐色を呈し炭化物が付着している。最終期床面上に黄褐色を呈した半焼成の須恵器が出土した。

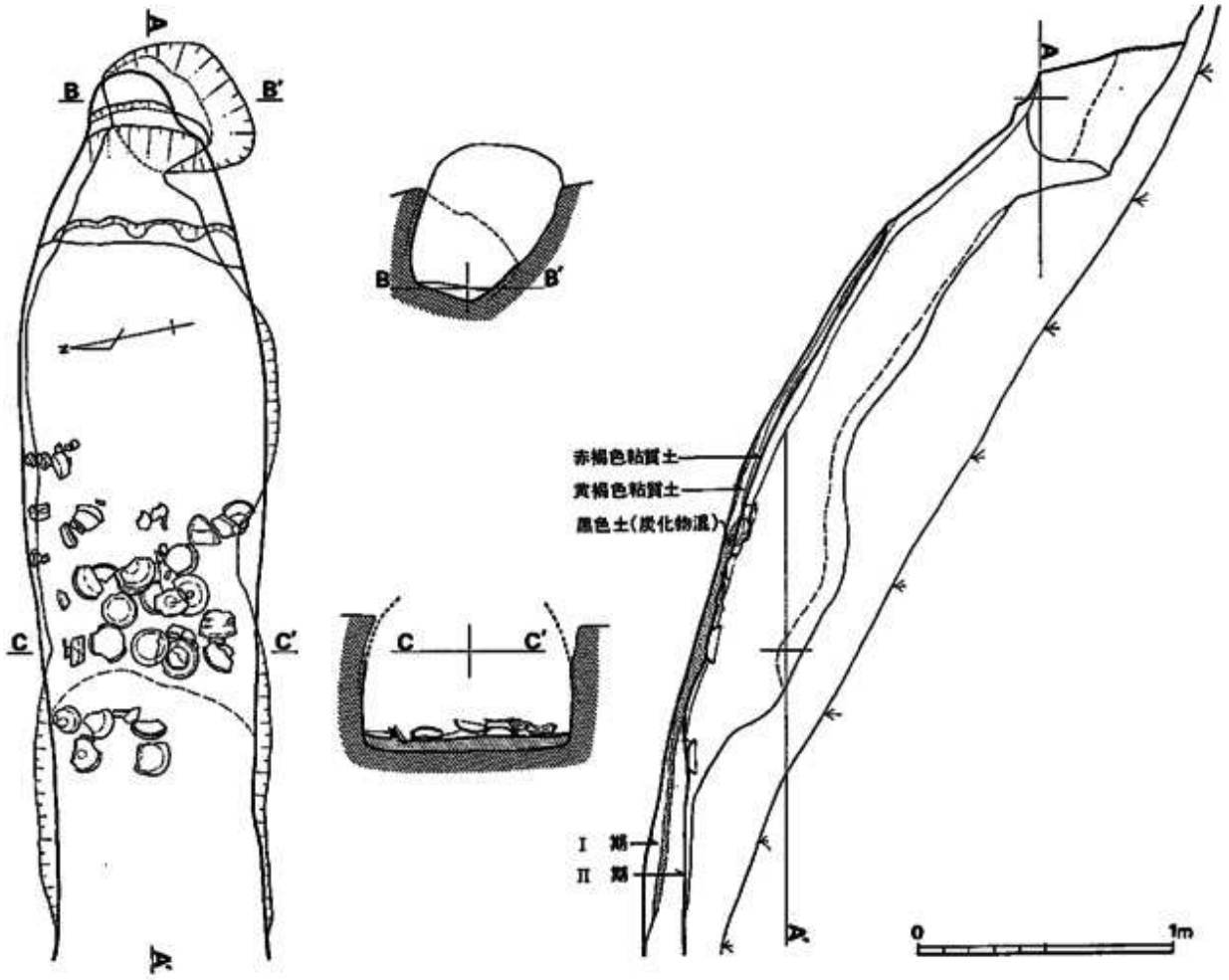


Fig. 120 長浦窯跡実測図(縮尺1/30)

焼成部

焼成部は中央部で若干中太りとなり，最大幅約90cmを測る。煙道部奥壁より焼成部方に約60cmのところで傾斜変換部が認められ，その部分を基点とし煙道部と焼成部とに区分した。したがって焼成部の長さは，Ⅰ・Ⅱ期共に約180cmで，勾配約31度である。左右の側壁は床面に対しほぼ90度の角度で立上り，天井部を架工するが，その残存壁高は床面より約40cmで，赤褐色を呈する。床面は1回の改築が認められ，火熱をおびやや硬く青灰色を呈している。第Ⅰ期床面との厚さ約10cmである。その断面を観察すると，黒色土（炭化物を含む）と黄褐色粘質土を貼っていることが認められた。焼成部の前面では，半焼成の須恵器を検出した。

煙道部

焼成部との傾斜変換部から煙道奥壁まで約60cmあり，床面に煤が付着していることから煙道部と推定した。焼成部と異って床面が急勾配となり約51度で，変換部より奥壁に丸く狭ばまる。この奥壁から高さ約60cm，勾配約75度，煙出し口上端径約50cmの大きな煙道が右斜上に突抜ける。煙道部は全体に赤褐色で硬く焼けている。窯体に比べて，煙道部は計画的に構築されたとは考えがたい。

（2）灰原の調査

灰原は焚口部より下方に長さ約3.5m，幅約1.3mの長円形状に広がっていることを確認した。その堆積層序は，大きく3層から成り下層は炭化物を含有した灰黒色土，中央部は黒色の炭化層，上層は黄色の砂質土である。遺物は主に下層の灰黒色炭化層から出土した。

（3）その他の調査

検出した窯跡を中心として，左右にトレンチ4本を設定し発掘した。トレンチは山の斜面に沿って幅約80cm，深さ約1m強掘り下げたが，各トレンチとも窯跡の存在は認められなかった。

（4）出土遺物

窯内の焼成部，燃焼部において須恵器を若干検出した。須恵器の大部分が半焼成で器形は杯蓋，杯身（杯・有高台杯），高杯，壺があり，一括資料として取り上げることができた。また灰原においては最下層の灰黒色土から若干の須恵器片が出土した。窯内焼成部の須恵器と灰原で出土したものについては，2回にわたる床面改築からⅠ時期とⅡ時期の2回に区別することができた。よってⅠ時期の須恵器は灰原出土のもの，Ⅱ時期は窯内出土である。

杯蓋（Fig. 121-1～4, 10～12. PL. 70）

窯内出土（1～4）の杯蓋は器形的には大きな変化は見られない。1・2は法量的に類似しており口径12.7cm，器高2.7cmを測る。口縁部にかえりを有し，つまみをもつもので，天井部と体部との境はヘラ削りとヨコナデによって区分できる。天井部においては器壁が厚く，口縁部に推移するにしたがって薄くなる。かえりは口縁内面に若干くぼみ，口縁先端部より少し突

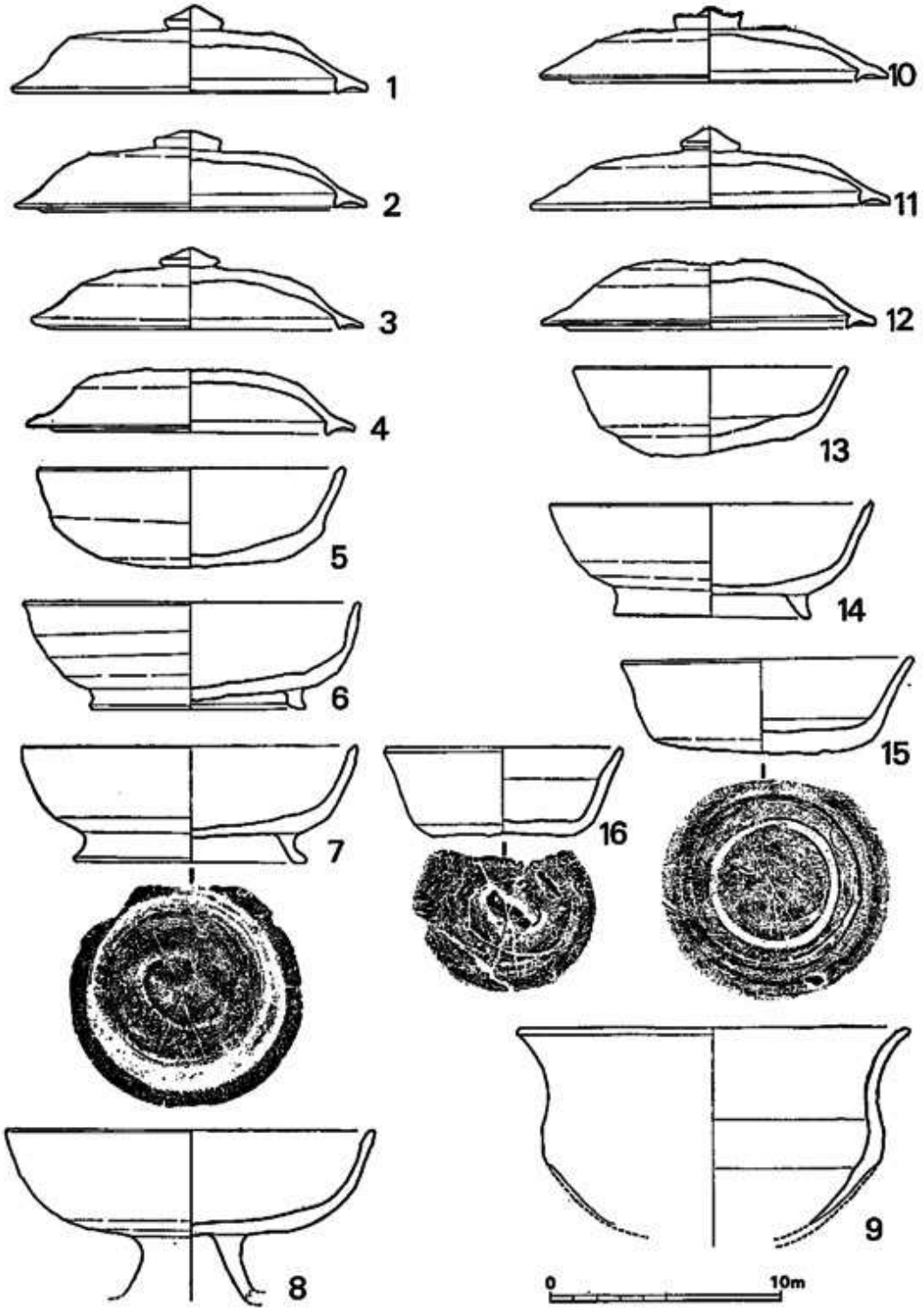


Fig. 121 長浦窯跡出土須恵器実測図（縮尺1/3）

出て，体部内面接合部に稜線を有する。胎土は砂粒が多く焼成は軟質である。3・4は口径約12cm前後で，器高2.7cmを測る。手法，調整等は1・2に類する。4はつまみが欠損している。

灰原出土（10～12）の蓋は，窯内出土のものと器形的に同種と思われるが，10は扁平な宝珠形のつまみを有することから他と相違する。かえりはやや外反し口縁先端部より若干突き出る。口径12.5cm，器高2.3cmで，全体に灰色を呈し胎土には砂粒が少ない。焼成は堅緻である。11・12は各々1～4に類しており，11は口径12.9cm，器高2.5cmである。12はつまみが欠損し，口径12.1cm，器高2.9cmを測る。

杯身（Fig. 121-5～7, 13～16, PL. 70）

杯身は高台の有無によって大きく2つに分類される。

杯（5，13，16）は各々形態が異る。5は窯内出土である。口径13.5cm，器高4.3cmで口縁部は丸味をおび，体部から底部への境はヨコナデとヘラ削りにより区分され，明瞭な稜線が入る。底部はヘラ切りで「×」印のヘラ記号を有す。全体に茶褐色で非常に脆い。13は灰原出土で約⅓残存し，器形的に杯蓋ないし杯身の判定がつきにくいものである。口径12cm，器高3.8cmで，底部はヘラ切りである。16は灰原出土で口径10.2cm，器高3.3cmで，口縁部はやや外反し，内外面共にヨコナデ調整によって仕上げている。底部はヘラ切りで，不明瞭なヘラ記号を有する。本窯出土中で一番小型のものである。

有高台杯（6・7，14・15）6・7は窯内出土，14・15は灰原出土である。7と14の杯身は酷似しているが，高台が7は外方へ湾曲形に強くふんばり，高台先端部はやや丸味をおびる。それに対し14は屈曲するが，杯身との接合部から高台先端部にかけて，細く丸く仕上げている。7は口径14.5cm，器高5.1cmで底部に「×」印のヘラ記号を有す。14は口径14.1cm，器高5cmである。6は口縁部が若干外反し，体部は細身で底部にかけて厚くなる。高台は低く，外反する。口径14.7cm，器高4.7cmである。15は高台が剝離して明らかでないが，杯身はやや小形である。底部から体部にかけて器壁は薄くなり，口縁部は若干外反する。底部はヘラ切りで「×」印のヘラ記号を有する。口径12.8cm，杯身の器高4.1cmを測る。

高杯（Fig. 121-8, PL. 70）

窯内から蓋，杯身と共に出土した。脚部が欠損し明らかでないが，杯部の形態から脚部は低く，杯部と平行的に広がるものと思われる。杯身口径16.1cm，器高は定かでない。体部と脚部はヨコナデ調整で，底部はヘラ切りである。全体に茶褐色を呈し，胎土は砂粒が多量に含有する。焼成は軟質である。

壺（Fig. 121-9, PL. 70）

燃焼部から出土した。約⅓程度の破片で復原口径17.1cm，器高は定かでない。体部内面は黒色，外体部は茶褐色を呈し，内外面ともにヨコナデ調整で仕上げている。胎土には砂粒を多量に含有し軟質である。器形的に鉢形とも広口壺ともいえる異形のものである。(註1)

（5）小　結

長浦窯跡は土取り作業の際に煙道部を検出し，緊急発掘調査を行ったものである。この窯跡は牛頸窯跡群の分布で最も東に位置し，通称尊田窯跡と向佐野窯跡の中間にあたる。牛頸窯跡群は現在22支群が確認されており，うち6個所を大学，県教育委員会の手により発掘調査が行なわれた。(註2) 今回向佐野1号窯跡と合せて2基の窯を発掘調査した。よって22支群で計19基の窯跡が明らかにされた。これらの窯の構造をみると，大部分が幅約2m～2.5m，長さ約10mを呈するものであり，なかには煙道部，排水施設を有する特異なものもある。

これらから出土した須恵器ないし瓦類は，昭和45年3月に刊行した「野添・大浦窯跡群」の発掘調査報告書によって須恵器の編年図が作成され，筑前地方における須恵器の一基準を提起されたものである。さらに近年坂詰秀一氏等により「平田窯跡」が発掘調査された。(註3) 九州の須恵器の編年は，小田富士雄氏等の積年の努力により明らかにされつつあるが，牛頸窯跡群の19基の窯跡を発掘調査した結果においては，6世紀から8世紀代にわたって須恵器を最も多く生産している。

今回出土した須恵器は灰原（I）と窯内（II）出土に区分でき，I期の須恵器は本窯操業時の当初のもので，II期は操業最終期のものであることが確認された。しかし形態的にほとんど差異がないといってよい。窯内でまとまって検出した須恵器は杯蓋，杯身，有高台杯，高杯，壺とバラエテーに富み，一括して取り上げることができたことは，セット関係資料として大いに活用されるものである。これら同時期のものを他に求めれば，附近で平田窯跡B地点2号窯跡，(註4) 塔原遺跡3号住居跡，(註5) 大宰府史跡(註6)などがある。

これらに共通して出土している杯形品をみると，蓋においては返りをもち，鈕はやや扁平で中央部を突起させるシャープなつくりである。これにセットになる身は強く屈曲させた力強い高台が付き，畳付をはねあげる特徴がある。これは小田氏編年ではVIaとした形式であり，次節小結で述べる歴史時代須恵器I期に連続する直前の形式である。絶対年代についてはまだ不確定であるが，大宰府史跡第34次検出の土壙の出土状況や後述するI期の年代を勘案すると7世紀中葉あるいはそれよりやや下る時期と考えておきたい。

次に窯について若干触れると，本窯は構造的に牛頸窯跡群のなかで，最も小形に属するものといってよい。窯の床面，側壁および灰原の堆積状況からみて，操業は短期間のうちに使用している。特に床面の2回改築状態は，それを補充している。また最終期床面の燃焼部，焼成部に半焼成の須恵器が検出したことから，最終期の操業は中途でやめ，廃棄されたものと考えられる。

窯業生産体制のなかで，牛頸窯跡群は北九州地域における中枢的なものだけに，需要と供給の相互関係，窯の構造，性格等の問題を，今後の調査において総体的に究明せねばならならいだろう。時期的には，大宰府への製品の供給が開始される時期とみてよく，その意味では，今

回検出した一括資料は，須恵器編年上において貴重な資料となるとともに，牛頸窯跡群の生産集団にとっては生産関係の変換を進められる時期と考えられる。　(高橋　章)

註　1）小田富士雄他「塚ノ谷窯跡群」八女市教育委員会，1969年.
「塚ノ谷窯跡群」の2号窯跡出土の壺と極めて類似している。
2）福岡県教育委員会「野添・大浦窯跡群」福岡県文化財調査報告書　第43集，1970.
3）坂詰秀一編「筑前平田窯跡」雄山閣，1974年2月
4）註3に同じ。
5）福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」—Ⅳ—，本文編，1974.
6）大宰府史跡第34次発掘調査で土壙から土師器と共に出土した須恵器である。

b.　向佐野1号窯跡の調査

県道5号線によって長浦窯跡から連続する丘陵が切断されているが，この道路の東側法面に1基の窯跡の存在が確認され，これを1号窯とする。この窯跡の南に各々約10m離れて須恵器の散布がみられ，これらも別個の窯跡と認められたので北から2号，3号窯としたが，構造等についてはわからない。

（1）窯の構造 (Fig. 122, PL. 69)

1号窯は焼成部の先端から2.7mを残すのみで，それ以下の部分は破壊されていた。遺存部分からみると焼成部の窯底の幅は2.1m位，傾斜角は30度である。窯の主軸は北1度西で，ほぼ南北方向につくられ，花崗岩バイラン土をくり抜いた窯である。窯壁は1mほど残存していたがスサは認められなかった。遺存部窯底に若干の須恵器が検出されたが，ほとんどの遺物は既に破壊されていた灰原想定地付近からである。改窯は構造上からは判断できないが，出土品をみると同一時期のものであり，この窯が短期間に操業されたことを推測させる。

(2) 遺物 (Fig. 123, PL. 70)

この2～4号窯跡は上述のようにほとんど破壊されてしまっていたので，遺物は主として灰原からの採集品である。しかしそのうち1号窯の遺物は窯跡内からの出土品が若干あり，2・6・9は燃焼部焚口付近，3・4・7・8は焼成部の窯尻付近から検出した。以下この3基の窯跡の出土品は類似した要素が多いのでまとめて記述したい。出土須恵器の器形は，蓋，杯，皿の3種類で，他には図示しなかったが，2号窯跡から甕の把手部が発見された他は蓋，杯，皿の組みあわせである。大形の甕類の破片はなく1～3号の窯では小形品だけを焼成していたと考えられる。また瓦の出土はなかった。個々の出土須恵器の特徴については Tab. 9 に示したとおりであるが，若干説明を加えておきたい。

蓋（1～4，10～12，16）

いずれもふくらみのない器高の低い形態で，天井部は平らにつくっている。端部は嘴状につ

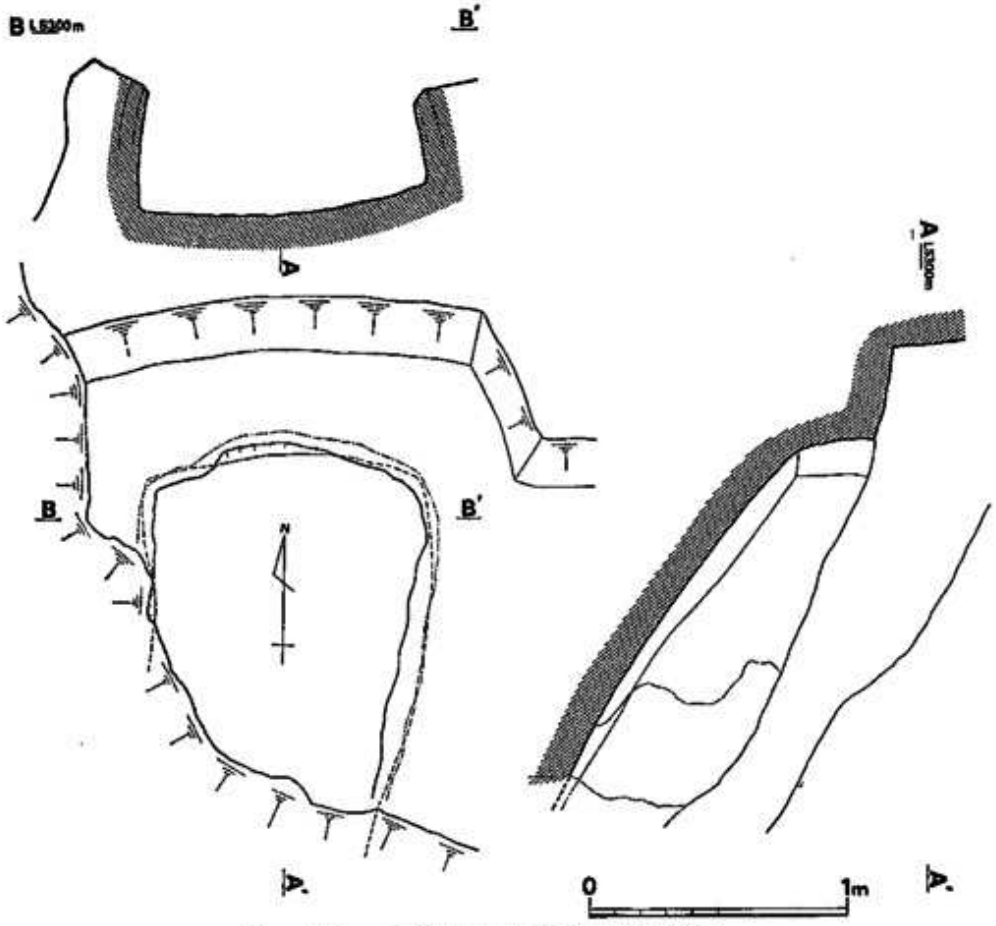


Fig. 122　向佐野1号窯跡実測図（縮尺1/30）

くるものがあるが，それもにぶい曲線で明瞭なものは少い。1あるいは12のような端部のつくりが多い。鉢は3号窯から1点採集したが，12に復原図示した扁平な形態であり，中央部が突出した形は出土していない。調整は粗雑で11，12のように天井部を切り離しのままの未調整のものもある。

杯（5～7，13，14，17，18）

体部に近い位置に短い高台を付けるものである。底部と体部の境も明瞭な稜をもつものは少い。無高台の器形も同様であり，調整は外底部をヘラ切り離しのままで未調整のもの7・8・14がある。調整している他のものも粗雑である。

皿（8，9，15）

体部が外反するタイプと，直線やや内湾してのびるものとがある。体部と底部の境は丸味をもち，明瞭な稜をもつものはない。皿においても外底部はヘラ切りのままで未調整のものがある。

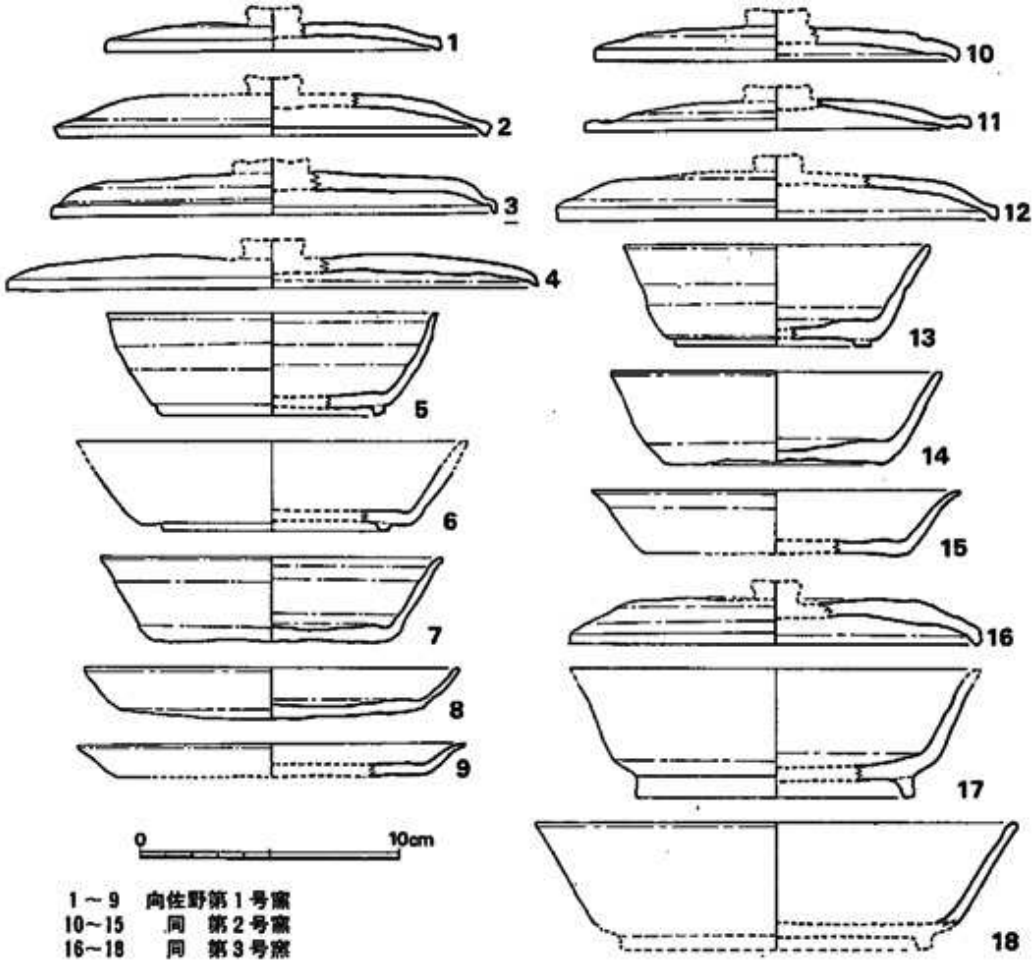


Fig. 123　向佐野窯跡出土須恵器実測図（縮尺1/3）

Tab. 9　向佐野1～3号窯跡出土須恵器

向佐野1号窯

Fig. 123 番号	器形	法量 口径 器高 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	色調・焼成	胎土
1	蓋	13.0(1.7)	天井部は平に成形し、ふくらみがなく端部はわずかにおさえる。	粗い調整で、天井部は削りと思われるが明瞭ではない。口縁部ヨコナデ、内面はナデ。	灰色 硬質	石英粒を含む細土
2	蓋	16.6(2.3)	ふくらみの少い形態で、端部は短く折りまげる。	口縁部はヨコナデ、内面はナデ、天井部は削りであろう。	灰色 硬質	精製
3	蓋	17.2(2.1)	天井部は平らで、口端部を折り曲げ嘴状につくる。	口縁部内外は丁寧なヨコナデ、天井部はナデと思われる。	灰褐色 焼成にムラ	精製
4	蓋	20.6(1.9)	天井部と口縁部との境がない。口端部内面に沈線をめぐらす。	天井部は磨滅のため調整不明、端部はヨコナデ、内面はナデ	黄灰色 軟質	砂質

5	杯	12.7(4.0)	短い高台を体部の近くに付ける。内湾する体部と口縁は軽く外反する。	体部内外はヨコナデ、底部内面はナデ。	黒灰色 硬質	精製
6	杯	15.1(3.6)	口縁部欠損、短い高台。底部と体部の境はゆるい曲線。	体部内外はヨコナデ、内底部はナデ。	灰色 やや軟質	砂質
7	杯	13.3(3.3)	体部は直線的、口唇部を軽く外反する。	底部はヘラ切り放しで再調整していない。体部はヨコナデ、内底はナデ。	灰色 硬質	精製
8	皿	14.5(2.0)	体部は直線的、底部の器内は体部に比較して厚い。	外底部はヘラ切り放し、体部はヨコナデ、内底はナデ。	灰色 硬質	精製
9	皿	15.0(1.2)	軽く外反する体部。	外底部は再調整していない。体部はヨコナデ、内側に粘痕あり。	灰色 やや軟質	砂質を含む。

向佐野2号窯

Fig. 123 番号	器形	法量 口径 器高	形態の特徴	手法の特徴	色調・焼成	胎土
10	蓋	(cm) 14.1(2.0)	天井部と口縁部の境に段がある。ふくらみのない形態。口端部は短く折りまげる。	天井部は磨滅が著しく不明。端部ヨコナデ、内面はナデ。	灰黒色 軟質 重焼痕	砂質
11	蓋	15.0(1.7)	ふくらみのない形態、端部は嘴状につくるが鈍重。	天井部は再調整の痕跡が認められない。	褐灰色 軟質	砂質
12	蓋	17.0(2.5)	平らな形態で、端部を嘴状につくる。	天井部再調整なし、端部ヨコナデ、内面はナデ。	黄褐色 軟質	砂質
13	杯	11.8(3.9)	短い高台をつける。	体部はヨコナデ、底部内外はナデ、調整は粗い。	灰色 やや軟質	精製
14	杯	12.8(3.5)	体部は直線的にのびる。底部の器内は厚く凹凸が多い。	外底部は切り離しのままで調整していない。体部ヨコナデ、内底はナデ。	黒灰色 硬質	精製
15	皿	14.3(2.5)	外反する体部で底部との境はゆるい曲線。	外底部はナデ、体部はヨコナデ。	褐灰色 軟質	砂粒が多い

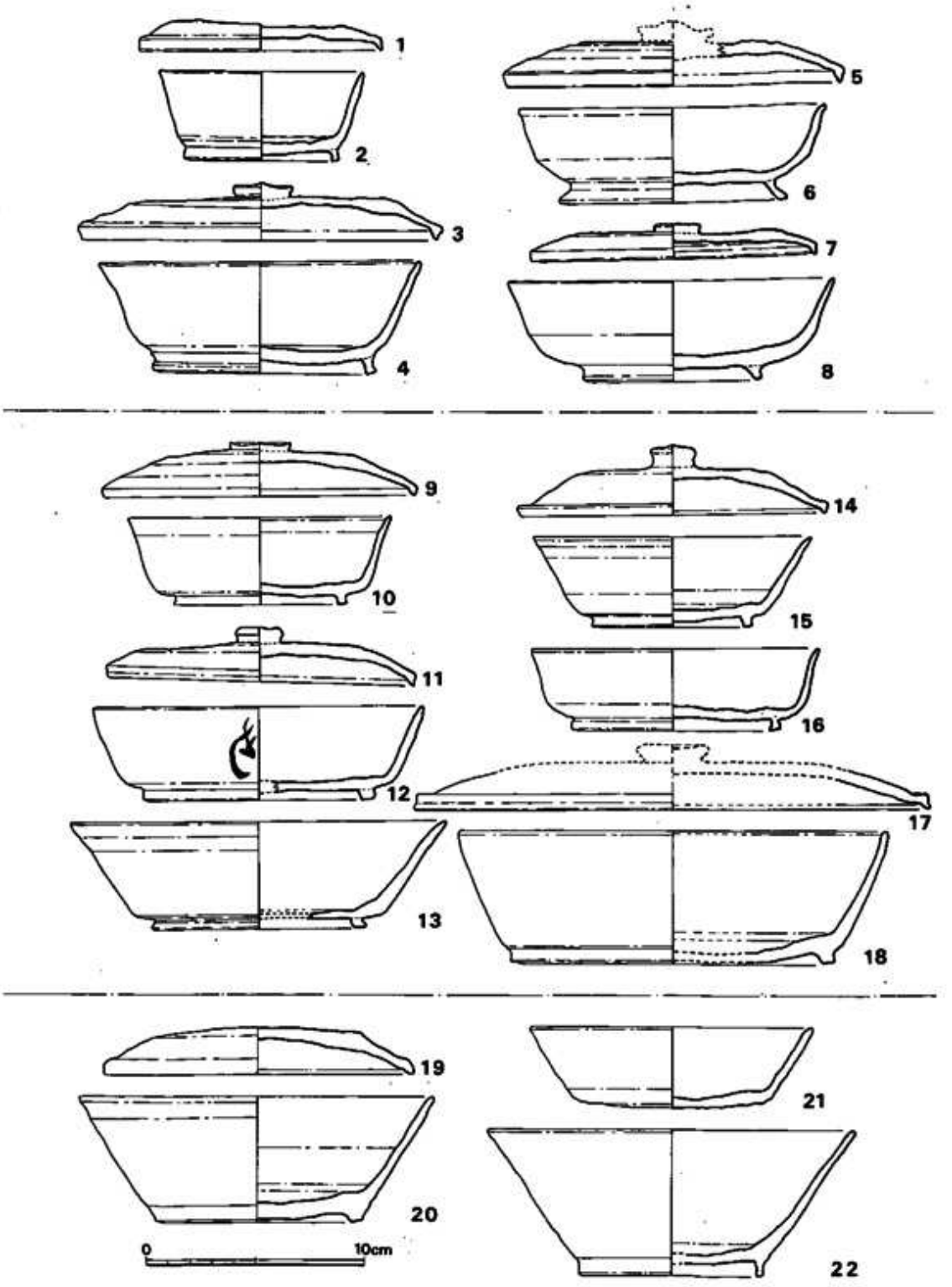
向佐野3号窯

Fig. 123 番号	器形	法量 口径 器高	形態の特徴	手法の特徴	色調・焼成	胎土
16	蓋	(cm) 15.8(2.5)	天井部は平らで、口縁部との境はゆるい曲線、端部は短く折りまげる。	天井部は削り、口縁部はヨコナデ、内面はナデ、器肉は厚い。	褐色 軟質	砂質
17	杯	15.8(5.0)	底部と体部の境は稜をもたずゆるい曲線、口縁部は外反する形態がやや古式。	体部はヨコナデ。	灰色 硬質	精製
18	杯	18.6(4.8)	底部欠損、体部は直線的にのびる。	体部はヨコナデ、丁寧。	灰色 硬質	精製

3　小　　結 (Fig. 124～125)

この向佐野1，2，3号窯は著しく破壊されていたので窯構造を調査によって究めることはできなかった。しかし出土須恵器は従来牛頸窯跡群中で空白の時期をうめる良好な資料である。3基の窯の出土品は若干の差異はあるにしてもほぼ近接した時期に位置付けられよう。

牛頸窯跡群において従来古墳時代の調査例が多く，それ以降の時期についてはその存在は指摘されながらも調査は少い。換言すれば，小田富士雄氏をはじめとする諸先学によりV期以前の須恵器の相対編年は若干の意見の相違はあるにしろほぼ確実なものとなってきている。それ



1～4	三沢種畜場S－4号古墳	11－13，17・18	大宰府史跡西二坊側溝下層
5・6	牛頸窯跡群平田B－1窯	14・15	牛頸窯跡群井手窯
7・8	大宰府政庁跡第1次整地層	16	大宰府政庁跡中門整第1次整地層
9・10	牛頸窯跡群吉松皇頭窯	19～22	大宰府学校院跡井戸埋土層

Fig. 124 大宰府を中心とする歴史時代須恵器の変遷（縮尺1/3）

に対して小田氏がⅦ期とした時期については良好な資料にめぐまれないこともあり，明確とは言い難いのが現状ではなかろうか。一方この時期の遺跡の代表である大宰府史跡とくに政庁跡の調査に須恵器の編年ができるのではないかという期待がある。しかし現在までの政庁跡調査の出土状態をみると，この種官衙，寺院等で共通するように，多くは整地層からの散在的な出土で，まとまった資料は少なく，また時期的に先行するものが現存している状態である。しかし大宰府史跡の調査が進展するにしたがって土壙，溝等の遺構からいくつかまとまった資料も検出されるようになり，また周辺の歴史時代遺跡，例えば福岡市多々良古川遺跡，(註2) 粕屋町駕輿丁遺跡，(註3) 粕屋町和田遺跡，(註4) 八並住居跡(註5)などから良好な資料が検出されている。窯跡資料も牛頸窯野添第4，第5号窯，(註6) 井手窯跡，(註7) 平田窯跡，(註8) 上平田窯跡，(註9) 八女古窯群の管の谷第一号窯，(註10) 未報告であるが北九州市小倉区トギバ窯跡などⅥ，Ⅶの遺物が出土している。

そこで本稿において，これらの資料からⅥ，Ⅶ期に該当する遺物にどのようなタイプがみられるかさぐってみたい。かなり断片的資料が多くセット関係を把握するには至らないし，さらに遺漏があることを恐れるがⅥ，Ⅶ期の須恵器編年確立への捨石として批判の材料になれば幸いである。この時期の須恵器はもっとも形態上で変化の著しいと思われる杯形品においても，全体として前代に比較して明確な変化に乏しいといえる。長浦窯形式（Ⅵa）につづく時期，歴史時代の須恵器は図示したように3期に区分できる。

Ⅰとした一群の有高台の杯をみると，第一の特徴は体部がやや内湾気味にのびることである。体部との境に稜があり，つくりがⅡに比較してシャープである。第2に高台に屈曲があるが，前代に比較して著しく小さい。第3に蓋は端部を直角ないし鋭角に折り曲げるが両者は同時期の手法上の相違である。鈕は中央を突起させるものがみられⅡに比較して低く稜をつけるシャープなつくりである。

この一群の須恵器で絶対年代の推定できるのは，Fig. 124-7・8 のものである。これは大宰府政庁跡東北回廊下層からの出土品で，大宰府第1次整地層中に含まれる須恵器のうちで形態上からみても最も新しいと思われる。この第1次整地層に掘立柱建物が建てられている。従って政庁地区の当初の遺構の時期とほぼ一致すると考えてよく，実年代は7世紀後半とみられる。この第1次整地層中には，Ⅰ期に先行する長浦窯形式のものが多くあり，また次の第2次整地層中から出土するⅡ期のタイプは含まれていない。(註11) 1～4は三沢種蓄場S地区第4号古墳の羨道部から出土したものである。窯跡としては平田B-1号窯跡がある。(註12) この窯跡はⅠ期に先行するタイプ，向佐野長浦窯の形式のものが多いが，蓋に返りのない折り返しのものもあり，蓋身は小田氏編年Ⅵa，あるいは長浦窯の出土品に比較して高台の屈曲が小さいが，Ⅰ期のなかでは前代の形態を残している。ここで報告した向佐野，長浦窯はⅠ期に先行する時期のもので，形態上の連続が認められる。(註13)

Ⅱ期における杯身の特徴の第1は，体部が内湾せずほぼ直線的にのびることである。体部と

底部の境に稜はなくなり，曲線となる。第2に高台は低く，屈曲することなく，断面長方形となる。蓋は天井部を平坦にし，端部は折り曲げるものと嘴状にするタイプがある。前者の折り曲げはⅠ期に比較して小さく，シャープさに欠ける。嘴状にするタイプがこの時期のなかで後出ではないかとも考えられるが，この出土量は少く，資料的に両タイプを分けて考えることは現段階では無理が生ずる。

この一群の須恵器の絶対年代は，15の杯身の出土状態である。これは大宰府政庁の礎石を用いた建物の整地層（第2次整地）の土壙から出土したもので，この形式の杯身は前述のⅠ期にはなく第1次整地層からも検出されない。礎石建物の第2次整地の時期は8世紀前半と考えられるのでⅡ期の上限をここにおける。下限はⅢ期との関連で8世紀後半ないし末と考えられる。11～13，17，18は西二坊偶溝最下層からの一括資料で，12の外方に「那ッ支」，側面に「□□□也」と墨書がある。窯跡資料としては，今回報告の向佐野1号窯跡と吉松象頭窯跡と井手窯跡のいずれも採集資料がある。(註14)

Ⅲ期の須恵器は前代に比較して形態上の変化は明確である。杯身の特徴は高台の位置にあり体部から直線的に付け，Ⅱ期以前とちがって底部と体部の境が認められない。蓋は天井部を削り口縁部と稜をつけ，端部のつくりも粗雑である。鈕を付けているものもある。

この期の資料は大宰府学院跡井戸埋土から一括して出土し，同一形態の土師器と Fig. 125 の特殊な器形を共伴している。(註15) このタイプの須恵器および土師器は第2次整地遺構面から検出でき，また10世紀中頃と考えられる焼土層から

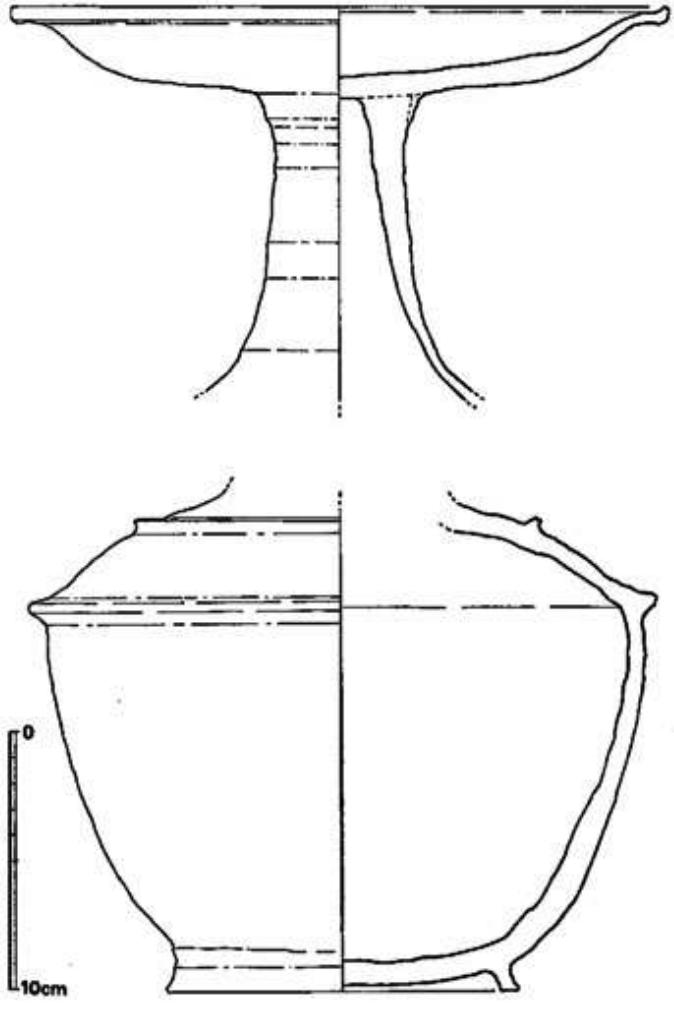


Fig. 125　大宰府学校院跡井戸埋土層出土須恵器実測図（縮尺1/3）

は発見できない。共伴資料のうち Fig. 125 高杯は，平城宮ＳＢ316出土品と形態はやや異るが，端部の成形において共通したものをもっている。(註16) このＳＢ316は８世紀末ないし９世紀初頭と考えているが，学校院井戸埋土もほぼ近接した時期と思われる。共伴資料の第２の突帯を胴部にめぐらず壺は，現在次の６ヶ所から発見されている。①朝倉郡夜須町八並火葬墓遺跡，(註17) ②久留米市山本西谷火葬墓，(註18) ③太宰府町向佐野大字前田，④熊本県下益城郡城南町阿高火葬墓，(註19) ⑤熊本県下益城郡城南町益城国相定地，(註20) ⑥八女市管の谷１号窯跡。

このうち共伴資料があるのは阿高火葬墓で，土師器椀が蓋として使用されている。この椀は大宰府の所見では平安中期に位置付けているが骨壺としての性格もあり，須恵器壺はそこまで下げないでよいであろう。やはり９世紀を中心に盛行したタイプと考えておきたい。従ってⅢ期を平安前期，９世紀の須恵器と位置付ける。

以上のように歴史時代，７世紀後半から９世紀にわたる須恵器の時期を３時期に区分して認識した。Ⅱ期における細分の問題，Ⅲ期以降の須恵器，さらに個々の時期のセット関係は今後究明しなければならない問題として残っている。(註21)　　（亀井明徳）

註　1）小田富士雄・柳田康雄『野添・大浦窯跡群』福岡県文化財報告第43集，1970.

2）福岡市文化課：49年度発掘調査，溝ならびに遺構から須恵器が出土している。

3）西谷正他「駕輿丁遺跡」九州縦貫道理文報告Ⅰ，1970. Ⅰ期の須恵器が出土し，「大宅」などの墨書もみられる。西谷正氏はこれら須恵器を「７世紀後半から８世紀」としているがこの見解は本稿と一致し，支持したい。

4）福岡市文化課：50年発掘調査，掘立柱建物20棟近く検出している。

5）川述昭人他「八並住居跡出土遺物」九州縦貫道埋文報告Ⅳ，福岡県教育委員会，1974年.

6）註1)と同じ。調査時に保存の可能性があったので，この２窯跡は発掘調査しなかったので資料は極めて少い。

7）横田賢次郎他「福岡県大野城市牛頸における奈良時代窯跡」九州考古学，4950，1974年.

8）坂詰秀一編『筑前平田窯跡』雄山閣，1974年.

10）真野和夫他『管の谷窯跡群』八女市教育委員会，1971.

11）石松好雄他『大宰府史跡昭和47年度調査略報』九州歴史資料館，1973年.

12）平田Ｂ－１号窯跡の報文中には，折り返し杯蓋は記載されていない。この他Ⅰ期の窯跡は未報告であるが，上平田窯跡が牛頸窯跡群中にはある。

13）ここにⅠ期としたものは，小田氏編年に対照すればⅥａに連続する形式で，Ⅵｂ，Ⅵｃ，Ⅶの各々一部を含んでいる。

14）破壊されてしまった窯跡から採集品で，少くとも２基が確認できる。

15）石松好雄他『大宰府史跡昭和47年度調査略報』九州歴史資料館，1973年.

16）奈良文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告Ⅱ』1962年.

17）福岡県教育委員会：1970年調査.

18) 宮小路賀宏他『西谷火葬墓』久留米市教育委員会，1971年.

19) 三島格「骨製笄副葬の蔵骨器について」古代文化3－6・7・8，1959年.

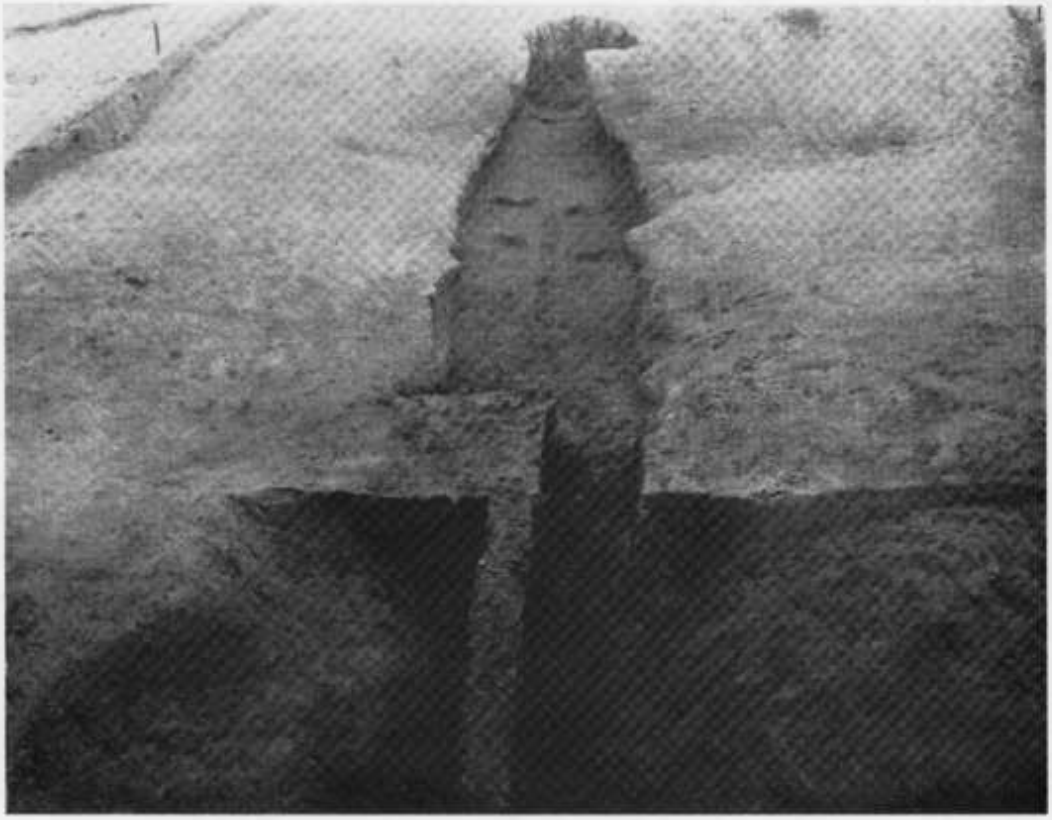
20) 松本雅明他『城南町史』城南町教育委員会，1960年.

21) この編年の検討にあたって，森田勉氏のご教示によるところが多い。

向佐野，長浦窯跡

PLATES

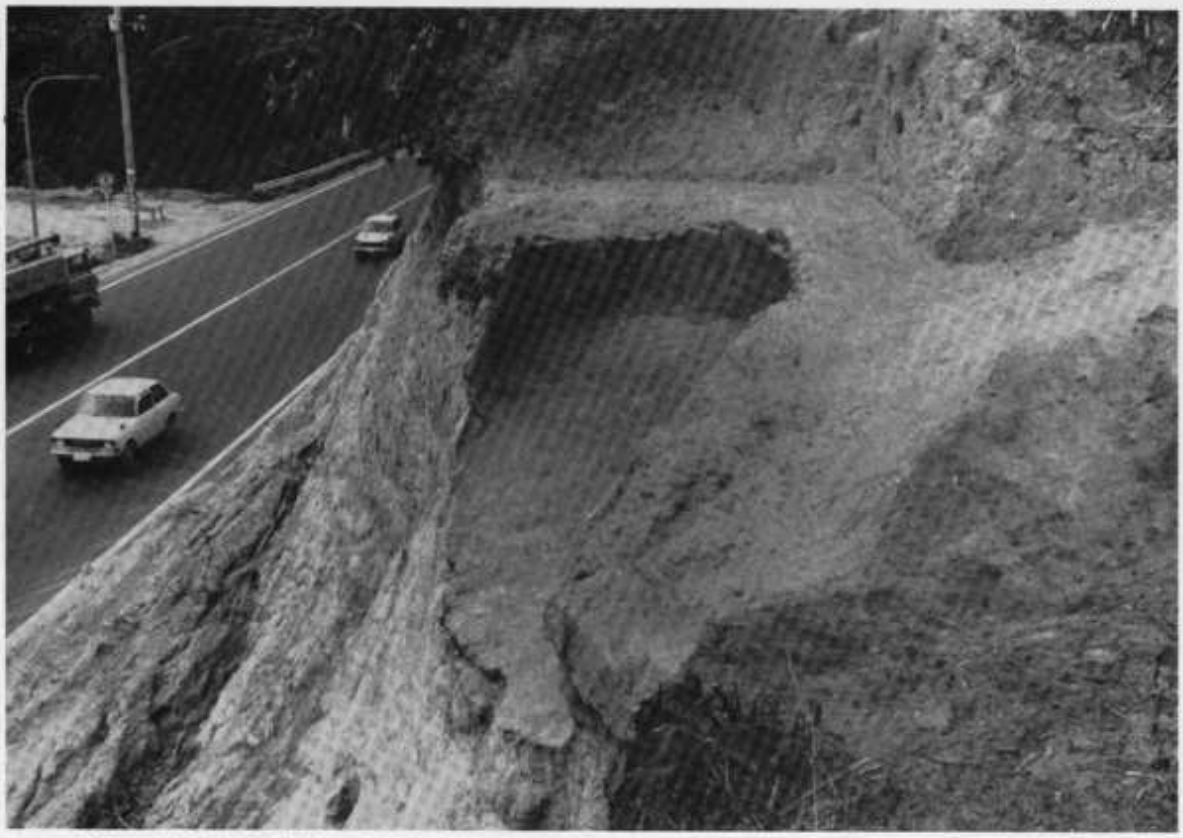
(1) 長浦窯跡　全景 1　(西から)



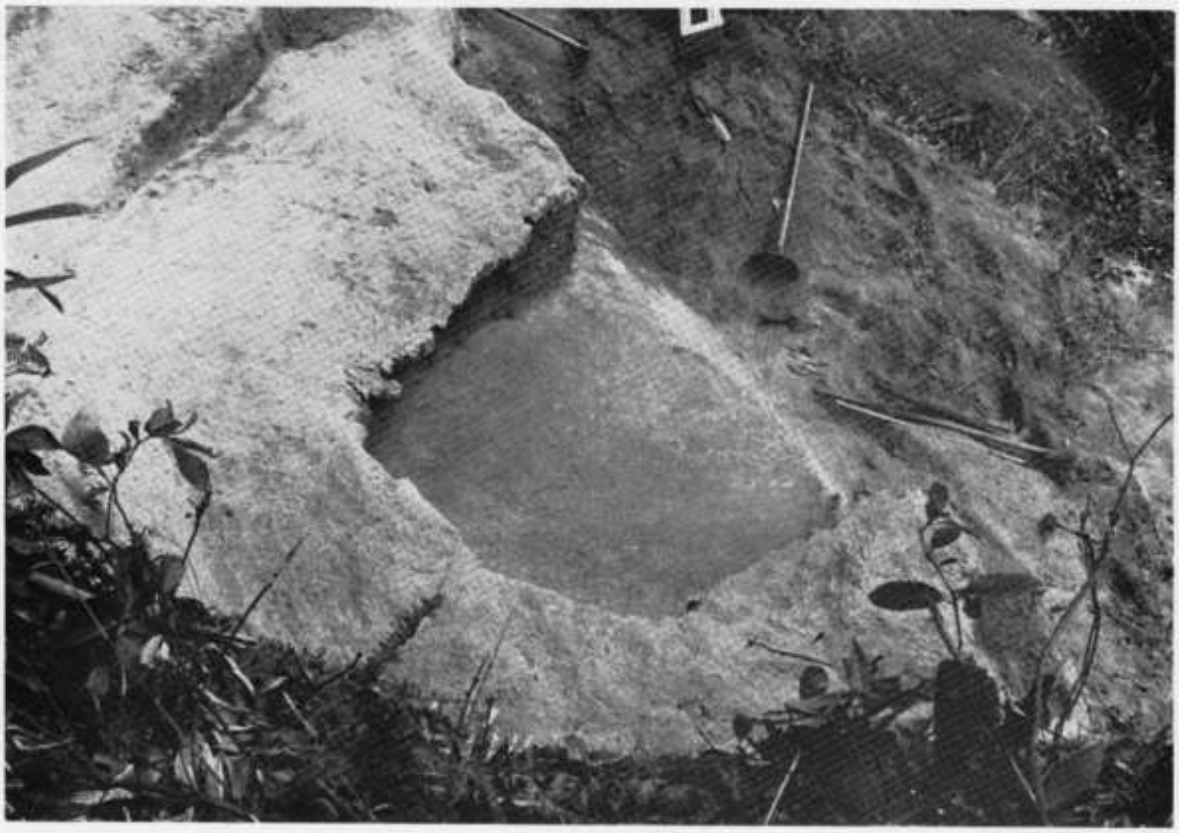
(2) 長浦窯跡　全景 2　(西から)

（1） 長浦窯跡　煙道　（西から）

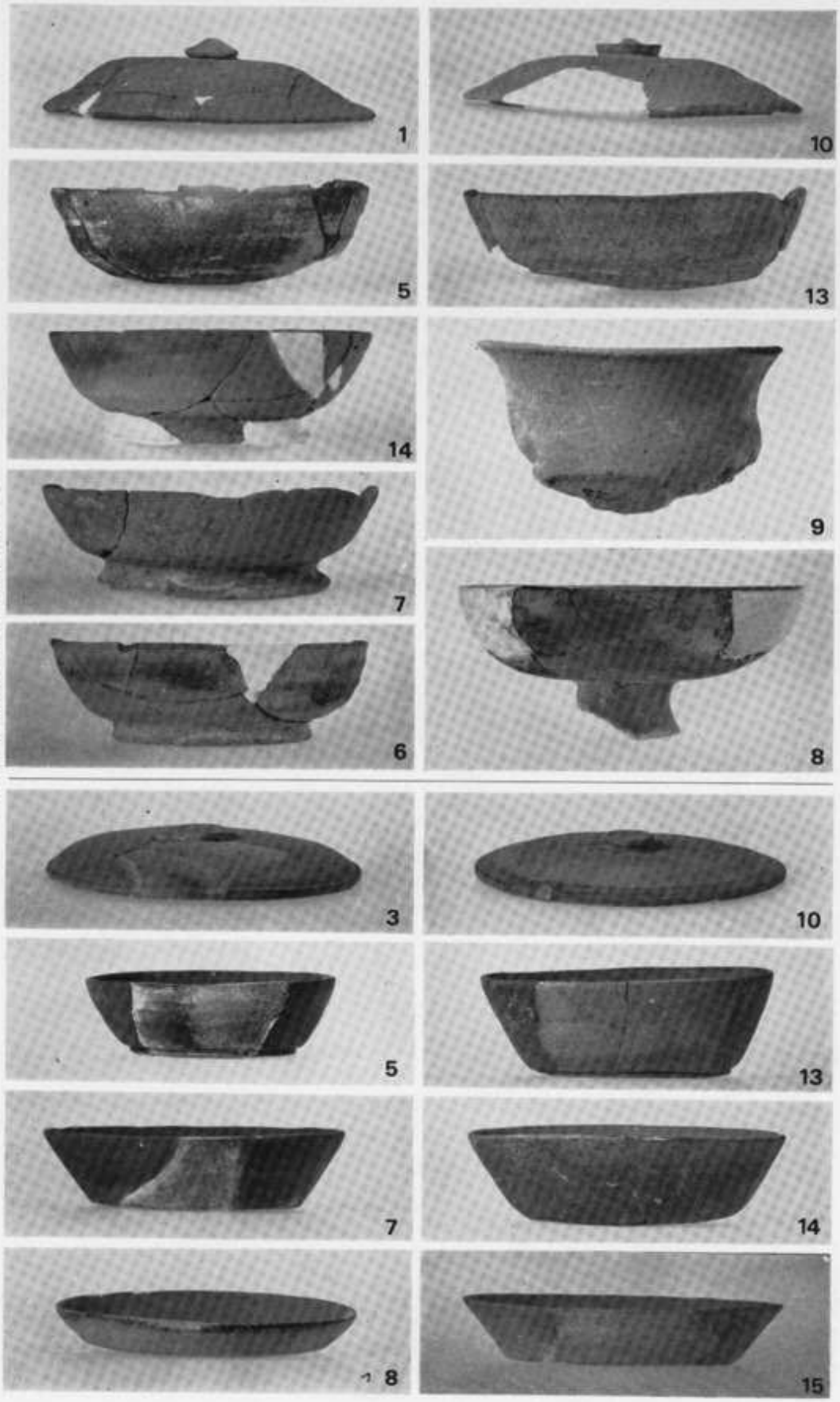
（2） 長浦窯跡　土器出土状態　（西から）



（1） 向佐野１号窯跡　窯尻遺存部　（下方から）



（2） 同　上　（煙出しから）



向佐野、長浦窯跡出土須恵器（約1/3）

上段—長浦窯跡、下段　1～8　向佐野1号窯跡　10～15　向佐野2号窯跡

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—VI—

昭和50年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷　福岡印刷株式会社

福岡市博多区大字那珂142